Date Due

Bible. Japanese. N.T. [n.d.]

Japanese Scriptures—

The Four Gospels + Acts—

C. Ostheay Miller

Yokohama

April 1879— Japan—

耶穌降生一千八百七十七年

新約聖書馬太傳

翻譯委員社中
米國聖書會社

明治十年

日本橫濱上梓

新約全書　馬太傳福音書

第一章　アブラハムの裔なるダビテの子耶蘇キリストの系圖

二 アブラハム　イサクをうみ　イサク　ヤコブを生　ヤコブ　ユダと
その兄弟をうめり　三 ユダ　タマルによりてパレスとザラをう
みパレス　エスロンをうみ　エスロン　アラムをうみ　四 アラム
アミナダブをうみ　アミナダブ　ナアソンをうみ　ナアソン
サルモンをうみ　五 サルモン　ラカブによりてボアズを生　ボアズ
ルツによりてオベデをうみ　オベデ　エッサイをうみ　六 エッサイ
ダビデ王をうむ　ダビデ王　ウリヤの妻によりてソロモンを

うみ七ソロモンレハベアムをうみレハベアム アビアをうみアビア アサをうみ八アサ ヨサパテをうみヨサパテヨラムをうみヨラム ウッズヤをうみ九ウッズヤヨタムをうみヨタムアカズをうみアカズ ヘゼキヤをうみ十ヘゼキヤ マナセをうみマナセ アモンをうみアモン ヨシアをうめり十一バブロンまでうつされたるのちヨアハズ シアテルをうむ シアテルゼルバベルをうみ十二ゼルバベル アビウデをうみ アビウデエリアキンをうみエリアキン アゾルをうみ十三アゾルザドクをうみザドク アキムをうみアキム エリウデをう

み五エリウデ エリアザルをうみエリアザル マツタンをう
マツタン ヤコブをうみ六ヤコブ マリアの夫ヨセフをう
めをさのマリアよりキリストとよばるる耶蘇うまれたまふ
ひきそその世系をこのごとくまもてアブラハム トリダビデよい
さるまで十四代ダビデよりバブロンまうつさるときまで
で十四代バブロンよりうつさるときよりキリストまで十四代
あり〇十八それ耶蘇キリストのうまれたまくるまこと左のごと
くしその母マリアをヨセフと娉をるせるのさまていまだ
こともよるさりしときに聖靈よ感にくもるみしるその懐孕
たることあらはれたり十九夫ヨセフたゞしき人あるゆゑ

よこをもづくりむることをこのまず。ひそうに離縁せんとおもふくり 二十のくて、このことをおもひめぐらせるをりよ主のつのひの主が夢にあらはれていひけるよ。ダビデのそ名ヨセフよあんぢ妻マリアをめどることをおそるることなかれ。そのもうめるところのものい聖靈によるなり 二十一これ子をうまんその名を耶蘇となづくべし。そはその民を罪よりすくはんとするものなり 二十二さてこのことよ預言者によりて主のいひたまひしことをよ 二十三處女もうみて子をうまんその名をインマヌエルとよぶべしとあるよ應驗せんためなり。その名をとけば神われらとともにますとの義なり

二四 ヨセフ ねむりより起て主のつげたまひし命のごとくその妻をめとりたまど 二五 家子のうまるるまで牀をともせざりき その うみ・ま子を耶蘇となづけたり

第二章 それ耶蘇ユダヤのベツレヘムにうまれたまひしが そのとき博士たちひがしのかたよりエルサレムにきたりて ニ いひけるは ユダヤ人の王としてうまれたまひしものいづこに在や われらひがしにてその星をみたれば これを拜せんために きたれり ニ ヘロデ王これをきゝて いたくこゝろをなやまし エルサレムの民もこれに然

ハキリストのうまるべきところはいづこあらや
けるにユダヤのベツレヘムあり。そは預言者のもちゐられ
ることしるせるによりてユダヤの郡ベツレヘムよりぞユダヤの
中にて小ちひさきものにあらざればなり。イスラエルの民を
やしなふべき君そのうちよりいでん。といへるなり。ここに
ヘロデひそかに博士たちをよび星のあらはれし
きを詳しらべて、このものをベツレヘムにつかはしていひけるは。ゆきて嬰兒のことをつぶさにたづねよ。
もしみつけなば我にもつげよわれもまたゆきて拜せんと。
彼ら王の命をきゝてゆきぬ。前にひがしにて
星のかれ

らにさきだちてをさなごのをるところへゆきとゞまりぬ一〇
よろこびまたよろこびてかの星をみていさゝかもたゆたふことなく
でゝ家にいりてをさなご嬰兒のそのおかあさまりやとともにをる
を見ひざまづきてをがみまつりぬ而して寶盒をひらきて黄金乳香
沒藥などの禮物をさゝげたり一二 その夜夢にヘロデのもとへ
かへるなかれとの黙示をうけむりほうのみちよりその國にかへ
りぬ一三 かの博士らが去るのち主のつかひヨセフにいでまあ
らはれていひけるはヘロデをさがすごとくをさなごとその母とを
ゐて起てをしやのくにをたちさりエジプトにのがれてまつわがあんぢよ
とつげきまでかしこ

とゞまる迄ヨセフおきて夜をこめごとその母とをつれさり
エジプトへゆきヘロデの死るまでそこにとゞまり迄主よりげんぎやうのようて。わが子をエジプトよりよびいだせといひたまひしことのなせんためなり
ヘロデはおのれをあざむく迄たるをしりておほいにいかり人をつかはして博士よりくはしくときひたる時をもとりてベツレヘムとそのさかひのうちなる二歳一たのをことごとくころせり
ヨハネのみいくる憂るらおゐラマよりこうゑラケルはおのれの子どもをなげきその子どものおきよりて慰さまをとる

いひーよこのあくり十九このてへロデ死ゐーるを主のつうひ
ヨセフのいめるエジプトにてあらはれいひけるハ手もき
て嬰兒とそのはゝとをたづさへイスラエルの地にゆけ嬰
兒のいのちをもとむるものゝ死ねて二この地起てをさな
ごとそのはゝをたづさへてイスラエルの地にいりこ
三アケラヲヨ父へロデにこのもりてユダヤの王たりときゝけ
をぢこゝにゆくことをおそる。まゝ夢につげをこうむり
てガリラヤのうちにさけ三ナザレといへるまちにいりて
てをりこのとき、ナザレ人とよばんと預言者によりていひ
たるてる言このあたせんたためなり

第三章

一 そのころバプテスマのヨハネきたりてユダヤの野
二 に宣べつたへていひけるは、天國いちかし悔あらたためよ、こは
三 主の道をそなへその徑をなほくせよと野になよべる
人のこゑあると預言者イザヤがいひし人あり 四 このヨハネ
は身にらくだの毛衣をき腰にその革帶をむすび蝗蟲と
野蜜をくらひもちとせり 五 このとき エルサレムおよびユダヤ
をことごとくまたヨルダンの四方よりひとびといでてヨハネに
六 つきおのが罪をくいあらはしてヨルダンにておのれよりバプテスマをさづけられたり 七 パプテスマをうけんとて
パリサイおよびサドカイの人々のおほくきたるをみて

こゝをよいひけるハ蝮のをや誰なんぢらをきゝこんとをる怒をさくべきことをつげしやハさきだち悔改よこのみ果をもむをべよなんぢらわれらが先祖よアブラハムありといふことをおもふなかれなんぢらにつげん神ハこの石をもよりアブラハムの子とあらしむるあり十いまや斧を樹のねもとにおくるなりよきをざる樹ハきりたをして火になげいれらるべし十一われハなんぢらを悔あらためさせんとて水をもてなんぢらにバプテズマをさづくれどもわれよりのちにくるものハわれよりまさりて能力ありやもハその履をとるにもたらざれバなり聖靈と火をもてなんぢらに

バプテスマをさづけん 十二 手まい箕をもちてその禾場をきよめ麥をあつめてその倉にいれ糠はきえざる火にてやくべし○ 十三 このとき耶穌ヨハネよりバプテスマをうけんとてガリラヤよりヨルダンにきたりたまふ 十四 ヨハネ辭ていひけるは我なんぢよりバプテスマをうくべきものなるにまんぢわれにきたるか 十五 耶穌こたへけるは今はゆるせ如此をづてのたゞしきことわれらつくすべきなり 十六 耶穌バプテスマをうけて水よりあがりたるとき天たちまちにひらけ聖靈の鴿のごとくくだりてその上にとゞまる 十七 また天より

聲ありてこれわがこころよろこぶあがの愛子あれをいだ
第四章 さて耶蘇せい聖神にみちびかれ惡魔にこころ
みられんために野にゆきたまふ 二四十日四十夜くらふことをせざ
れば餓ぬ 三こころむるもの來りていひけるは。もし
ぢもし神の子あるも命じてこの石をパンとせよ 四耶蘇こた
へけるは。人はパンのみにていくるものにあらず神の
口よりいづるすべてのことばによるとしるされたり 五ここ
において惡魔これを聖京にたづさへゆき殿のいただきに
たちていひけるは 六もしぢもし神の子あるさればおのが身を
ここより投げよ。それは『なんぢがために神その使ひたちに命

ぜんのごとく手をあてさうへてあんぢの足の石をふをざるやうをごーとおろされさり七耶蘇このごとくいひけるハ。主たるあんぢの神をこうろむべこのごとくまさく錄せり八あくまのこのをといとたのき山をたづさへゆき世界のさかえとその榮華とをみせて九あんぢまーひをふーてこのごとく拜せばこのごとくをみなあんぢのあうふべーといふ十耶蘇こうごとくいひけるハサタンよさりぞけ。主たるあんぢの神を拜したゞこのまのみつこうべーとおろされさり十一つひに惡魔このをとをきゝてガリラヤよゆき十二ナザレをさりゼブルンと

ネブタリとめさりひおるうみべのカペナウハよいくりて
こゝふとをり 十四 これ預言者イザヤのことばによ 十五 ゼブルンの
地ナブタリの地うみよそひたる地ヨルダンのむこふの地
異邦人のガリラヤ 十六 くらきにをる民はおほいなる
光をみ死地と死蔭にざをるものらにひかりをいだ
りといひしことのなりたるなり 十七 このときよりて耶蘇
もじめて道をつげ。天國はちかづきたればなりといひ
たまへり 十八 耶蘇ガリラヤのうみべをあゆみてペテロといひ
ふシモンその兄弟アンデレとふたりをみて海にあみうちを
をみさりこのふたりは漁者なり 十九 われにきたれよひけるは。わ

さぐくわをあんぢうを人をまもとるものとあきらん二十このをしらやがて網をうてく耶蘇よおさがの三こうすりまうみけるよまことほうの兄弟ふたり即ちゼベダイの子ヤコブとそのきやうだいヨハネ父ゼベダイとともに舟あてあみをつくろへるをみてこゝをよびしかば三このをしへもやがて舟と父をおきて耶蘇よおさがく〇三耶蘇カリラヤをあまねくめぐりてその會堂あてをしへをおこし天國の福音をのべつたへうち民のうちなるもろ〳〵の病をぐしてのわざうひをいやしぬ二四その聲名あまねくスリヤよひろがりしかば人々をもてのわづらひ萬殊のやまひまたいたみなやめるものあ

ろひ鬼につかるる者、癲癇らるる者、ぶのやまひある者、
をるる者をことごとくいやしたり。ガリラヤ
とデカポリスとエルサレムとユダヤヨルダンのむこうより
ほくの人々きたりしたがふ。

第五章　耶蘇ほくの人をみて山にのぼり坐したまひければ
其門徒たちもそのもとにきたる。二耶蘇こちをひらきて
このをしへをなしていひけるは、三心のまづしきものはさいはひ
あり天國はそもその人のものなればなり。四なげくもの
はさいはひあり、そのひとは安慰をうくべければなり。
五柔和なるものはさいはひあり、そのひとは地土を嗣ことを

をこべけをゞあり 六うゑ このもゝこゝろく 義をそこなふものは
さいをひきりそのひとは飽ことをうべけをゞあり 七あた
をみあるものは福あり その人は矜恤をうべけをゞあり
八こゝろの清潔ものはさいをひきりその人は神をうること
うを得べけをゞあり 九和平をまもるものはさいをひきり
その人は神の子とゝなくらるべけをゞあり 十たゞしきこ
このたゝめにせめらるゝものは福あり てんこくはそのた
ちその人のものなるをゞあり 十一わがたゝめに人なんぢらを詬
誇ものゝ迫害いつさまくのあしきことをいはんそのと
きはなんぢらさいをひきり 十二よろこびたのしめ天をお

いてあんちらの報賞おほけ止てるりそらはあんちらうきき
きの預言者をもこのくせめたりき〇十三あんちらは地のほ
あり鹽もーそのあぢをうしなはゞ何をもてろまくの味よ
のくさんのもち用おーそとよまそくまて人よふものくさ
こ十四あんちらい世のひろをあり山のうへにたてくる
城はのくろことをえまそ十五燈をとくしてす斗のしたおく
そのおーの燭臺よおきて家よあるまべてのものをてらさん
十六このくのこくひとぐのまへよあんちらの光をこのやう
せさきをまバ人々あんちらのよきおこあひをみて天ゐいま
まそあんちらのをあがむべし〇十七律法と預言者をも

つるためにきたるものとおもふなかれ廢せんために
きたるにあらずこれまことに汝らにつげん天地のつきざるうちは
いさゝかの點一畫もとほりすぎずしてことごとく成
就のいたるまでもちひらるゝをやぶり。まゝそのごとく人ををしへ
おば天國において最小ものといはれん。おほよそこれをおこなひ
かつ人ををしふるものは天國において大なるものといはるべし
十九 ヰエスまたかれらにつげたまふ。學者とパリサイの人のたゞしきよりもあんらのたゞしきことをすぐまさざれば
汝らは天國にいることあたはず 〇三 ヰエスへの人

つげて殺こと[illegible]ろそものハ審判よあぶこうんといへることあるハあんぢらがきくしころるり三さるどわ
至あんぢらよつげんをべて故おくしてその兄弟をいうる
そものハさだきよあぶこうん。まこそのの兄弟をおろうものよ
とつふものハ集議よあぶこうんぞまこ狂妄よこいふものハ
地獄の火よあぶこうるべし三このゆるよあんぢらを禮物
をたづさへて壇よゆきたるときこころて兄弟ようらま
るこことあるをおもひいださば四そのそるへものをだん
のまへよ留まづゆきてあんぢの兄弟とやもらき後きたり
てあんぢのそるへものを獻よ二五あんぢをうったふるもの

とゝもよ途間よあるときもやくやそうげよ。おそろくい訟
るものあんぢをもくべやくよわくく審官もくあんぢをく
さやくよわくく遂よるんぢい獄よいもくれん 三六 もも
とくるんぢよつげん分釐もそもつくのそざもづこのあらび
そこをいづることあさそぎるより〇 三七 いまくくの人よつ
げて姦淫をることるもとゝいくることあるへるんぢらの
きくくころろるり 三八 さもでわもるんぢくよつげん。おほよ
そ婦をみて色情をおこすものいこゝろのうちをでよこのん
りんしたるより 三九 をくそぎの眼あんぢを罪におとさぬ
きいぶくてこもをもてよ。そへ五體のひとつをうしるよへ

全身ぜんしんぢごくにおとされんよりは三十そこ右の手めんぢをつきおとしすてよ。そは五體のひとつをうしなふは、ぜんしん地獄ぢごくにおとされんよりはまさるなり○三一また云くること有り。おのれその妻をつまさんとせば、こと離縁状りえんじょうをあたへべしと三二されどわれなんぢらにつげん。姦淫のゆゑならでその妻をいざなふものは、これに姦淫をおこなはするなり○三三また古人いにしへのひとに告ていひしことの誓をたつることなかれの述べんぢらにふところをはたすべしと主にくべしと云くること。

るハあんぢ〳〵がきく〳〵こゝろあり三四さるによりわるんぢ〳〵
まつげん。さる誓ことあるのも天をさして立ちうふあられ。こ
も神のこゝろ〳〵みるのもあり三五地をさして立ちうふこゝろあり
も。こも神の足臺なもあり。エルサレムをさして立ちうふこゝろ
あり。も。こも大王のみやこなもあり三六あんぢのこゝらをさ
〳〵て立ちうふあり。そハひとりもの髪だよもろ〳〵こゝろ
くもることあるさゝれざるあり三七あんぢ〳〵たゞ是々否々とい
へ。こもよりもふるハ惡よりいづるあり〇三八目あて目をつ
くのひ齒あて齒をつくのくといへることあるハあんぢ
らがきく〳〵こゝろあり三九されどもあるんぢ〳〵まつげん惡

よ敵をることあるを。人なんぢの右の頬をうつをまさぼの頬をもめぐらしてこをむけよ　四十　なんぢをうつたくて裏衣をとらんとするものよ外服をもまたとらせよ　四一　人なんぢよ一里の公役をもひあふこをとるもよ二里ゆけ　四二　なんぢよ求るものよあらへ借んとするこめをさりそくるなかれを○　四三　なんぢの隣をいつくしみてその敵をうらむべしといつることあるふなんぢらがきゝしところなり　四四　されどもなんぢらよつげん。なんぢらの敵をいつくしみ。なんぢらを詛ものを祝しなんぢらをにくむものを善視し。なやめ迫害るものゝたためよ祈禱せよ　四五　このくするい天よいま

にるんぢ〳〵が父の子とあらんためなり。そも〳〵天の父はその日をこのきものよもあしきものよもてらし雨をたゞしきものよもたゞしからざるものよもふらせたまへり四六 あんぢら自己をあいするものを愛するいるゝの報賞うあらん。みつぎとりもかくのせざらんや四七 安否を兄弟よのみとふ人よりあんのまさりたることかあらん。稅吏もかくせざらんや四八 このゆゑよ天よいまにるんぢらの父の純全がごとくあんぢらも純全をぐし

第六章

るんぢら人よみせんためよそのたゞしきを人のまへよ行ことをつゝしめ。そもそもむび天よいまにあんぢ

らの父よりむくいをえず　二　このゆゑに施濟をなすとき人
のあがめをえんために會堂や街衢にて僞善者のごとく祇を
ふきならすことなかれ　まことなんぢらにつげん　この
輩はその報賞をえたり　三　なんぢら施濟をなすとき右の手の
なすことを左の手に知らせるなかれ　四　如此なるはその施濟
のうちなんぢが祕事あり　而して暗中
にみそなはすなんぢの父はあらはに報いたまふべし　五　なんぢ
祈るときに僞善者のごとくなるなかれ　かれらは人に
みられんがために會堂や街衢のすみに立ていのることを
このむ　まことになんぢらにつげん　かれらはその

その報賞をえるより六あんぢいのるときい密室よいり門をとぢてこのごとくまうすよいまだあんぢの父よいのをさらばこのごとくまたまうよみたまふあんぢの父ハ明顯よむくゐたまふべしあんぢらいのるときい異邦人のごとくくりごとをいふあつてこの言おほきをもてきくのをゆるすあんぢらハこのゆゑよこのごとくまうよあらんことをあんぢらの父ハねがはざるさきよそのあくてるぬものをふりたまへばなり九さればあんぢらこのくいのごとくいのるべし天よまします我らの父よねがはくハ聖名をあがめさせたまへ十神國をきたらせたまへ聖旨の天よあるごとく地よもあらせた

まん　十一　我らの日ごとの糧を今日も與へたまへ　十二　我らに罪を犯す者を我らの赦すごとく我らの罪をも免したまへ　十三　我らを誘惑に遇はせず惡より救ひいだしたまへ。國と權と榮とは永遠なんぢのものなればなり。アーメン　十四　なんぢら人のつみをゆるさば天なる父もまたなんぢらをゆるしたまはん　十五　されど人のつみをゆるさずばなんぢらの父もなんぢらの罪をゆるしたまはざるべし　十六　なんぢら斷食するとき僞善者のごとく憂容をもるな彼らは斷食するを人にしらせんために顏色をそこ

るふるまひをなんぢらよつげん。こゝろにいまそのむくひをえさせんために断食をするときいこゝらよあぶらをぬり面をあらへ。このくるしみなんぢのだんじき人にみへずして暗中にいますなんぢの父よあらそをもんがためのさらだこのくるしみたまふなんぢの父いあらそを報たまふべし。〇十九 蠹と蝕とさびり盜うがちぬすむところの地にたうらをたくはふることなかれ。二十 蠹と蝕とさびり盜うがちぬすむところの天にたうらをたくはふべし。二十一 そこになんぢらの財寶のあるところに心もまたあるべければなり。〇二十二 身のひかりは目なり。それ

なるぞ全身もまつくらであるべし 三 されば汝の内の光が暗くあらば其の暗きこと如何ばかり大なるぞや 四 人は二人の主に兼ね仕ふることあたはず 或は一人を憎みて他の一人を愛し或は一人に親しみて他の一人を侮るべければなり 汝等は神と財貨とに兼ね仕ふることあたはず 五 この故に我なんぢらに告ぐ 生命のために何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ふな 身のために何を衣んと思ひ煩ふな 生命は糧に勝り身は衣に勝るにあらずや 六 空の鳥を見よ 播かず刈らず倉に収めず されど汝等の天の父は之を養ひ給ふ 汝等は之よりも遥かに勝れたる者にあらずや

倉よたくさふることまー。まそうるまんだらの天の父いこ
ゐをやーまひたまくり。るんだらいこをよりもおほいまを
ぐるーことのあらぢや 三 あんだら誰らよりおもひつづらひ
てそのいのちを寸陰ものべえんや 六 またあよゆるよ衣の
こころをおもひつづらふや。野の百合花をいうるーてそざろ
うをおもへ。労ぜ紡がざるあり 元 ままあんだらよつげん
ソロモンの榮華の極のときだもこの花のひとつほどもよ
そそざりき 三 神いけふ野よありてあを爐よるげいをうる
る草をもこのくようそそせたまくべまーてあんだらをや。あ
信仰うをきものよ 三 さをべるよをくらひるよを飲るよを

衣んとておもひまどらよるの巡三こをみる異邦人のごとくむるものあり。なんぢの天の父はまことてこをしらのなのくるくてならぬことをおりたまへり三三なんぢまづ神の國とその義とをもとめよさらばこをらのものはこぞみなんぢらに加へらるべし三四このゆゑに明日のことをおもひまどらふるな。明日はあそのことをおもひまどらへ。一日の苦勞はいちにちにて足れり

第七章

人のつみをさばむることなかれおそらくはなんぢらもまた罪さばめられん二なんぢらが人のつみを定るところにおのが罪をもさだめらるべし。なんぢらが人を量と

くいおのまことをあらはすべし　三　あんじ兄弟の目にあるもの
をこうてものが目にある梁木をあらざるいるんやいなや　四　あ
ま の目にうつるちりのちいさいうで兄弟にむかひてあんじ
が目にある物屑をとらせよといふことをえんや　五　偽善者よまづおのが目
のうちより梁木をとりさらばはじめて兄弟
のめより物屑をとりそらるやうあきらかにみゆべし　六　犬に
聖物をあたふるなかれまた豕のまへに
るげあらふることなかれおそらくは足にてこれを踐ふり
こちりてなんぢらとこれをやぶらん　七　求よさらばあたへられ
ん尋ねよさらばあひ門をたたけよさらばひらかるこ

ことを得ん、ここにまづくもとむるものは得たづぬるものはあひ門をたゝくことあひひらくべければなり、なんぢらのうち誰かその子パンをもとめんに石をあたへんや、また魚をもとめんに蛇をあたへんや、されば汝らきものなかより善賜をその子にあたふることをしるまして、天にいますなんぢらの父はもとむるものにしかあたへざらんや、ここのゆゑによりて人にせられんと思ふことはなんぢもまた人にせよこれ律法と預言者なるなり、○せまき門より入れよ滅にいたる路は廣くその門はおほきなりこれより入るものおほし、生にいたる

たるみちは せまくその門はもひとつその路をこうるものまゝ
ゝるより〇十五 いつそうの預言者をとうしおよごうそうは綿羊
のそばさうてあんぢうよきことをも内はあらき豺狼あり
まことにその果よりてしるべし 誰かいばらより葡萄
うあざみより無花果をとることをせん さてべて善樹はよ
き果をむすびあしき樹はあしきみをむすぶ よきき樹は
惡果をむすびあしき樹はよきみをむすぶことあたはざる
るなり おほよそよきみをむすばざる樹はきられて火よ
るげいれらる このゆゑにその果よりてこれをしるべ
し〇二十一 我をよびて主よ主よといふものはことごとく天國よ

いるまあらざぜ。たゞことをいるものが天にいますその父の
旨をおこなふものてこそあり　二一その日におほくの人が主よ
主よ主の名によりてをしへ主の名によりて鬼をおひ主の
名によりておほく異能をおこなひやしませりやといふものが
ほこゝろん　二二そのときこの事をかれらにつげて。我曾てなんぢらを
しらぢ惡をおこなふものよ我をはなれされといさん　二三このゆゑに
我をきゝてこのことばをきゝておこなふものを磐
のうへに家をたてたる智き人にたとへん　二五雨ふりおし
ほそゝいで風ふきてその家をうてどもたふれず。こはこれ
こと磐いはを根基となしたればなり　二六我をきゝてこのことを

ぞをきゝてあこるをざるものを沙めらへは家をたてさる。
ゆへにあめふりおほ水いでこの世ふき
てその家をうてびつひよふ傾覆てそのたふれおほいなり
二六 耶蘇こゝろのことを言竟たまへるときあつまりたる人
人そのをしへをあぢろきあへり 二七 そは學者のごとくあら
ず權威をもてるものごとくをしへたまへばなり
二八 耶蘇やまをくだりてきおほくの人々これまたがへり
二九 癩病のものきたりて拜していひけるは主もし
ろしめすもよくきよくするをえをきたるべしと
三 耶蘇手をのべうをよつけてわがこゝろにこゝるべし潔るをといひけ

バらいびやうたゞちよきよまれり。耶蘇このをりいひけるは愼て人にこのことを告ずゆきておのれを祭司にしめせこのモーゼが命せし禮物をさゝげてこれらに證據をせよ○五耶蘇カペナウムにいりしとき百夫の長きたりねがふていひけるは六主よわがしもべ癱瘋をやみ家にふしてはなはだくるしむやうり七耶蘇いひけるはわれゆきてこれをいやすべし八百夫のこうらこたへけるは主よわれなんぢをわが家裏にいれまつるにおよばずたゞ一言をいひたまへ。わが僕はいやさん九そはわれも人の權威の下にあるものなるにわが下にも兵卒ありてこれにゆけといへばゆき

へぞゆきこの道よきことをいふべきにあらず我しもべなる道を
なせといへどもなほも行ふ所あり十耶蘇このことをきゝて
あやしみおろがめる人々よびけるは。わがまことの主人
むらなつげんイスラエルのうもなだよいまぞこの人の篤信
おそぎるあり十三また多くむらなつげんおほくのひとびと東
より西よりきたりてアブラハムイサクヤコブとともに天國
にざし十三國の諸子いそとのくらきなほいぶさをそこに
てこのなしを切齒することあらん十四耶蘇いやくまんの長
ゆけるんむぢの信仰のごとくなんぢに成べしといひたまひ
るそのときに僕いいをり〇十五耶蘇ペテロの家にいりそ

のもとらいの熱をわづらひふしゐるをきゝその手をさしりけるにその熱さりて婦おきいでつかへ奉仕ひとをたるときひとびと鬼よつきたるものをおほくつれきりけるバ耶蘇こゝろよく鬼をおひいだし病あるものをことごとくいやせり　十七預言者イザヤよりてのべつかわまつの惡をうけまつの病をおふといひたまひしことのなさんがためなり　十八さて耶蘇おほくの人々のおのれをめぐまるをみて門徒を命じむうみの岸へわたらんとこゝろざしてゐたりある學者きたりていひけるハ師よいづこへおきたまふともまいらんと耶蘇こたへけるハ狐ハあ

おたりそらの鳥はきまりされど人の子はまくらそるところ
二 まこでーのひとりいひけるは主よまづゆきて父
をそうむることをゆるせ 三 耶蘇いひけるはそれま
ねさがい死たるものはその死るものをそうむらせよ
三 耶蘇ふねのりけるを門徒たちもこそよこぐ 二四 こ
のときおほいなる颶風おこりて舟をおほふそうなる浪
たちまち耶蘇はいりたり 二五 でーたちおこせもちのづきておか
こしいひけるは。主よすくひたまへまどろほろびんとそ
耶蘇こたへらいひけるは信仰うすきものよあんぞおそる
るやつひよおきて風と海とをいましめけるにおほいなお

ざやうまありぬ　三人々あやしみていひけるは。こゝいふる
る人ぞこのせもうみもことまさごひたり〇三六耶蘇むりみ
のきゝあるガダラ人の地にいたるとき鬼にとりつかれ
たるふたりのその墓よりいでゝこうきをむさぼ。究猛こゝ
そのほどくくそのみちを人のとほることあたはざりし
ほどあり　元こゝをさけびていひけるは神のこ耶蘇よ
らんぢとるんの與あるんやいまだ時にいたらざるにわれ
らをせうんとてこゝにきたりたるか　三七そのとき遠て豕のおほ
くのむれを食ひみけるに　三八鬼耶蘇にねがひていひけるは
そこをもてゝをおひいだしんとするにば豕のむれにいること

をゆるせ二こゝろよゆけといひけをば鬼いでゝふるのむ
をよいつゝもとゞめての群さゝよりこゝけて海へいり水をお
もゝり三牧者どもむゝにげゆきてこのことゝ鬼よつゝ
ゝゝりしものゝことをつげまをば四耶蘇へあもんとて邑
のものこぞりていできたりこゝをを見てこの境をいでんこ
ゝをねがひたり

第九章

耶蘇ふねにのりわたりて故邑へいたりけをば二癲
癇もて床にふしたるものをひとゞ舁きたりぬ。耶蘇のゝゝ
が信ぜるをみてちゝうぶのものよいひけるは。子よこゝろ
やそうをもあんじの罪ゆるさをたり三ある學者たちこゝろ

のうもよいひけるは。この人いけかをことをいふ。耶蘇
その思ひをしりていひけるは。なんぢらいかなるを心
惡しく思ふやゐるんぢの罪ゆるされてりとふるか起てあ
ゆめといふるかやすきそれ人のこ地にて罪
ゆるすの權あることをなんぢらに知らせんとてぞひ中風
癇のものにおきてねござをとり家へこうるをいひけれバ
おきてその家へこうるぬ人々これをみてあやしみそのか
のごとき權を人にたまひし神をあがめたり○耶蘇こゝ
よりまてみめきマタイといふる人の稅關にざしるけるを
をみていわれにまつたがへといひけれバ起てしたがふ○耶

蘇の主がいつも食まるとき税吏つどあるくさう
て耶蘇ゆのびそのでーとそまよざーけるバ　ハリサイの人
こゐつをこらてその門徒よいひけるハ。あんおらの師ハみこゆ
恵こつきとりや罪あるひとらとまよ食まるとき　耶蘇きく
てこの主らいひけうハ。をろやうあるものハ醫士のたをけ
をもくめぞたゞ病あるものこををもとむ　珍恤をも
このこて祭祀をこのまびとりよ　此いゐるこてゐ
ゆきてまなぶべし。そをこそのきこるハたゞしき人をまねく
たゝあまおくぞ罪あるひとらいあらためさうせんがためる
り（）おそのときヨハネのでー耶蘇よきこりていひけるハ

まことパリサイの人はおほく斷食をするに師かでーめたんじきせざるはなぜや　耶蘇こたへていひけるは新郎の友そのともにをるあひだは哀しむことをえんや將來さるゝ日きたらんその時さらは斷食まつぎなり　またあらたなる布をもてふるき衣をつくろふものはあらざるべし補ふるそのものかへつてこれをやぶりその綻もさるはさらにあしかるべし　また新酒をふるき嚢にいるゝものはあらざるべしさのせば嚢さけ酒もともにでそのふくろもまさむるにこれら新嚢にあらたなるさけをいるべきなり

べし（一）十八 耶蘇このごとくをいふときある宰官ら
年ごろいひけるはわがむすめいまぞ死りきたりてこの
手をつけたまへそ生べし 十九 耶蘇たちてこれにしたがひ
その門徒ともおのおの 二十 十二年血漏をわづらひたる婦
うしろよりきたりてその衣のすそにさはれり 二一 そはわれ
ただこのきものにさはらば愈んとおもへばなり 二二 耶蘇ふりか
へり婦をみていひけるは。むすめよ心やすかれ汝の信
仰なんぢをいやせり。すなはちをんなこのときより愈 二三 い
たれる宰のいへにいたりて笛ふくものおよびおほくの人の
あきさわぐをみて 二四 こゑをいひけるは退むすめいまだ

よあゝぞたゞいねふるのをぴとゞ耶蘇をあざわらふ 二五
うをとりいだせーのもりてその手をとりしかばをんなおきる
り 二六 このきこえあまねくその地にひろがりぬ 二七 耶蘇そこ
をさるにきふたりの瞽者あとがひてよびいひけるはダビデ
の子よをもとめをあはれみたまへ 二八 耶蘇いへにまいりしかば
瞽者きたりけるにそのものいひたまひけるはなんぢこのこ
とをなしうると信ずるやこたへけるは主よしかり 二九 耶蘇
その眼に手をつけてなんぢらの信ずるごとくなんぢ
らによあるべーといひけるにその目ひらけたり 三〇 耶蘇きび
しくいましめてこれをいひけるはつゝしみて人にさとる

るのみ。[二]ここにおいてもろもろの弟子いでゆきてあまねくその地よ耶蘇の名をひろめたり。[三]めしひのいづるときひとり鬼につかれつうまざる唖を耶蘇のつれきたりしに[三]鬼おひいだされてものいへり。衆人あやしみいひけるは、イスラエルのうちにかかることいまだかつてみえざりき。[四]パリサイのひといひけるは、この主鬼のつかひとよりてもろもろの鬼をおひいだせるなり。[五]耶蘇あまねくむらざとをめぐりその會堂にをしへ、天國の福音をのべつたへ、民のうちのもろもろの病をいやしたまふ。[六]衆人うふものなき羊のごとくなやみまた流離するのを見てあ

そをみたまふ　三その時でしたもよひけるに收稼はおほくして人はすくなし　三八ゆゑにその稼主にねがひて收稼のために人をおくりいだしたまへとこひねがへ

第十章　一さて耶穌その十二でしをよびうれつよけがをさる鬼をおひいだしまたそべてのやまひをそのぞくびをいやす權をたまへり　二それ十二使徒の名はさのごとし首はペテロとるびけたまひしシモンその兄弟アンデレゼベダイの子ヤコブそのきやうだいヨハネ　三ピルポバルトロマイトーマ稅吏マタイアルパイの子ヤコブタッダイとるびくるレッバイカナンのシモンイスカリオテのユダこをもそそ

も耶蘇をうらみ、せーものゝり（五）耶蘇この十二をいろえさ
んし、ここで命ていひけるゝ異邦の途よゆくるゝをまうこはマリヤ
人かもうまもいるゝもうゝ六たゞイスラエルの家のあうこる
羊よゆけゝもきて天國ちうきまありとのべつこゝ八病
のこゝのをいやし癩病をきよくし死たるものをよみがへらせ
鬼をおいだすこうをせよ。るんだゞ價をもうけたをそ
まうこおこいるゝほどこをべし。るんだゞ金まこい銀ま
こい錢をたゝえそ、おぶるゝもうゝたびぶくろ、のこたぎ
履つゑもまうこそうゞそ八もそうくものゝその食物をうる
八宜ありゝおほよそ郷邑よいくゝもそのうちの好人をた

づねていづるまでいそこよりさらまた十三人のいくよいくそ
その平安をとく十三その家そこへやすきをうべきものあらば
あんぢらのねがふ平安はそのいくよいくよんそこへやすき
を受べうらざるものあらばあんぢらの祈ふやすきはあん
ぢらにかへるべし十四もしあんぢらを接ずあんぢらの言を
きくのざるものあらばその家またはその邑をさるとき足の
ちりをはらへ十五まことにあんぢらにつげん審判の日に
いたらばソドムとゴモラの地はこのむらよりもゆるやそら
らん○十六それあんぢらをつのそをく羊を狼のなかにいる
るがごとし。ゆゑに蛇のごとく鴿のごとくおとなし

この事をつくづくみて人々こゝろえせよ。そも人あんぢらを集議
所よわづかまたその會堂にてむちうつべけをばるり十八ま
たわづかの緣故ようりて侯伯および王のまへにひかるべし。こ
をこのゝち異邦人に證をなさんがためなり十九人あんぢら
を解さばいかになにをいはんとおもひまうらふなをそ
のときいふべきことあんぢらに賜るべし二十こをあんぢ
らみづからいふにあらずあんぢらの父の靈そのうちにおり
ていふなり二十一兄弟はきやうだいを死にわたし父は子をわたし子は父
おやを詐こうことをころさしむべし二十二またあんぢらわが名のために
すべての人にに

と終までおのづからものいはくなるべし 三 この邑なる人あんぢらをせめあぐぬほどのものむらよりをまちくるあんぢらつげん。あんぢらイスラエルのむらくをめぐりつくさざるうちに人の子はきたるべし 四 でしその師よりまさらざるあり 三五 でしはその師のごとくなり僕はその主のごとくあらば足ぬべし。もし人あるじをよびてベルゼブルといはばましてその家のものをや 三六 このゆゑにかれらをおそるることなかれ。そは掩蔵せてあらはされざるものなく隠てしられざるものなければなり 三七 われ暗中なほいひてあんぢらつげしことを明處なほのべよ。

耳をつけてきゝ一こゝろを屋上いひゝろめよ 三 身をこゝろ
しん、霊魂をこゝろをこゝにおくをざるものをおそるゝ色。
唯あんばらなましひとこゝろたゝを地獄にほろぼしうるも
のをおそれよ 元 二羽のすゞめは一銭にそうるもあらずや
ちゝうるもあんぢらの父のゆるしなくばそのいちをも地に
おつることあらじ 三 あんぢらのこゝろの髪までこゝなこのぞ
へらる 三 ゆゑにおそるゝなあんぢらはおほくの雀よ
りもまさりたり 三 さきにわれ人のまへにわれをいふも
のをわれもまた天にいますわが父のまへにこゝ色
をいふべし 三 人のまへにわれをいふぞこゝいそん ものの

をうしなふものは天にいまそわれの父のまへにこれをえ
いふべし　○三四地におこせやうをいださんためにわれ
きたれりとおもふなかれ泰平をいださんとてにあらず刃
をいださんためにきたれり三五そはわがきたるは人をその父
にそむけ女をその母にそむけ嫁をその姑にそむけんがた
めなり三六人の敵はそのいへのものなるべし　三七我よりも
父母をいつくしむものはわれにふさはしからず我よりも
子女をいつくしむものもわれにふさはしからず三八おのれ
の十字架をとりてわれにしたがはざるものもわれに
ふさはしからず三九その生命をうるものはこれをうしふ

ひ我たゞよいのちをうしなふものいこゝを得ざれ四甲ん
じつを接るものいまをうくるあり我をうくるものい
まをつかせしものをうくるあり四乙預言者みるをも
てそのよげんしやを接るものゝよげんしやのむくいをう
け義人あるをもてそのたゞしき人をうくるものゝたゞし
きひとの報賞をうく四丙わざの門徒あるをもてそのちひさき
ひとりのものにひやゝかある水一杯ばかりまでものまするもの
は誠にあんじつなつげん。このあかしびそのむくいを失ざる
べし

第十一章

耶蘇その十二でしに示をさとりきよきこゝろをさり道
をなをしくひろめんがためこのまちの諸邑にゆけそ〇二さ

てヨハネ獄にありてキリストのわざをきゝてその弟子二人をこの主につかはして三いはせけるは來るべきものはなんぢなるかまたわれら他をまつべきかの四耶穌これにこたへていひけるはなんぢらが聞ところみるところをヨハネにゆきてつげよ五瞽者はみ眼あき跛者はあゆみ癩病はきよまり聾者はきき死たるものはいきかへり貧者はふくいんをきくのせらるる六おほよそわれのために躓かざるものは福あり○七この人らのかへるのち耶穌ヨハネのことをひとびとにいひけるはなんぢら何をこんとて野にいでや風にうごかさるゝ葦をみ

んとていでゝや美服をきてる人あるぞ。やそうきこゝろもをきたるものゝ王宮にあり九さらばるをみんとていでゝや預言者あるか然てまたそをるんぢらにつげんこをよげんゝやよりもまさりたるものあり十そをるんぢにさきだちて道をそなふるわが使者をまをるんぢのまへにおくらんと錄されたるはこれ是あり十一まことにるんぢらにつげん婦のうみたるものゝうちいまだバプテスマのヨハネより大なるものをおらざりき。されど天國のゝちひさきものもこれよりいおほいあるなり十二バプテスマのヨハネのときより今にいたるまで人々せめて天國をとらんと

そだてげさせるものハこゝをとゝまり　十三　なんぢらの頭言者
を律法のようげんしたるハヨハネのときまでなりき　十四　もし
これをうけんとおもふものハきたるべきエリアのことをなり　十五　耳あるものハきくべし　○
十六　またこの世をなにたとへんや。童子のまちにすわりてその伴
をよびてこゝろまて笛ふけどもをどらずまた哀をなしてもなげ
かざりしたぐひなり　十七　そハヨハネきたりて食ことも飲ことをせざれバ鬼もつきたるものなりと人
人いひて　十八　人のこゝろをしてこゝろよく飲ことをせ
べきく食をたのしこ酒をこのむ人こゝつぎとり罪のるものゝ

友ありといふことをきくも智慧ハもろの子に義とせらるるみ
り○そのとき耶蘇おほくの異能をあらはしたまひたる諸邑
のうれあらたまざるにより て責いひたまハ三あゝまざそ
ひまるこのなコラジンよあゝ禍あるかなベツサイダよあゝ
のうれあるかな異能をもしツロとシドンにあらばそ
のまゝハさやう威をき灰をこのむりてそのかみあらたまり
べし三まもあんぢらにつげん審判の日ハツロとシドン
の刑罰ハあんぢらよりもるほやをそらん三まてよ天よまで
であげられてカペナウムよまさ陰府におとさるべしそハあ
んぢらよ行ことあるまさをもしソドマにあせしるしば

今日まても多たもゝあらん 二四 ゝをるんぢらよつげん
審判の日はソドマの地はあんぢよりもゆるやをこのゝ
〇 二五 そのゝき耶蘇こゝろていひけるは天地の主なる父よ
このことを智者さときものよこのくしてあかごたち
まふと謝せ 二六 ちゝよ然そはこのごときは聖旨よろこ
るるあり 二七 父はもろ〳〵萬物をあたへたまへり。ちゝのほか
子をるものあくまた子はゝのび子のあらそころのを
のゝほかは父をるものあし〇 二八 もろ〳〵勞たるものおも
重をおへるものはいたりてきたれもをんぢらをやをなせ
ん 二九 ゝをもつてこゝろ柔和あしくて謙遜ものあをび わゝがくびき

を負てわがまゝにあるゝ、あんしんこゝろよく平安をうべし 三 そ
いわゞが軛はやさしくわゞが荷はかろければなり

第十二章 そのころ耶蘇あんそくにちよ麥田をとほりしに その
でしたち飢て穗をつみとりくひはじめたり 二 パリサイの人これをみ
て耶蘇にいひけるはなんぢのでしは安息日にあらぬことをなせり 三
こたへていひけるはダビデおよび從ありしものゝ饑しときなしたることをいまだよまざるのか 四
また神の殿にいりて祭司のほかはおのれもおよびそともにをるも
のもくらふまじきそなへの餅をくらひ 五 またあんそくにちに祭司は殿

きことを律法において よまざるや
ん殿よりおほいなるものこゝにあり七 われ矜恤をこのみ
て祭祀をこのまずといふ事のこゝろをもしらば罪なき
ものをつみせざるべし 八そは人の子はあんそくにもの
主たるなり 〇九こゝをさりてこゝろの會堂にいりしに十
一手なへたる人ありけるゆゑにこゝろ耶蘇をうつたへん
こゝろにてひけるは安息日にわざをなすべきや十二
こゝろよりひけるはあんちゝのうちに ひとつの羊をも
るものあらんもしその羊あんそくにも坑におちいる
ばこゝをとりあげざるや 十三人はひつじよりもこと

いくのむらうそや。さきび安息日よ善をなさんより 十三 つひに
その人よ。なんぢが手をのべよといひけるにのべたりしかば
たちまちほかの手のごとく愈 十四 パリサイのひといでゝ 耶蘇を
ころさんとたくみをり 十五 耶蘇これをしりてこゝをさりしに
おほくの人々これにしたがふ。またすべて疾病あるものをこゝに
いやし 十六 己をあらはすなことをかれらにいましめたり 十七 これ
預言者イザヤのいひしことぞ 十八 曰よわがえらみしわが
僕またわれのこゝろにかなひたるわが愛ものわれこれにわが
この靈をおくらん。この者異邦人にこゝろをきたらせん 十九 この者は
競ことなく喧ことなく人もまちにおいてその声をきく

ころもを　二十七眞道をもて勝ちを得しむるまでに
いたらん葦を　折ことなく　煙ふきを消ことなく
かならず眞道を施すべし　二十八なんぢらの
その名をよろこべりとある　よみがたきことばの
ありて　二十九人もしサタンをサタンにて
逐ば　その國いかでか立ん　三十もしわれ
神の御靈によりて鬼を逐ば　神の國なんぢらに
いたりしなり　三十一なんぢらの　瘡あるものを
耶蘇のもとにつれきたりけるに　この瞽の
おのれをいやしてものいひ　かつ見るやうに
なおせり　三十二衆人ことごとくおやまきていひけるは
ダビデの子なりあらざるこの　三十三パリサイの人きゝて
いひけるはこの人いかなるものこれらベルゼブルを
つらふによりざるバ鬼をおひいだすことなし
三十四耶蘇そのこゝろをしりてこれらにいひけるは
なんぢらわるびとゞもいかでおひあらそふ
國のことをかたるべきや　おひあらそ

そふ邑や家にたらぐこのうぢ云サタンもーサタンをおひいざさふみづうらあひおうそふありさうべその國いうでたんやもーこをべルゼブルによりて惡鬼をおひいざさばるんぢうの子弟にたまよりそおひいざやそをこをらうるんぢうの裁判人とるうべー云もーこを神の靈によりてわれ神の國にいたれるやるんぢうのうへにきたるなり云あるひいかでひとりつよきもののいへにいりてその家のたからをうばふことをえんや縛てのちにその家をうばふべし云そもてそもあうざるものにこをよそむきてこをもてとをもて斂ざるものいちうそおり云このゆゑに

ゐんちらよつげん人々のまごゝろをゝころのつゝゝ神をけがすことゝゆるさるべし三言をもて人の子をそむくものゝゆるさるべし。されどことばをもて聖靈をそむくものゝ今世よおいてもまた來世よおいてもゆるさるべからず三あるひは樹をもよしとしその果をもよしとせよ。あるひは樹をもあしゝとしその果をもあしゝとせよ。その樹はその果によりてしらるゝものあり三而あゝ蝮のそらよりなんぢら惡きものゝいうで善をいふことをえんや。そは心よりつるより口はいふものあるべきあり三五よき人はこゝろの善庫よりよ

きものをしるし　惡人はそのあしきくちより惡きものを
せり。三六　またあんぢらはつげんをこばんで人のしみところの虛
言をさぐりきの日よきをうたくざるを得ず。三七　それまんだ
そのしみところのくちむまよりて義とせしきまでそのい
ふことをきよりて罪ありとせしきまでありの○三八　このきお
る學者とパリサイのひとくちくていひけるは師よ奇蹟をみ
しそきをまほさんことをねんじよ請三九　こくてこの邪
まひけるい奸惡ある世はきるしをもとむ。されど預言者
ヨナのきるしのほかはきをきるしをあたへらるまじ。四〇　それ
ヨナが三日三夜くちをのそまのうちにありしごとく人の子

もみつらこよ地のうちにあるべし　四一ニネベの人さばきの
日よともにたちて今の世のつらをさばめん。こはヨナ
のをしへによりて悔改たり。それヨナよりおほいなるもの
こゝにあり　四二南の女王さばきの日よともにたちて今の
世のつらをさばめん。こは地の極よりソロモンの智慧をき
かんとてきたりぬ。そこにソロモンよりおほいなるものこゝ
にあり　四三あくきくよりいでゝうるきたるときこゝろをめぐり安
息をもとむれどもえずていひけるは　四四わがいでゝ家に
うつらんとてさりきたりしに空虚ふきてきよまりうるぎ
たるをみ　四五遂にゆきて己のをよりあほあしき七の惡鬼を

たづさへよりてこゝに居(を)るその人のなかにものありさまざまにより來(き)たりおこつるべし。このあしき世もまたこのごとくあらん　四六　耶蘇(いえす)ひらくまことのことをるときその母と兄弟(きやうだい)ともものいはんとてそとにたちけるに　四七　あるひと耶蘇(いえす)にいひけるはなんぢの母(はゝ)ときやうだいなんぢとものいはんとてそとにたてり　四八　耶蘇(いえす)つげしものにこたへていひけるはわが母(はゝ)はたれぞわが兄弟(きやうだい)はたれぞや　四九　手をのべその門徒(でし)をさしていひけるはこれわがはゝわがきやうだいなり　五十　そはたれにてもわが天(てん)にいます父(ちゝ)の旨(むね)をおこなふものはこれわが兄弟(きやうだい)わが姉妹(しまい)わが母(はゝ)なればなり

第十三章　この日耶蘇ゐでゝうみぐるに坐せしに　二大
人こぞりよりあつまりきたりければ耶蘇いふねにのりてさり
をゞしてのこりの人々はきしにたゝり　三耶蘇たゞ
のことをひとゝゝにこのゝりぬ種まくものまきにいでゝ
播るときみちのほとりにおちしたねありそらの鳥きたり
てついばみつくせり　五またほかの土うるほき礫地におちしたね
りたゞもはえいでたれど　六日のいでゝきやけぬれ
ば根あさければ枯たり　七またしげき棘中におちしたねあり
いでゝそだちてこれをふさげり　八またよき沃壌におちしたね
あり實をむすべることあるひは百倍あるひは六十倍あるひ

ひい三十倍せり 九 耳ありてきこゆるものいさくべし 十 門
徒たちきくりてこのせよいひけるはあゝ名を讐をもて、この
きよくうつくしたまふや 十一 こゝろくていひけるはんむろま
ハ天國の奥義をとゝるこゝをあたへたまへどこのたとへハあ
さへたまへざるべからず 十二 そもまつものハ予られてあるは
あるりあり無有ものハそのまつところのものをもとゝるべ
し 十三 このゆゑにハ視てもみざ聽てもきゝざさとらざるがゆゑ
にまたこゝにをもてこのたとへをもてこれをとく 古イザヤの預言よ。
あんむろきけどもさとらじみてどもみざ 十四 そハこの民め
ゝて見みてきこゝろゝをさとり悔改てすくはざらんや

こゝろをおそれ其の心をにぶくし耳をおほひ目をとぢたるといひしよこのゆゑなり　十六されどなんぢらの目はこゝろよきゆゑなんぢらの耳はきくがゆゑなりさいそこひあり　まことなんぢらにつげんおほくの預言者と義人はなんぢらがみるところをこゝろとしたりしの見ることをえざりなんぢらがきくところをきゝたりしの聞ことをえざりき　十八ゆゑなんぢら播種のたとへをきけ　十九天國のをしへをきゝてさとらざるときは惡きものきたりてその心にまかれたるねをうばふこれ路のほとりにまかれたるねなり　二十礫地にまかれたるねはこれをきゝてすみやかによろこ

びうくもてごも 二 おのまて よ 根 あくまバ もぞ〳〵 のそを〳〵へのた
めよ 患難 あるひいせめくるくことのおこるときいたもま
ち道よつまづくものあり 三 まくいだらのあるよまうをた
る種いことをく〳〵ときけどもこの世のこころづこのひと
貨財のまつぐひよをく〳〵ねふそがまてみのらざるものあり
三 沃壌 よまうをたるたねいこをく〳〵をきくてさとり實
をむそぶことあるひい百倍あるひい六十倍あるひい三十
倍をるものあり 四 まくたとへをこのまてる志あしていひ
けるい天國い人はるけよきたねをなくまにるり 五
ひとくのいるたるうちよその敵きたり麥のあるよこうそ

むぎをまきてさることり二六苗て通りそで〳〵みのりたるときこのゝ
ちむぎもあらはれ出たり二七あるじの僕きたりていひけるは
主よきよけるよい美種をまきのざりしにあらずやこのくさはい
ぎあるや二八ぬべよいひけるは敵人これをなせりしもべ
主にいひけるはゆきてこれをぬきあつめんやと二九答あるじいふ
ないよきぬくいあんぢらこのくさをむぎを抜あつ
めんとて麥をもともぬくべし三十收穫までふたつながら
そだてあけよ收穫のときわれ先このくさをむぎをぬきあつ
めてやきんたきぎよこれをつつねて麥をばわがくらにをさめ
よといはん〇三一またたとへをこの人どもにまうけていひけるは

天國はこのくだものの如し人これをとりてその園に蒔けば三よろづの種よりは小ひさけれども長じては蔬菜よりおほいになりてそこの鳥きたりてその枝にやどるほどの樹となるなり○三まさたるくをこれにたとへていはく婦人これを取り三斗の粉のなかにかくせばことごとくふくれいづるなり○耶蘇たるくをもてこれこれのことを衆人にかたりたまへり譬なくてはかたりたまはざりき○三五これ預言者によりていへるをまたるくをまうけて口をひらき世のもとめよりこのくれたることをいひいだすといへるなるをもたるなり○三六つ

ひよ耶穌ひとりいとうへして宣よいまりぞそのでーきうつて
いでりくたもうさけのこうをものぎかたうくなくうる醉た
まへ言こうをこうさんていひりうハこの世界るりよきたねをまくうものハ
人の子なり 三 もうけハこの世界るりよきたねをまくうものハ
の諸子なりこうくをむぎハ惡魔のこぐもらるり こわ
く敵ハあくまるりこのりのまハ世のをそうまりごうるまのハ
天めつうりたもうあり 四 こうをむぎのあつめて火よやこのる
ここうくこの世のをそりよおいてもこうくのこうくあるへ
し 四人のをのつうひたもをつのもうてその國のうちよ
りをうてつあつきくるものまのくを惡をおそ人をあつめて

四二こゝを燧の火をもてげうるべしそこまでこのるゐ歯をる事あらん四三このとき義人はそのもくの國をおいて日のごとくにかゞやくこと昼のごとくべし（四四また天國はたとへばこのくさ生たる寶のごとし人みいだしバこゝを秘まもりよろこびのあまりその所有をことごとくうりてその田をこうふなり○四五またてんこくはよき珍珠をもとめんとするあきうどのごとし。四六一のあとひたかき珍珠をみいだしさりてそのもちものをことごとくうりてこれを買なり○四七またてんこくは海にうちてさまざまの魚をとる網のごとし四八

よいをぉしきものをそこるるり　咒世のをそりよおいてもうくのごとくるん。天のつのひたもいでく義者のうちよりあしきものをとりわけ　五こをを爐の火になげいるべし。そこにて哀哭とぎみをることあらん○　五一耶蘇このをてよいひけるハ主よひけるハこのことをるか悟しやこのをてよいひけるハ主よ　五二耶蘇こうをてよいひけるハさればてんくくまついてをしへらをてる學者はあてらしきものとふるきものとをその庫よりいぶる家のあるじのごとし○　五三耶蘇このたとへをいひをりてこゝをさりぬ　五四そのふるさとにいるとき會堂にをしへをりしかばひとくおやしこのひと

の智慧と異能いづこよりきたるや 五五 これ木匠のこにあらずや その母いまだマリアその兄弟ヤコブ ヨセ シモン ユダとはあらずや 五六 その妹たちもわれらとともにあるにあらずや されこの人のもろもろのことはいづこよりきたりしや 五七 つひに厭てこれをもて耶蘇 この事をいひけるはさきげんじやをその故土そのいへのほかにおいてたふとまざることなきなり 五八 この事かれが信ぜることなきによりてなほかれのふしぎあることをこころまでたまはざりき

第十四章

そのころ分封のきみヘロデ 耶蘇のうわさをきゝて

二そのしもべらにいひけるは、こはバプテスマのヨハネなり。
彼よみがへりたり。ゆゑにかゝる勢力をあらはすなり
三前にヘロデその兄弟ピリッポの妻ヘロデヤのことに
よりてヨハネをとらへ、縛りて獄に入れたるは、四ヨハ
ネ、ヘロデに此の女をめとるはよろしからずといひ
しによる。五この故ヨハネを殺さんと思へども、民を
預言者とするによりてこれを恐れたり。六ヘロデ誕
生の日をいとなむときヘロデヤのむすめその坐上にて舞
をまひ、ヘロデをよろこばせければ、七いつにてもなんぢの
求むるものを與へんと誓ひてあらかじめ約せり。八むすめ

その母のそばにありしより バプテスマのヨハネの首を盤に
のせてこゝにたまはせよといふ 九 王うれひけれどもその
誓たるに席につゐる人のために命じ 獄においてヨハネの首を
きらせ 十 その首を盤にのせてもちきたりて女にあたへけれ
ば 女はこれをその母にさゝげたり 十一 ヨハネの弟子たちきた
りて屍をとりこれをはふむりもきて耶蘇につぐ 十二 耶蘇こ
のことをきゝて人をさけ船にのりてそこをさりさびしきとこ
ろにゆきたまひしが衆人きゝて歩行よりこれにしたがひ
り ○十四 耶蘇いでゝおほくの人をみてこれをあはれみその

病るものをいやせり　十五　日くるゝときその弟子ら
ひけるはこゝは寂莫ところにして時もはや
ゝものきてみづからの食をもとめさせんために
ひらきたまへよ　十六　耶蘇こゝろよいひけるは
人々ゆくにおよばずなんぢらこそ食をあたへよ
といふ　十七　かれいふよ五の餅と二ひきの魚あるのみ
ここらまりおきらを　十九　遂よひらぐ命じてもわしめ五
をとらまりおきらを　十八　耶蘇のひけるいそ
のパンと二のうを取とり天をあふきて謝しパンをさきて
弟子らにあたへ門徒らもひとぐまおらくぬ　二十　詐らひて
飽そのあまりたるくづをひろひしる十二の筐にみちたり

三 くゝひゝものゝ婦とこゝろもめほろおほよそ五千人ありき〇三 やゞて耶蘇ひとりくとうくさんとしてその門徒を去ひて舟のもむうみのきしへさまよわくらむ 三 このくてひとりぐとうへしけるば祈禱せんとてひそくま山のほりひるまてひとりそこにいませる 四 ふねハ海中におりて逆風のたゝよふをこまぜよせさる 五 夜の四時ごろ耶蘇くをのうへをあゆみてこちまいりしま 六 門徒そのうみのうへをあゆみるとてをどろきこハ變化のものゝふしんといひておそれさけびたり 七 耶蘇やゞてこのもとまいひけるハこゝろやすくをもてあれハなおそるまあの主 八 ペテロこたくてい

ひけるい主よわれをあんむるべからざる命じるみづとうそ
あんむのもとへいくらしめよ 元来きたといひたるひにふ
ぺテロふねよりおりて耶蘇のもとへいくとて浪のう
をあゆみたまど 三 風のさかしきをみておそれあやぶ
きけるど主よわれをたすけたまへといふ 耶蘇すぐて手
をのべてこれをとらへていひけるい信仰のうすきものよ
んぞうたがひや 三 ともに舟にのりけるど風しづまりぬ 三
ふねにをるものどもよりてうやまひ拝していひけるい
まことにあんむは神の子なり○ 西 つひにわたりてゲネサレの地
にいたりぬ 三五 そのところのひとびと耶蘇をしりてあま

ね〳〵四方より人をつてのもとへもちきたりつゝきら〳〵むれたるその衣のそでさへさはらんことを耶蘇にねがへつゝ押去りものいをもちもちうるわやさをたり

第五章 エルサレムの學者とパリサイのひと耶蘇にまさりていひけること 二 あんぢの門徒いまだ人のつゝく伝をこのまずあるものをそや食するにきよからぬその手をあらはずしてくひけるや 三 こゝにてこのまうけるひけるやあんぢらいまさるんぢらのつゝくによりて神の誡をこのもいあるものをそや 四 そも〳〵神いまし〳〵めてあんぢの父母をうやまへまた父母をのしるものいころさるべしとのたまへり 五 されどなんぢ

ぢ〳〵はいひてをべて人ちゝをむりびあんぢとやるふべきものハ禮物ふりといもでハその父母とうやまをぞとをよ〳〵そのくてあんむり遺傳より神のおきそをむるーくせり七僞善者よイザヤハよくあんぢをついてよげんしーハこの民ハくちもつゝそこゝろをハ七のハきゝ屢こゝろをうやまをぐもその心いまをよとなぞうり九人のいひつけの誡をしへとおーそいるづるまをを拜をくいつもーー耶蘇ひとびとをよびてうをまよいひけるハきゝてさとをまよ十一口にハいるものハ人をけがさぞらもよりいづるものハこゝをを人をけがをふり十二門徒きたりて耶蘇にいひけるハパリサイの人

このごとをきゝていふひ棄るとあんぢもの
ていひけるいわゞ天の父のうゑざるものいくらぬ
一五 このまことをもそおけ瞽者のてびきをするめしひあり。
めしひのめの瞽者のてびきせばふたりともに溝におちべし
ペテロ耶蘇にこゝていひけるにこのたとへをわれらにときたまふ
耶蘇いひけるいまだあんぢらもいまださとらざるか
もろて口にいるものゝ腹にくだりてのちやすておつるを
いまだあんぢらざるの 八口よりいづるものゝこゝろより出
こゝを人をけがすものなり 九そゝこゝろよりいづるところ
の惡念凶殺姦淫苟合盜竊妄證謗讟 二十こゝをこゝろの人をけがす

めのかりされども手をあらはざりければ
ピ三耶蘇こゝをさりてツロとシドンの地よりきけるよ三その
地よりあるカナンの婦いでゝよびけるハ主よ
ダビデのきみよわをあはれみたまへわがむすめ鬼につ
かれていとくるしめり三耶蘇ひとこともこの婦にこたへ
ざりしかばその門徒きたりこひていひけるハこれらのお
とより喊叫ものゝごとくにしたがひ来ればなり四こたへていひ
けるハイスラエルの家のまよへる羊のほかにはつかは
さるゝことなしと五婦きたり拝していひけるハ主よわれをたすけ
たまへ六こたへけるハ兒女のパンをとりて犬になげあたふ

るいようろーこうぞ 七 をんるいひけるハ主よおつうされど
いぬもその主人の膳よりおつるこづをくらふるり 八 つひ
よ耶蘇こうこういひけるんをんるよるんぢの信仰いおほく
あるねがひのごとくるんぢに成べし 九 このときよりその女
いえたり 十 耶蘇こうをさりガリラヤのうみべまもき山
よのぼりて坐せり 十一 おほくのひとびと跛者めしひ瘖者こう
はおほびきまぐのやまひあるものをともなひきたり耶蘇
のあしもとおきけるにそをもこをいやしぬ 十二 こう
まおいておしハものいひ殘疾いいえおしくいおゆを
瞽者いを見たるをひとびと見てあやしみイスラエルの神をあ

ざめたり○三耶蘇そのでーを召ていひけるは此
人をおそるゝむ○こゝにてこゝまでとそまをることと三日よりそこ
らふものかー飢させてさらしむることをこのそのおそらく
くは途間まてなやまん三そのでーこのをるいひけるは野ま
てこのおほくの人まあるほどの餅をいつことよりえん
や四耶蘇こうをらまいひけるはパンいのくつのあるやこうと
るに七ともこーの魚あり三九耶蘇ひとびーま命じて地まをて
らしめ三六七のパンとうをとりて謝ーこをさきてその門
徒まあたへーこをひとびーまあたへ三七らみてこ
お飽たりあまりの屑をひろひーまあつのうとこまみてり

三八 こゝをを食るものをんあとこゞものほかの四千人ありき
三九 耶蘇ひとくをさゝくめ舟よのりてマグダラのさとひと
いりこをつゝ

第十六章 パリサイとサドガイの人きたりて耶蘇をこゝろみんと
して天のあるしるしをこゝをよといひけるに 二 このとき
ときこゝけるにあんぢ暮るとゆふやけするよりて晴るら
んといひ 三 朝ゆふあるやけまくもりするよりてけふは雨
あらんといふ。偽善者よそらのけしきをわきまへこゝをさり
て時のしるしをわきまへざるか 四 姦悪なる世はしるし
をもとむるともよげんとやヨナの休徴のほかにしるしを

あるところをとりつひよこのもろをそなへてさりぬ　その七
しかうみの岸よりさりしよ餅をたつさふることをできるを見
さり　六　耶蘇こうもろこしひけるいこころおしてハリサイと
サドカイの人のパンだねをつゝしめよ　七　門徒たうひよ論
しそひけるいこころをパンをたづさへさりしのをおしへ　八
耶蘇こゝをしりそいひけるい信仰うすきものよなんぞたが
かいよ餅をたづさへさりしことをろんぞるやハいまさ
とゝふるう五千人ついてのパンをあらつしときいくこの
ごひろひやとまた四千人まあるのパンをあらつしと
きいくこごひろひやなんぢらこゝをおぼえざるの　九

パリサイとサドガイの人のパンだねをつゝしめとい餅(パン)
きていくるまわらざるをあんぞさとらざる十二こゝまわい
て門徒そのパンだねまわあらでパリサイとサドガイのひと
のをつゝしめを謹防(つゝし)といつるあるをさとるり○十三耶蘇(いえす)ヒリッポ
のカイサリヤのうるまいたりしときそのでしよふといひ
けるハひとゝ人の子をたれといふや十四こたへていひける
ハある人ハバプテスマのヨハネあるひとハエリヤあるひと
エレミヤまた預言者(よげんしや)のひとりありといふ十五こたへていひ
けるあんぢらハまたをいひて誰とまふすや十六シモンペテロ
こたへけるハあんちやハキリスト活神(いきかみ)の子(こ)なり十七耶蘇(いえす)こたへ

てよくまことをいひけるハヨナの子シモンあんじんさいひふりそんに血肉あんちよもあめせるよあらざ天よまゝにわが父ありて　十八　われまたなんじよつげんあんじハペテロありわれ教會をこのいはほのうへにたつべし陰府の門ハこれにかつことをえざるべし　十九　われなんじに天國の鑰をあんじにあたへんなんぢなにおいて繫ことハ天よおいてもつるぎあんじが地よおゐて繹ことハてんよおいてもとくべし　二十　つひにその門徒をいましめけるハこれをキリストと人につぐることをなさん　二十一　このときよりイエス耶蘇そのでしにおのれのエルサレムよゆきて長老さいし學者たちよりおほく

のごとくせをうけ三つのころさを第三日によみがへること
を示さむ 三ペテロ耶蘇をひきとめて主よこのごとき
ことあんぢよきことなるまじといひければ 三耶蘇
てペテロにのひたまひけるにサタンよわがうしろにまりぞ
けあんぢいはを礙のものなりそはなんぢが神のことを
おもひびからず人のことをおもへり 四このとき耶蘇その
でしのひけるやうはたれにてもわれにしたがはんものは
おのれをすてそのー字架を負てわれにしたがへ
いのちを保全せんとするものはこれをうしなひわがため
によの生命をうしなふものはこれをうべけれあり 三

人にうひらめうとうるとそのいのちとうしなふ
んの益あらんやまた人はなにをもてその生命にかへ
んや　三七　人の子はちゝの榮光をもてそのつかひたちとともに
きたらんそのときおのれの行にしたがひてむくいをへし
　三八　まことなんぢらにつげん人の子その國にきたりて
るものゝうちに立ものあるべし

第十七章

六日のちペテロヤコブその兄弟ヨハネをとり
てひとりけてくらき山にのぼりたまふ　二　かれらの
まへにてそのすがたかはりその顏日のごとくかゞや
きその衣いとしろくひかりわたれり　三　モーセとエリヤあらはれて

耶蘇をこゝろもよろこびぬ 四 ペテロこゝろづきて耶蘇にいひける
は主よこゝにをるは善きことなり若し汝こゝろ
にまかせ三の廬をつくらせたまへ一は主のため一はモーセ
のため一はエリアのためなりせん 五 よくいふるときこの
ける雲のわれらをおほふ聲ありいでていひけるは
わがこゝろにかなふわが愛子あり汝ら彼にきくべ
し 六 門徒これをきゝておほいにおそれたりき 七
耶蘇きたりてこのもろもろの手をとりて起よおそるゝなかれ
ひけるに 八 その目をあけしかたゞ耶蘇のほかひとりをも
みざりき 〇 九 山をくだるときに耶蘇よりこの命じて人の

子のようにこづるまでにあんじくの見こうを人よつくべ
こうぞと云くり　十そのでしをみていひけるはさきだ
ちてきくべき學者のいくるにあるぞや　十一耶蘇こと
へていひけるは實よエリアいきたりて萬事をあらたむべ
し　十二さるをわれあんじるにつげんエリアいをでにきたり
しを人こうきをあらびたで任意よろをあしらくりこのく
ごとく人の子もまたこうをうけよりくるをうくべし　十三こ
こにおいて門徒はバプテスマのヨハネをさとていひたるく
をさとれり○　十四こをもてあるくの人のをるところにきたり
しにあるひと耶蘇のもとにきたり曲躓　十五いひけるは主よ

わが子をあそばしたまへ癲癇にて屢〻火に入り
たまひ水に入りたまふ 十六 弟子たちに
治せんことを願ひたれども治すこと
あたはざりき 十七 耶蘇こたへていひけ
るは 信なき曲がれる世なるかな
いつまであんぢらと共にをらんやいつまで
あんぢらを忍んやこの
をわが許につれきたれ 十八 耶蘇
悪鬼をいましめたまへば鬼いでてその子
このときよりなほりたり 十九 そのとき
弟子ひそかに耶蘇にきたりいひけるは
われらこれを逐いだすことあたはざりしは
なにゆゑぞ 二十 耶蘇いひたまひけるは
あんぢら信なきによりてなり

らよつげんこと〻并種のごとき信あらばこの山よこゝよりうつこゝろうつるといふともこのあらざるぞうらんまゝあんぢらにあたはざることあらざるべし二一さるにこのたぐひは祈禱と斷食とにあらざればいづることなきなり二二ガリラヤを周流るとき耶穌うちまいひけるは人の子ひとの手よわたされ二三ころされて第三日よみがへるべしと門徒こゝろをきはなはだうれへたり○二四カペナウンにきたるとき稅金をおさむるものどもペテロにきたりていひけるはあんぢらの師いをさめきんをいださゞるか二五いふてペテロいへりしとき耶穌まづうちいひけるは

ペテロシモンあんぢいかゝおもふや世界の王たちは運上および人税をたれよりとるや己の子よりほかの人よりとるや
二六 ペテロこのまゝいひけるにイエスかれにいひけるは然り子はうけざるなり
二七 されどかれらをつまづかせざるために汝あんぢ海にゆきて釣をたれよ最初はじめに釣るところの魚をとりてその口をひらけば銀一ピースを得ん
これをとりてわれとなんぢのために納よ

第十八章

そのときに弟子イエスにきたりていひけるは天國において大なるものはたれぞや
二 イエスをさなご子をよびこれを

のあうまたてゝ　三　いひけるはまことなんぢらに告ん
ぬしあらたまりて孩提のごとくあらずばてんこくにいる
ことをえず　四　さればおのれをこのをさなごのごとく
へりくだるものはこれ天國において　おほいなるものな
り　五　またわが名のためにかゝるのごときひとりのをさな
ごを接るものはわれをうくるなり　六　されどわれを信ずるこの
小子のひとりをつまづかするものは磨石をその
けくびにそへ海のふかきにしづめらるゝほど益あるべし
七　この世はわざはひあるかな。そはつまづきのくることを
ぬぐりえざればなり。礙くることはくるべきなれど

たくさんのものハ禍あるとうるハこゝもんぢの手もんぢの足おのまたつのづうさびきりてこゝをそそよ兩手兩足ありてつきさゞる火よあげいまゝれんよりハ跛まゝいうこゝをうそ生よいるハよきあり九りもんぢの眼おのまたつのづくさびぬきいづてこゝをそそよ兩眼ありてぢごくの火よあげいまゝれんよりハ二眼まていのもよいるハよきあり

十もんぢらこのちひさきものゝひとりをもつてさゝて輕視おこのまたまんぢらよつげんするまゝこゞ天のつゝひハ天よありて天よいまそわゞ父のこゝほとつねよゝをゞあり土そをゞの子ハほろびたるものをもくもんたあよきこゝまた

十三 なんぢらいかゝおもふや人もし百匹のひつじあらんに
その一ぴきまよはゞ九十九を山におきてゆきて
ひとつをたづねざるや 十四 まことに尋てこれをえばわれ
まよはぬ九十九のものよりもかの
ほその一をよろこぶべし 十五 かくのごとくこのちひさきものの
のひとりのほろぶるは天にいますなんぢらの父のこゝろ
にあるにあらず 十六 もし兄弟なんぢに罪ありてそのさゝ
ときにゆきていさめよこれをなんぢのことをきくばその
兄弟をえたるなり 十七 もしきかずば一二人の口によりてあら
ゆることのこゝろをさだめんがためなほひとりふたり

ところもおひやけごとこの色ごともきろぞい教會よつげよ。
のーけろくちいまきのぞいこをを異邦人こう税吏のごと
きものとまぐべー 六 そを色まてまあんぢごまつげんおほよ
そあんぢごが地よおいそ繋こと天よおいそもつあぎ。あ
んぢごが地よおいそ釋こと天よおいそもとくべー 九 そ
色まごあんちごまつげんをごあんぢらのうち二人のもの
地よおいてこころをあそもあごとまそもめこめば天よ
いまをわごが父いうをごのためよこをを成たまあべー 十 そ
いわごが名のためよ二三人のあつまるところいまてもあ
そのうちもまあれべあり(一) 三 そのときペテロ耶蘇よきろう

ていひけるは主よいくたびまでわが兄弟のわれにつみを
をかすをゆるすべきのか七たびまでのか　二二耶蘇これ
にいひけるはなんぢに七次とはいはず七十倍せよ　二三
このゆゑに天國は王そのけらいと會計をもとめんとする
がごとし　二四もとめしときひとり千萬金のひきおひしたる
ものを王のまへにひきたりしに　二五つぐのひうるものなければ
こをも命じてその身その妻孥とあるすべてのものをうり
てつぐのはんことをめり　二六その臣ひれふしていひけるは請
わをを寛したまへさらばつぐのはんべし　二七ここにおいてそ
のけらいの主あはれみてこをゆるし釋そのひきおひをゆる

たり。その臣いで、おのれより銀一百のひきおひしたく。
友よあらけものこらまをそしく喉をとりひきおひをうくせ
きいふ。その友あしもとに俯伏てわがひいひけるわきを
を覚ずしてそこるつくのふべし。三十ろうるよこらまをうけ
がもちてゆきその負債をうくのふまそこのまを獄よりれ
ぬ。三ほうの友そのおせることをうけてそこのこらまをこるその主よつげしうど。三主こうまをよびて
いひけるはあしき臣よ。んちわまよ求しまよりてわまそ
のひきおひをことごとく免たり。三十がもんじをおそれを
しごとくおんじまる友をおそれむづきまおらまや。三

の主いうりてひきおひをくる償までこのまつを獄吏にわたさせ
三五 り三五 もしおのおのその心より兄弟をゆるさざれば天のわ
ちちまたかんぜんにこのごとくなしたまふべし
第十九章 耶蘇これらのことをのべをはりてガリラヤをさ
りてヨルダンのむかふユダヤの境にいたりけるに 二 おほくの
人々したがひきたりてここにてかれらを醫したまへり
三 パリサイ人のひときたりて耶蘇をこころみのひけるは人おの
おの故なくしてその妻をいださるよきや 四 こたへて
いひけるは元始より人をつくりたまひしものはこれを男女につくりたまひ 五 このゆゑに人もちちをはなれて

その妻よあひ二人のもの一體となるあり
だよまぎるこの六さればもや二ゐあらじ一體あり神のお
もはたまくるものか人こまをそもべうらじ七耶蘇まい
ひけるいさらば離縁状をあたへて妻をいづせとモーセ
命ぜしあるぞやハこまろまいひけるモーセいふんぢ
らの心のつまあきまよりて妻をいづそことをゆるしたる
ありさされど元始いこのくあらざりき九ここまんぢらまつげ
んも淫事のゆゑあらでその妻をいづしほうの婦をめと
るものい姦淫をおこなふあり。またいづされる婦をめと
るものもこんいんを行あり十でしたち耶蘇まいひける

を一人つまよおいてこのごとくの
ごとくハ娶ざるよ云うぞ十一この
ことをよいひけるハこのことをぞ人
ことをかうけいることあ
ることをぞ。たゞ稟賦たるものゝことをぞ。
のもとよりうまれつきたる寺人ありまた人よせられたる
寺人ありまた天國のためみづからまたる寺人あり。こと
をうけいることをうるものハ納べし〇十三そのときひと
びと耶蘇の手をつけていのりんことを求をそふかこれ
まつをきたりけゞ門徒ことをとゞめたり十四耶蘇いひけ
るハ孩提をゆるせわれにきたることをいましむるなかれ
天國ハをるものハこのごとくのごときものなり十五そふをいひ

らん手をつけてこゝをさりぬ○十六ある人きたりてこゝをよいひけるは善師よわをこゝろおき生をえんがためよいおよのよきこゝろをおそべきてうをよいひけるはるよめおこゝををよきとりかやひとりのほう善ものいおしをおもも神ありごとういのちよいくんとおめもぐ誠をまもるべし十八このれこゝろへけるは何ぞ。耶蘇いひけるはこゝろをおう邪淫をるおうをぬすむおう迷いのもりの證をたつるおう迷十九おんちの父と母こゝろやまべまごおのをのごとくおんちの隣をおいをべし二十少者こゝをよいひけるはこゝをこるおわをいとけおきとりまもをまもるものありおよの虧たるところわをてお

るや　二三耶蘇こゝろまよいひけるハ完全くゝんこゝをおももて
往てあんぢが所有をうりそまづしきものゝ施されハ天
において財あらんむくてきたりわれにしたがへ　二二わかい
きものこのことばをきゝてうれひさりぬこは產業おほ
いありければなり　○二三耶蘇そのでしにいひけるハまこと
よなんぢらにつげん富るものハ天國にいることこゝろ
ふかんぢらにつげんまたゝやすきものゝ神の國にいるよりハ駱
駝の針のあなをとほるハやすし　二五門徒これをきゝて
いとゝおどろきいひけるハさらバ誰こゝろをうくべき
や　二六耶蘇こゝろをとめていひけるハこれ人にハあることざる

ところあり。されど神よ、あなたをきるところあり。〇二七 このときペテロ こたえて 耶蘇にいひけるは わをば一切をすてゝ、したがひまつりぬ。されば我を得べきか。二八 耶蘇これにいひけるは まことなんぢらにつげん、さいたりつくるなんぢらは、世あらたまり人の子その栄の位にさるるときに、なんぢらも十二の位にざして、イスラエルの十二の支派をさばくべし。二九 またわが名のために家宅あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは子あるひは田畴をすつるものは、百倍をうけ、かつ永生をつがん。三十 おほくの先なるものは後

るものいさきよからんや

第二十章 一それ天國はあさきやくいでゝ葡萄園にやとふ主人のごとし 二かれらくものゝ一日に銀一枚をあたへんと約束をなしてその葡萄園にぶだうだうつかはせり 三また九時ごろいでゝ市場にほかの立るものを見 四なんぢらもぶだうだうにゆけ相當のあたひをあたへんといひければゆきぬ 五また十二時と三時ごろいでゝまたかのごとくおこなへり 六五時ごろいでゝまたほかの立るものをあひていひけるはなぜ終日こゝにむなしく立ていたるやと

七これをこたへ

もてこやとよものあきなようりてありこのまちよりいひけるいもんぢらも葡萄園へゆけさうたらの價をうべきハ日るるとうきぶだうもうりのあるじその家幸よいひけるハそさらきたるものどもをよびて後よやとつるものをもとめし先のものまでおろくをもろくよ　九五時ごろよりとれるものどもきうりて銀一枚づゝをうけたり　十さきのものどもきうりてまたいおほくうるるもんとおもひしまゝに銀一枚づゝをうく　十一こゝをうけて主人をうらみつぶやきけるハ　十二この後至者のそうきたるハ一時をうりあるよ終日くろうみを負あつさをおかしてまとひとし

くこと遠くあるなり 十三 あるじその一人よろこびたくていひけるは
友よ我なんぢを不義をせざ。なんぢと銀いちにんのやくそくをなりたるよあらざるや 十四 なんぢのものをとりてゆけ。
我此のものの末なんぢのごとくあたへんべし 十五 我わがおのれのものを
なすがよきごとくなすはよからざるや。わるくの善よくなりてなんぢの目あしきるや 十六 このごとく後のものは
さきたる先のものあたるべし。それ召よばるる者は多けれど選ばるる者は
少しくぞえるまた 十七 ものはさくなり 〇 十七 耶蘇
エルサレムにのぼるとき途間にて衆をとる召十二門徒をとり
またひそかにこれらにのひける 十八 エルサレムにのぼり

人の子は祭司の長たちと學者たちとに
死罪をさだめ 十九 また凌辱むちうち十字架につけ
異邦人にわたすべし。 三四 また第三日によみがえる。
 三五 そのときゼベダイの子たちの母その子らとともに耶蘇に
きたり拜してなにをもとむることありけるに 三六 いひけるは
なんぢの願をいかにせよとおもふや。 三七 耶蘇いひけるは
なんぢの國において一人はなんぢの右ひとりはなんぢの
左をわれにゆるすことを命ぜよ。 三八 耶蘇こたへていひけるは
なんぢら求ることをしらざるなり。なんぢらわれのまんとする杯
をのみまたわれのうけんとするバプテスマをうけうるや。

ふいひけるハよくをぺー　三耶穌このをとこいひけるハまことをもあんぢらハわがさうづきをのミまさわがうらるバプテスマをうくべーされどわがが右左にをわることハわが賜べきにあらずただわが父よそのために備られたるものにおらるべー　二四十人のでしこれをきゝてふたりの兄弟をいきどほりをり　二五耶穌このをとこをよびていひけるハ異邦の領主ハその民をつかさどり大なるものどもハこのをとこのうへに權をとるこゝをあんぢらが知ところなり　二六されどあんぢらのうちにてハ然をべからずあんぢらのうち大あらんと抔をふるものハあんぢらにつかへるものとなるべー　二七まことに

んぢうのうち首たらんとおもふものハ あんぢうの右まべ
にゐるべし 二六このごとく人の子のきたるも人をつかふ
ためにあらず かへつて人につかはれてのぞみおほくの人の
ために生命をあたへんためなればなり 二七エリコをいでゆきおほくのひとびと耶蘇にしたがひ
二八ふたりの瞽者みちのうへにをりしが耶蘇のとほりたまふときゝてさけびていひけるハダビデのこよ
われをあはれみたまへ 二九衆これをせめてだまれといへどもいよ
いよさけびていひけるハダビデの子よわれをあはれみたまへ 三〇耶蘇たちとまりてこれをよびていひけるハなんぢ

らるるまでもあるをせられんとねがふや三耶蘇よりひけるに主よ我らの目のひらかんことをねがふ　三耶蘇おそれて
その目を手をつけたればたちまち見ることをえ耶蘇にしたがひ
ぬ

第廿一章

この後かれら橄欖山のベツパゲよりきたりエルサレムにちかづ
けるとき耶蘇ふたりの弟子をつかはしてこれにいひけるは
よいひけるはんだ對のむらにゆけ。やがてつながれたる
驢馬のその子とともにあるをたんそをときてわれにひ
きたれ三もしなんだる何ごとのいふものあらばこれ主の用
あるとつげよさらばたちまちこれをつかはすべし四預言者

のこゝろを視よあんぢの王い柔和ふして驢馬にる
むの子なのりあんぢにきたるとシヨンの女よつげよ五と
いへるはこのあらせんためなりかくあるより六門徒ゆきて
耶蘇のめいぜーごとくなし、七驢馬とその子をひきたり
おのれの衣をそのうへにおきければ耶蘇こゝにの
衆おほくいそのこゝもを途にしきあるひい樹枝をきりて
みちにしきぬ八のち前にゆき後にしたがふものよびい
ひけるはダビデの子ホザナよ主の名によりてきたるもの
はさいわひあり至上にゝろにホザナよ〇十耶蘇エルサレム
にいりたるときみやこさわぎてさもぶものいひけるは

たゞ迯ぞや、衆ひけるこゝガリラヤのナザレよりいでたるよげんしや耶蘇あり○十一いゑを神のうやまつりてそのうちあるもの、すべての賣買をするものをおひいだし兌銀者のだい臺をうるものどもうけとたふし十二この迯つまいひけるハわが殿ハ祈禱のいへとゝなへらるべしとあるさるに汝らこれをぬすびとの巢となせり十三瞽者あしなへのひとゝ殿にいりて耶蘇にきたりけれバこれをいやしぬ十四さいしのをゝと學者たちそのおこなへる奇事をゝまたこどもの殿にてよばゝりてダビデの子ホザナといふをきゝていかりをふくゝ十六耶蘇にいひけるハこの迯つ

ごりよこゝをきゝや耶蘇こゝていひけるわう嬰兒
ものゝ子のくちよ讃美をそなたりとあるされをいま
だよまざるか　遂よこのまことをさとをやをいでゝベタニヤ
よゆきそこよやどをり○六翌朝こやこゝるとき飢け
給ふ丸みちのほとりよある一の無花果のきをそそのこ
ころよきたりしよ葉のほかのなきをもてりしかばいま
よりのちいつまでも果をむすぶことをえざるてこまよい
ひたまひければ無花果たちどころよこのれぬ　十門徒これを
そてあやしみいひけるいかでかくのごとくこゝいのまえ
やきや　三耶蘇こゝてこまよいひけるまことよ

あんぢらよつけんをもー信仰ありてうごかざるからしの無花果におゐてかくのごときのみならずこの山よ命じてうごかりうつされて海よいれよといふともまさにあらん　二二　なんぢら信じていのりばねがふところのことごとく得べし　二三　いまや殿よりきたりしとき祭司のともおよび民の長老だちきたりいひけるいかなる權威をもてこのことをなすや誰このけんゐをあんぢよあたへしや　二四　耶穌こたへていひけるわれも一言あんぢらよとはんまれよそのことをつげばわれも何のけんゐをもてこのことを行といふことをあんぢらよいふべし　二五　ヨハネのバプテスマをいづこ

よりぞ天よりこの人よりこの。この事うたがひは論ひつけるは
ず。天よりといはばさらべあるの意信ぜざるといはん
天あり人よりといはば事民をおそるるにふさはず
と預言者とそれもあり。つひにこころうべきはずといふ
耶蘇この事のひはるいまも事もるこの雄威をあおぐ
あたらのあんちうよこのさまざまいのうあのふやあ
るくふさの子ありしが長子よきこりていひける。子よ
けふわが葡萄園にゆきてたこうけ。こうこうていふといひ
しがのち悔てゆきたり。また次子にもおなじごとくいひ
けるにこたへて君よもゆくべしといひしがつひにゆか

さりき　二 このふたりのものいづれの父のむねまでかひ
こうをいひけるや長子なり耶蘇これにいひけるはまこと
になんぢらにつげん稅吏および娼妓はなんぢらよりさ
きに神のくにへいるべし　三 それヨハネたゞしき道をもて
きたりしをなんぢらこれを信ぜざりしが稅吏および
娼妓はこれを信じたり　なんぢらこれをみてのちかれを
信じたりせざりき　四 また一のたとへをきけ　ある家の
あるじぶだうをうゑ　籬をめぐらし　そのなかに酒槽を
ほり　樓をたて　農夫にこれをつくらせて　ほかのくにへ
いきしが　五 果期
ちかづきたればその果をとらんために僕をのうふのも

よつのたとへ 三五 農夫どもその一もとへたちをらしめ一人を
もちうち一人をころし一人をいましてうその訴訟
の僕をまねよりもはなはだつよくせしめけるごとくあ
せり 三六 わが子はうやまふべしといひて終にその
子をつかはせしに 三七 かのうふどもその子をえてたがひに
いひけるやこれは嗣子なりいでこれをころしてその産業を
ものとるべしと 三八 そのもちうちをとらへ葡萄園
のそとへなげいだしてころせり 四〇 されば葡萄園の主きたらんとき
はこの農夫どもをいかにするべきや 四一 いふ
ら耶蘇にいひけるは
いたくうちほろぼし期

果絨をさむるほくの農夫よぶたうむくけをこーあたふご
ー四耶蘇このをてくよひけるい聖書よに匠のをてたる石ハ
いくのをくの首石とおまりこと主のおーたまへることよ
ーてわまくの日よあやーとまるとこうありと為るされー
をいまざよまざるの四二この故よくをあんちくまつげん神
の國をあんちくよりうばひその果をむまぶ民よあくら
るべー四四この石のうへにおつるものハ壊この石うへよお
つるにバそのものくだこうるべー四五祭司のをさたちおよび
パリサイの人こをのたとへをきゝおのまくをさしていへる
をーまー四六耶蘇をとらへんとおもひたるうーどたゞ民を

おそれたりぞいひとびとこのことを預言者ともとべあり
第廿二章 耶蘇うたとうとこころへてまた譬をとのたりけるい二天
國いある王そのこのたためよ婚筵をまうらるるがごとし三こ
んえんよ請おけるものをむかへんたためよ僕たちをつかは
せしうとうとうきたるこころをこのまぜ四またほかのものも
べをつのたさんとしていひけるいわが筵をでよそふたまひ
りわが牛まる肥畜をもほふりてことごくそなへたりたまひ
婚筵にさきたまへとまねきたるものよりく五おのおのじぶんの
らのくりをりてさりぬそのひとりいおのれの田にゆきひ
とりいおのれ貿易にゆけり六ほかのものどもはへその僕

をとゝへそのしめてこゝろせり七王こゝをきゝていふり
軍勢をつかはしてそのころせるものをほろぼしまたその
邑をやきたり八こゝにおいてその僕どもにいひけるはこ
んえんまことにそなれども請たるものハ客にあるまたく
ざるものなれバ九衢にゆきてあふほどのものを婚筵にま
ねけ十そのしもべ途にいでてまきものをもあしきものを
もあふほどのものをことごとくあつめければこんえんのき
やく充滿をり十一王きやくをゝんとてきたりけるにこゝにひと
りの禮服をきざるものあるをゝて十二こをまいひけるは友
よいかのもとにまいふくをきざるにてこゝまきたるや。ことを默

然たるを十三つひに王をもどきいひけるいこのゝの手足をきをりてそこの幽暗なるあげいづるそこにてこゝろ切歯をることおびたゝん　十四それよりもるゝものはおほしといへどもえたゝまるゝものはすくなし　○十五このときパリサイの人いでいのまへにてこのゝをいひあやまらせんとあしをうり十六その徒弟とヘロデの黨をつのもていはせけるは師よあんちは眞なるものなり。まことをもて神のこゝろをしふるのみ人誰をもはゞからざることをもてこゝろをいろるそは貌よりて人をとらざるをしる　十七されば人税をカイザルにをさむるはよきやあしきやわれらにいふでおもふにわれらつ

げよ　十六　耶蘇その惡をしりていひけるは偽善者よ汝
等なぜわれを試るや　十七　納税の銀錢をわれに
見せよ　と耶蘇いひたまひければ一つの
像と號とはたれのと　十八　かいざるいひけれ
ばなり　と耶蘇いひたまひけるは　十九　かいざる
のものはかいざるに納めよ神のものは神に
納めよ　二十　耶蘇これらの言をきゝて奇とし
て耶蘇をさりやけり　二十一　復生るなしといひ
るサドカイの人この日いまだきたらずとみて
師よモーセのいひたまひけるは人もし子なくし
て死なば兄弟その妻をめとりて子をうみきやうだいのあとを嗣をべしと　二十五　こ

こうしてこれらの中よりきゃうだい七人ありしが兄めとりて死
こもきこがゆゑよその妻をおとうとおくもり 六その二そ
の三その七までこれ然も そのもつひよ婦もまこもたず
六 よりこがくるときいこのをんな七人のうち誰のつまとなる
べきの。こをこれこのをこと娶ーものもをばあり 元 耶蘇こうこ
てこのをこよいひけるはんぢこ 聖書をも神のちからをも
おこざるよりておやまをり 三 そをこよりこがへるときにめ
ここぞ嫁ぞてんよある神のつかひたちのごてこ 三 死ーも
のこよりこがへるこことつきてこはんぢこ神のつげたま
ひー言よ 三 ををこ アブラハムの神イサクのこをヤコブのこを

あるをいまだよまざるや。それ神は
神にあるを生るものにあらず　三二ひとびとこれをきゝてその
訓をおどろけり○　三三耶蘇サドカイの人をこゝろよくかつ
めたりときゝてパリサイの人ひとゝころよりあつまりけるが　三四
その中なるひとりの教法師いふをこゝろみんために
よりきたりて　三五師よおきてのうちいづれの誡が
いちばん　三六耶蘇こたへけるはあんた心をつくし精神をつ
くし意をつくし主なるあんたの神をあいすべし　三七これ第一
にして大なるいましめなり　三八第二もまたこれにおとらず
おのれのごとくあんたの隣をあいすべし　三九
これその律法と

預言者はこのふたつのいましめよより〇四パリサイの
人のあつまりをるときに耶蘇これらにとふていひたまふ四三あ
んぢらキリストについていふことをおもふやこれたれの子なる
ぞ彼等いひけるはダビデの子なり四三これにいひたまふいか
にダビデ聖靈に感じてかれを主と
となへていひけるは四四主わが主にいひたまひけるは
われなんぢの敵をなんぢの足のしたにおくまでわが手の右にざせ
よとさればダビデかれを主となへたればいかでか
その子ならんや四五たれ一言にもこたふることあたはざりき
このひとより敢てかれにとふものあらざりき

第廿三章　一そのとき耶蘇ひろくと門徒とにつげていいける
二學者とパリサイのひとはモーセの位にざをしめ
三てをるがあんじゃまいぞところを守ておこなふべし。さ
れどそのをるが行ところをおもてことあるの
ふのごとくしてあるこ勿れ　四まことのをるい重うの
負にくき荷をくくりて人の肩におせかのをいひとつの
指をもてこをうごかすをこころもそこのまぞ　五このをるらの行
はまべて人にみられんがためにするなり。その佩經をひろ
くしてその衣のすそをおほいまた　六まく筵席のうへざ會
堂のうへざ　七市上のあいさつ人々よりラビラビとそとく

らをこのむ ハあんぢらハラビのとうへとうる
ことなかれそハあんぢらの師ハひとりにてあんぢらもキリスト
なりあんぢらハこらふ兄弟なり 九 また地よおるものを父と
とうるふることなかれあんぢらの父ハひとりにてましませる天
にいますものなり 十 また導師のとうへとうることなかれそハ
あんぢらのだうしハひとり即ちキリストなり 十一 あんぢらの
うち大なるものハあんぢらの僕となるべし 十二 おほよそ
おのれをたかうするものハひくくせられ己をひくうするものハ
たかくせらるべし 十三 あゝあんぢら わざとらしきる
うゑ偽善なる學者とパリサイの人よそハあんぢら天國を人

のまへにてみづからいふところんとするものゝ
るをもゆるさゞるをもてなり　十四　噫なんぢらわざはひあるかな
僞善なるかうくしやとパリサイの人よそふなんぢら孀婦の家
をのみいひもりておほき祈をなすことによりてなんぢら
もつとも重刑をうくべければなり　十五　あゝ禍あるかな僞
なんぢる學者とパリサイのひとよそふなんぢらおまねく水陸
をへめぐり一人をもおのれが宗旨にひきいれんとせばまづ
ひきいれたればこれをなんぢらよりもまた倍したる地獄の
子となすなり　十六　あゝなんぢらわきまへなきをひきいる督者なるて
びきよなんぢらいかに人もし殿をさしてちかふ事をも

殿のことごとくしてもうそむくべからざるおろ
かなることをもうしてめしいるるものよ金とこがねをきよこうしもる殿
うちいづるまのたふとき六まついよ人もまうりの壇をさ
しそもうそぶことをおしそのうへの供物をさしてもうそぶ
そもむくべからざると十九愚よしてめしいるるものよそむくも
のと供物をきよこうしもる祭壇とうちいづるまのたふとき十
そもまのだんをさして誓ものはまうその壇おすびそ
のうへのそべてのものをさしてもうふるり三まつ殿をさ
しそもうふものは殿おすびそのうもよいまそものをさし
てもうふるり三まつ天をさしてもうふものは神の寶座お

よびそのうへにまさるものをさへてもうすまじ
あるんぢらわざはひあるかな偽善ある學者とパリサイのひと
よそらあんぢら薄荷茴香馬芹の十分の一をとりをさめて
おきてのもつともおもき義と仁と信とをあんぢらは廢こ
とおこなふべきものなり。この事もまたつべこうざるものの
あり 而 めしひあるてびきよあんぢらは蠅をこしいだして
駱駝をのむものなり 三五 あゝまぎはひあるかな偽善あるこゝ
くしやとパリサイのひとよあんぢらさかづきと盤のそとを
きよくしてうちは貪欲と淫欲とをこゝせり 三六 めしひあ
るパリサイの人よあんぢらまづ杯とさかづきのうちをきよくせ

よさそうにその外面をまっしろにぬりたくる。（一）あゝあんたらは禍なるかな偽善なる學者とパリサイのひとよあんたらは白くぬりたる墳墓のごとくにうるはしくみゆれども内は骸骨とさまざまの汚穢とにてみつ（二）かくのごとくあんたらもまた外いたゞしく人にみゆれども内は偽善と不法とにてみつ（三）あゝあんたらわざわひなるかな偽善なる學者とパリサイのひとよあんたらは預言者の墓をたて義人の碑をかざりまた（四）いふなわれらもしわれらが祖先のときにおらばよげんしやの血をながすことにおいてかれらにくみせざりしをと（五）されば汝らは預言者をころせしものの裔なることを

みつうつ證せ三 ゐんむ〳〵せんでの量をうつせ三一 へひまむ
しのたゝひよ。ゐんむ〳〵いうで地獄のけいむつてものぬうを
んや三二 このゆゑまわまゐんむうま預言者と智者と學者を
つゝのさうんまおうひいこれをこゝろーまる十字架よつけあ
るひいその會堂うてこうまをむもうもおるひい邑より邑へ
おひふまーめん三五 そい義おるアバルの血よりみやこまうり
の壇のあひさまそゐんむ〳〵のこうろせーバラキアの子ザカリア
の血まいうるまで地よるご〳〵たる義人の血いそゝうてゐん
むゝまむ〳〵いきたうんぬためあり三六 まこまゝまこゝまゐんむ
らまつけんこのうゝこゝかうろ代まむうにきうるべー三七 あゝ

エルサレムニエルサレハよよけんしやをころしなんもよつてのそさこゝのものを石まてうちものよ母雞の雛をいそきのあらつちむるごとくつとめんとせしことたびそやされとあんちうハこのまぐらき視よあんちうの家ハあきもちとありてのこされんちうよつけん主の名よりてきたるものハ福ありとあんちうのいえんときつてるまてハ今よりわをみさうへ

第廿四章

耶蘇みやよりのでけるとそのてしもうる、殿宇をのまてみせんとうしは二耶蘇このまてよいけるにあんちくまん、てこをまうを見さるのわをまことよあんちうまつ

げんこのところを一のいしも石のうへよりさきをしてはのこらじ 三 耶蘇ゐんらんぎんよ坐したまふるとき門徒ひそうきたりてのひけいのときこのことあるやまつまんぢのきたる兆と世のをはりのきるしはいかのかるぞやさとしつげたまへ 四 耶蘇こたへてこのをしへまひけるなかれんぢら人にあざむかるゝやう愼よ 五 そはおほくの人わが名我をらしきたりわれはキリストるゝといひておほくの人をあざむくべし 六 またんぢら戦とそのきの風聲をきたるんさきをつゝしめよおそるゝなかれこれ是らのことはかならずあるべきなりされど末期はいまだいと

らば七民おこりてたゝかをせん國ハさらにをせん饑饉疫病地
震ところ〴〵にあるあらん八こは迚もさけがたきわざわひ
まゝ九そのときに人あんおうをば患難なわさ〳〵あんちうをう
ちべしとのゝしりわの名のためよ萬民ふにくまゝん十
このときおほくのもの礙うたがひまわりたがひようらむべし十一まゝ僞よげんしやおほくおこりておほくの人
をあざむかん十二まゝ不法うつるによりておほくの人の愛
情ひやうこうよあるべし十三されどをもりまで志のぶものハ
もくもくこゝろをえん十四まゝ天國のこのふくいんを萬民
に證せんたあまあまねく天下にいひひろめらをん。志うる

の末期いくるべし　十五このゆゑに預言者ダニエルによりて
いひ遺たるところその殘暴にくむべきもの聖處にたつをみ
ば（讀ものよくおもへべし）　十六そのときユダヤにをるものは
山にのがれよ　十七屋上にをるものはその家のものをとりに
くだるなかれ　十八たとひにをるものはその衣をとりにかへ
るなかれ　十九その日はざはひあるかな乳をのませる
婦いとぎちひるうかんむら冬やすく安息日にに
ぐることをなすねがはくはこれらのことの逆にその
ときは大患難あるべければなり　二十このごとき災難は世のはじめより
いまにいたるまであることなくまたあることなし　二十一その日をみじ

くのごとくあんぢうまをべてこうもうのことをこゝに時にいろ
く明らかにいふるともをも言つまることうまあんぢうまつげ
んこうまうのことこゝろいぐく成までこの民いうせきるべー三五
天地いうせんさきでわがこうもをいうせー三六その外その時
をまるまのいたゞわんが父のみ天の使もたゞまるまのはか
りキノアのごときのごとく人の子のきたるもまたこのごとく人
三七それ洪水のまへノア方舟にいる日までひとぐ飲食嫁
娶あるいは三八こうまいのきたるこうとぐくこうをを滅生
でおろさざりき。このごとく人の子もまたきたらん。四〇そ
のときふたり田にあらんに一人はとられひとりはのこら

るべし 四一二人のをんな磨ひきをらんにひとりはとられ
ひとりはのこされるべし 四二このゆゑにあんじらの主のいづ
れのときにきたるかをしらざればおこたらずしてまもれ 四三あ
んじらこれをしれ家のあるじ賊のいづれのときにきたるかを
しらばそのいへをまもりてやぶらせざるべし 四四されば
あんじらもまた預備せよおもはざるときに人の子きたればな
り 四五時をおもひて糧をこれらにあたへさせるたれ
ぞ主がその家のしもべどもをうへたてさせる忠義にして智
あるしもべいたるや 四六そのあるじのきたらんときかくの
ごとくつとめるをさせるしもべ僕はさいはひなり 四七まこと

ろよあんぢつよいげん その全業をろるこうをつろさじ
もべーしゃもーそのあーき僕おのがこころよわが主のきたる
いおそうろんとおもひ児その傍輩をうちたぐきて酒よ
ろひたるものどもとともに飲食ーそめるが、辛そのーもぐ
の主おもそぐるの日ろーうさるのときよきろりて五こうを
きりころーそのむくいを偽善者とおるぢうもべー。そころよ
てこのるーと切歯ところのことおろん。

第十五章 そのとき天國いともしびをとりて新郎をむかへ
いづる十人のむすめにおぞらもべー二そのうちの五人は
のーらく五人いおろのあり三おろのあるものいその燈を

ともるまおぶらをたづさへざりしが　四智ある
ともしびとおぶらを器にたづさへたり　五はふむとおそかり
けるゆゑ假寐してねむりたり　六夜あけのぞよさけびてはふ
むこきたりぬいでよ迎へよとよぶこゑありけるゆゑ　七この童
女ども皆おきてそのともしび火をととのへたるに　八愚か
なるものどもかしこきものどもにいひけるはわれらの燈きえ
ねばこまりぬあんぢらの油をすこしわけおくれよ　九かしこ
きものどもこたへていひけるはまことにあんぢらとわれおそ
らくは足まじあんぢら賣者にゆきておのがためかふべし　十
かふもの買んとてゆきしときに新郎きたりけるゆゑそなへ

へたるものいこらをてくるまよ婚姻よいうまでうば門ハとぢうを
をさり　十　このくてのちその餘のむをめきるりていひけるハ
走とし　　そのまうのたのまよひくきたまへ　こうくへていをまを
ひとうまんぢうまつげんまをハまんぢうをおうくれといく
つ　十二　さをバおこうくぞして微醒まんちうそのはその時を
おうざをバまり（）おまうし天國ハある人のたびだちせんと
してその僕をよび所有をこのをうまあづこうるがごとくし　十五　お
のおのの才智慧よおうこびてあるものまハ銀五千あるもの
まハ二千あるものまハ一千をあたへおきたびたもまり　十六　五千の銀をうけしものハゆきてこれをそうこ

ほかの五千をえそり　七二千をうけしものまたほかの二
千をえそり　六そうるは一千をうけしものいでゆきて地をほ
りその主のこのかねをかくしかり　九ほどへてのちその
ちの主こうきてこうきうと繪計せしは　十五千のぎんをうけ
しものそのほかの五千の銀をもちきたりて主よわれは五千
のぎんをあづけしがほかの五千のぎんをまうけたりくい
ひけるに　三主こうきよいひけるかあり善こうの忠あるきたる
そなんぢわづかのことに忠あり。われなんぢに多のものを
つかさどらせんなんぢの主のよろこびにいれよ　三二千の
銀をうけしものきたりて主よわれは二千のぎんをあづけ

しが ほうこう に 二千 の 銀 を まうけたり と いひけるに 三 主 この 言
よ いひける は あく 善 こう ちもう ある ちもんべ ぞ あんぢ 寡
る こと うよ ちもう ある り 我 あんぢ よ おほき もの を つくら さる
せん あんぢ の ある じ の 歡樂 よい を よ 四 まう 千 の きん を
うけ しめ きう りて いひける は 主 よ あんぢ は きん しき 人
なり、まう さる ところ より 穫 ちく さる ところ より 斂 こと を
まう さ ざる ところ より 集 ゆる よう 主 の 一千 の ぎん
を 地 に かく して おける 今 あんぢ の もの を 得たり 六 その
の 主 こと へて いひける は 惡 しき 僕 ぞ あんぢ
が 播 ざる ところ より 散 さる ところ より あつ むる こ

とをおもふもの 三 もろもろ
ばわがうねを兌換舗にあづけおくべ
きなり。さらばわがこれをたるとき本と利とをうくべし 二八
このゆゑにこの主の一千のぎんをとりて十千の銀あるもの
にあたへよ 二九 そもそもすべてあるものはあたへられて多くあまり
あり 有 ものはそれもまでもとらるべけんびあり
三十 無益 なるしもべをそとのくらきにおひやれ そこにて哀
哭 なげき 切齒 はがみ するこつくあらん ○ 三一 人の子おのれのえいくわう
をもてすべてのきよきの聖使をひきゐきたるときはその榮光の
くらゐにつき 三二 萬國 の民をそのまへにあつめ羊をやぎ
の綿羊 めん 山羊 やぎ とをわくるがごとくこれらをわくもの 三三 めん

やうとその右よやぎをその左よおくべし三四こゝに王そのみざるをあやまりいはん。やくの父ゑめぐまるゝまゝよきるとゝもに世よりこのかたあんぢらのためよそるべくこゝをてゝ國を開きそいあんぢらゝやくの飢ーときゝてゝもせ渇ーときゝてゝもせのまを旅せーときてゝをやどらせ三六裸るりーときてゝもきせ病ーときてゝをたづねまゐらせ獄よおりーときてゝ通よきてゝまゐるべきり三七こゝよおいて義なものこゝをてゝこゝらくていはん主よいつあんぢのう名たるをゝて食せまつるにのきたるを飲せーや三八いつ主のたびーたるをゝてやどらせまつるぎたるのあるを衣ーや三九いつ主のやまひ獄よおるをゝて

あんぢよいよりしや　四十王こゝにてうをらまいそんぢ誠
まあんぢらまつげんをそまあんぢらわがこの兄弟のいと
ちひさきものゝひとりまおこるくるいをのらをわをこ行
しふり四つひまをる左まをるものよいそん罰せらるべき
ものよわをまをるをて惡魔とそのつかひのためまそなく
たるき迄ぎる火よいをよ四二そよあんぢらわが飢しくきわ
をまくをまそ渴しくきわまよのまをまそ四三旅せしくきわまを
やぐらせまそ裸ありしくきわまよきまそ病まさひくやまあ
すしくきわまを顧ぐをびあり四四こゝまおいてうをらまをる
こゝくていそんへ主よいつあんぢの飢をる渴をる旅しをる

裸まく病まく獄よあるをこそ主よつくづくや罪ふかきまく王こゝろへてこの事よいちんわをまことよあんじくよつげん。その至微まのいひくりよおとあをぐらふまをぬもわ。ふまおとあもぐりーあり 罪ふまのまのいこぎうあき刑罰よいまたゞーきまのいこぎうあき生命よいくべーまく

第廿章 さて耶蘇こゝのさまぐの言をいひをへりてそのでーまのひげるい 二日のうち 逾越節あるいあんちらゞあるまくこゝろふりそ迚人のこゝ十字架よつけらきんたゞめよわさまるべーまく こゝのときさゝーのをさおよび民の長老だちカヤバとのへる祭司のをさのやーきの庭よあつまり 四 詭計

をもて耶蘇をとゝのへころもさんとぞもぐさもうりいひける
五 ものつゝめの日まいあをぐあらびおそくくい民のうちを
亂おこらん○六 耶蘇ベタニヤの癩病シモンのいへにまし
へゐるとき 七 あるをんな蠟石のうつはものまあらこへたうとき
香膏をもりて耶蘇の食をるをよくまもちきりその首にそゝ
ぎ 八 でしたちこをみていかりをふくみいひけるは
この糜費のごときをあたいるまゆゑぞや 九 まことにこを
こゝろにとゞめおくべしいづこにてもこの福音をとくところ
にはをんなの金をえてまつしきものにほどこさんをえん
十 耶蘇これりてこのをんなよりひけるはいかんぞこの婦をあやま
もやむ 十一 なんぢらにわれよき善事をおこなへるあり 十二 まづしきものの

ハつねよあんぢらよあまでわをらつねよあんぢら
とゝもよあらぢ 三 うるはしのほいあぶらをわが髑よそ
そぎーハわ主の葬のためよあらせるあり 三 まことまことくよあ
んぢらにつげん天の下にひろくよそもこの福音のひろめら
るゝところにかならずこのをんなのなせーこともまたその記念のた
めにいつへらるべー ○ 十 そのとき十二門徒のひとり
ふかりオテのユダといふるもの祭司のをさたちのもと
にゆきて 十五 いひけるハ まことあんぢらよこのをとこをうるさゝば
あらほぐをあらんるの。つひよ銀三十まて約したり 十六 この
ときより耶蘇をうるさんと機をうかゞひぬ ○ 十七 たねいま

ぬ餅のいくひのまじめの口でイエス
ときどきここの食をあんちのためにいつこうそうべ
きや六イエスいひけるはみやこにいり某にいくりていく師
いはわざの時ちかづきけるはわをてしもに逾越のいそ
ひをあんちが家におそくべしと十九でしイエスは命せらまし
ごとくしてときこしの食をそなへ二十日くるとき耶蘇おふ
よでしともに席につき二十一食をるときいひけるはまこ
ことまあんちらにつげんあんちらのうち一人わををわさ
をるり二十二うちいくこうひておのく耶蘇にいひいでけ
るは主よそれわるもの二十三こたへていひけるはわをてしもよ

手を盃につくるものいまるでもわるをわるをものあり 二四
人の子はおのをついてあるさればこそ逝んされど
人の子をわるをものわるをひあるこのおそのの人うをぶ
をこのぶうくつて幸あるーあるん 二五 このをわるをユダこ
こていひけるラビわるや。こをよいひけるいあん
おのいくるごとし 二六 こうをうく食をるとき耶蘇パンをとりて祝
ーこをを擘でーあるこていひけるに取てくらくこをわるが身
あり 二七 またさかつきをとりて謝ーこをとをあるこていひ
けるにあんぢらこのかより飲め 二八 こを新約のわるの血
をもてつをゆをんとておほくの人のためにあるそと

こゝのまめあり　元　また汝ら今よりのち汝
ら我をまた見ざるまでは我が父の國にて新
たに汝らと飲むまで葡萄の産物を飲まざる
べしとこれを言ひてのち橄欖山にゆけり　三
その時イエス弟子たちに言ひけるは今夜汝
ら皆我につまづくべし其は牧者を撃たん群
の羊ら散ん　三　されど我よみがへりて後
ガリラヤにゆくべし　三　ペテロこたへて
イエスに言ひけるは
縦ひ皆なんぢにつきて躓くとも我は決して
躓かじ　三　イエス彼に言ひけるは
まことに我なんぢに告ぐ今夜鶏の二たび鳴
前に汝三たび我を知らずと言ふべし　三
ペテロまた言ひけるは縦ひ我なんぢと共に
死ぬるとも決して汝を知らずと言はじ

よひ雞なくのさきまへよあんち三次まををもしをこいてん三五
ペテロこのをてよいひけるハまをを主よしもよあるともも
んもをもまよといもじ門徒まるこよくいへを三六そのときき
耶蘇こをてよしもよゲツセマネといよところよいりて門
徒たちよいひけるハあんちよこよををれうくよゆ
きていのりん三七ペテロおよびぜベタイのふたりの子をたら
さく憂愁のふしをもよわし三八こうをくよいひけるハわく
心いたくうをひて死るをもりあくこよまもてをてく
もよ目をさましをれ三九まもしもそゆきて俯伏いのりい
ひけるハちの父よもしこうをもこの杯をわをとりもるも

たまくさればぐわこうのまくをあさんとするまあうを
聖旨（みこころ）をまもらせたまへ　四　さりて門徒（もとめ）のところにきたりその
るを見てねぶりをりひけるかのごとく時（とき）をすごしたまふ目（め）
をさましをることまたさきのごとくなり　四三　ふたゝびさりて
醒（さま）ふつゐのごとくそのたまひしねがひをいだしまたいねがふ
たまふ　四四　ここにいゆきてまた祈禱（いのり）をゐけるかれらの父（ちゝ）をまた
たまふ　四五　ここのちくのづきをのまさゝをるつことくのねふ
ことをまのあたりたまへ　四六　きたりてまこうをとらの寢（ね）たるを
こるこゝをこのあとらの目（め）つゐをたるあり　四七　ゐをりつゝをそあれて
まへゆき第三次（みたび）もかゝることをゐていのたり　四八　つひま

その門徒ゆきつりていひけるは今はゝねぞやとゝめ時はち
かし人の子つゝびとの手にわたさるゝ四六起よゆくべしわれをうるものちかづきたりと四七いふうちに
十二のひとりなるユダ刀と棒とをもちたるおほくの人々
とともにまいりしが祭司長民の長老のもとよりきたりしなり耶蘇
をうるものかれらに號をなしそれひけるはわれ接吻をする
ものはそれなりこれをとらへよ四九たゞちに耶蘇にいきたり
てラビやまもきこえよといひてかれにくちつけをなす耶蘇これに
いひけるは友よなんぢのなすべきことをなせやといひおこりてすゝ
みきたり手を耶蘇にかけてとらへぬ五一耶蘇にともなはり

しものゝひとり手をのべ劍をぬきてさいしの長のしもべをうちその耳をそぎおとせり　耶蘇これにいひけるはなんぢのつるぎをもとにおさめよそべて劍をとるものはつるぎてほろぶべし　五三　われいま十二軍餘の天使をわれにおくりたまへと求てうたるゝことをえざるをなんぢおもふや　五四　然せばこゝにあるべきことをいかでか聖書をいふべけんや　五五　このとき耶蘇ひとびとにいひけるはつるぎと棒とをもちてわれをとらふるごとくしてきたれるか。われ日々なんぢらとともに殿にありてをしへしにかくなんぢら我をとらへざりき　五六　されどこれらのことのごとくあるは

いくる預言者のもろ〳〵たるところよ應成せんためなり。つひにでゝたちくる耶蘇をそしりあげさりぬ。五七耶蘇をらう〳〵たるものこゝをひきて學者と長老のあつまるところの祭司のもとカヤパといふ人のところにゆく。五八ペテロはとほくより耶蘇にしたがひ祭司のもとの庭にいりてその結局をこんとて内にいりおもむきをり。五九さいしのをきたもおよび長老およびその議官らもよ耶蘇をころさんとして妄證をもとむれどもえざりき。六〇おほくのいつはりの證者きたりしもえざりき。後ふたりのあらしびと二人きたりていひけるは六一この人さきにいへることあり。

ゝく神のみやをこぼちて三日のうちにこれを建あらべし
六二　さつきのをき起ていひけるはなんぢらさ
ふることなきやこの人々のなんぢにたつる證據はいかゝ
六三　いひをも默然たり。さいしのをさこれにいひける
はなんぢキリスト神の子あるのをもなんぢを活神にちかひ
せてこれをつげよめん　六四　耶穌これにいひけるはなんぢが
いへるごとし。ふたゝびなんぢにつげんこのゝち人の子
大權のうぎよさ　天の雲にのりてきたるをなんぢらみる
べし　六五　こゝにおゐて祭司のをさその衣をさきて裂ていひけ
るはこの人はけがしごとをいへり。なんぞほかに

をもくめんやあんぢらも今その襞瀆たるこころをきく奈あんぢらいのちおもふやこのをてこころにていひけるハうまい死よおいふるりをこころよおいてこのをうそのおもてよつぞきこころつ拳まてうてり。まさあるひとこのをたづきいひけるハ奈キリストよあんぢをうつものハ誰こうをこころようげんせよ(二六)ペテロハそこよ坐しあけるよある婢きたりてあんぢるガリラヤの耶蘇とともありとのひけるバトペテロきべてのひとのまへよこのこころをうけごそしてもをあんぢのいふところをきらざるとつをいでて門ぐちよいくをるときまさに他の去もめこをとてそこよをるものいひける

いこの人もナザレの耶蘇とともにあり 七一ペテロまたこれを
けがしてしかして誓ひていはくわれこの人をしらずと 七二
ややありて立てるものまたきたりてペテロにいひけるは
まことなんぢもその黨のひとりあり そはなんぢの口音
あんぢをあらはせり 七四ここにおいてペテロのろひうつ
ちくりひてまたその人をしらずといひしにただちに雞なきぬ
七五ペテロ耶蘇のにひたまへるこの言をおもひいだしそとに
いでゝ悲慟あけり

第廿七章 平旦

さてあまねくすべての祭司の長と民のつかさより

共にこれをのりて耶蘇をころさんとす 二 ここにこの事を縛ひきゆきて方伯のポンテオ ピラトにわたせり ○三 ここにおいて耶蘇をうらみ ユダこの事の死にさだめらるゝをみて悔てその銀三十をさいしゅのもとに長老だちにかへして 四 われ無辜の血をわなゝきわるき罪をのしぬ。ひとびとのいひけるはわれらにおいてあんぞ與らんやなんぢみづから當べし 五 ユダそのぎんを殿にあげてそこをさりゆきてをづから縊たり 六 さいしゅのもとこの銀をとりていひけるはこれ血のあがひなれば賽錢のたからにいるべからずとてもにはかりこの銀をもて旅客をうづむるために陶工

のそうけをうく、八故にそのそうけいまでいくるまで血田と
あげらる、九こゝにおいて預言者エレミヤによりいそうさ
るることぞイスラエルの民はねがもられ彼らまたくものごとく
たいの銀三十をとり、十土のそうまる命せしごとくかきしる
しのそうけを買ぬとあるよういえり、十一さて耶蘇ついに
のまへに立つうさ耶蘇にそうていひけるはなんぢはユダヤ
びとの王あるかの耶蘇こまていひけるはなんぢのいへるごと
し、十二祭司のそうさ長老だちこまをさらたふまどもあらめ
ども、ませをこくなおいて、ピラトこのまていひけるはこ
の人々なんぢにたつる證のこくおほくあるをなんぢきくの

ざるの十四方伯のいとおやしとそるまもて耶蘇
こゝろ〳〵せざりき十五このまつりの日よい方伯
ひとまうせてひとりの罪人をゆるその例おり十六ときは
バラバといへる人のあざうきざいまんおりけるバピラト民を
のおつまりて〳〵ときこのもうないひけるハバラバをまぬかれ
ストとそるふる耶蘇おるさ。まんぢうたをゆるさんとお
もふや。こゝを娼婦よりて耶蘇をそたしさりとおもひおり
○十九方伯さそきその座にそわをたるときその妻いひつかも
しけるハこか義人にまんちこゝそることあるの也。そハそを
けふ夢のうちにこのもとつきておほくうをいたり二十祭司の

をゆるし長老たちバラバをゆるし耶蘇をころさんことをねがふ
と民をそゝのかす　三方伯こたへていひけるはふたりの
うちいづれをわがあんじゆるさんことをのぞむや。
こうまうバラバとこたふ　三ピラトいひけるはさらばキリストと
ころある耶蘇はいかゞをるべきや。衆いふ十字架につけ
よと　三ついにいひけるはこの人あしき惡事をなせしや。この
ものさけびて十字架につけよといふ　四ピラトその
言の益なくしてたゞ亂のおこらんことをみり水をとりて
ひとびとのまへに手をあらひいひけるはこのたゞしきものの
血よりわれつみなしなんぢらみづからそれを當よ　五た

みづからこころくていひけるいその血いまわれらとわれらの子
孫とのうへにあるべし 二六 ここにおいてバラバをこのために
はなちイエスをむちうちてこれを十字架につけんために
うり 二七 つかさの兵卒いえもをたづさへ公廳にいりて組中
をそのまへにあつめ 二八 うるはしきころもをはぎそむにさきの
袍をきせ 二九 いばらの冠をおりてその首にのせむにしめまた
葦をみぎの手にもたせうつそのまへにひざまづき嘲弄
ていひけるはユダヤびとの王やまたうを 三十 またこれに唾しそ
の葦をとりてそのかうべをうてり 三一 てうろうしをもりて
そのうちぎを袍もとのころもをきせて十字架につけんと

の道をひきゆく 三二 そのいでしときクレネびとの シモンと
いふものにあひければ強てこれをその十字架をおはせて
ゆく 三三 ゴルゴダ 譯がくろがうといふところにきたり 三四 醋を膽をおまぜて耶蘇にのませんとしたりしが
嘗てのむことをせざりき 三五 かくて耶蘇をおふじうまつり
しのち鬮をとりてその衣をわけわかち 三六 預言者のことばに
この衣をわがために わかち裏衣をくじにもとめしとのべ
しごとくなるためなり 三七 兵卒ここにまりて 耶蘇をまもれり 三八 また
罪標にこれがユダヤびとの王いえすなりとしるしてその首
のうへにおけり 三九 そのとき二人のぬすびと 耶蘇とともに

ひとりはその右ひとりはその左よ十字架につけらる〇三九
ゆきてのもの耶蘇をのゝしり首をふりていひけるい四〇殿
をこぼちて三日よこをたつるものよみづからをもすくへ
あんじもし神の子ならば十字架よりおりよ四一祭司の長がく
しや長老だちもまたおれらく嘲弄していひけるい四二人をも
らひておのれの身をもすくひあたはざるをイスラエルの王たら
ばいま十字架よりくだるべし。さらばわれもこのかを信ぜん
四三この人神よりたのめり神もしこれをいつくしまば今
もすくへ。そはわれは神の子なりといひしによりて四四
ともよ十字架につけられたる盗もおなじく耶蘇をのゝし

まり〇四晝のおよそ三時よりくらきまでその地あまねく黒暗となる四五また三時ころ耶蘇おほごゑをエリエリラマサバクタニとよばゝりぬ。こゝを譯ばわが神わが神あはれ我をすてたまふやといふくるなり四六ここなるもの〻うちある人ことをきゝてこの人エリヤをよぶるありとい四七そのうちの一人たゞちにはしりきたりて海綿をとり醋をふくませこれをよしもつけて耶蘇にのませむ餘人いひけるは俟エリヤきたりてこれをすくふや否やをみむと〇五〇耶蘇また大聲をよばゝりて氣たえたまふ五一みやの幔うへよりしたまでさけて二ゝとなりまた地ふるひ磐さけ五二墓ひら

けてもそでよ いねふる聖徒の身おほくおきこのゝち耶
みづくきるのち 三墓をいで、聖城よりおほくのひとに
あらはれたり〇 四百夫の長ゝもゝ耶蘇をまもりたるもの
の地震およびそのおりしことをみて甚おそれつゝ
ゝ神の子なりとつぶやけり〇 五五 このところゝ遥にのぞみゐる
るおほくの婦ありしがこのきたるはガリラヤより耶蘇にまもりその
ひとくらいしものどもなり 五六 そのうちにマグダラ
のマリアとヤコブヨセのおやなるマリアとゼベダイの子
たちの母もありき〇 五七 日くれて耶蘇のでしなるヨセフといふ
るアリマタヤの富人きたりてピラトにゆき耶蘇のしかばね

ねをこひしのバ 五八 ピラト その屍をわたせと命ぜ 五九 ヨセフ
きたのをねをとりてきよき布にてつゝみ 六〇 こをを磐よりほりたるおのれがあたらしき墓におきおほいある石をほとけの門にまきたりてさる 六一 マグダラのマリアとほかのマリアとそこにむかひて坐りそこををれり○ 六二 預備日の翌日さいしゝのをきたバリサイのひとだちピラトのもとにつどひきたりていひけるハ 六三 主よわれらおもひいでもりこのの偽者いきてありしとき三日の後よみがへらんといひし 六四 ことあゆゑに命じて三日まいるまの墓をつゝめしめよ。おそらくはそのでし夜きたりてこをぬすみ死よりよみがへりたりと

民よいそぎ行きて墓を堅くせよ後のまどひ先よりもいやまさるべし　六五ピラトこれをきゝいひけるは守兵あんじきたりゆきておもひのまゝにこれをそなへよ　六六こゝをおいてかれらゆきて石に封印しまもるものをして墓をかたくせしめたり

第廿八章

安息日をすぎてのち七日のそのあけの日よあけがたマグダラのマリアおよびほかのマリアその墓をこんとてきたりしに　二おほいなる地震ありて主のつかひだちより天だり墓のもんより石をまろばしてそのうへに坐をり　三その容貌いなづまのごとくその衣服ゆきのごとく白し　四守兵これをおそれ死たるものゝごとくなりぬ

五 天使こゝにてをんなによびけるはをんなおそるゝことなかれなんぢらが十字架につけられし耶蘇をたづぬることをしる 六 かれはこゝにあらずさきにいひしごとく復生たりきたりてかれのおきたまひしところを見よ 七 うつゆきてその門徒につげよかれ死よりよみがへりなんぢらにさきだちてガリラヤにゆけりかしこにおいてをんぢらこれをみるべしわれこれをなんぢらに告へをんなおそれおのゝきもいたくよろこびて急ぎこの墓をさりその門徒につげんとてはしりゆけり 九 ときにイエスかれらにあひたまひければ婦ふみその足

をいだきて拜しぬ 十 耶蘇こゝろよくいひけるは おそるゝ
ことなかれ なんぢ ガリラヤよりゆけるつゐてきたれる
婦のさゝやきしのち守兵のうちあるものどもみやこにいりて
祭司のをさたちにすべて ありしことを告げしらべ 十一
ふたゝび長老あつまりて議おこなひのち 兵卒におほくの
銀をあたへていひけるは 十二 なんぢら夜ふけて
われらねむれるときその門徒きたりてこれをぬすみさりと 十三
このことは 方伯きこゆるともわれらこれをなだめて
なんぢらを憂慮なからしめん 十四 ここを銀をとりて いひふ
くめるまゝにせり 於是このごとき 今

口よりうるまでユダヤ人のうちよりひろめられたり（一）

其一一のでしガリラヤへゆきて耶蘇のこの山へ命じたまふところの山へゆけり（二）耶蘇をみて拜せり。されどうたがふものもありき（三）耶蘇ちかよりていひけるは天のうち地のうへのもろもろの權をわれにたまはれり（四）

このゆゑにゆきて萬國の民をバプテスマをほどこしこれを父と子と聖靈の名によりてでしとなし（五）わがなんぢらに命ぜしことをまもれとをしへよ。それわれは世のをはりまでつねになんぢらとともにあるなりアーメン

耶穌降生千八百七十七年

新約聖書馬可傳

明治十年

翻譯委員社中
米國聖書會社

日本橫濱上梓

第一章　一神の子耶穌キリストの福音の始めなり二預言者の志るして、視よ我使者を爾前に遣りて爾の道を備へさせん三曠野に呼はる者の聲あり曰く、主の路を備へよ其徑を直くせよと。四ヨハネ曠野に居てバプテスマを施し罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣べつたへたり五ユダヤの國の中およびエルサレムの人みな出でゝ其罪を言ひあらはしヨルダム河にてバプテスマを受く六ヨハネ駱駝の毛衣を著こ

しは疾病をいやし、蝗蟲と野蜜をくらへり。七この
へにくる、我よりまさるものその後よきたらんと告
てその履のひもをとくにもたらず。八ヨハネ水
もてなバプテスマをほどこせしが、聖靈をもてあん
らはバプテスマをほどこすべし。九そのころ耶蘇
ナザレよりきたりヨルダンにおてヨハネよりバプテスマをうけ
十やがて水よりあがりたるとき天ひらけて聖靈の
ごとくその上にくだるをみたり。十一また天より
いふありけるは、なんぢは我愛子われのよろこぶところのものなり
と。十二このくて靈たちまち耶蘇を野にゆかしむ。十三

のまをりリヤこうろうられ獣とともまをりまく天の
つくひたちうまつくぬ（）十四ヨハネのうちれましのも
耶蘇がリヤよくうり神の國の福音をつくへいひいるハ十五
期ハみくり神の國ハちかづけりなんぢら心をあらためて
福音を信ぜよ（）十六耶蘇がリヤのみづうみのほとりをあゆ
めるときシモンとその兄弟アンデレーのみづうみに網うて
るをみる。この二人ハ漁者なり十七耶蘇うまくまいひけるハ
まをわれよりまんぢらを人をとるものとせん十八
のまちたちまそめ網をすてうまわれにつきゆく十九こう
よりすこしまくみゆきゼベダイの子ヤコブとそのきやうだ

いヨハネの舟よりてあそつくろふをそ二
たゞちにこのきらをよびたまひしかばその父ゼベダイを傭人どももともにふねのこしてこの主にしたがひゆけり三
かペナウムにいたる耶蘇すなはち安息日に會堂にいりてをしへたまふ三
人々その教におどろきあへり其は學者のごとくにはあらで權威をもてするものゝごとくをしへたまふによりなり三
その會堂にけがれたる鬼にとりつかれたる人ありて二
さけびていひけるはあゝナザレの耶蘇よ我らにかゝはりたまふなんぢ我らを滅ぼしにきたりたまふか我なんぢが誰なるかをしるぞ汝は神の聖なるものなり三
耶蘇

こゝろを責て いひけるハ 聲をいたさずして 此人を出よ 二六 汚鬼ありてその人をひきつけさけび大聲をいだしてこの人より出たり 二七 衆人みなおどろき相ふていひけるハ 是何ぞや 此ことばハ いかなる教ぞや 權をもて命じけがれたる鬼さへ したがふなりと 二八 ゆゑに イエスの名 ガリラヤの四方ひろがりぬ ○ 二九 その會堂をいでゝ ヤコブおよびヨハネとともにシモン アンデレーの家にいたりしに 三〇 シモンのしうとめ熱をやみてふしゐけるゆゑ人たゞちにこのことを耶蘇につぐ 三一 耶蘇ちかよりてその手をとりおこしければ熱たちまち

ちさりぬ。かくてその婦この主ら供事たり。三ゆゑで〻日のいるころき人々もべてその病をそつらへるもの鬼よつうをたるものを耶蘇よなづさくきたる。三その邑そりて門まあつまりり。三四耶蘇さまぐのやまひをそつらへるおほくの人人をいやし。まさおほくの鬼をおひいだし鬼のことのりふことゆるさざりき。そは鬼うををりたるまゝりてあり。三五夜あけまく耶蘇そやくおき人るきところよゆきそとまく祈禱せり。三六シモニおよびうをとともおりしものとおその跡をおふひゆき。三七うをまあひていひけるい衆そをもんちとたづぬ。三八耶蘇このをるよいひけるいそをへく

紙のふるためにあんもうとくれよ近郷のむらむらおくに
まをこらこのためまきつれば 三六 耶蘇おほねくカリラヤあ
くまと經めぐりその會堂にをしへたまひ御國のふみつた
ひぐさせり ○ 癩病のりの一人うまれきたりて曲躬ねがひ
ひけるにあはれみ聖旨をうるよときこえそをきよくし
あーうべー 四一 耶蘇あをれみて手をのべその身にふれ
こころよしあれきよくなり 潔まをと 四二 ひとやいるたちに癩病
あをそその人きよまをり 四三 耶蘇きびしくこれを戒
うてあるをその人よつぐるなかれ往てゆきておのの身を祭
司にみせよきよめらをたためにモーセの命ぜしところ

のものを獻てこうまつる證據をあせくいひてさつしめたり
四五 さるほどにこうまつる人ども先このことを大ごいひつゝうへ
たりひろめければ耶蘇このうちあらせる處ゝゝ
たゝく人ふきこゝろ居たりしかひとゝ四方よりあつまり
きたりぬ

第二章 數日のうち耶蘇まつカペナウムにきたりしことの
家にをることきこえたゝちまちおほくの人々つと
ひきたり門にたつべき場處さへもなきほどになりき耶蘇う
をこなひたまへば 二 なほ宣ふらく 癱瘋をやむるものを四人よ
りくせ耶蘇にきたるものありしかば 四 群集によりてちから

つきうごりけるをみまもるところの屋蓋をくりのぞきてちゝうぶの人をねどころのまへにつりおろせり　九耶蘇その信仰をみてちゝうぶのひとにいひけるは子よなんぢの罪ゆるされたり　六數人のこゝろにやらん坐してこの心のうちにおもひけるは　七この人はなぜかゝるあしきことをいふや神をあざむきてたゞ神のみ罪をゆるすことをえんや　八耶蘇たゞちにこの人が心のうちにこゝろおもふことを論ずるをみてこゝろにおもひてこの人にいひけるはなんぢらなんぞ心のうちにこのることをおもんぢるや　九癱瘋の人にこれなんぢのつみはゆるされたりといふと起てなんぢの

ねうことをうけてゆけといひしかどいづもやさきやうに人
の子地につくをゆるすの権威おろこしをおへいふこゝろ
こゝろせんこゝろにて遂にちゝうぶの人まで土まで兵あんちまで告もきゝて、
臥床をとりあんちの家まうでいたりけるに土その人た
ちもおきてねどこをとり衆人のまへにいづひとりびみる
おどろき神をあがめていひけるいまゝしいまだこのごと
くきこうを見ずとおしへ土耶蘇まことのべつもきしよ
くゞをあつめこの道をきゝてうけ給ふべき事を教ふといふ
みてアルハヨの子レビといふものゝ税吏のやくしよにゐ
あるをみてわれにしたがへとのたまふ起てわが

ゥ、ゼー十五　このて耶蘇そのいへにゐて食ゐるときに多くの
稅吏つみあるひとゞ耶蘇とゝもに坐せりこは
多のものおほくありて耶蘇にしたがひたれば
のゆゑなり　ファリサイ人の學者ゝパリサイ
のひとゝもにゐるをみつゝ弟子らにいひけるは
なぜその人は稅吏つみあるひとゝ
もに食飲するのか　十七　耶蘇きゝてこれらにいひけるは康強
るものは醫者のたよりをもとめずたゞ病あるものこれを
もとむわれきたりしは義人をまねくためにあらず罪人を
まねくためなり○十八　ヨハネのでゞしとパリサイ
のひとつねに斷食をるをりとありけるゆゑ人この

きよりいけるハヨハネのイしとパリサイのでしハ斷食をるまゐハもの門徒いまよも名だんしき ぜざるのか 斷食こ
ゑまいいひけるハ新郎の友そのもろむこいまもろうち斷食まるらをうべきのうまら新郎いまもろうちハだんしきまることをえず 千將來うばとえみむこと
らるし日きしてハその日ハだんしきもつきるり 三あとらしき布をふるき衣にぬひつくるものおいうどをし然せバそのおいうたるおきまへるまの舊をほころをしそのやぶまうへつておいうまるべし 三まく新酒をふるきこのもろふくろにいるし ものおいうどをしもつせバおいうしきるけハそ

の嚢となりさき酒は皮にて盛べし
一ぱいあらざるときこれをふくべるのあり
三さて耶蘇あんそく日よむぎのほなかをとほりゆけるに
その門徒あるきつゝ麥の穗をつみてもみけるに
サイの人うたがひていひるは安息日よまもるべきことを
をもてるにあるよや
五耶蘇こたへていひるはダビデおよび從
よありしものゝ乏くして飢しときおこなることをいまだ
讀ざるの
六またもろもろ祭司のほかアビアタルのごとき神殿はい
りてたゞ祭司のほかはくらふまじき供物のパンをくらひ
こうたまよありしものよもおくりて
まことの主ろまい

ひけるハ安息日ハ人のために設られたるものにあらず人ハ安息日のために設られたるものなり
バ人の子ハ安息日にも主たるなり

第三章

耶蘇また會堂にいりたまふに手なえたる人ありけるが
ひとびと耶蘇をうかゞへるとて。この人をあんそくにちゆるやとうかゞひゐたり
耶蘇いりたまひて手なえたる人にひだりの手をのべよといひたまへば
のべたるに手もとのごとくなほりぬ
パリサイ人ハ出ていりたちまちヘロデ黨の人とともに
いかにしてかイエスを殺さんとはかりゐたり
耶蘇その弟子たちとともに海邊にのがれたまふにガリラヤより
ユダヤより
エルサレムより
イドマヤより
ヨルダンの外
ツロ
シドンの邊より
おほくの人きたりてその爲たまふ事をことごとく聞てみもとにきたりぬ
これは多くの人をいやしたまひたればなり

る人よ汝んぢの手をのべよといひけるがごとくその手をのばせりよりて他のてのごとくいえたり六パリサイの人いでいりまもなくてこの耶穌をころさんとてヘロデの黨よりおびたゞしくうりぬ（）七耶穌そのでしどもと海邊にさりぬ多くの人々ガリラヤよりこれに從ひ又ユダヤ八エルサレムイドマヤヨルダンのあなたツロとシドンのほとりより多くのひとゞ耶穌のなせしことをきゝてこれにむらがりきたる九耶穌ひとびとの群集により乘ぜんためとて小舟をそなへおくやうにことをおらんたあまり小舟をそなへおくやうにことをおらんたあまり十こゝを耶穌おまへのひとびとを愈せ

ーよりてまべて疾あるひとびと手おきてこの邑よさそらんと
て權勢ーしゆゑあり十一また汚たる鬼にこの邑をさてそのまくへ
よひをふーさけびて。なんぢ神の子ありこのひーを十二
耶蘇にこの邑より我をおらそをことおり給ときびーくいまし
めたり〇十三耶蘇やまのぼりてその意よこのあふところのも
のを召ーらいきたりて彼よつけを十四こーまおいて十二人
をたてくおのもとともまおきまく教をのべるためよつ
このそーに十五こうの病をいやし鬼をおひいだすの權威をさづく
十六さてそもシモンをペテロとなづけゼベダイの子ヤコブと
その兄弟ヨハネこのふたりをボアネルゲとなづくこれを譯

び雷の子あり　十八まつ アンデレー ピリポ バルトロマイ マタイ トーマ アルパヨの子 ヤコブ ダッダイ カナンのシモン　十九 まつ イスカリオテのユダ こをい 耶穌をわうせーものあり　二十 こをつのもの家にいりーにおほくの人々まつきつりおつまりけをび食をるいとまもあらざりき　二一 その親屬きゝてこを い狂氣せりといひてこをとらへんとてきつする　二二 まき エルサレムよりくだをる學者たちもこをいベルゼブルにとりつをまつりこつ鬼のこーらによりて鬼をおひいだをるなりと いへり　二三 耶穌こをまつをよび譬をもていひけるいサタンをいうでサタンをおひいだーえんや　二四 そーー國おのをまゝもつ

てわづらはあらざるべし　その國たらんこと
まさに家おのおの
よもやぶりてわづらはあらざるべし　その家たらんこと
サタンおのおのをそそのかし　起てまさにあらざるべし　彼たらんこと
このごとくへつて終あるべし　たとへ勇士のいへるごとく
てそのだうぐをうばはんとせば　先つよきものをおさへ
さらばうばふことあるべし　縛てのちその家をうばふべし
人のそべての罪とけがをものいふところの褻瀆はゆるさるべけれど聖靈をけがすものは
永ゆるさるべからざるつみぞかし　刑罰にあづからん
いへるいひとぐ耶蘇をあくまでとりつくろはんとい

ゆゑなり○三その兄弟と母ときたりて戸外にたち人をつかはして耶蘇をよばしむ三おほくのひと〻耶蘇をめぐりて坐したりしかば人いひけるは視よなんぢの母と兄弟そとにありてなんぢをたづぬ三耶蘇こたへていひけるはわが母わが兄弟とは誰ぞや三四うくてまわりに坐せる人々をさしまねきていひけるはわが母わが兄弟とみよ三五そも〳〵神の旨にしたがふものはこれわが兄弟わが姉妹わが母なり

第四章

耶蘇またこゝろみて教訓をもちゐはじめしにおほくの人あつまりければこれ舟にのりて坐したるに

ふびとい海にそゝいできしにたてり 二この迷たるにへとゞめておほくのこゝろをこゝにとゞまらしふ教ていひけるは 三きけよ種まくものまうんとて出 四まけるときある種はみちのほとりにおちしをそらの鳥きたりてこれをくらへて 五あるたねは土うすき礫地におちしがつちふかうらねばたちまちもえいでたれども 六日いでしうへやけ根あきがゆゑにこのまゝかれたねは棘中におちしがいばらそだちてこれを蔽ひ遂に實をむすばざりき 八またあるたねは沃壌におちしがその苗もえいでそひそりて實をむすべることありひは三十倍あるひは六十倍あるひは百倍せり 九またこゝに

らるいひけるは耳ありてきくべきものは聽
人のをらざりしき耶蘇のこれらまをりしものと十二
の門徒とこのたとへとをとひしかば十一耶蘇これいひけ
るは神のくにの奥義をあんぢらにはあたへこれ
他のものはすべてたとへをもつてを十二これ
らき視てもみるべきなり聽てもさとらんがその罪のゆる
をえざらんためなり十三またこの比喩をしらざるやいかでこ
の譬をおもさるべきやしてそのすべてのたとへを
識ことをえんや十四それ播者はことばをまくなり十五道のま
うきて路のほとりなおちしものは人こころをきゝしとき

たゞちよりサタンきたりてその心をまどはす事をとうとびうるあり十六また磽地をまうけとするものは人こゝろをさきくときたゞちによろこびてこれを受さまたげるものをまた根あきらゞゆゑたゞ右もしくは後うちのために患難あるひは迫害にあふときはたちまちつまづくものあり十七またのあうまうけとするものは人こゝろをきけども十九この世の思慮と貨財のまどはしさまざまの情欲いりきたりて道をふさぐによりつひに實をむすばざるものあり二十沃壌にまうけとするものは人こゝろをきゝてこれをうけ或は三十倍あるひは六十倍あるひは百倍のみをむす

ぶものあり○二 まことにこの燈火をもちきたりて斗のしたにおくものあらんや燭臺のうへにおくにあらずや 三 隱れてあきらかにあらはるることなきものはなし 三耳ありてきくべし 四 またこのいひけるは聽くところをつつしめよなんぢらがはかるところの量をもてなんぢらもはからるべし。きたるなんぢらのふるに加へらん 五 そてをもつものはあたへらるべし持ものはなきものをもとりさらるべし○六 またこのひけるは神の國は人たねを地にまくがごとし 七 日夜おきふしをるうちに種そえいでて

そゞろにその然ゆゑをしらぜ元そも地いおのづから實をむすぶものゝごとくそゞめまい苗つぎ穂いでほのほうに熟したる穀をむすぶ元もそよみのまぶこのるゝきいうるようりてたゞちに鎌をいるさまるあり〇幸まさいひける神の國にいうまおぞらへあるのたゝくをもてこゝをたゝくへん三一粒のうらしだねのごとし。こゝを地まきいうるきいよろづの種ありちいさけをゞ三をそゝ播てそえいつをいよろづの野菜すりいおほきくこうおほいるる枝をいゞしてそらの鳥そのうげよもむほゝまるるり〇三耶蘇のまらのきゝうるゝろゝろ生さうひておほくこうる譬をも

てをこゝろみんとしてかくいふ
らくこゝろぞ。耶蘇そのでしとゝもにふねにのるときこのあらし
うとくくらきを解きたまはず（三九）さてそのHのくれがた耶
蘇うみこむかうの岸へわたらんといひけるがごとくせよと
ぐとをうながせ耶蘇の舟さりしかばそのまゝこぎとも
もまわらぬうち。まことなくの小舟もともにゆけり（三六）時よおほ
うのぜんうり浪うちこみて殆どふねをうつ（三七）耶蘇こゝろのな
なき枕していねたりしが門徒うきの目をさまし「ていひけ
るい師よわれらがおぼれをもうへりみたまはざるこの（三八）
耶蘇おきて風をいましめまた海にむかひておだやかに

ゐ　いひけるは風やそれおほいさおきより　四　うくてこの
ものらさいひけるいまはゆるしつくおそるゝやなんちらあん
ぞ信おきや　四　こゝものらもふはづくおそ　互　さいひけるい
うせく海さんもおさがふこと誰あるぞや

第五章

こゝもの海をわたりてガダラびとの地さつき　二　ふね
より耶蘇のおかゝるとき惡鬼さとりつくゝさる人たづち
ま墓間よりいでいこゝもの遇　三　このひとはつねをそこの
とせりだれもく桎梏さくさりをもてつなげども鏈をうちき
てをおこりをうちくだくまよりこゝもを繋うるものなくま
さたれもこゝもを制しうるものなうりき　五　夜もひるもつね

さ山とはらをとおいてさけびまた石をもておのれの身をきずつけぬ　六　うをまたるより耶蘇にうてそこをよりこうをさて拜し　七　おほごゑさよばはりまたいふは至上神の子い也まよわれをなんぢとるさのこうもりあらんやわれ神よりてまよわれをくるしむることなかれ　八　こうをは耶蘇おくきさ人よりいでよといひしさよりてあり　九　耶蘇こうをさなんぢの名いかまとこといしこたへけるはわれら多ゐゆゑさわが名をレギヨンといふ　十　またりまこの土地よりわれらをおひいださあうをと耶蘇さねがひたり　十一　こゝにおほくの豕のむをは山さえさをこゝにあさりしが　十二　まべての惡鬼こうをさねがひてをは

らをおくりて家にいらせよといひければ十三耶蘇たゞちに
うまらをゆるせり汚たるおにその人よりいでゝふたゝび入
りてうばおほよそ二千匹ほどの群をげしくうけくだり山坂
より海におちてうみにおぼれぬ十四牧者どもにげゆきてこ
のことを邑またむらにつげたまひ人々そのあるしことを
をみんとて出いたるに十五いまだきたりて惡鬼さとりつきたる
ものの即ちレギヨンをもちたりし人の衣服をつけたしかなる
こゝろさて坐しをるをそおそれあへりまこのことを
見しものども惡鬼さとりつきたるものゝこと豕の
ことをこの邑のこゝつげ遍ねくやうて耶蘇にその境をいで

んことをねがひぬ 六 耶蘇ふねとのらんとせしとき惡鬼ども
どもつゐにさたりしものともをそれんことをねがひけれ
も 十九 耶蘇ゆるさずしてこのひとりのはらからの家にか
へり親屬にゆきて主のあんぢに行ひおほいなることをあ
をきくしことを告よ 二十 かの進ゆきて耶蘇のおのれに
ふしたまつる大なることをデカポリスにのべ傳へ衆人を
ふかどろきあやしむ 二十一 耶蘇ふねにのりてまた海のあなた
にわたりしに大勢のひとぐうにあつまる耶蘇はうみ
ちうくをきり 二十二 會堂のつかさヤイロといふ人きたり耶蘇
をみてその あしもとにふし 二十三 切にねがひいひけるは

いとけなき女ありぬるがうちにありぬこゝをもてもんたゐ
さきうちて手をうちおきたまへ。うちばむうちいいくべ
し二四耶蘇こゝをもてこゝもとゆくときおほぜいの人々ゐうちこゝ
たゞひてもしあへそ二五こゝをき十二年血漏をわづらひたる
をんなあり二六この婦おほくの醫者のためにさもるばかるる
しめられそのの所有をもことごとくつひやしけ色どもるこの
論もおくうちうちてあしうらしかど二七耶蘇のうちをきゝて群衆
集のうちにうちうちのうしろさきうちその衣さわる者り二八
こゝをいそのこゝろもさだまさもがたをこのるくしといへをお
そ二九このくて血のいづるこゝとたゞちにさとまりまぞく痛い巡

しとその身をおほえたり　二十　耶蘇みづから能力のおのれよ
りいでさるをあり　た勢のひろびろところへ
わたくしの衣にさへさはりしものいたるあるや　三十一　門徒これにいひけ
るいかんぞ群衆のあなたこなたおしあふをそれ見て問
しものいたるぞといひたるふ　三十二　耶蘇このことをなせる
婦をこんとみまはしけるば　三十三　かれ恐懼をのきおのが
身になせることをあり　きりてこの前にまゐり俯伏ことこ
とくありのまことをつぐ　三十四　耶蘇これにいひけるはむすめ
よあんぢの信あんぢをすくへり安然まゐりてゆけあんぢの
やまひいやべし　三十五　耶蘇このことをいひをるうちに會堂

のつこのさの家にひとりひきこもりていひけるはんちの女
をもてきたにたりあんぞ師をわづらはすやと三六耶蘇たづねもとめ
そのつげしことをきゝ會堂のつこのさきいひけるはおゝてる
るあうまたゞ信ぜよ三七耶蘇ペテロとヤコブおよびそのきや
うだいヨハネのほかは誰にもともにゆくことをゆるさゞる
ゆき三八もそこにきたるにだうの宰のいへにきたりてひとびとの
忙亂いさゝかあきさけぶをみる三九いりてこの泣きさけぶ
はんそさきにうつ哭やむをえい死るにあらぞたゞいね
たるのみ四〇かれら耶蘇をあざわらふ。耶蘇をぐてのひとびと
をいだし女のちゝもとそのともなへるものどもをひき

つ娘なのふーたるところにいり四むをめの手をうりてこ
ゑさいひけるはタリタクミこゑを譯ばむをめよわをあん
ぢよ命ぞおきよといふ義なり四二たゞちに女おきてあゆめ
るこの娘は年十二歳なりこの時甚おどろきぬ四三耶穌この
ことを人にしらするなくの迯ときびしく戒まことむをめよ食
物をあたへよと命じたり

第六章

耶穌ふるさとをさりてふるさとにいたりしその門徒
もこの迯にまさがひぬ二安息日におよびけるば會堂にて
をしへはじむ衆人これをきゝておやしをひけるはいふ
ところこの人はこのごときことあるその誰ゆうこの智慧

をさづけら巡てこのくふしぎあるわざをもその手よりあまねくこの三この巡ハ木匠ヨあらぎやマリアの子ヤコブとシモンの兄弟ヨしてその姉妹もこゝに在巡ころいもよおるらこあらぎやつひに人々この巡につぎつぎけを四耶蘇この巡らよいひけるハ預言者ハそのふるさとその親戚その宅家のほかのよおいていたふことまさざることおし五耶蘇このゝことてわつらふものゝ手をつけてたゞ數人をいやせしほかのふしぎおふしわざをおそことおらをざりき六またこの巡らの信ぜざるをおやしを怪よむらくをへめぐりてをしへ給もまた十二のでしを召てこの巡らを二人づゝつくのを

さんとしてそこを立て惡鬼をおひいだすの權威をあたへたまふ
9 また命じたまふはひとつの杖のほかは旅のために
もなにをもたずつねの旅錢なきもののまた金をもおびず
10 また二つの衣をきまたくつをはかずまた杖をも持つな
かれ何處にてもその人のうちにいりてはその所をさるまで
11 そこに居よ　また何處にてもなんぢらを接ぎなんぢらの言
をきかざるものあらばそこをさるときに證のためにかれら
にむかひてなんぢらの足の塵をはらひおとせ　まことにな
んぢらにつげん審判の日にはソドムとゴモラはこの邑よりも
おほやをうるべし　12 弟子たちいでゆきて人々にこころ
をあらたむべきことを說ひろめ　13 また多くの惡鬼を

くの悪鬼をおひいだし。まことおほくの病るものどもおふくをつけていやしぬ○古耶蘇の名ひろごりけるバヘロデ王このことをきゝていひけるハバプテスマをほどこせしヨハネいきてのへ給るゆゑさふらぎあるわざをあらはなり十五ある人ハこの事をエリアあらといひ或ハいにしへのよげんしやのごとき預言者あらといふ六ヘロデこの事をきゝていひけるハこの事ぞ我のおしへこうべをヨハネあらひ給よとこゝろをなるあり十七さきにヘロデその兄弟ピリポのつまヘロデヤのことよりて人をつかはしヨハネをとらへて獄につなげたそハヘロデがこの婦をめぐりしをヨハネいさめてあんぢやうた

いの妻といるをヘロデヤこれをうらみてころさんとおもひしかどあたはざりき　二十ヘロデはヨハネを義なる聖人なりてうやまひ保護うまもりきておほくのことをおこなひつつ歓喜てこれをきくことをせり　二十一ここにてヘロデその誕生の日もろ〳〵の大臣せんにんの長およびガリラヤの導者ひとびとふるまひをなせる機會の日いたりけるに　二十二ヘロデヤのむすめきたりて舞をまひヘロデとその席につらなるをのむすめきたりて舞をまひヘロデとその席につらなる人々をたのしませまむ。王そのむすめにいひけるは何なりとも我にもとめよ我なんぢにあたへまむと　二十三ま

あらふべし 三 まことこの娘よおほよそあんちがもとむるものは
わが領分の半さへするともあんちよあらへんとちかふ
四 女いでそのもちにあるを求べきやといひけれバ母を
おそれバプテスマのヨハネが首といふ 五 むさぼりたつとき
いそぎ王にきたり求てバプテスマのヨハネがくびを盤にのせ
てもちきたりやがてわかきたまへといふ 六 王をはじめひ
け座ぐみもまでき誓たると同席のものゆゑとまてこれを
こばむことをえざりき 七 王たゞちにヨハネの首をもちきた
れと命じて兵卒をつかはしけれバ。この人ゆきて獄にをい
てこれをきり 八 その首をぼんのせもちきたりて女にあ

たふむをわれうをその母さあらへたり　九　日八木の門徒たちこのうらをきくてきたりその屍をとりて墓さもうむるぬ○　十　使徒だち耶蘇さあつまりておこなふことをことごとくかれらにつぐ　三一　耶蘇こうまろこいひけるはひとつゞをさけてあんぢらとゝもさむろく寂寞ところさゆきてやそまん。こゝ往來のものおほくしてくうるひまもあらざりきかゆゑあり　三二　うまろ人をさけ舟にのてさびしきところへゆけり　三三　そのゆくをゝてひとゞおほくの耶蘇をしりむろくより歩行きてそこをうまろのゆうんともるところへさきだちゆきて耶蘇さあつまをり○　三四　耶蘇いで

てをほくの人をこゝまでこゝろよい牧者のおき羊のごときものあるようりてこゝろを慣さまぐのもち物をしくもとめぬ
三五時までも晩ごゝろありけまびそのでしうまできうりい
ひけるいこういさびしきところまでして時のもちやおそし三六
衆人のくらうべきものあきこゆゑきそのみでこうし四周のむらぎとくゆきて餅をもとめんがためこのまちとさとしめたまへ三七耶蘇こたへけるいわんぢうこまで食をあたくよでしこのまちいひけるいわまちゆきて銀二百のパンをこのひうまちにあたへてくちもしむべきの三八耶蘇うまちさいひけるいわ餅いくつあるゆきてこよこうまち觀てそのうぞ

をとり五のパンと二のうをとりてふ三耶蘇
人をくさくさしめて青草のうへにまわらしめよく命じけ
バ四あるひハ百人あるひハ五十人づゝむれ坐せり四耶
蘇その五つの餅と二つの魚をとり天をあふぎ謝してパンをさき門徒にあたへてひとびとのまへにおかしむまた
ふたつのうを我人ごとにわけあたへぬ四ひとびとくらひて飽そのパンとうをの餘屑をひろひしに十二のこのごと
みちたり四餅をくらひたるをとこおよそ五千人ありき〇
四五たゞちに耶蘇その弟子をおひて舟にのせむうみのきし
あるベツサイダへまづわたらしめ已ハひとびとをとゝのへ

衆人をうつせしのちのゝちある山にゆきて日く
まて舟にうみのあてのまありて耶蘇ひとりをかこみ
風さへのらんよまよりて門徒たちのふねをこぐまつこの事
をきゝて暁の四時ごろ耶蘇うみのうへをあゆみきたりこの事
らをまぎらんとせしよ 兒門徒そのうへをあゆめるをみて驚
化のものならんとおもひさけびたり 平 それでしるこの事
をきゝておそれまどゐこのゆゑなり耶蘇たゞちにこの事をうち
ていひけるは心やすくおもふまてあれおそるゝことなかれこの事 三
つひにふねのほりしかば風やみぬ。こゝをもてこゝろのうちに
いとゝおどろきあやしめることをゝるはずし 三 こゝをそのこゝろ

の愚頑よりてパンの奇跡をもさとらざりしなり（五三）
ゐなわさりゲネサレといふ地にいたりてふねをつなぎ
五四 うきふねよりいでしにやがてひとびと耶蘇をしりて五五 あ
まねくその近ころの地へもせめき病るものどもをのせ
てにわかに耶蘇のいますところときくにいづこにてこ
つけき五六 あるひは耶蘇のゆくところあるひは郷あるひ
は邑あるひは村その街市にやるものどもおきてこのきよ
の衣のすそにだにさわらせたきよしねがへばさわりし
ほどのものいやされぬ

第七章

一 パリサイの人とある學者たちエルサレムよりきたりて

耶蘇のあしこにあつまり　二　うたの門徒のうちにきよらざる手をもてるもちあしきものぞる手もてパンを食するものあるをみて　三　そはパリサイの人々ことごとくよくあしきぞれば食せざる　四　市よりうへをきたりてあらゝえざれば食せざるこのほか杯ゝん鍋おゝび牀をあらふなどさまざまのつたへをうけまもれり　五　こゝにおいてパリサイの人ことごとくやなぎ耶蘇にとひけるはなんぢの弟子ゝ古人のつたへにも古人のつたへにもあしきぞしてあらざる手をもてパンを食するやと　六　耶蘇こたへていひけるよ

ハイザヤハ偽善者なるなんぢらをさしてよく預言せり。その
のごとくせよ。この民はくちびるをもてわれをたふとめども
へどもその心はわれよりとほざかり　人のいましめを教とな
していたづらにわれを拜むなり　八そのごとくなんぢらは神
のいましめをすてて人のつたへをまもるなり。九またかれら
にいひけるはなんぢらおのれの遺傳をまもらんとてよくも神
のいましめをもつ　十モーセのひけるはなんぢ父母をうやまへ
また父母をうやまへるものは必ずころすべしと　十一されどなんぢらはいふ人もし

あるひいたらふむうひてあんぢをやしるのべきものいコ
ルバン即ちそのものありといたづつくぎらもよしと
十二あらうしてその人のその父あるひハ母のたあこあにをもそる
こうくとあんぢらゆるさざぞ十三あくあんぢらハそのそこある
うこうの遺傳とりて神のこうぢをむるしうをまさおたく
この類のこうをもこあよ〇十四耶蘇またひとびとをよびてこの
れうよいひけるハんぢらこあわがうとをきうてさと
ら十五そこより人ハいるものハひうとをけがをうことあさるず
されど人よりいづるものハひうとを汚あり十六きうある耳あ
るものハきくべし〇十七耶蘇ひとびとをるれて室よりし

まそのでし曾のこゝろをさとりけるハ六これらのものハけるハあんもちろんものほさゝるのおほよそ外より人にいるものゝ人をけがしおとさることをもうさるのんそのこゝろよりいでゝ腹にいりて則ちもらにいらんとらゐのものさまざまなり二十まるいひけるハ人よりいづるものこれ人をけがす三人のこゝろよりいづるものハ惡念姦淫苟合兇殺三盜竊貪婪惡慝詭譎邪侈嫉妒謗讟驕傲狂妄あり三これらのわるきことハみな内よりいでて人をけがすものなり〇四耶穌こゝをさりてツロとシドンのさうひまぬき家にいりて人にもらさゞらんことをねがひしかど

ろ迯えさりし 二五 そは惡鬼まつこう迯たるをさきき女をよて
るをんる耶蘇のことをきゝてきたりその足もとにふした
るまゝりてありし 二六 この婦いサイロピニシヤまうまれし キリシヤ
のものありしが惡鬼をそのむすめよりおひいだしたまえ
んことを耶蘇にねがへり 二七 耶蘇うまていひけるハ先こど
もに飽しむべしこどものパンをとりて犬にあたふるハよろ
しからず 二八 そんるこゝろにていひけるハ主よ然りされといぬ
も案のしたにありて兒曹のたべくづをくらふなり 二九 耶蘇
そんるにいひけるハこのことをよりてうくを惡鬼ハる
んちのむすめよりいでたり 三〇 婦そのいへにまうりしにあ

くきそでよいでく 女の牀よふしたるとそ〳〵○三 耶蘇ツロ
とシドンの地をさりてデカポリスのうちをそぎガリラヤのうみ
よりかへりを三 ひとく聾のどもるものを耶蘇よつまきつれ
て手をつけたまもんこ〳〵をねがひけまべ三 耶蘇ひとくごと
をもものまこうをほつく〳〵つまゆき指をその耳よさし入まつ
唾〳〵てその舌よさそり三四 うつ天をあふぎ嘆じその人よむ
ひて エツバタとのよ。こうまをとけびひらけよとの義あり三五 た
ぢちよそのみゝひらけ舌のもちゆるをてたゞしくものいひ
つ三六 耶蘇こうまを人よつぐるあうまとこの命らといへ〳〵む
まべかまし むるほどまもくのひふふしぬ三七 衆そをみはぢ

くおぐろきていひけるいこの人のあせーところぐく
善あるひいつんぼときこえさせあるひい唖者とものいを
しめたを

第八章 そのころおつまれる人々をみはぢおほうりーがる
にの食物もおくざりけるゞ耶蘇そのでしをよびていひけ
るい 二ろ色このおほくのひとぐをあをれむ。そぞる三日を
迯てくるもをりーゆゑ今あるものもろくふものあし 三もし飢
しまくそのゝこゝろさゞ途間まてもやまん。そのうちもま
遠處よりきたるものあるべおり 四そのでしうまこたへけるいての野まてゞてよりパンを得このひとぐをお

うーめんや　五　耶蘇うまごころひけるいバンいくつあるや。
七　とらふ　六　耶蘇ひとくぐ命じて地にふしめ七のパン
とりて謝しこまと掌ひとくぐのまへにおうーめんうため
その門徒にあたへけまべをるをも人々のまへにおけり　七
またちひさき魚をわづかもとりこれをも祝しそひ
とびとのまへにおけとのふ　八　ひとくぐこまとをくらひて飽
のこつぶとるつの籃にひろひをれ　九　こまと食るもの凡およ
そ四千人ありき。そのち耶蘇こまとをうへぬ　十　耶蘇たち
ちまそのでーるまに舟にのりてタルマヌタのうちにゆき
しまパリサイの人いでこまとをろんがたため天よりの

ゐるをとゞめて詰をゝむ十二耶蘇こゝろのうちにふかく歎息しこいひけるは此の世の人あんぞゐるをもとむるや。まことにまれあんぢらにつげん休徴はこの世のひとにあらばあるべからずと十三耶蘇こゝろをもるゝをもるゝてまことねまのをむうまのうまわるをもり○十四さて門徒パンをたづさふるをもるゝをもるゝたゞ一のパンのみ船にありき十五耶蘇のゐるをいましめていひけるはこゝろをつけてパリサイの人のパンだねとヘロデの餅だねをつゝしめよ十六門徒たがひに論じていひけるはこゝをパンをたづさへざるがゆゑなりと十七耶蘇これをもりてこゝをもるゝいひけるはあんぞたがひに餅

とらへさんざんにこれをろんぜるやいまださとらざるこのあんちろのこゝろおほふがごとし　八目ありてみえざるか耳ありてきこえざるか汝ら記ぬるか　九我五個人のパンを五千人にわかちあたへしときその餘屑をいくかごひろひしや答ていふ十二あり　十また四千人にわかつのパンを擘あたへしときその餘屑を幾籠ひろひしや答ていふ七あり　十一耶穌かれらにいひけるはなんぞさとらざるや

〇十二耶穌ベツサイダにいたりけるにひとく瞽者をつれきたりてこれに手をつけたまはんことをねがへり　十三耶穌めくらの手をとりてむらのそとにつれゆきその目につばきし

て手をこの者につけ給ひける 何ごとやらん 西めしひ目を
あげていひけるは 主この人々のあるくを見る 樹のご
とし 二 つひに耶蘇 まことやうてをこの者の目につけその目
をあげ給へ 三 けまびそのもち 愈てまくてのものおきらこの
ごとくなり 六 耶蘇 この事をそのいくこうくせいひけるいこ
の村よいるなの迷まこのむらびとまもつぐるなかれ ○
七 耶蘇そのでしとともにピリッポのカイザリヤのむらくへゆ
く途間てそのでしとらそいひけるは人をいひて誰とまるもり
八 こたへけるは或人はバプテスマのヨハネあるひとはエリヤ
あるひとは預言者のひとりの

といへるを耶蘇これをきゝいひけるはなんぢらいかでこゝろをいだいて誰とかこのごとくにかるやなんぢらキリストなり三耶蘇ふたゝびいでゆきてわがこゝろをたのしまするものとなり命じたり○三また人の子のうるさきをうけ長老さいしのをさ學者どもにすてられて三日のうちによみがへることをこゝろまたしめたまふ○三あきらかにこのことを示たまひしかばペテロ耶蘇をひきていさめんとせしに耶蘇ふりかへりてその門徒をみてペテロをいましめいひけるはサタンよわがうしろにさりそいまんらい神のこゝろをおもはでこゝろ人のこ

らるゝおのれ（二三）ひらくとその門徒をこゝもとよびそこうまつら
まいひけるハをしまれよあるてがもんとおもふものハ己を
そゝその十字架をもひてわれにしたがへ（二五）そハ生命をま
つたうせんとするものハこゝをうしなひわがためまた福
音のためにいのちをうしなふものハこゝをうべきなり
（二六）もし人ぜんせかいをうるともその生命をうしなは
ゝなの益あらんや（二七）また人なにをもてそのいのちにか
んや（二八）姦淫するこの世においてわれとわがことばをも
つるものをバ人の子もまた聖使とともに父の榮光をもて
きたらるときこれをも恥べし

第九章 耶蘇まことうまうよいひけるハまことまちがひなくらよつげんらくまたつものうちよ神の國のけんゐをもてきたるをみるまでい死ざるものあり ○二さて六日のち耶蘇ペテロヤコブヨハネをともなひ人をさけてたかき山よのぼりたまひしがうまうのまへまでそのすがたかはりたまひ三その衣こうやきわろきこともなるはぶくしてこの世上の布さらしもうくわろくハふしあらえざるべし四エリヤモーセとともにこのまうよあらはれて耶蘇とこうをまをまつり五ペテロこたへて耶蘇よいひけるもラビもまこうまをるハ善きまこうまうの廬をつくらせらまくハ

主のために一ハモーセのために一ハエリヤのためにせん六こ
ハそのいふところをわらひさりしかばこの事を遂おそれし
よりてこのくて雲のまらをもおほひ聲ありていひけ
るハこれわが愛子ありこれをきくべしハやうて門徒みま
もりけれバ耶蘇よりのほかハひとりをもみざりき○
九やまをくだるときに耶蘇この事ハ命じて人の子のよ
うにつるまでハあんじらの見しことを人につぐるなとい
ひつ。門徒たちこのことばをまもり。うつたがひに論ト
いひけるハよみうつるとハあるのことハいかの事ぞ耶
蘇またいひけるハエリヤハ前よきたるべしと學者の

いつるハあるまじや 十三 耶蘇こゝに、ていひけるハ實まエリヤハさきだちきたりて萬事をあらたむ。また人の子につきてハそのさまざまのくるしみを受ることしるしかきたるごとし 十三 されどまたあんぢらにつげんエリヤハもはやきたりしがこゝろのまゝにこれをあしらへるされたりしごとく人の子もまたかれらのてにくるしみをうけんとなり 十四 ○ 耶蘇でしたちのもとにきたりおほくの人々のうへにあつまりうこめるとき學者たちのうをもて論じをりしをたり 十五 衆たゞちにこのかたをみておどろきをゝきよりて禮をなせり 十六 耶蘇學者たちにやまらひけるハ門徒とあまごとを論ずるや 十七 ひとびとのう

ち一人ここへけるハ師よ子をものいはぬ悪鬼にとりつ
まるわが子をあんちよつきこまり 十六 あくきのとりつ
くことハこれあげたふされ沫とふき歯をかみにつこをた
つるあり。こをとおひいだしんことをまれあんちの門徒よ
こひーうごうまうあそぶりき 十七 耶蘇こをうまこうへて
いひけるハあゝ信あき世あるこうるいつまでそをあんちう
こもよあらんや何時までそをあんちらとともにあんや。こ
をそをまよつきこれ 十八 こをうその子をつきこうりーよ
あゝき耶蘇をそたちまちこをうと拘攣しむこをち地よたふ
まこうけまろびてあわをふきね 十九 耶蘇その父にとひけるハ

いふのころよりこのくありしや父いひけるはちさるときよりあり　二三惡鬼あなたくこゝをと火のあるひは水のあるくゝまあけいまてこゝろさんとはりあんぢらをゝ爲こゝらをえばそまてくをおもれそたすけよ　二三耶穌こゝまていひけるはあんおもゝ信ずることくをえば信ずるものまおいてはあらざることなり　二四その子のちゝたゞちに聲をあげみづからをおぶゝていひけるは主よ我信ぜわぐゝあんぢきをたすけたまへ　二五耶穌ひとゞくのもゝをあつまるをそて惡鬼をせめいひけるは啞まゝそいんぼうのあゝきよ我あんぢこゝめいぜ出てふたゝびこゝまているあてを　二六惡鬼さけびてお

いよ〳〵ひきつけしめていふべし〳〵死たるまゝ
〳〵なりぬ人々こゑをそろへ死りとのゝしる 三 耶蘇その手をとり
ておこしければ起る 四 いよ〳〵家にいりてはその
門徒ひそかにひけるはまことにこの事をあひいゝをこゝに
たゝずりしはあまゆゑぞ 五 耶蘇こゝにいたりこの
たゞひい祈禱と斷食よりほかにいでぬあひいゝをこゝにあるそ
さるあり 六 こゝをさりてガリラヤをとほりこのことを
を耶蘇ひとの志ることこのまぎりき 三 そはそのでしをを
つて人の子はひとの手にわたされ殺さ
れそのち第三日によみがへるべしといひたまふがゆゑ

三 その時門徒たちこのまことをさとらずしてこれに問うことをおそれたり（） 三 さて耶蘇カペノウムにいたり室にありて門徒にとひけるは汝ら途間にて互に論ぜしは何事ぞ 三四 默然たり是途間にて互に論じ誰の大いなるやとの争ひありければなり 三五 いまだ坐しずしてその十二をよびこれらにいひけるは人もし首たらんとおもはばすべての人の後となりまたすべての人のつかへ人とならんと 三六 また孩提をとりてこれらのあひだにたてこれをいだきこれらにいひけるは 三七 おほよそわが名のためにこのごとき孩提をひとりをうくるものは即ち

その人いむくいをうけざるあり　四二まことなんぢらにつげん
を信ずるらひさきものひとりをつまづくるものはその
の首に磨をかけられて海にあげいれらるんこそその人の
たあによかるべし　四三もしなんぢのうで手あんぢをつ
まづかさばこれをきりすてよ兩手ありて地獄をもちきえ
ざる火にゆくんよりは殘缺なるいのちにいるんなんぢの
たあによきことあり　四四そこにてかれざるまた火きえ
ざるところなんぢのうであんぢをつまづかさばこれ
をきりすてよ兩足ありてちごく即ちきえざる火にあげいれ
らるんよりは跛てえいせいにいるはあんぢのたあによきこと

ま　このこころいるところのうじつきず火きえず　四七そこるん
ちの一眼あんちとつまづくさこころまとぬきいぶりぜごめう
ごんありて地獄の火にあげいまころれんようにうこころめまて
神の國にいるにはあんちのためによきあり　四八彼處にいるも
のこうじつきず火きえず　四九そこにまべての人は鹽をつかる
ごとく火にとまてばらる。五〇まべての祭物はあぶをまて鹽つけ
らる　五一あぶはよきものあり。されど鹽そこその味をうし
なわるにいかてこれをあてこまてよ　五二あらとつけんやあんちら心の
うちに鹽をたもてまたがひに睦やそらぐべし

第十章

耶蘇こころヨルダンのあるさとにて　ユダヤのさ

うひのうちよりきらひしによりてなほくの人々まことうるはしきりけるべし悔のごとくの事ゆゑよく教誨をなしたまへりニパリサイの人きゝてこれをこゝろにそひけるゆゑにその妻をいよきらひ三こゝにいひけるはモーセはなんぢらのこゝろかたくなるによりて離縁状をかきあらはしてこれを出すことをゆるせり五耶蘇こゝにてこのきゝにいひけるはモーセなんぢらのこゝろ剛硬なるによりてこのおきてをなしたるなり。されど開闢のはじめ神ひとを男女につくりたまへりヒこのゆゑに人はその父母をはなれその妻にあひてふたりのものは一體となるべし!さるべ

二ゐんあらばなんぢ ゝ九このゆゑに神のそそのかせたまへるものゝ人これをさるまぢうぢ○十室にありて門徒たちまたこのことをとひけるに十一耶蘇こたへていひけるはおほよそその妻をいだしてほかのものをめとるものはその妻に對してうんりんをおこなふなり十二また婦もその夫をいだしてほかの嫁ぐばこのものもまた姦淫をおこなふなり○十三耶蘇にさはらんがために人々をさなごをつれきたりけるに門徒たちそのつれきたれるものをいましめたり十四耶蘇これをみていかりをふくみこれにいひけるは孩提をわがもとにきたらせよこれらを禁るなかれ神の國

よきものあらんこのごときものあり　十九　なんぢよつけんおもてをさるごのごとくに神の國をうけさるものいることをよいることを得ざるあり　二十　そのときかの人をいぶかりて手をそのうへにのせこれを祝せり○　二十一　耶蘇みちにいでけるに一人かれをきたりてひざまづきとひけるは善師よわれいかにしてか永生をうべきや　二十二　耶蘇いひけるはなんぢなぜわれを善といふやひとりのほかに善ものなし　二十三　なんぢ誡命をもちゐよ　二十四　いはくめはなんぢころすなかれ姦淫するなかれ殺すなかれ盜むなかれ妄のあかしをたつるなかれ拐騙るなんぢの父と母

をうやまへ 十 こゝろくていひけるハ 師よこゝをこゆるわざいと
けるきよりまもれるものあり 三 耶蘇こゝをきゝていつくし
みひけるいあんちるほひとらを屠ゆきてそのもちものを
賣まづしきものゝほどこせさらバ天にもいて財おらん
あうしてきたりて十字架をとりてわをまなびくべし 三 この
のことをよりてこゝろをうをひてさりぬ。こゝろいもほい
る豪業をもてるものあればなり 三 耶蘇みまはしてその
門徒にいひけるハ財をもてるもの神の國にいるハいかの
ようにかたきぞ 四 でしこのことばをおどろけり。耶蘇またこ
たへていふをもろこいひけるハ小子よたのしきと恃ものハ神の

るにまさるはいとかたし　二五富める者の神の國にはいるよりは駱駝の針のあなをとほるはやすし　二六弟子たち甚だおどろきたがひにいひけるは誰かすくひをうべきや　二七耶蘇こゝろをとめていひけるは人にあたはざることろなれど神にはしからず神にはあらゆることろあたはざることろなければなり　二八ペテロこゝろよいひけるはまた一切をすてゝあなたにしたがひまつれり　二九耶蘇こたへていひけるはまことなんぢらにつげん我と福音のために家宅あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは兒女あるひは田疇をすつる

ものハ三十この世にて百倍をうけざるものまた即ちいへきやうだい姉妹もこどもたもとをつらねこのもれ世にてさのもれ世にてこのぎりあきいのちをうけん三されとおほくの先あるものハおほくあり後あるものハさきにあるべし〇三さてうれふエルサレムよのぼらんもわをぶら耶蘇でまさきぶちゆきけるバこのもらもおどろき且おそれてあとゞひね。耶蘇またよをとりあつめて將よおのれにおこりてあることどもをつぎのごとくいひかたりたまひけるハ三それらエルサレムよのぼり人の子ハさいしのかしらと學者たちにわたされん。このものらハ人の子を死罪にさだめ異邦人にわたし三またこれを嘲

弄（ろう）しむ、唯（ゆい）一（いつ）の事（こと）を缺（かく）のみ、往（ゆ）きて汝（なんぢ）の有（も）てる物（もの）を賣（う）りて貧（まづ）しき者（もの）に與（あた）へよ、然（しか）らば天（てん）に寶（たから）あらん、又（また）來（きた）りて我（われ）に從（したが）へ、二二 彼（かれ）この言（ことば）を聞（きき）て憂（うれ）へ、大（おほ）いに悲（かなし）みて去（さ）りぬ、蓋（けだし）多（おほ）くの產業（さんげふ）を有（も）てる者（もの）なり、二三 耶蘇（やそ）周圍（まはり）を見（み）て弟子（でし）に言（いひ）けるは、富（とめ）る者（もの）の神（かみ）の國（くに）に入（いる）は何（いか）に難（かた）きかな、二四 弟子（でし）その言（ことば）に驚（おどろ）きたれば、耶蘇（やそ）また答（こたへ）て言（いひ）けるは、子（こ）よ、神（かみ）の國（くに）に入（いる）は何（いか）に難（かた）きかな、二五 駱駝（らくだ）の針（はり）の孔（あな）を通（とほ）るは富（とめ）る者（もの）の神（かみ）の國（くに）に入（いる）よりも易（やす）かるべし、二六 弟子（でし）いよいよ驚（おどろ）きて互（たがひ）に言（いひ）けるは、然（しか）らば誰（たれ）か救（すく）はるることを得（え）ん、二七 耶蘇（やそ）目（め）を注（そそ）ぎて言（いひ）けるは、人（ひと）には能（あた）はざれども神（かみ）には然（しか）らず、神（かみ）には凡（すべ）ての事（こと）能（あた）はざることなし、二八 ペテロ言（いひ）けるは、我（われ）ら凡（すべ）ての物（もの）を棄（すて）て汝（なんぢ）に從（したが）へり、二九 耶蘇（やそ）言（いひ）けるは、誠（まこと）に汝（なんぢ）らに告（つげ）ん、我（わが）ために又（また）福音（ふくいん）のために家（いへ）、兄弟（きやうだい）、姉妹（しまい）、母（はは）、父（ちち）、子（こ）、田地（でんち）を棄（すて）たる者（もの）は、三〇 今（いま）この時（とき）において百倍（ひやくばい）を受（うけ）ざる者（もの）なし、即（すなは）ち家（いへ）、兄弟（きやうだい）、姉妹（しまい）、母（はは）、子（こ）、田地（でんち）を受（うけ）ん、迫害（はくがい）もまた然（しか）り、而（しかう）して後（のち）の世（よ）において永生（えいせい）を受（うけ）ん、三一 然（しか）れども先（さき）なる者（もの）の多（おほ）くは後（あと）になり、後（あと）なる者（もの）の多（おほ）くは先（さき）になるべし、三二 彼（かれ）ら途（みち）にありてエルサレムに上（のぼ）る、耶蘇（やそ）は彼（かれ）らに先（さき）だちて行（ゆ）きたまふ、弟子（でし）は驚（おどろ）き、從（したが）ふ者（もの）は懼（おそ）れたり、耶蘇（やそ）また十二人（じふにん）を傍（かたはら）に呼（よび）て、己（おのれ）に將（まさ）に臨（のぞ）まんとする事（こと）を告（つげ）はじめて言（いひ）けるは、三三 我（われ）ら今（いま）エルサレムに上（のぼ）る、人（ひと）の子（こ）は祭司長（さいしちやう）と學者（がくしや）とに付（わた）されん、彼（かれ）ら死（し）に定（さだ）めて異邦人（いはうじん）に付（わた）さん、三四 異邦人（いはうじん）は彼（かれ）を嘲（あざけ）り、唾（つば）し、鞭（むち）うち、殺（ころ）さん、されど三日（みつか）目（め）に復活（よみがへ）らん、三五 ゼベダイの子（こ）ヤコブとヨハネ耶蘇（やそ）に來（きた）りて言（いひ）けるは、師（し）よ、我（われ）ら願（ねが）ふ所（ところ）を汝（なんぢ）に求（もと）めんとす、三六 耶蘇（やそ）言（いひ）けるは、汝（なんぢ）らに何（なに）を爲（なし）てほしきか、三七 答（こたへ）て言（いひ）けるは、榮光（えいくわう）を汝（なんぢ）の右（みぎ）ひとりと左（ひだり）ひとりとに坐（ざ）せしめよ、三八 耶蘇（やそ）言（いひ）けるは、汝（なんぢ）らは求（もと）むる所（ところ）を知（しら）ず、我（わが）飲（のむ）杯（さかづき）を飲（のみ）、我（わが）受（うく）るバプテスマを受（うけ）得（え）るや、三九 答（こたへ）て言（いひ）けるは、能（よく）す、耶蘇（やそ）言（いひ）けるは、我（わが）飲（のむ）杯（さかづき）は汝（なんぢ）ら飲（のむ）べし、我（わが）受（うく）るバプテスマは汝（なんぢ）ら受（うく）べし、四〇 但（ただし）我（わが）右（みぎ）左（ひだり）に坐（ざ）することは我（われ）の與（あた）ふる所（ところ）にあらず、唯（ただ）備（そなへ）ある者（もの）のために備（そなへ）たるなり、四一 十人（じふにん）これを聞（きき）て、ヤコブとヨハネとを憤（いきどほ）りはじめたれば、四二 耶蘇（やそ）彼（かれ）らを呼（よび）て言（いひ）けるは、汝（なんぢ）らの知（しる）ごとく、異邦人（いはうじん）の君（きみ）たる者（もの）は民（たみ）を治（をさ）め、大（おほ）いなる者（もの）は民（たみ）に權威（けんゐ）を施（ほどこ）す、四三 汝（なんぢ）らの中（うち）にはしからず、汝（なんぢ）らの中（うち）にて大（おほ）いならんと欲（ほつ）する者（もの）は、汝（なんぢ）らの役者（えきしや）となり、四四 汝（なんぢ）らの中（うち）にて首（かしら）たらんと欲（ほつ）する者（もの）は、凡（すべ）ての人（ひと）の僕（しもべ）となるべし、四五 人（ひと）の子（こ）の來（きた）りしは仕（つか）へられんためにあらず、反（かへ）りて仕（つか）へんためにまた多（おほ）くの人（ひと）の贖（あがなひ）として己（おのれ）の生命（いのち）を與（あた）へんためなり、四六 彼（かれ）ら耶利哥（エリコ）に來（きた）る、耶蘇（やそ）その弟子（でし）および多（おほ）くの群衆（ぐんしう）とともにエリコを出（いで）たまふとき、テマイの子（こ）バルテマイと言（いふ）盲人（めしひ）道（みち）の傍（かたはら）に坐（ざ）して乞食（こつじき）をなしをりしが、四七 ナザレの耶蘇（やそ）なりと聞（きき）て、呼（よば）はりて言（いひ）けるは、ダビデの子（こ）イエスよ、我（われ）を憐（あはれ）みたまへ、四八 多（おほ）くの人（ひと）これを叱（しか）りて默（もだ）せと言（いひ）けれども、彼（かれ）ますます呼（よば）はりて、ダビデの子（こ）よ、我（われ）を憐（あはれ）みたまへと言（いひ）ければ、四九 耶蘇（やそ）立（たち）とまりて、彼（かれ）を呼（よび）よと言（いひ）たまふ、人（ひと）すなはち盲人（めしひ）を呼（よび）て言（いひ）けるは、心（こころ）安（やす）かれ、起（おき）よ、汝（なんぢ）を呼（よび）たまふ、五〇 彼（かれ）その上衣（うはぎ）を脫（ぬぎ）すてて起（おき）、耶蘇（やそ）の許（もと）に來（きた）る、五一 耶蘇（やそ）言（いひ）けるは、我（われ）に何（なに）を爲（なし）てほしきか、盲人（めしひ）言（いひ）けるは、師（し）よ、我（われ）見（み）ることを得（え）んことを願（ねが）ふ、五二 耶蘇（やそ）言（いひ）けるは、往（ゆ）け、汝（なんぢ）の信仰（しんかう）汝（なんぢ）を救（すく）へりと、彼（かれ）すなはち見（み）ることを得（え）、道（みち）に從（したが）ひて耶蘇（やそ）に從（したが）ふ、

第十一章

一 彼（かれ）ら橄欖山（かんらんざん）の傍（かたはら）なるベテパゲとベタニヤに近（ちか）づきたるとき、耶蘇（やそ）二人（ふたり）の弟子（でし）を遣（つかは）すとて、二 言（いひ）けるは、汝（なんぢ）ら對（むか）ひの村（むら）に往（ゆ）け、入（いる）とき未（いま）だ人（ひと）の乘（のり）たることなき子驢馬（ころば）の繫（つな）ぎあるを見（み）ん、解（とき）て牽（ひ）き來（きた）れ、三 もし人（ひと）汝（なんぢ）らに何（なに）ゆゑ然（しか）するかと問（とは）ば、主（しゅ）これを要（えう）したまふと言（いへ）、すなはち速（すみやか）に此（ここ）に送（おく）りかへすべしと言（いひ）たまふ、四 彼（かれ）ら往（ゆ）きて門（もん）の外（そと）の巷（ちまた）に繫（つな）ぎある子驢馬（ころば）を見（み）て解（とき）しに、五 傍（かたはら）に立（たち）たる人（ひと）ども、子驢馬（ころば）を解（とく）とは何（なに）ゆゑぞと言（いひ）ければ、六 耶蘇（やそ）の言（いひ）たまひしごとく言（いひ）しかば、人（ひと）ども許（ゆる）せり、七 彼（かれ）ら子驢馬（ころば）を耶蘇（やそ）の許（もと）に牽（ひ）き來（きた）りて、己（おのれ）の衣（ころも）を其（その）上（うへ）に置（おき）しかば、耶蘇（やそ）乘（のり）たまへり、八 多（おほ）くの人（ひと）その衣（ころも）を路（みち）に敷（しき）、また野（の）より枝（えだ）を伐（きり）て路（みち）に敷（しき）ぬ、九 前（まへ）に行（ゆく）者（もの）と後（あと）に從（したが）ふ者（もの）と呼（よば）はりて言（いひ）けるは、ホサナ、主（しゅ）の名（な）によりて來（きた）る者（もの）は祝（ほめ）されよ、一〇 我（わが）父（ちち）ダビデの國（くに）は祝（ほめ）されよ、ホサナ、最高（いとたか）き所（ところ）にて然（しか）り、一一 耶蘇（やそ）エルサレムに入（いり）て宮（みや）に至（いた）りたまへり、すべて周圍（まはり）を見（み）たまひしが、時（とき）已（すで）に夕（ゆふ）になりたれば、十二人（じふにん）とともにベタニヤに出（いで）たまへり、一二 明日（あす）ベタニヤを出（いで）たまふとき、耶蘇（やそ）飢（うゑ）たまへり、一三 遠（とほ）くより葉（は）ある無花果樹（いちじくのき）を見（み）て、もしや何（なに）か有（あ）らんとて、近（ちか）づきたまへども、葉（は）のほかは何（なに）も有（あ）らざりき、無花果（いちじく）の時（とき）にあらざればなり、一四 耶蘇（やそ）これに向（むか）ひて言（いひ）たまひけるは、今（いま）より後（のち）永（とこしへ）に汝（なんぢ）の果（み）を食（くら）ふ者（もの）なかれと、弟子（でし）これを聞（きき）たり、一五 彼（かれ）ら又（また）エルサレムに至（いた）りたまへり、耶蘇（やそ）宮（みや）に入（いり）て、其（その）中（うち）にて賣（う）り買（かひ）する者（もの）どもを逐（おひ）いだし、兩替（りやうがへ）する者（もの）の臺（だい）と鴿賣（はとうり）の腰掛（こしかけ）とを覆（くつがへ）し、一六 また器具（うつはもの）を携（たづさ）へて宮（みや）を通（とほ）ることを許（ゆる）したまはず、一七 教（をしへ）て言（いひ）たまひけるは、我（わが）家（いへ）は萬民（ばんみん）の祈禱（いのりのいへ）の家（いへ）と稱（とな）へらるべしと錄（しる）されたるにあらずや、汝（なんぢ）らは之（これ）を强盜（ごふだう）の巢窟（すくひ）となせり、一八 祭司長（さいしちやう）と學者（がくしや）とこれを聞（きき）て、いかにして耶蘇（やそ）を殺（ころ）さんかと謀（はかり）たり、蓋（けだし）民（たみ）みな其（その）教（をしへ）に驚（おどろ）きたるによりて、之（これ）を懼（おそ）れたるなり、一九 夕（ゆふ）になりて耶蘇（やそ）と弟子（でし）とは都（みやこ）の外（そと）に出（いで）たまへり、二〇 朝（あさ）早（はや）く通（とほ）るとき、無花果樹（いちじくのき）の根（ね）より枯（かれ）たるを見（み）たり、二一 ペテロ思（おもひ）出（いだ）して耶蘇（やそ）に言（いひ）けるは、師（し）よ、看（み）たまへ、汝（なんぢ）の詛（のろ）ひたる無花果樹（いちじくのき）枯（かれ）たりと、二二 耶蘇（やそ）答（こたへ）て言（いひ）たまひけるは、汝（なんぢ）ら神（かみ）を信（しん）ぜよ、二三 誠（まこと）に汝（なんぢ）らに告（つげ）ん、人（ひと）もし此（この）山（やま）に向（むか）ひて、起（おこ）りて海（うみ）に投（なげ）入（いれ）らるべしと言（いひ）、心（こころ）に疑（うたが）はずして、己（おのれ）の言（いひ）たることの成（なる）を信（しん）ずれば、その言（いひ）たるごとくなることを得（え）ん、二四 この故（ゆゑ）に我（われ）汝（なんぢ）らに告（つげ）ん、凡（すべ）て祈（いの）りて求（もと）むる事（こと）は、すでに得（え）たりと信（しん）ぜよ、さらば汝（なんぢ）らの如（ごと）くなるを得（え）ん、二五 また立（たち）て祈（いの）るとき、人（ひと）に對（たい）して何（なに）か懷（いだ）くことあらば、赦（ゆる）せ、然（しか）らば天（てん）にいます汝（なんぢ）らの父（ちち）も汝（なんぢ）らの罪（つみ）を赦（ゆる）したまはん、二六 汝（なんぢ）らもし赦（ゆる）さずば、天（てん）にいます汝（なんぢ）らの父（ちち）も汝（なんぢ）らの罪（つみ）を赦（ゆる）したまはざるべし、二七 彼（かれ）ら又（また）エルサレムに至（いた）りたまへり、耶蘇（やそ）宮（みや）にて歩（あゆ）みたまふとき、祭司長（さいしちやう）と學者（がくしや）と長老（ちやうらう）とその許（もと）に來（きた）りて、二八 言（いひ）けるは、何（なに）の權威（けんゐ）によりて此（これ）らの事（こと）を爲（なす）や、誰（たれ）か此（これ）らの事（こと）を爲（なす）の權威（けんゐ）を汝（なんぢ）に與（あた）へたるや、二九 耶蘇（やそ）答（こたへ）て言（いひ）けるは、我（われ）も一（ひと）つの事（こと）を汝（なんぢ）らに問（とは）ん、我（われ）に答（こたへ）よ、然（しか）らば何（なに）の權威（けんゐ）によりて此（これ）らの事（こと）を爲（なす）かを汝（なんぢ）らに告（つげ）ん、三〇 ヨハネのバプテスマは天（てん）より來（きた）りしか、人（ひと）より來（きた）りしか、我（われ）に答（こたへ）よ、三一 彼（かれ）ら互（たがひ）に論（ろん）じて言（いひ）けるは、もし天（てん）より來（きた）りしと言（いは）ば、彼（かれ）なんぞ之（これ）を信（しん）ぜざりしと言（いは）ん、三二 もし人（ひと）より來（きた）りしと言（いは）んか、民（たみ）を懼（おそ）れざるべからず、蓋（けだし）民（たみ）みなヨハネを眞（まこと）の預言者（よげんしや）と思（おも）ふなり、三三 彼（かれ）ら耶蘇（やそ）に答（こたへ）て言（いひ）けるは、我（われ）ら知（しら）ずと、耶蘇（やそ）言（いひ）たまひけるは、我（われ）も何（なに）の權威（けんゐ）によりて此（これ）らの事（こと）を爲（なす）かを汝（なんぢ）らに告（つげ）じ、

第十二章

一 耶蘇（やそ）譬（たとへ）をもて彼（かれ）らに語（かた）りはじめたまひけるは、人（ひと）ぶだうの園（その）を作（つく）りて、垣（かき）をめぐらし、酒槽（さかぶね）を掘（ほり）、樓（やぐら）を建（たて）、農夫（のうふ）に貸（かし）て遠（とほ）く旅（たび）したり、二 時（とき）いたりて僕（しもべ）を農夫（のうふ）の許（もと）に遣（つかは）し、ぶだうの園（その）の果（み）を收（をさ）めんとせしに、三 農夫（のうふ）僕（しもべ）を捕（とら）へ、打（うち）て空（むな）しく歸（かへ）らしめたり、四 また他（ほか）の僕（しもべ）を遣（つかは）しければ、これをも打（うち）て辱（はづかし）めたり、五 また他（ほか）の一人（ひとり）を遣（つかは）しければ、これをも殺（ころ）せり、また多（おほ）くの他（ほか）の僕（しもべ）を遣（つかは）しけるに、或（あるひ）は打（うち）或（あるひ）は殺（ころ）せり、六 尚（なほ）ひとりの愛子（あいし）あるのみなりしが、最後（さいご）にこれを遣（つかは）して、我（わが）子（こ）は敬（うやま）ふならんと言（いひ）たるに、七 農夫（のうふ）ら互（たがひ）に言（いひ）けるは、これ嗣業（よつぎ）なり、來（きた）れ殺（ころ）さん、さらば嗣業（よつぎ）は我（われ）らのものとならんと、八 すなはち捕（とら）へて殺（ころ）し、ぶだうの園（その）の外（そと）に投（なげ）いだせり、九 ぶだうの園（その）の主（しゅ）いかにせんや、來（きた）りて農夫（のうふ）を滅（ほろぼ）し、ぶだうの園（その）を他（ほか）の人（ひと）に與（あた）へんか、一〇 汝（なんぢ）らこの經（しるし）を讀（よ）まざるか、家（いへ）を建（たつ）る者（もの）の棄（すて）たる石（いし）は隅（すみ）の首（かしら）となれり、一一 これ主（しゅ）の爲（なし）たまふことにて、我（われ）らの目（め）には奇（くし）なりと、一二 彼（かれ）ら耶蘇（やそ）の己（おのれ）らを指（さし）て此（この）譬（たとへ）を言（いひ）たまひしを知（しり）たれば、民（たみ）を懼（おそ）れて、之（これ）を捕（とら）へんと求（もと）めたれども、遂（つひ）に去（さ）りぬ、一三 彼（かれ）ら又（また）パリサイ人（びと）とヘロデ黨（たう）の人（ひと）を遣（つかは）して、耶蘇（やそ）の言（ことば）を捕（とら）へんとせしめたり、一四 彼（かれ）ら來（きた）りて言（いひ）けるは、師（し）よ、我（われ）ら汝（なんぢ）の眞（まこと）なる人（ひと）にして、人（ひと）を憚（はばか）らず、人（ひと）の貌（かほ）を見（み）ず、眞（まこと）に神（かみ）の道（みち）を教（をしへ）たまふを知（しる）、凱撒（カイザル）に稅（ぜい）を納（をさ）むるは可（よろ）しきか、一五 我（われ）ら納（をさ）むべきか、納（をさ）むべからざるか、耶蘇（やそ）彼（かれ）らの偽（いつはり）を知（しり）たまひ、言（いひ）たまひけるは、我（われ）を試（こころ）みるは何（なに）ゆゑぞ、デナリを我（われ）に見（み）せよ、我（われ）これを觀（み）ん、一六 彼（かれ）ら持（もち）來（きた）りしかば、耶蘇（やそ）言（いひ）たまひけるは、此（この）像（かたち）と號（な）とは誰（たれ）のなるか、彼（かれ）ら言（いひ）けるは、凱撒（カイザル）のなり、一七 耶蘇（やそ）言（いひ）たまひけるは、凱撒（カイザル）のものは凱撒（カイザル）に、神（かみ）のものは神（かみ）に還（かへ）せ、彼（かれ）ら耶蘇（やそ）の言（ことば）に驚（おどろ）きたり、一八 復活（よみがへり）あることなしと言（いふ）サドカイ人（びと）ども耶蘇（やそ）に來（きた）りて問（とひ）けるは、一九 師（し）よ、モーセ我（われ）らのために書（かき）遺（のこ）せり、人（ひと）の兄（あに）もし妻（つま）を有（も）ちて子（こ）なくして死（し）なば、その弟（おとと）これを娶（めと）りて兄（あに）のために子孫（すゑ）を擧（あげ）べしと、二〇 七人（しちにん）の兄弟（きやうだい）ありき、長（ちやう）なる者（もの）妻（つま）を娶（めと）りて子（こ）なくして死（し）ぬ、二一 次（つぎ）なる者（もの）これを娶（めと）りて子（こ）なくして死（し）ぬ、三（さん）なる者（もの）も然（しか）り、二二 七人（しちにん）ともに子（こ）なかりき、婦（をんな）また死（し）ぬ、二三 復活（よみがへり）の時（とき）に彼（かれ）ら復活（よみがへ）らば、婦（をんな）は誰（たれ）の妻（つま）ならんや、七人（しちにん）ともに之（これ）を妻（つま）としたればなり、二四 耶蘇（やそ）言（いひ）たまひけるは、汝（なんぢ）らの惑（まど）ふは聖書（せいしよ）をも神（かみ）の能力（ちから）をも知（しら）ざるによるにあらずや、二五 人（ひと）死（し）より復活（よみがへ）らば、嫁（とつ）ぐことも娶（めと）ることもなく、天（てん）にある御使（みつかひ）のごとくなるべし、二六 死人（しにん）の復活（よみがへり）については、モーセの書（しよ）の柴（しば）の條（くだり）に、神（かみ）モーセに言（いひ）たまひけるは、我（われ）はアブラハムの神（かみ）、イサクの神（かみ）、ヤコブの神（かみ）なりと錄（しる）されたるを、汝（なんぢ）ら讀（よ）まざるか、二七 神（かみ）は死人（しにん）の神（かみ）にあらず、生（いき）たる者（もの）の神（かみ）なり、汝（なんぢ）らの惑（まど）ふは甚（はなはだ）しきなり、二八 學者（がくしや）の一人（ひとり）ありて、彼（かれ）らの論（ろん）じ合（あひ）たるを聞（きき）、耶蘇（やそ）の善（よく）答（こたへ）たまひしを知（しり）て、耶蘇（やそ）に問（とひ）けるは、誡命（いましめ）の中（うち）にて何（いづれ）か第一（だいいち）なるや、二九 耶蘇（やそ）答（こたへ）たまひけるは、第一（だいいち）は、イスラエルよ聽（きけ）、我（われ）らの神（かみ）ヱホバは唯一（ゆいいつ）のヱホバなり、三〇 汝（なんぢ）心（こころ）を盡（つく）し、精神（こころ）を盡（つく）し、意（おもひ）を盡（つく）し、力（ちから）を盡（つく）して、汝（なんぢ）の神（かみ）ヱホバを愛（あい）すべしとあるこれなり、三一 第二（だいに）は、己（おのれ）のごとく汝（なんぢ）の隣（となり）を愛（あい）すべしとあるこれなり、此（これ）より大（おほ）いなる誡命（いましめ）は他（ほか）になしと、三二 學者（がくしや）耶蘇（やそ）に言（いひ）けるは、師（し）よ、善（よく）言（いひ）たまへり、神（かみ）は唯一（ゆいいつ）にして、ほかに神（かみ）なしと言（いひ）たまふは眞（まこと）なり、三三 また心（こころ）を盡（つく）し、智慧（ちゑ）を盡（つく）し、力（ちから）を盡（つく）して神（かみ）を愛（あい）し、己（おのれ）のごとく隣（となり）を愛（あい）するは、すべての燔祭（はんさい）と犧牲（いけにへ）とに勝（まさ）ると、三四 耶蘇（やそ）その智慧（ちゑ）ありて答（こたへ）たまへるを見（み）て、言（いひ）たまひけるは、汝（なんぢ）は神（かみ）の國（くに）を遠（とほ）からずと、これより後（のち）敢（あへ）て耶蘇（やそ）に問（とふ）者（もの）なかりき、三五 耶蘇（やそ）宮（みや）にて教（をしへ）たまふとき、言（いひ）たまひけるは、學者（がくしや）はいかでキリストをダビデの子（こ）と言（いふ）ことを得（え）ん、三六 ダビデ聖靈（せいれい）に感（かん）じて言（いひ）けるは、ヱホバ我（わが）主（しゅ）に言（いひ）たまふ、我（われ）汝（なんぢ）の仇（あだ）を汝（なんぢ）の足（あし）の下（した）に置（おく）まで、我（わが）右（みぎ）に坐（ざ）せよと、三七 ダビデ自（みづから）これを主（しゅ）と稱（とな）へたり、然（しか）らば何（いかで）ダビデの子（こ）ならんや、三八 耶蘇（やそ）また教（をしへ）て言（いひ）たまひけるは、學者（がくしや）に慎（つつし）めよ、彼（かれ）らは長衣（ながごろも）を着（き）て歩（あゆ）むことを好（この）み、市場（いちば）にて敬禮（うやまひ）を受（うけ）ることを好（この）み、三九 會堂（くわいだう）の上席（かみのせき）、宴會（えんくわい）の上座（かみのざ）を好（この）み、四〇 寡婦（やもめ）の家（いへ）を呑（のみ）、かつ外見（うはべ）のために長（なが）き祈禱（いのり）をなす、彼（かれ）らは更（さら）に重（おも）き審判（さばき）を受（うけ）ん、四一 耶蘇（やそ）宝庫（たからのはこ）に對（むか）ひて坐（ざ）し、群衆（ぐんしう）の宝庫（たからのはこ）に錢（ぜに）を投（なげ）入（いる）るを觀（み）たまへり、富（とめ）る者（もの）多（おほ）く投（なげ）入（いれ）たり、四二 一（ひと）りの貧（まづ）しき寡婦（やもめ）來（きた）りて、レプタ二（ふたつ）を投（なげ）入（いれ）たり、これ一（ひと）コドラントなり、四三 耶蘇（やそ）弟子（でし）を呼（よび）て言（いひ）たまひけるは、誠（まこと）に汝（なんぢ）らに告（つげ）ん、この貧（まづ）しき寡婦（やもめ）は宝庫（たからのはこ）に投（なげ）入（いれ）る者（もの）の中（うち）にて最（もつとも）多（おほ）く投（なげ）入（いれ）たり、四四 彼（かれ）らは皆（みな）その餘（あまり）の中（うち）より投（なげ）入（いれ）たるなり、されど此（この）婦（をんな）は乏（とぼ）しき中（うち）より己（おのれ）の有（も）てる凡（すべ）ての生計（いのちのもと）を投（なげ）入（いれ）たればなり、

第十三章

一 耶蘇（やそ）宮（みや）を出（いで）たまふとき、弟子（でし）の一人（ひとり）言（いひ）けるは、師（し）よ、看（み）たまへ、何（なに）ほどの石（いし）、何（なに）ほどの建物（たてもの）ぞや、二 耶蘇（やそ）言（いひ）たまひけるは、汝（なんぢ）この大（おほ）いなる建物（たてもの）を見（み）るか、石（いし）の一（ひと）つも崩（くづ）されずして、他（ほか）の石（いし）の上（うへ）に殘（のこ）らざるべし、三 耶蘇（やそ）オリブ山（やま）にて宮（みや）に對（むか）ひて坐（ざ）したまふとき、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ密（ひそか）に問（とひ）けるは、四 我（われ）らに告（つげ）よ、これらの事（こと）は何（いつ）あるべきか、また凡（すべ）てこれらの事（こと）の成（なる）べきとき、何（なに）の徴（しるし）あるべきか、五 耶蘇（やそ）答（こたへ）て言（いひ）たまひけるは、人（ひと）に惑（まど）はされざるやう慎（つつし）めよ、六 多（おほ）くの人（ひと）我（わが）名（な）を名乘（なのり）て來（きた）り、我（われ）はキリストなりと言（いひ）て、多（おほ）くの人（ひと）を惑（まど）はすべし、七 戰（たたかひ）の聲（こゑ）と戰（たたかひ）の風聞（うはさ）とを聞（きく）とき、懼（おそ）るることなかれ、これ必（かならず）ず有（あ）るべきことなれども、末（すゑ）はいまだ來（きた）らず、八 民（たみ）は民（たみ）に、國（くに）は國（くに）に敵（てき）して起（おこ）り、處々（ところどころ）に地震（ぢしん）あり、饑饉（ききん）あるべし、これ産（うみ）の苦（くるしみ）の始（はじめ）なり、九 汝（なんぢ）ら自（みづから）慎（つつし）めよ、人（ひと）汝（なんぢ）らを公會（くわいぎ）に付（わた）し、會堂（くわいだう）にて鞭（むち）うたん、また我（われ）のために諸侯（しよこう）と王（わう）との前（まへ）に立（たた）されん、これ汝（なんぢ）らに證（あかし）をなさんためなり、一〇 福音（ふくいん）はまづ萬國（ばんこく）に宣傳（のべつた）へらるべし、一一 人（ひと）汝（なんぢ）らを引（ひき）て付（わた）すとき、何（なに）を言（いは）んかと豫（あらかじ）め慮（おもひわづら）ふことなかれ、ただその時（とき）に汝（なんぢ）らに與（あた）へらるる事（こと）を言（いへ）、言（いふ）者（もの）は汝（なんぢ）らにあらず、聖靈（せいれい）なればなり、一二 兄弟（きやうだい）は兄弟（きやうだい）を死（し）に付（わた）し、父（ちち）は子（こ）を付（わた）し、子（こ）は父母（ちちはは）に敵（てき）して起（おこ）りて殺（ころ）さしめん、一三 また我（わが）名（な）のために凡（すべ）ての人（ひと）に憎（にく）まれん、されど終（をはり）まで忍（しの）ぶ者（もの）は救（すく）はるべし、一四 汝（なんぢ）ら滅亡（ほろび）の憎（にく）むべき者（もの）の立（たつ）べからざる所（ところ）に立（たつ）を見（み）ば、（讀（よ）む者（もの）は悟（さと）れ）その時（とき）ユダヤに在（あ）る者（もの）は山（やま）に逃（にげ）よ、一五 屋上（やね）にある者（もの）は下（くだ）るな、家（いへ）に入（いり）て何（なに）をも取（とり）出（いだ）すな、一六 畑（はた）にある者（もの）は衣（ころも）を取（とら）んとて後（うしろ）に歸（かへ）るな、一七 その日（ひ）には孕（はら）める婦（をんな）と乳（ちち）を哺（ふく）ませる婦（をんな）とは禍（わざはひ）なるかな、一八 汝（なんぢ）ら冬（ふゆ）に逃（にげ）ざらんことを祈（いの）れ、一九 その日（ひ）には患難（なやみ）あるべし、神（かみ）の創（つくり）たまひし創（つくり）の始（はじめ）より今（いま）に至（いた）るまで、かかる患難（なやみ）なく、また後（のち）にもあらざるべし、二〇 主（しゅ）もし其（その）日（ひ）を減（へら）したまはずば、一人（ひとり）の肉（にく）も救（すく）はるることなかるべし、されど己（おのれ）の選（えら）びたまへる選民（えらびのたみ）のために其（その）日（ひ）を減（へら）したまへり、二一 その時（とき）もし人（ひと）汝（なんぢ）らに、視（み）よ、キリスト此（ここ）にありと言（いひ）、あるいは視（み）よ、彼（かしこ）にありと言（いふ）とも、信（しん）ずるなかれ、二二 偽（にせ）キリストと偽（にせ）預言者（よげんしや）とは起（おこ）りて、しるしと奇跡（きせき）とを行（おこな）ひ、もし得（え）ば選民（えらびのたみ）をも惑（まど）はさんとて、現（あらは）れん、二三 汝（なんぢ）ら慎（つつし）めよ、我（われ）すでに凡（すべ）てを預（あらかじ）め告（つげ）たり、二四 その日（ひ）その患難（なやみ）の後（のち）には、日（ひ）は暗（くら）くなり、月（つき）は光（ひかり）を放（はな）たず、二五 星（ほし）は天（てん）より墜（おち）、天（てん）の萬象（ばんしやう）は震（ふる）ひ動（うごか）されん、二六 その時（とき）人（ひと）の子（こ）の大（おほ）いなる權威（けんゐ）と榮光（えいくわう）とをもて雲（くも）に乘（のり）て來（きた）るを見（み）ん、二七 その時（とき）彼（かれ）その使者（つかひ）を遣（つかは）して、地（ち）の極（はて）より天（てん）の極（はて）まで、四方（よも）より己（おのれ）の選（えら）びたまへる者（もの）を集（あつめ）たまはん、二八 汝（なんぢ）ら無花果樹（いちじくのき）の譬（たとへ）を學（まな）べ、その枝（えだ）すでに柔（やはらか）になりて葉（は）を出（いだ）すときは、夏（なつ）の近（ちか）きを知（しる）、二九 斯（かく）のごとく汝（なんぢ）ら此（これ）らの事（こと）の成（なる）を見（み）ば、人（ひと）の子（こ）の近（ちか）きて門（もん）に在（あ）るを知（しる）べし、三〇 誠（まこと）に汝（なんぢ）らに告（つげ）ん、此（これ）らの事（こと）皆（みな）成（なる）までは、此（この）代（よ）は過（すぎ）ざるべし、三一 天地（てんち）は過（すぎ）ん、されど我（わが）言（ことば）は過（すぎ）ざるべし、三二 その日（ひ）その時（とき）は誰（たれ）も知（しら）ず、天（てん）の御使（みつかひ）も知（しら）ず、子（こ）も知（しら）ず、ただ父（ちち）のみ知（しり）たまふ、三三 汝（なんぢ）ら慎（つつし）め、目（め）を覺（さま）し祈（いの）れ、その時（とき）の何（いつ）なるかを知（しら）ざればなり、三四 譬（たとへ）ば人（ひと）の旅（たび）に出（いで）んとて家（いへ）を離（はな）れ、僕（しもべ）に權（けん）を與（あた）へ、各（おのおの）その業（わざ）を授（さづ）け、門守（もんもり）に目（め）を覺（さま）しをれと命（めい）ずるごとし、三五 汝（なんぢ）ら目（め）を覺（さま）しをれ、家（いへ）の主人（あるじ）は夕（ゆふ）か夜半（よなか）か鷄鳴（とりなき）か朝（あさ）か、いつ來（きた）るかを知（しら）ざればなり、三六 恐（おそ）らくは突然（にはか）に來（きた）りて汝（なんぢ）らの眠（ねむ）れるを見（み）ん、三七 我（われ）汝（なんぢ）らに言（いふ）ところは凡（すべ）ての人（ひと）に言（いふ）なり、目（め）を覺（さま）しをれ、

第十四章

一 過越（すぎこし）と酵（パン）なき祭（まつり）とは二日（ふつか）の後（のち）なりき、祭司長（さいしちやう）と學者（がくしや）とは、いかにして詭計（たばかり）をもて耶蘇（やそ）を捕（とら）へ殺（ころ）さんかと謀（はかり）たり、二 されど彼（かれ）ら言（いひ）けるは、祭（まつり）の間（あひだ）はいけず、民（たみ）の騒擾（さわぎ）あらんことを恐（おそ）るるなり、三 耶蘇（やそ）ベタニヤにてツァラアトの癩人（らいびと）シモンの家（いへ）に在（あ）りて食（しよく）に就（つき）たまへるとき、一人（ひとり）の婦（をんな）純粹（まじりなし）の甚（はなはだ）貴（たふと）きナルドの香油（かうゆ）の玉壺（たまつぼ）を持（もち）來（きた）り、壺（つぼ）を開（ひら）きて耶蘇（やそ）の頭（かしら）に注（そそ）ぎたり、四 ある者（もの）憤（いきどほ）りて互（たがひ）に言（いひ）けるは、何（なに）ゆゑ此（かく）香油（かうゆ）を徒（いたづら）にするや、五 この香油（かうゆ）は三百（さんびやく）デナリ餘（あまり）に賣（う）りて貧（まづ）しき者（もの）に施（ほどこ）すべかりしものを、と言（いひ）て婦（をんな）を責（せめ）たり、六 耶蘇（やそ）言（いひ）たまひけるは、婦（をんな）を責（せめ）るな、なんぞ彼（かれ）を困（こま）らすや、彼（かれ）は我（われ）に善（よき）事（わざ）をなしたり、七 貧（まづ）しき者（もの）は常（つね）に汝（なんぢ）らと偕（とも）にあり、汝（なんぢ）ら善（よく）これに施（ほどこ）すことを得（え）ん、されど我（われ）は常（つね）に汝（なんぢ）らと偕（とも）にあらず、八 彼（かれ）は己（おのれ）の能（よく）することを爲（なし）たり、我（わが）體（からだ）を葬（はうむ）らんために豫（あらかじ）め膏（あぶら）を注（そそ）ぎたり、九 誠（まこと）に汝（なんぢ）らに告（つげ）ん、全世界（ぜんせかい）いづこにても福音（ふくいん）の宣傳（のべつた）へらるる所（ところ）には、この婦（をんな）の爲（なし）たることも記念（かたみ）として語（かた）られん、一〇 十二人（じふにん）の一人（ひとり）なるイスカリオテのユダ、祭司長（さいしちやう）に耶蘇（やそ）を付（わた）さんとて往（ゆ）けり、一一 彼（かれ）ら聞（きき）て喜（よろこ）び、金（かね）を與（あた）へんと約（やく）せり、ユダ機（をり）を得（え）て耶蘇（やそ）を付（わた）さんと求（もと）めたり、一二 除酵（パンなき）の第一日（だいいちにち）に過越（すぎこし）の羔羊（こひつじ）を殺（ころ）すとき、弟子（でし）ら耶蘇（やそ）に言（いひ）けるは、何（いづく）に往（ゆ）きて過越（すぎこし）の食（しよく）を備（そなへ）んことを望（のぞ）みたまふや、我（われ）ら往（ゆ）きて備（そなへ）ん、一三 耶蘇（やそ）二人（ふたり）の弟子（でし）を遣（つかは）すとて、言（いひ）け

ところのさかづきを飲まざりがうらるところのバプテスマをうくべし 四 されどわがみぎひだりに坐することは我が予ひきうるあらず唯そなえられたるものにあらるべし 五 十人のでしらきをきゝてヤコブとヨハネをのきたりはまた 六 耶蘇これらをよびてのたまひけるは異邦人の君とうめるものはその民をしたがえまた大なるものはこのものうえに權をとるられあんじらこのごとくあるべからず 七 されどなんじらのうちにては然るべからず なんじらのうち大ならんとおもふものはなんじらにつかうるものとなるべし 八 なんじらのうち首たらんとおもふものはすべての人

の右をとらん　四五そは人の子のきたるも人をつかふためにあらずかへつて人につかはれんためにきたりまた多くの人のあがなひの代として己の命をあたへんためなればなり　四六かくてエリコにいたれり耶蘇その弟子および群集のひとびとエリコをいづるときテマイの子なるバルテマイといふ瞽者みちのかたはらにすわりゐたるが　四七ナザレの耶蘇なりときくやいひけるはダビデの子イエスよわれをあはれみたまへと　四八おほくの人々かれをだまらせんとしかりければますますいよいよダビデの子よわれをあはれみたまへといひけるゆゑ　四九耶蘇たちとまりてこの

さとうべく命じ給ひければ人々めしひとしびとこの處にいひはるゐは心をやすんぜよ起て耶蘇なんぢをよぶ 五 聽者そのうちぎをもてたちて耶蘇にきたれり 五 耶蘇こゝについてこの處にいひけるはなんぢ主をもとめをらんとねがふやめしひのひけるは主よみえなんことをねがふ 五 耶蘇このごとくいひけるは我なんぢの信仰なんぢをすくへりたゞちにみゆるてしと得いたりをふみひて路とをゆけり

第三章

撒馬利亞のベツパケとベタニヤよりエルサレムにつづくるとき耶蘇ふたりの門徒とつのをもんとしてこの處にいひけるはなんぢ對面のむらにゆけ

よりくるバやグて人のいまだのらざるところのつるげる驢
馬の子をるべしそをときそひきしたまふうん
ちなるものあらばわが主のいりあり
りといくさらばたちまちそをこしまおくるべし四
さてゆきて門のそとの岐路につるげるろばの子をそこ
れをときけるバ五そこにたてる人々のうちあるものの言
らまいひけるハこの驢馬のことをときていかにをやで
し耶蘇の命ぜしごとくいひしバ遂にゆるしたり六門徒
ろばのことを耶蘇にひきしたりておのの衣をそのうへにお
きうけまひ耶蘇こをるの七ひとぐおほくハそのころも

を路上に布きあるひは樹の枝をきりてみちにしき九
つ前にゆき後にしたがふ群衆よばはりていひけるは
よ主の名によりてきたるものは福なり十王のるこの
きたるわれらの父なるダビデの國はさいはひなるかな
ろよホザナよ○十一耶蘇エルサレムにいたり聖殿にいりて
こことごとくみまはし時もはや暮になりければ
よべタニヤにいでゆけり○十二明日このもろべタニヤよりいでこ
こにきたりし時十三いちじくの樹をみてその
葉のほかになにのおらんとてきたりしに葉のほかにもの
えざりきこれ無花果樹のときにあらざればなり十四耶蘇こ

のきよむうひく今よりのちおのおのなんぢの果をうらみ人
あくさげれとゝふ門徒こをきゝけるに十五 ゝをゝゝゝ

のをよ　まおどろきたまべり○十九日くまて耶蘇みやこ
をいでゝはけま三十里朝にうきろいもゝじくの樹をもぐるときその
根よりこゝくゞくこのまてるをとる三ベテロおもひいで耶
蘇まいひけるハラビみよ詛ゝそのいらゞいハの里さ
まに耶蘇こゝくてうきろまいひけるハ神を信ぜよ　まこ
とをもてあんちらまつげん誰もてもそのこゝろよりさゞ
ふこゝろふくそのいふところの言ハうるこにあるべしと信
ずこの山よりうりて海よりまきいちぢそのこゝのごとく
成ぐゝ一四このゆゑをもてあんちらまつげんおほまそ祈禱
のときそのねごふところのものハうるこをうべしと信せ

バこのふうを得べし　二五まことなんぢら立ていのりをするときとし人をうらむることあらばこれをゆるせそら天にいますなんぢらの父もなんぢらもまたその過をゆるさるべしたがふ二六もしなんぢら免さずば天にいますなんぢらのもまたなんぢらのあやまちをゆるしたまはざるべし二七またエルサレムにいたる耶蘇みやにあるけるときに祭司の長學者および長老どもきたりて二八これにいひけるはなんの權威をもてこのことをするや誰このことをするをゆるしてかかることをなさしめたるや二九耶蘇こたへていひけるはわれも一言なんぢらにとはん

こゝろ〳〵よろこばるゝなり。ヨハネの權威をもてこゝを
るゐをといふことをつぐべし 三 ヨハネのバプテスマも天よりの
この人よりのものよこゝろよ 三 この事をたゞひら論ひつけ
るいとう天よりといそでさるべし。ゆゑこの事を信ぜざる
ちといもん 三 人よりといはゞ。この事民をおそるゝ
るなり。そは民ことごとくヨハネを預言者とせり 三 つゐにこ
たへてわれ知らずといひければ耶蘇もまた何の
しるしをもてこれをなすをわれもまたなんぢらに言はじ
第二十一章 耶蘇たとへをもてこゝろをさとす。ある人ぶだう
をうけをつくり籬をめぐらし酒搾をほりものをたて農

夫よこのごとくにてほうのくらすべゆきしが二期のつとめをはたしけるに三農夫どもこゝろとゝもにうちたすきてむかひくのつとめをはたすに四また他の志あるべをこの地にとゞまつくのものうふどもこゝろを石のごとくにして首をきるつけ耶蘇のてうくしむ五またほうのくをめをつのものぜしめこゝろをもてろぜり。まことにほうをおほくつのものぜしめあるひいまだおるひいこゝろしぬ六こゝにひとりの愛子ありけるがこのわこの子にうやまふあらんといひて卒にその子をつのものぜしめとのごとくに五いひけるにこの嗣子ありいでゝこゝろさ

んさらば産業いづれらのものとあらん八 汝ら
てこの葡萄園のそらをもてよ 九 かくらばふた
うむるだけの主あらをあもべきこの生きよりて農夫どもを
うちほろぼし葡萄だうけをほかのひとにあたへべし 十 工匠
のきてする石いづへのかしらの首石となれり 十一 この主の
しわざなりこれわれらの目にあやしとするところの
ありとある生きものといまざるの十二 この譬
おのれらをさしてこれをかたりと知り耶蘇をとらへんとせ
しかど衆をおそれて耶蘇をさりゆけり○十三 この後耶蘇を
そのこころをよりて陥いれんとしてパリサイのひとら

ヘロデの黨のうもより數人をつかはせり　よつてかれら往
てヤソを耶蘇のもとにきたりいひけるハ師よわれらハ眞
なるものなりまた誰をも憚ることなくまたひとの貌
るに從ひて人をとらびまことをもて神のみちを
をしふるものなりと人稅をカイザルにをさむるハよきや否
をきくべきや納ざるべきや　十五　耶蘇そのまことをしりて
をりてこのわらハいひけるハなんぞわれをこゝろみるや
ナリをもちきたりてわれにみせよ　十六　こゝろみもちきたりけ
れバ耶蘇これにいひけるハこの像と號ハたれのぞ。かれら
てカイザルなりといふ　十七　耶蘇いひけるハカイザルのものハ

カイザルよ、ゝまた神のものハ神にをさめよ、をべし。この事ら
れを奇とせり○六復生るしといひるせるサドカイの人きゝ
りて耶蘇よりひけるい先師よ、もろ〻モーゼ、かりきおか
けるこの八人のきやうだいまた子なくして妻をのこし死ハ
そのきやうだいこのつまをめとりて兄弟のあとをたつべ
しと下こゝに七人のきやうだいありこの長子いまをめと
り子なくしてまた二第二のものこれを娶また子なくして
死三だい三ゝまたこのごとく七人ともにこれをふしたがひて子
なくつひにまた、この婦もまた死ぬり三復生のときこのうち
つまこのをんなハたれの妻とあるべきや。そハ七人ある

しるこうをめとりたるをばゆるせり　三耶穌こたへて
ひけるはなんぢらは聖書をも神のちからをもしらざるによりてあやまるるにあらずや　三五それ死よりよみがへるときはめとらず嫁ぐ天にあるつかひたちのごとくなり　三六また死人のよみがへることは
神のモーセにかたりてのたまへるアブラハムの神イサクの神ヤコブの神ありといひたまひしことをなんぢらまだしるこの神はかれにしもの神にあらず生ものの神なり　三七なんぢらは
やまれり　三八學者のひとりこのもろの議論をきゝて耶穌のよくこたへたまふことをしり、ちかよりこれにとひけるはすべて

のいまーめめうちいづ廷首なるや 元 耶蘇この廷ここにけ
るはもべての誠のこころいイスラエルよきけ主なるこころも
の神はなるもも一の主なり 二 あんぢ心をつくし精神をつ
くし意をつくし力をつくし主なるあんぢの神をあいもべ
しこと廷おきその首なり 三 だい二もまたこれとおなじ。おの
廷のごとくあんぢのとなりを愛もべしこと廷より大なるおき
てあらず 三 ごいしや耶蘇よいひけるは善き師よあんぢ
神はまるもも一にてほかのよこみるしといひしはまことに
あり 三 まこころをつくし智慧をつくし精神をつくしちか
らを盡てこれを愛しまたおのれのごとく隣をあいもべ

るハまづその燔祭と禮物よりもまさるなり　三三耶蘇この理かの道理をあきらかにとゝてられよいひりるハあんち神の國よりさほうらにこのうち敢ていふまよそよものあらり

き○三五耶蘇みやにありて教誨をるせるときこうれうよこうく

つくいひけるハあんそ學者ハキリストをダビデの子ならんよや三六そもダビデ聖靈よこのんでてみづからいよ。主わが主よいひけるいわをなんぢの敵をなんぢの足のしたにおくまでいわらの手のみぎに坐せよと三七うくダビデこれをかの主とよばくたり。されバいかでその子ならんやおほくの人々よろこびて耶蘇のきくことをあせり○三八耶蘇をよ

玖るのいるときこの里うよりひけるいあがき衣服をきてある
き市にまて人のあいさつ會堂のうらさ筵席のこのさざこ
のこ 四 まて婆婦のいへを呑いつもりてあがきいのこをそ
るこがくしやを謹防よこの里うのつこせてうこうこうこうこ
重一〇 四 耶蘇さいせんのもうよむうひて坐ひうべの銭
をもてまいるをうふまひしまおほくうめるものいおほ
くるけいをたり 四 ひとりの貪やもめきうりてレプタふう
つをみけいをねこうハ四厘ほどまおくれり 四 耶蘇そのこ
をまびくこのうちういけうに誠にまをふんにくまつけん
はこまねけいをしまべての人々よりもこのまつしき婆婦

ハおほくあけつまこと　二そいうまこといみなその美餘こと
ろをもていまこのちんみいそのかたちをうまへ
てのまちものまるもち全業をこりぐくいまたれハかり
第十三章　二そ聖殿まりいてけまいひとりの門徒いまい
ひけるハ師よみまへこの石この殿宇いうまさうんあう
をや　耶穌こうへていひけるハあんぢらこの大るるいく
をるるの一のいーも石のうへよろつさまをいのこら
ずいまを樵欖山まてみやまむうひ坐ーたまひしにペテロ
ヤコブヨハネ　アンデレー等ひそうまそひけるハ　いつまの
時このことあるやまたまへそこのことのあらんときい

このある北あるやうまうまうつけたまく耶蘇こうくてこれ
らこそびけるい人はあぎむこの迷さるやうつくーめよ　そ
いふほくの人わくが名誉をこのーきうりまいきうこと
いいておほくのひとを欺惑ぐーセあんもう戦といくさの
風聲ききくときおそるゝおこの迷これらのこといふこるある
べきあり　そのの迷ども末期にいまさいふらん　民はもうり
てたゝをせめ國ぐにを攻まさところぐる地震あり饑饉
みうまぶこうまうい苦難のそーめる　んあんいうみづう
ういいそいあんちう集議所よわくさ迷まさ會堂よ
てむもうたまうの證をあさんためよいのこくまりて　候

およびエルサレムに往きたるべし。ここにて福音をつづ萬民にひろめざるをえず。十人なんぢらをひきわたさばいかにまえよりなすべきかと、あらかじめおもひわづらふなかれ。その時たまはんぢらそのときに賜ふところのことをいひのべよ。それものいふはなんぢらにあらず聖靈なり。十二きやうだいは兄弟を死にわたし、父は子をわたしまた子はその父にさからひてこれを死しめ、十三またなんぢらはわが名のゆゑにすべての人にくまるべし。されどをはりまでしのぶものはすくはるべし。十四なんぢらエルサレムの殘暴にいむべきものの立べからざるところ

ろよたつそろバ（讀ものよくおもひべし）そのときユダヤよ
をさるものハ山よのぐまよ　去屋上よをさるものハいへうちに
るあいだ物をとらんとてその家にいるあいだ　去田よ
をるものハその衣服をとらんとてうへるあうまとき　その日
よハさしめるものと乳とのまもる婦ハわざはひなるかな
去なんぢら冬にぐることをまぬかるんためよいのれそ
の日はあやまあらんうくのごとき患難ハ神のものとつく
られてよりいまにいたるまであらざるべきなり。
また後ふたゝび　主　その日をとほくおくたまふべ
し人くなれそくなるとものあり。されど主のえらびたまへ

るにこれらのえらまれしものゝためにその日を減少ならん
ふべし　二一そのときもしキリストこゝにありとか
るんぢらにいふものあるとも信ずるなかれ　二二そは偽キリスト
にせ預言者おこりてなるしくふしぎなるわざをもこなひ
揀選たるものをもあざむかんとうをえばおきもしべけなば
あり　二三なんぢら愼よわれあらかじめなんぢらにこれらのことを
こと告　二四そのときこのなやみのゝち日はくらくなり月はひ
かりをうしなひ　二五天の星はおち天のいきほひ震動べし　二六
そのときひとのこの子のおほいなる權威と榮光とをもて
雲のうちにあらはれきたるをん　二七またそのとき人の子

そのつゐたちをつのをして地のもそよう天のもてきぬ
四方よりそのえらまれしものとおつむべし　六これあんむ
ら無花果樹よりてたらくをまるべ。その枝もそらくべきら
のをして葉めぐめバ夏のちくうきとしる　元このごとくいる
んおともそべてこらのことをバ時ちかく門にもよい
たるとを　三まことまるんむらまつげんこ是らのこ
ときことくく成までハこの民いうせざるべし　三天地いうせ
んされどもわがことばハ霧ど　三その日そのときをしるもの
ハたゝわが父のみなり　天まるつこのひも子もたゞしるも
ものをし　〇三この日いつぞのときうるこのとをくぶれバ

なんぢら つゝしみて 醒 ゐよ 祈禱 せよ 汝等 人の子は たび
ぢ せん とき その權 を 委 おのれの しもべ ども に 委 おのれ
き事 を さづけ 門者 に おこたら ず まもれ と 命じ て 家 を
さる ひと の ごとし 三五 この ゆゑ に なんぢら も おこたら ず
て まもれ 汝等 は 家 の あるじ は 夕 あるひ は 夜半 あるひ
は 鷄 ふく ころ あるひ は 早晨 よ う つる ころ を 知 ら ざれ ば
三六 おそら く は 卒 にはか に 來 きた り て なんぢら が ねむ れ
る を 見 ん 三七 我 わ れ 汝等 に おこなふ ところ を 衆 もろ もろ に おこなふ
る は 醒 さめ を れ と 言 いふ なり

第十四章

一 さて 逾越 すぎこし と 酵 いれ ぬ パン の 節 せち の 二日 まへ

祭司のをごとごくしやだち詭計をもて耶蘇をとらへこ
ろさんとしいひけるはまらその日まはあもちべこふばお
そらくは民のうちに亂もこらん（）三耶蘇ベタニヤの癩病
シモンのいへにまて食しゐるときある女ん壜石の
うつわもてまあらはたふときナルドのあぶらをかりてまもち
たりその盒をやぶり耶蘇のかうべにあぶらをそそぎたり
四あるくたもたがひにいきどほりをふくみいひけるはこの膏
をつひやすはあたひゆゑぞや五これをうらば三百おもりの
デナリをえてまづしきものにほどこすべきことをえんとこの
婦をいひとがむ六耶蘇いひけるはこの為すわざ

ゐんぞこのをんなをるやまをやうまる善事をおこなふ
なりヱまづーきまハつねりをんじうとともまをおもべる
んぢう意まもうせてこのまうとたをくることを得べーまを
ハつねまるんだうとともまをおもべハこのをんなハかをつ
くしてるせりぞハおもうのじめまる葬なめわが身まをおぶ
らとうぎーなり九ひまもとまをんだうまつげん天の
下いづくまでもこの福音のひろめらるーところにまたこのを
んなのなせーこともまたその記念のためまいひつうく
らるべーナさて十二のひとりなるイスカリオテのユダ耶蘇
をてきさんとて祭司のをさまゆきーまヒこのまうこう並をき

きてよろこび銀子をあたえんと約せしかのバユダハ耶蘇を
うらぎらんと機をうかゞふ○十三除酵餅のいまだひのはじめ
の日弟子たちきたりてイエスにいひけるハきみこゝの食をいづくにて
ひけるハをぎこゝの食をいづくにて
べきや十四耶蘇ふたりの門徒をつかはしてこゝにゆきて
ひけるハみやこにゆきさらバ水をいだける瓶をもてる人
にあふべしこゝまでしたがひゆきその入るところの家のあるじに
師いふ客房ハいづこにあるやと云ふ十五そこにてしもしをぎこゝの食
べき客房ハ陳設たるおほいなるにかいたるをみん十六ふたりゆきてそのたまふ

こと預備よ　其でーゐきて京城エルサレムへゆきしに耶蘇のいひたまへるごとく遇ーうべきことのそのへとありければ茲に
れて耶蘇をふにの門徒とともにきたれり　其ところ席をつ
きてゐたるとき耶蘇いひけるは　まことなんぢらにつげん　ものと
らと食するなんぢらのうち一人ものを
をそむくべし　そのときうれひておのく耶蘇にいひでけ
るいまだあらざるかのまことにわれならんやと　かれこたへ
ていひけるは十二のうちのひとりわれとともに
耶蘇ここにていひけるは十二のうちのひとりわれとともに
うつわに手を盂につらるものこれなり　三人の子はおの
ついて錄されたるごとく逝ん。されど人の子をつく

ハ、ぐらひあるうる。その人いうまをざりしかば幸ありしあらん。二 のれらをよくまもるときは耶蘇パンをとりて祝しことをさきのまてるまあらくてのひけるに取てくらくこれはそが身なり。三 また杯をとりて謝しこのまてるまあまくけまへば皆このさきのつきよりのめり。四 耶蘇いひけるにられい新約のわが血なりてあほくの人のためにそそぐるものなり。五 まことにまことにまんちにまつけん今よりのちあしこのきのみと神の國にそのまん日までに葡萄なてつくらまるものをのまーー。六 うまら歌をうたひて橄欖山にゆけり。七 耶蘇これらまいひけるに今夜あんらくまるまてついてつ

まづ汝ら。その迷牧者をうち、その羊ちるべしと
ちるされたまひあり 二六 されど我よみがへりて、
ガリラヤへ汝らにさきだちゆくべし 二七 ペテロ
るハたとひ凡ての凝ともまつ去ることあるとも
けるハ我まことに汝にいふ、今日このよ鶏ふたゝ
びなくまへに、なんぢ三次われをしらずといはん 三四
たとりうしいひけるハ我ともに死ねるとも
もなんぢをしらずといはず門徒もおのれ
うまつげツセマネといふところにいたり耶蘇そのでしら
ひけるハ祈禱あひだここにさせよ 三六 つひにペテロ ヤコブ

ヨハネをそもるひゆき甚しくうまひこのふしらとそもほし
三四 うれらよいひけるいわの心いさくうまひて死こそのそ
ありるんぢらこまもちて儆醒をま 三五 耶穌まこと
ゆきて地にふしいのをいひけるいそしこのみえこの時を
さらしめたまへ 三六 まこのひけるハアパ父よるんぢよおい
くいまべてのくしおこそぎるふしこの杯とそ也よりうり
たまへさられどもわおもふこころをるうんこまるよあらむ
るんぢおもふこころろよまりせたまへ 三七 耶穌きうりてこ
もらのいねいるを見ペテロよいひけるハシモンるんもいね
たらの一時もめとさまりをることあるまらぶこの 三八 誘惑よ

いくぬかうめをさまし且いのる。そのたまひねんごろに
まど肉體よわきあり　三九　まことにめさめておるべしこれをいひて
いのり　四十　返てまたこのしもべのいねたるをみる。こはかの
その目つくろをたるあり。耶蘇よあなとこころよ
ぎりき　四一　三次きたりてこのまでよいひけるハ今ハいねてや
もあ充分あり時いたり人の子ハつみびとの手にわたさる
るにあり　四二　起よわれらゆくべしまことをわたすものちかづ
けり○　四三　かくいへるときたゞちに十二のひとりあるユダ
つるぎと棒とをもちきたるおほくの人々とともにさいしの
をき學者および長老のもとよりきたる　四四　耶蘇をわたす

のごとくに號をなして いひけるハ わが接吻するものハそ
れなり これをとらへて 堅くとりおさへよ 四 すなはちきた
りて 耶蘇にちかよりラビ ラビといひてくちつけせり 四六 ひ
とびと手を耶蘇にかけてとらへ 四七 そこにたちてゐたるもの
の一人つるぎをぬきて 祭司の長のしもべをうちその耳を
きりおとせり 四八 耶蘇こたへて これをとらへんとていでたる
ものどもにいひけるハ 汝ら刀と棒とをもちわれをとらふる
ごとくに 強盗をとらへんとてきたるか 四九 われ日々なんぢら
とともに宮にをりて教へたれども なんぢらわれをとらへざ
りき されど聖書のこうるもせんがためなり 五〇 ここに
弟子ども耶蘇をすてにげさりぬ 五一 ある わかき

ものその身にたゞ麻の夜具をまとひて耶蘇にしたがひさまよふ者ら捕ふるものどもこれとらへけるに五二その麻布をすてゝ裸體にて逃げさりぬ○五三かくて耶蘇を祭司の長のもとにひきゆくに祭司の長老および學士みな集まれり五四ペテロは遠くより耶蘇にしたがひ祭司の長の庭のうちまでいりて僕どもとともにすわりて火にあたゐまりをり五五さて祭司の長および議官ら耶蘇をころさんとして證となるべき事をさがしもとむれども得ず五六おほくの人ら耶蘇にいつはりの證をいひたてたれどもその證あひたがふ五七ある人々たちていつはりの證

しといひいでけるハ 五五 これ手をもてつくりたるこの聖
殿をこぼち三日のうちに手をもてつくらざる別のみやを
たてんといひしをもてハきけん 五六 このいひしのその證
まことあるさりき 五七 祭司のをさ中よりたちて耶蘇にこひいひ
けるいかんぞこたふることなきやこの人々のなんぢらを
つる證據ありやといふ 五八 耶蘇默然としてなにもこたへざり
けるに祭司の長またこうむりていひけるハなんぢハ頌
べきものか 五九 子キリストなるとの 六〇 耶蘇いひけるハなんぢ人の
こ大權の右にさし天の雲のうちにおりそをきたるをなん
ぢらみるべし 六一 こうまおいて祭司のをさその衣をさきて

いひけるハもまことゝあんそまことほくのよ證據をもちめハべ六四
その裏漬たることゝハあんぢともきけることゝろありるんちら
いのよおゝみや。このまことそつて耶蘇を死よおくるべき
ものとさだめたり六五あるものハこのまこと唾ーまことその面を
おほひ拳てたゝきいひけるハ預言せよ。また者もべぐら
も手のひらてこのまをうてり六六ペテロ下庭よをりしにさ
いーのをきのある婢きたりて六七その火にあたりをる
をみ孰々このまをうて、いひけるハあんぢもナザレの耶蘇と
ともにありし六八ペテロうけこのまをしていひけるハ我こ
のまとをらおまさあんぢらのいふところのことをさとりえざ

るなり。こゝにて庭門よりでけるにそうりあきね　六その婢
こゝをきてこゝそゝはたてるものこゝまでいひけるはこの
人ものの黨のひとりなり　七ペテロまたうけおもはず
くりてこゝそゝはたてるものまたペテロはいひけるはま
んちまことにこのともがらの一人なりそはまんちかりラヤ
の人なりその口音こゝまであらはれてペテロ誓
てこゝ神のたゝりをうけるともまんぢがいふその人を
我しらざるなりといひしに　八このとき鷄ふたゝびな
きにぬぺテロ耶蘇のいひたまひしことばを思ひいだ
して三次までわれをしらずといはんといひたまひしことを

しまことうまでおもひうつくしてつ哭のゝしめり

第十五章

一平旦まもなくびたごちよ祭司のかしら長老ぐくしやたちまち〳〵ての議官とそもまたうりて耶穌をおさりひきつきてピラトにまもらせり

二ピラトこのまもらひけるハあんちハユダヤひとの王なるや耶穌こたへけるハあんちのいふるごとし

三さいしの長おほくのことをもてうきをうつたふ

四ピラトまた耶穌にとゝみていひけるハなにもこたへざるをこのまもるこのあんちをよついて證をたてゝこといふのをうりぞや

五ピラトのあやしとをるまでも耶穌なにをもこたへざりき

六さてこのまつりまんにうまもる一人求まうせてひとり

の囚人をゆるすの例あり七ときにパラバといふる人のわれ
おの主とともに謀叛せしことおもてにあらはれつゐに
うりしぶうまつりいそのむほんのとき人をころせしものと
もあり八ひとゝび聲をあげてよもすがら恒例のごとくせんこ
とをねがへるに九ピラトこのまうしさへていひけるはユダヤ
びとの王をあんちうよわれゆるさんことをのぞむやと十こ
とにピラトさいしの長たちのねがひによりて耶蘇をころさ
たらとおもへばあり十一祭司のをさ民どもユバラバをゆるさ
んことをねがへとそゝのかしむ十二ピラトまたこたへていふ
いひけるはさらばユダヤ人のまうとあんちうのふる

もあるは何をしようとするんだらうとそむやうにいはれらまさうけびてこゑをいと十字架につけよとピラトに
きらよいひけるはかの惡事をなしたるや益ますさけびてこゑをおふじらよ釘につけよとピラト民の
よろこびをらんとしてバラバをこの爲ゆるしイエス耶蘇を
むちうちてこゑを十字架につけんために兵卒
にわたせり兵卒ども庭と公廳につれゆき組中をよびあつめ
らさきの袍をきせいばらのかんむりをあみてこうむらせ
たり又こくていひけるユダヤびとの王やとこゑをまた
葦をもてその首をたゝきこうつ唾をひざまづきて拜をぬ

てこうろうにとりて紫のころもをきせもとの衣をきせ
おくふたりこのよつけんとそひきゆきしに三アレキサンデルとルフ
のこどもなるクレネのシモンといへるものいなかよりきたりて
そのところをとほりかゝりけるが強てこの耶蘇の十字
架をおはせたり三耶蘇をゴルコタとりば即ちわれらうべと
いへるところまできたり三没薬と酒とをまじへてのませ
んとせしかどもこれをうけさりき三耶蘇をかふとてこのま
けものら誰がうへをくじにて闈をとりてその衣服をわかそ
三おなじ第九時よいまをと十字架にかけ奉りその罪標を
ユダヤびとの王とこのきろく三ふたりの盜人ともに一人

ハその仕ひとりハその右よりあふとうつりくる六こと聖書よこの多い罪人とともにつらねられたりといひしまうかつて九のもの耶蘇とのことを首としるしてゐひけるハあゝ聖殿をこはちてこれを三日よたてるものよ十みづからをすくひて十字架よりおりよ三祭司のをく學者どもおなじく嘲弄してたがひにいひけるハ人をすくひてみづからをすくひあたはず三イスラエルの王キリストハ今十字架よりおりてわれらにこのよりそれをるべし。さらバともにつけられたるものどもこれをのことをもまたおふと架につけられたるものどもこれをのことをのことを

第十二時より三時よいたるまであまねく地のうへく

らいありぬ 二四第三時ついでもおほでゑまよちこをたりてり
ラマサバクタニといふ。こをを譯かわれが神わが神あんぢがをを
もてたまふやとふくるあり 二五うしもとにたちるものゝ
うちある人ども是をきゝていれエリヤをよぶあるといふ
二六ひとりもとめきて海絨をとり醋をふくませ葦を
つけてその呑まのまゝめのびけるいと俟エリヤきたりてこの
をとをそふやとこころむくー〇 二七耶穌おほいなる聲をい
ぎーていき絶 二八みやの幔うくまりあまねくさけて二とる
あり 二九耶穌ゑむうえてたちる百人の長こくよをでて言
たまふーまことにいひけるかまことにこの人は神のこあり〇

まことなるこのよのそこなふる婦ありしがそのうちよりしち
ものハマグダラのマリアおよびちひさきヤコブとヨセの母
なるマリアまたサロメなり 四一 またイエスのガリラヤにおひ
てしたがひつかへしものどもなりまたエルサレムにのぼりしおほくの
をんなもこのほかにありき 四二 この日はそなへ日なりてあんそくにちかき
のまへの日なりしゆゑ 四三 日くれてとき尊貴きひとアリマタヤのヨセフといへるものきたれり
このひとも神の國をのぞめるものなりしがこれピラトにゆきて耶
蘇のしかばねを求めたり 四四 ピラト耶蘇のすでに死ねるをあ

やーを百人のこうらをよびてこの老い死てより時をへるやいなやをこひ豎ひやくまんの長よりきてこの屍をヨセフよあるよ 異ヨセフ巣布をのぬのまていつみ磐よほりたる墓よおき石をそのもんよまろめ耶蘇をとりおろしこの屍をそのぬのまていつみ磐よほりたる墓よおき石をそのもんよまろめ 此マグダラのマリアおよびヨセの母なるマリアその屍をおきしところをみる

安息日よきて マグダラのマリアとヤコブの母なるマリアおよびサロメ香料をこうひとぐのべ耶蘇よねらんとてきたれり 七日のそのめの日いとそやく日のいづるころこの老

ら墓よきたり 三 たゞひとりひけるい誰かこの墓のために
石とりのぞくの門よりまろばしたるものあるらんと
なげきおるいまだ甚だおほいなるにより 四 ふくてこれら見
石のまでよまろびあるところる 五 墓よいまだ白こころもと
きふるわくものく 右のうまざせるをそておどろきあ
やしめるも 六 少者こまうまうひけるいおどろきあやしむる
うまるんちらい十字架よつけらまし ナザレの耶蘇をた
づぬ。この墓いよみがへりてこゝよをらびこの墓をおきしところ
ろをそよ 七 且ゆきてその門徒とペテロよつげよ。この墓いお
んちらよさきだちてガリラヤよゆけをるんちらこしとまて

こうまくを見へしまるそもそのあんだろよいひしがごとくハ
このごとくいでし墓よりさり給へり。このつ戦慄こうおしろきまもと
一言をまくよこうろざりき。こを聞おそれしがおの
いこを七日のそしめの日よあけごろ、まみこんへそまうで
マグダラのマリアよおくそる。さきよ耶蘇このをよりしの悪鬼
をおひさりし耶蘇こそまよありしものく哭こうるしめ
ここまよこの婦きてこれらのことを告上こうのごとく耶蘇
の話しこのをんなまひことをきしが信ぜざ
りき上このいとうのうちこ人のものいるくやきけ
るこの路をゆくとき耶蘇こそりたる貌まそこをろよおくそ

る　十三　このふたりのものもきてほかの門徒たちにつげ
ぐもまたこれをも信ぜざりき　十四　まさそのちに
十一のでしの食しをるときにあらはれてうまらざる信
ずるきとそのこころの剛硬とをいましめたまへり　十五　こ
ゑたまへるのち其をみしものにふところを信ぜざ
るこのゆゑあり　十五　耶蘇　このもろもろにいひけるはあまねく世界を
めぐりてきべての人にふくいんをのべよ　十六　信じてバプテ
スマをうくるものはすくはるべし信ぜざるものは罪さだめ
らるべしなり　十七　またかぎるものはこのごとき奇跡あさかべし
わが名によりて悪鬼をおひいだし　こころなきの方

言をつひまで蛇をとらへ毒をのむとも害あらず手をやまひのものにつけなばかならず愈んと云ひて主イエスもまたかれらとともにかたりしのち天にあげられ神のみぎにざしぬ弟子たちあまねく福音をのべつたふ主もまたこの言葉にともなふしるしをもてそのあとにしたがへるアーメン

新約聖書馬可傳終

耶穌降生一千八百七十六年

新約聖書路加傳

翻譯委員社中
米國聖書會社

明治九年

日本橫濱上梓

新約全書　路加傳福音書

第一章

一 我らの中にあまねく信ぜられることを始より親しく見て道につかえたる者、二 我らにつたえしごとく記載んとあまたの人々これを手よせまとめたるよし。貴きテヨピロよ 三 我もまた原よりまべてその事をつまびらかに考究れば次第をもて汝のために書あらわすを善しとおもえり。四 これ汝がすでに教えられたることの確實をさとらせんとなり。五 ユダヤの王ヘロデのときアビアの班なる祭司ザカリアという者あり。その妻はアロンの裔にて名をエリサベツという。六 ともに神のまえに義人にして主の誡命と礼儀を

のけるくあこるくり七エリサベツ妊るときゝおもひよりまでらた
子るし。また二人ともに年も老ぬ八ザカリアその班次もあ
れて神のまへに祭司の職をあこるみときに九祭司の例にあ
がひ籤をとりて主のみやにいり香を焼こゝを得十ころうを
ときけるときに衆のひとびとはみな外にをりていのりつ十一
主のつかひ香壇のみぎにたちてザカリアにあらはれしかば
十二ザカリアこれをみておそれあやしむ十三天使かれにいひける
ハザカリアよおそるゝなかれなんぢのねがひはきゝたまへり。なんぢの妻エリサベツ男子をうまんその名をヨハネとなづく
べし十四なんぢのよろこびとたのしみあらん。おほくの人も

まことそのうまるるによりてよろこびあらん十五それこの子主のまへに大るらん。また葡萄酒と濃酒とをのまじ。母の胎よりうまれいでて聖靈に充さる十六またイスラエルの民のあるくのひとを主るその神に歸服せべけむざるり十七またエリアの心と才能をもりて主のさきよめらんごとし父のこころに子を慈もせ。逆のものを義人の智にくらせ。主のたみあらくるる民を備んとるり十八ザカリア天使に云ひけるは。われ何によりてこのことあるをしらん。我は年老ぬ妻もまた年邁ぬれば十九天使こたへていひけるはわれはガブリエルとて神の前にたつものなり。なんぢに

かくりてこのよろこびの音をつげんうめよ奉使これゞ
十 その時いくうそうるうを應驗べきことごとをを信ぜざる
により。るんぢおーとるりてこのことの成日までものいふ
こことあくこともづ 二 民ザカリアをまちゐて。その神殿のうちに
ひさしくをあやしむ 三 ザカリアいでてものいふことあるを
ざりしふぶれそその聖殿のうちにて異象をみることを
さとりたり。ザカリアひとびとに首をもてあめしめつひよ瘖
とるまゝり 三 その職事の日みちけまび家よくりぬ 四 この
後その妻エリサベツはらみてそこれをかくこと五ヶ月ゐ
して 五 いひけるは。主ねがふ恥を人のうちにまそぶせんうめ

に眷顧ふまふとき[二六]うのごとく。これよなせり○[二六]この
六ヶ月まあくりガリラヤのナザレとゐづけくる邑のヨセフ
の家のヨセフといふる人よ所聘あくる處女へ。神よりガブリ
エルといふ天使をつかはされり。その處女のその名はマリアと
いへり[二七]つひにこの女にきたりいひけるは。めでたしめぐ
まるものよ主なんぢと偕にいますと。なんぢは女のうちにて
福あるものなり[二八]處女そのことばを訝このあいさつはいか
なることぞとおもへり[二九]天使いひけるは。マリアよおそるる
なかれなんぢは神よりめぐみをえたり[三〇]なんぢはらみて
男子をうまん。その名を耶穌とゐづくべし[三一]かれ大なる

ものとなりて至上者の子ととなへらるゝ。また主なる
神その先祖ダビデ王の位をこれに與へたまふ。三三ヤコブの
家をとこしへに支配したまふ。またその國をとこしへに
ほろぼすことあらざるべし。三四マリア天使にいひけるは。これいかで夫を適ざる
によりてこのことあるべきや。三五天使こたへていひけるは。
聖靈なんぢに臨みいと高きものの大能なんぢをあがな
ん。この故もまるんぢうむところの聖なるものは神
の子ととなへらるべし。三六それなんぢの親戚エリサベツも
も年おいて男子をもうけたり。素うまずといはれたりしが
いまは六ヶ月になりぬ。三七そは

神にありてそあらゆることばなければ」ばるり 三八 マリアいひけるは。ここにこれ主の使女あり。なんぢのいへることく我によあれかし。天使つひよりまをさまたり ○ 三九 そのころマリア起てきそやかに山地あるユダのむらに急ぎゆきザカリアの家にいりてエリサベツにあいさつしに 四〇 エリサベツマリアのあいさつをきくにおよびて、その胎孕もれのうちにて跳動たり。エリサベツ聖靈にみたされ 四一 あをごゑに呼いひけるは。女のうちにてなんぢはさいはひなるものありまた胎孕のこどもさいはひなるものあり 四二 なが主の母わがもとにきたるこのことを得しは 四三 それなんぢ

のまいころの聲 耳 よいりーとき。そらみ子よろこび
てその腹内 おどり 四五 主のことを信ぜーりのいさい
もいるり そは主のくくりたまひーごとくこのるふぞ
あるべければるり 四六 マリア いひけるは。 四七 こころ主をあがめ
四七 たまーひはその救主なる神をよろこぶ 四八 これその
使女のいやしきをも眷顧 給ふがゆえなり。いまよりのち
萬世までも我をさいわひなるものとするふべーー 四九 それ
權能をもちたまへるもの我にあおいることをなせり。
その名はきよく 五十 そのあわれみは世々うれを敬畏おのも
おのもに 五一 その臂のちからをあらわーして心の驕るもの

をもちゐ五二權柄あるものを位よりおろし、卑賤ものをあげ
五三飢うるものを美食をあらせ、富るものをむなしくかへ
らせたまふ五四アブラハムとその子孫をとこしへにあはれ
ませたまはんとて五五その僕イスラエルを扶持なしたまへり。
これ先祖にいひたまひしごとくなり五六マリア
エリサベツとともに三ヶ月ばかりゐておのが家にか
へれり五七さてエリサベツ産期みちて男子をうめり五八その
隣里のものども親戚のもの、主がエリサベツにあはれ
み慈悲をくだしたまひしことをきゝてともによろこべり五九
第八日におよびけるに嬰兒に割礼せんとてきたり。

その父の名はヨリザカリアとぞいふめれ。その母
こそ、あろまきべらぞヨハネとぞいふめれ
べ。六二ゑまろエリサベツにむろひてぞいひけるぞ。親戚
のうちにこの名をぞ付くるものぞ。六三ゑまろつひに
その父は頭まで示意いぐるぐけんとあのふろ問ふる
六四ザカリア寫字板を請てその名はヨハネぞりとかきもる
ぞ。くべ皆あやしめり。六五ザカリアの口ただちにひらけて
舌とげものいひて神をぞほめたり。六六その隣里にまみくる
人々ぞるあそまぬ。まことまべてこのことをあまねくニダヤ
の山地よりひろごれぞ。六七きくものみなこれを心に

とめて。この子いうるものやらんといへり。さて主の手ありてともにあり。六六父ザカリア聖靈にみたされ預言していひけるは六七主なるイスラエルの神は讃美べきかな。これその民を眷顧てあがなひをなし六八我らのために拯救の角をそのしもべダビデの家におこしたまへばなり六九いにしへより聖なる預言者の口をもていひたまひしごとし七十われらをわれらを敵まことにそれらをにくむ者の手よりいだす拯救なり七一こは仁恵をわれらの先祖にほどこしまたその聖約をおもひたまふにとなり。これわれらの先祖アブラハムにちかひて七二われらをわれらを敵の

手より救ひ出したまひしその生涯を七五聖と義とをもて
あゆみ終れるまで主に服事しめんとのりたまふ七六
ときたまふごとくなんぢら至上者
のあがめたまふやとともにらまん。そいるんぢ主にさきだちそ
ゆくべき。その路を備へんとさだめたまふのり七七神のふかき憐憫
によりて。その罪をゆるされてまことの救ひをその民にあたへ
たまふのり七八そのあさぎりみよりて旭のひかり。くだりて七九
幽暗と死蔭とにまもるものをてらし。その足をみちびき
きて安きにいたらしめたまふのり八十こどもは
ぐくみそだてられて靈の強健よくなりてイスラエルに
あらはるるの日まで野にをりぬ

第二章　その頃天下のこせきをあらためる詔カイザルアウグストより出でたり二この戸籍あらべハクレニオ スリヤ我をきめしときの初次にあることなれたりしかり三人みなこせきせんとてあのおのその故邑にうつりたり四ヨセフもダビデの宗族また血統なるをもてガリラヤのナザレよりユダヤのベツレヘムといふところにのぼりて産期みちけむべ家子をうつそれを布にまきて槽に臥せたり。こは客舎にうまやのなるところなりしゆゑなり〇八この あたりは羊を牧ふものありて

か野よりて夜間その群をまもりしに 九 主の天使き
たりて主の榮光かれらをめぐりてらしければ牧者おそ
いたくおそれしに 十 天使かれらにいひけるは、おそるる
なかれ我なんぢらに萬民におよぶべき大なるよろこびの音を
つたふ、なんぢらにしめさん、 十一 それ今日ダビデの邑に
なんぢらのために救主うまれたまへり、これ主なるキリスト
なり 十二 なんぢら布にまかれて嬰兒の槽に臥るをみん、
これその徴なり 十三 忽然あまたの天軍あらはれ天使とと
に神を讃美していひけるは 十四 天上にては榮光神にあり
地には平安ひとびとに恵みあれ 十五 天使かれらを

らをさりて天にかへりければ。羊をうふものどもいひ
ろんいざベツレヘムまでゆき主のあめしたまふ
ことをみんとて十六いそぎゆきマリアとヨセフまた槽に
ふしたまふ嬰兒をあへり十七またこれを見てこの子に
つきし天使のうたへることをつげひろめけれバ大きく
ものみる羊をうふものどもうたへることを奇とせり十九マリアは
これらのことを心にとめてあれこれ思ひめぐらせり二十羊
をうふものはその見聞せしところ悉くかたられしと
ほりなりければ神をあがめたゝへ讃美してかへれり
二十一子を割礼をほどこすべき八日の日みちけるバその

いまいく時ゝやどりざるさきる天のつうひの稱ごとく名
と耶蘇とところのでうり二三モーセの例よおうそがひて潔目みち
けまがうきうるでるとうびきんて主よさうげんがうめエルサレム
にのぼれり三これ主のあきてるもぢめようまうら男子ハ
主の聖めみことろみべしとおるされうがごとく二四まうさ
主のあきてる班鳩ひとつがひ或ハ雛鴿ふたつをそるみべし
といつうるおうそがひて祭をるきんとしつ二五さて エルサレム
よシメオンといふる人ありこのひと義まこと虔誠ありて
イスラエルの民のなぐさめられんことをまそうるものるり。
うつ聖靈そのうへをまり二六まこ主のキリストをみざる

うまい死るまでと聖靈よそおめさとき
二六 うま聖靈よ感して神殿よいきたり。兩親その子耶穌をあきそのふつうに
二七 あつかひて行そんとするとき、きたりしに
二八 シメオンをきるごと抱いぐき神を讃美のひりろい
二九 主よいまそのの所言よろ
三〇 ひて僕を安然よ世をば逝せるまよ
三一 三二 ろが目まそで萬民のまへよ設たまひし救をみたり
三二 これ異邦人をてらさん光ふり
三三 まさるんぢの民イスラエルの榮ふり
三四 そう父母ハをさうおごよつのそうれることを奇をりぬ
三五 まうこシメオンうまいらを祝てその母マリアよいひけるい。この嬰兒ハイスラエルのおふくの人の頽てうの興らんことういひさらひ

をろけん。その號なるそらる三五これおろりくの心のをもひの
顯露まんがらめるり。まく劍ふんぢぐこころをも刺透べし
〇三六アセルの支派パヌエルのむすめなアンナといへる預言者
あり。うまれ甚とし夫よりうまり。その處女ありしとき夫よ
適て七年ともにをるとき三七この老女いよそひおろりよそ八十
四歳の嫠るりしが。神殿をそるをもぞ夜もひるも禁食と
祈禱をして神よつへなり三八このときこの老女もかたそらに
にうもて主を讃美し。まく エルサレムよそ贖をのぞめるもべ
その人よこの子のことをくちもりし〇三九主のおきてよ
ろひそことぐくをそうけまつばがリラヤのおのがむら

ナザレに歸りて其の父母に從ひ居たり。四十その子や成長くして精神も充ち智慧も充ち神の恩寵その上に在り。四十一さてその父母ふつゝあや年ごとに逾越の節にはエルサレムへ往きしが。四十二その十二歳のとき、まつひの例にあがりてエルサレムにのぼり。四十三節日をすごしてかへりけるに、その子耶穌はエルサレムにとゞまりぬ。されどヨセフと母これを知らず。四十四同行人のうちにをるべしとおもひ、一日程を往きて親戚と知る人のうちに尋ねしが。四十五あはざりければ尋ねつゝエルサレムにかへりぬ。四十六三日ののち聖殿にそあひたるに、教師のうちに坐して聽きつゝ問ひつゝ。四十七聞きものこ

その智慧とその應對とをあやしとせり四八両親これを
みておどろき母これにいひけるは子よ何ぞかくのごに
如此するやなんぢの父とわれとうれひてなんぢ
をたづねもとめき四九耶穌これにいひけるは。なんぢらなぜわれを尋
ねやなんぢらは父の事をつとめべきをしらざりしか
五十さまざま両親はその言ることをさとらざり五一耶穌これと
ともにくだり。ナザレにいたりてかれらにしたがひたまふ。
その母これらのすべてのことをこころにとどめぬ五二耶穌
ちゑのまさるとともに神と人とにまさりて愛せ
らるるにいたる。

第三章　テベリオ カイザル在位の十五年 ポンテオ ピラトハ
ユダヤの方伯となるり。ヘロデハガリラヤの分封君となるり。
その兄弟ピリポハイツリア あよびテラコニテの地の分封君
となるり。ルサニアハアビレネの分封君となるまたり。二アンナス
とカヤパ祭司の長となるりしとき。ザカリアの子ヨハネ
野にをりて神の命令をうけ、三ヨルダンのあたりなるすべ
ての地にきたり。罪の救をえさせんがためにあらため
のバプテスマを宣つたふるなり。四預言者イザヤのことばを
志るしたる書に、野によばわる人のこゑありいはく主の道
をそなへ。その みちすぢを直くせよ。五すべてその谷はうめ

られ。まべその山崗ハたちひらげられ。屈曲たるハるわく。
峻嶮ハやまく せぐれ六人々みる神のまもりひをみることを
得んとあらぐごとく〳〵七於此「バプテスマ」をうけんとそきたれる
衆にヨハネいひけるハ。あゝ蝮蛇のまゝこよ。誰がなんぢらに
きたらんとする怒をさくべきことをつげしや八さらバ悔改
にかなへる果をむすべ〳〵。なんぢら心にわれらが祖は
アブラハムありとおもかことなかれ。われなんぢらにつげん。
神ハ能この石をアブラハムの子とおらし〳〵むべ〳〵九いまや
斧を樹のねもとにおける。ゆゑにすべて善果をむすばざる
樹ハきらるゝて火になげいれらるゝなり十ひとく ヨハネに

とふそいひけるはさらばわれら何をなすべきや十一答ていひけるふたつの衣服をもてるものはもたぬものとわけあたへよ食物をもてるものも亦かくなすべし十二税吏もバプテスマをうけんとてきたりいひけるよ師よわれらはなにをなすべきやと十三答ていひけるは定例の税銀のほかになにをもとりたてることなかれ十四兵卒もまたとひていひけるはわれらはなにをなすべきやと答ていひけるは人を強暴しまたひが誣をなしまたおのれの給料をもて足りとなすべし○十五民まちをりしときこのれをおもひ衆みなこころよにヨハネをキリストあるやいなと忖度りしに十六ヨハネこれ

な答いひけらく。ヨハネ水をもて「バプテスマ」をなんぢらにあたふるのみ。されどわれより能力あるものきたるらん。われその履物をとるにもたらぬ。かれは聖靈と火をもて「バプテスマ」をなすなり。あふるゑん十七手まさきを箕をもちてその禾場をきよめ麥はあつめてその藏にいれ。殻は消えざる火をもて焼くべし。十八ヨハネまた多端をもてすすめをなし、福音を民にのべつたふ。十九されど分封君ヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事および行ところのもろもろの悪しきことをヨハネにいさめられければ、二十またこの悪事をくはへヨハネを獄にいれたり。二十一民みなバプテスマをうけしるに耶穌もまたバ

「バプテスマをうけて　しのれるとき。天ひらけ　三聖靈　鴿のごとき
狀をもてそのうへにくだりぬ　また天より　聲あり　云ふんだい
ごが　愛子ごろ　喜悅ところのものなり。　三時に耶穌そ〳〵
約そ三十ばかりて　福音を宣べつたむ。ひとびとはヨセフの子とあも
そもそもたまへり。ヨセフの父はヘリ　四その父はマツタテ　その父は
レビ　その父はメルキ　その父はヤンナ　その父はヨセフ　五その父は
マタテヤ　その父はアモス　その父はナオム　その父はエスリ　その父は
ナムガイ　六その父はマアツ　その父はマタテヤ　その父はセメイ　その父は
ヨセフ　その父はユダ　その父はヨハンナ　その父はレサ　その父はゼル
バベル　その父はサラタヱル　その父はネリ　八その父はメルキ　その

父ハアツデ その父ハコサム その父ハヱルマダム その父ハヨル
二九 その父ハヨセ その父ハヱリヱゼル その父ハヨホレムその父
ハマツタテ その父ハレビ三十 その父ハシメオン その父ハユダその
父ハヨセフ その父ハヨナン その父ハヱリアキム三一 その父ハメレア
その父ハマイナン その父ハマタツタ その父ハナタン その父ハ
ダビデ三二 その父ハヱツサイ その父ハオベテ その父ハボアスその
父ハサルモン その父ハナアソン三三 その父ハアミナタブ その父ハアラムそ
の父ハヱスロン その父ハパレス その父ハユダ三四 その父ハヤコブ その父
ハイサク その父ハアブラハム その父ハテラ その父ハナコル三五 その父
ハサルク その父ハラガウ その父ハパレク その父ハヘベル その父ハサラ

三六 その父ハカイナンその父ハアバザデその父ハセムその父ハノア
その父ハラメク 三七 その父ハマトサラその父ハエノクその父ハヤレド
その父ハマレレエルその父ハカイナンその父ハエノスその父ハセツ
その父ハアダム。アダムハさるもち神の子なり

第四章

さて耶蘇せいれいにみちてヨルダンよりかへり
靈よみちびかれ野をゆきて 二 四十日悪魔にこころみらる。
この諸日もろもろのひをもくらしもぢ四十日をすぎての ち餓うゑ
たり 三 悪魔これにいひけるは。なんぢもし神のこのいしを
この石に命じて餅とならせよ 四 耶蘇これにこたへけるは人は餅
のみにて生るものにあらず。ただ神のまへの言よ

よりと録されり　五　悪魔またこのれをことごとく山よりまた
き。一瞬間に天下の萬國をあめしてそ　六　のひけるこの
ての權威と榮華をわんぢにあたへん。これをまうされ
れぞそれ所欲のものこれをあたふべし　七　ゆゑに
もし一つでもまづ拜跪むことぐくわんぢの屬とわん　八
耶蘇これへけるサタンよさがらしろよしるしぞかく
主そるわんぢの神よひとりこれのみつかへべしと
志るされり　九　悪魔またこ耶蘇をエルサレムにつれゆき
聖殿のつばさにたてしめけるは。わんぢもし神の子
ならばここよりあのげ身をなげよ　十　それ神その使者に

ちに命じてるんぢをまもらせん十一るんぢが足の石にうちあたることなからんために手にてさゝへべしと云ゝる十二耶蘇こたへていひけるは。主なるるんぢの神をこゝろむべからずと云ゝひしあり十三悪魔この誘試をみをはりてしばらくのあひだ耶蘇をはなれさりぬ十四耶蘇せいれいの能をもてガリラヤにかへりしにその聲名あまねくまちうちの地にひろがりぬ十五

かれらが會堂にをしへをなし衆人にあがめられをれり○十六その長育しところなるナザレにきたり。常例のごとく安息日に會堂にいりて聖書をよまんとそこにたちけれは十七預言者イサヤの書をあたへしに。耶蘇

その書をひらきてこゝに録れるところを見いでたり
十八 主の霊われにいまそ。ゆゑよ貧ものに福音をつた
へんことをつとめさせ膏をそゝぎて任じ。心の傷るものを
醫し。また囚人にゆるさんことを聾者に見させんことと
をあめり。また壓制らるゝものをゆるし十九 主の禧年
を宣ひろめんがためなりき二十 耶穌書をまきて。
その役者にあたへて坐りけまへば會堂にあるもの
みな目をとめて視るせり二一 耶穌かれらにいひけるは。この
録されることは今日なんぢらのまへに應驗り二二 衆れ
を稱讃その口よりいづるところの恩恵のことばをあや

しみいひけるは。これヨセフの子にあらざるや。三耶蘇これらに
らよいひけるは。なんぢらかならずこのたとへ諺をひきて。醫者
みづからをいやせ。なんぢのうちにて行ふことを自己の家鄉にても
行へりと云ん。又いひけるは。まことになんぢらにつげん。
預言者はその鄉里にては敬重るるものなきなり。二五まことをりそなんぢらにつげん。エリヤのとき三年と六
ケ月天とぢて徧地におほいなる饑饉ありしとき。その時イス
ラヘルのうちに寡婦あまたありしごと。二六エリヤはその
一人へにつかはされずシドンのサレパタのひとりの

發よつうもさるゝうに　まこと預言者エリヤのときよりイス
ラエルのうちにあふくの癩者ありしかどそのひとりだに
も潔られざるなり。さてスリヤのナーマンのみきよめられたるうに
會堂にありしものこれをきゝてあふいきどほり　起て耶蘇を邑のそとにいだし。
なほあとさんとそその邑のたてたる山のこぶちまでひきゆけり　しかれども
かれらの中をとほりてさりぬ　ガリラヤのカペナウムといふ
るまちにいたりて安息日ごとに衆徒ををしへしに　その
ゝ權威ありければひとびとそのをしへをどろけり。　會
堂に汚れる鬼の靈よとりつかれる人あり。あるとき

ひけるは、三四あゝナザレの耶蘇よ我らをほろぼさるゝんぢとるんの
事おぼえんや。るんぢきたりてわれらをほろぼさるゝんぢら誰なるをも
しる。なんぢ神の聖なるものなり。三五耶蘇これを責ていひけるは。聲をいだすことなかれ。そこ
を出よ。惡鬼ついにその人をひとびとのまへになげうち傷をもこ
そいだ。衆みなあどろきたがひにかたりいひけるは。權威と能力をもて
けがれる鬼よ命ぜゝうを出さるゝまり。是いかなる道そや。三七こゝに耶蘇のきこえ近
傍このあたりの地よひろがりぬ。○三八耶蘇會堂をいでゝシモンの家にいりしにシモン
の妻母あつきに熱病をやみゐたりき。三九ひとびとこれがこと

よ耶蘇よねがひ給へ。そのかゝる所にとゞまりて熱を治めしめ給へ。熱さりぞけり。婦ゝ起てかれらに供事す。日のいまだくれざるに人々みなその病をうづらひたる者をもてる人々を耶蘇のもとにつれきたりければ。一々その手をおきていやせり。悪鬼もまた多くの人々をいでさりさけびて。なんぢは神の子キリストなりといへり。されどかれらかれがキリストなるを知れるゆゑに。かれらを許さでつまびらかにいふことをゆるさず。悪鬼その多くの人々より出さりぬ。あくる朝はやく耶蘇いでゆき人なき所にゆきけるに。衆ものねきたりてその離去ることをとゞめむ。耶蘇いひけるは。われまた他の邑々にも

神の國の福音をのべつたへざるを得ず。そはこれがために奉使るればなり。而してガリラヤの諸會堂にて道をのべつたへたり

第五章

一 ひとびと神のことばをきかんとて擁擁けるとき耶蘇ゲネサレの湖のほとりにたちて、二 いそに二艘の舟のあるを見たり。漁のものは舟をすてゝ網をあらひをれり。三 その一艘はシモンの舟なりしかば耶蘇これにのり、請て岸より少しこぎ出でしめたまふ。坐して舟中より人々に教をとけり。四 シモンにいひけるは、漁へいでゝ網を下してとれ。五 シモンこたへけるは、師よ我ら終夜とることをえず

所得おろりき。さまざまるんぢの言よおろぐひて網をおろさん。六 既よおろして魚を圍むことをえざりおろく網さけろりけるとぞ。いま一艘るふねの侶をまねきて來たまへ。しめしよ。このまろきこころしとき。そのろを二艘のふねに物てきたまんむろりおろり。八 シモン ペテロこれをみて耶蘇の足下よふして。主よろれを離さまへ。ろまい罪人おろりと。九 シモン あよび偕よおりしものも悉くろぐろくしてろの魚の夥にあどろけるろり。十 シモンの侶るぜベダイの子ヤコブとヨハネもまた然り。耶蘇シモンよいひけるは。おそるるなれるんぢいまより人を獲べし。十一 ろまろら舟

を岸によせおき一切をすてて耶蘇にしたがひ
ゐたり○十二耶蘇ある邑にをりしときに身こと
ごとく癩病をやめたるものあり。耶蘇をみて
ひれふし願ひていひけるは。主よ願はくは
きよくなれをきよくなし得べしと。十三耶蘇手をの
べてかれを按ていひけるは。われ願ふきよくなれ
と。ただちにその癩病きよくなれり。十四耶蘇かれ
にいひけるは。なんぢ誰にもいふなかれ。ただ往
て己れを祭司にみせ。またモーセが命じたるごとく
獻物をなして證據をその人らにせよ。十五されども
耶蘇の聲名ますますひろがりて衆あつまり
ひと教をきかんため。また病をいやされんとて

まうできたれり。十六 耶蘇つねに人のきところにありぞきて祈禱なまひきの。十七 あるひ耶蘇をしへをのべたまふときパリサイのひとゝ教法師ガリラヤの諸郷ユダヤ エルサレムよりきたりてこゝに坐しぬ。この主の病をいやしたまへき主の能あらはれたり。十八 あるひと癱瘋をやむるものを牀にのせてうちきたりて家にいれ耶蘇のまへにおかんとおもへども 十九 群集まて戸のうちにもいれざりければ屋上にのぼりて瓦をとりのけて。その人をねござのまゝ衆人のまへに縋おろしぬ。耶蘇のまへにおけり。二十 耶蘇その信あるをみそなはしのたまはく。人よなんぢの罪ゆるさるゝといひければ三學者と

パリサイのひとびと心にありひいでけるは、この褻瀆ことばを
いふものは誰ぞ。神よりほかなにれ罪をゆるすことを得
ん。廿二耶穌そのおもひを知りて答へけるは、なんぢら心のうちに論ずるや、廿三なんぢの罪ゆるさるるといふ
と起てあゆめといふといづれかやすき、廿四それ人の子地にて
罪をゆるすの權威あることを、なんぢらにしらせんとて、つひに癱瘋の人にいひけるは、われなんぢにつぐ。起てねどこをとり家
にかへれと。廿五ひけばその人ら衆のまへにて、すぐに
おきて臥ゐたるねどこをとり、神を稱讃てあのがいへ
にかへりぬ。廿六衆みなあどろきて、神をあがめうやまひ

畏懼ていひけるは。これら今日ふしぎなることを見たり
○二十 こゝのち耶蘇いでゝレビといふ稅吏の稅關に坐しゐけ
るをみそなはせ。これにむかひてといひたまふに二八レビ一切をすてゝ
起てむくひくり二九レビおのれの家にて耶蘇のために豐盛
なる筵をまうけたり。稅吏また他のひとびともともに筵に
坐むかゝるものおほかりけるに三十そのところの學者とパリ
サイのひと耶蘇の門徒につぶやきいひけるは。なんぢらみ
つぎとり並つみある人々とともに飲食まつるかゆゑぞ
三一耶蘇こたへていひけるは。康強なるものゝ醫者のたま
けをもとめず。こゝ病あるものこれをもとむ三二我こゝ

人をまねくことめずらしからぬ。そゞ罪ある人を悔改させんがためなり　三三　ヨハネの徒は屢斷食し祈禱をなす。パリサイの徒もまた然り。あるに汝らの門徒のむことくらふことをなすは何ゆゑぞ　三四　耶蘇いひけるは。新郎の友その新郎とともに一處にをるあひだは斷食をなさしむることを得んや　三五　されど新郎とりさらるゝ日いたらん。その日には斷食すべきなり　三六　譬をもていひけるは。新衣をきりとりて舊衣につくるものなし。もしかくせば新衣をもそこなひ、また新衣よりとりきたるものと舊衣とあはざるべし　三七　又あたらしき

酒をふくき革袋よりものあらじ。もしあらば。あらら〳〵き酒はそのふくろを裂もれのぞく且ふくろをもそこなふものぞ〳〵[三]あたらしき酒はあたらしきふくろふくろともにうべきものぞ。かくそこそ兩ながら存[三九]ふくき酒をのみたく立刻もあたらしきさけを欲ものにあらじ。これふるきそのものも好といふぞなり

第六章 逾越節の二日めのもぎめのあんそくにち耶蘇麥の穗をつみ

むぎのもろけをとほらるに。そのでし麥の穗をつみこれを手もてもみくらひしかば。あるパリサイの人ら

にのたまはく。なんぢら安息日にもあらぬことをなぜ

何ゆゑぞ三耶蘇こゝろへそいひける。ダビデおよび從ふありしものゝ饑ゑときゐるこゝろをいまゞ讀ざるや四まうそち神の殿よいりゝ祭司のほかにくらふまゝならぬ供のもの、餅をとりてくらひ且ともにありしものにもあたへてくらはしめしにあらずや五またいひけるは人の子は安息日にも主たるなり○六またべつのあんそくにちよ耶蘇會堂よいりてをしふ。こゝに右の手のなへたる人ありけるぞ七學者とパリサイのひと。耶蘇これを安息日よいやをなほすやうとうかゞひぬ。それはうれをうつたへんとおもへるなり八耶蘇そのこゝろをしりて手のなへたる人よおきて中にこそよといひけるぞ。そのひと

起てたそり。九耶蘇いひけるは。これ汝らにとそん。安息日
よ善をなすと悪をなすと。また生をたすくると殺といづれ
か可なるや。十つひよひとぐをみまわして。その人に手をのべよ
といひけまば。その如くせしよ。手まるくなり。十一ゑのこ手
の如くなほりぬ。ゑのこ怒りていろ耶蘇をなや
んとそぶひようりあへり。十二そのころ耶蘇いのりのため
よ山にゆきそよのまでら神にいのまり。十三夜あけて耶蘇
でしどもよび。そのうちより十二人をゑらみそこれを使徒
とそなづく。十四即ちペテロとなづけたるシモンその兄弟
アンデレー。あよびヤコブとヨハネ。ピリポとバルトロマイ。十五マタイ

とトーマ　アルパイの子　ゐるヤコブとゼロデといふるシモン
十六　ヤコブの兄弟のユダとイスカリオテのユダゐり、こゝの
ユダを耶蘇をつかまつるものゐるり　十七　耶蘇こゝまでくらと
ともにくだりそたひらかゐる地よこもしに。あまたの門徒
とおびたゞしきひとゞ　ユダヤの四方まこエルサレム　およひ
ソロシドンの海邊よりきたりあつまりそ或いその教をき
ケんとてまた　あつひい病をいやされんことをねがう　十八　また
悪鬼よるやまされたるものありてことごとくいやされたり
十九　衆みな耶蘇よさわらんとせりこれ能力のその身より
いでてうまつろをことごとく醫せそゐり　二十　耶蘇目をあ

げ門徒をみそいひけん。なんぢら貧者はさいわひなり。
神の國はなんぢらのものなればなり。二なんぢら
いま饑うるものはさいわひなり。飽こころを得べければなり。
なんぢらいま哭ものはさいわひなり。こころふことをうべ
ければなり。三人のこれなめん人なんぢらをにくみ。また
とうざけ罵なんぢらの名を悪しとしてまそるべなんぢら
福なり。三その日よろこびあどれ。なんぢら天よあり
て賞賜あつものなればなり。その祖が預言者よるしなり
おもうくのごとし。二四なんぢら富ものはさいわひなるかな。
まんぐる安樂をうくれをなり。二五なんぢら飽ものはさいわひ

るものゝ饑んとまれびるり。なんぢら今こゝろよきものゝうけ
をひるゝる哀るゝんとまれびるり二六まべその人るんぢら
をゝめるべ。るんぢらそきをひるゝるゝる。その祖がいつをり
の預言者よるしなり去もうくのごとうし二七それよ聽ところ
のるんぢらよつぐん。その仇を愛し。るんちらをにくむ
ものを善し二八詛ものを祝し虐遇のものなめよ祈禱せ
よ。八るんぢの頰の右方をうつでまる左方のをゝをむけ
よ。るんぢの外服をとらべあるぎをも禁ざれ三十まべそるん
ぢよ求べこれよ。あるべるんぢの物をとらでそをまをまる
索るゝれ三一あのれ人よせうまんとまるごとうまる人まも

そのごとくせよ 三 あのれを愛するものをあいするごとくに
賞賜あらんや。悪人にそもあのまゝを愛するものにあいを
るるり 三 おのれよ善をするものよ善をするよ
むくいあらんや。悪人もまさしくのごとく行るり 三 るんぢ
ら償ることを得んとあるの人よ借へるものむくいあら
んや。悪人もそのごとく償をえんとそまゝ悪人よりも
るり 三五 るんぢら仇を愛し。まゝ善をるし何をものぞま
ぢしそ借あるよ。さらぞその賞賜へあるんるり。そ
至上者の子とるらんそれ至上ものが恩をうるゝもの
および不善者よまでも慈愛をるごとせぢるり 三六 このゆゑ

まるんぢらの父のあはれみのごとくまた憐憫をるべし
三七 人を議ことるゐれ。さらばるんぢらもとらまず。人を
つみとせることるゐれ。さらばるんぢらも罪せられぢ。ひと
をゆるせ。さらばるんぢらもゆるさるべし 三八 人よあたへよ。
きたらばるんぢらも予らるべし。うまたら 量をよくしてあ
いをまあふるまでにしてるんぢらの懐へいるべし。
るんぢらがるところのその量をもてまた人へそうるべ
し 三九 またこれ譬言をかれらへいひけるは。盲ひめしひのて
びきをるゐ得るやあひともに溝壑へおちいらざらん
や 四〇 弟子はその師よまさらじ。あるまでに全備るものも

その師のごとくなるべし。三なんぢ兄弟の目のあるをもちゐそのまつの目のある梁木をおもはざるやなんぞや。三いはゆるそのおのの目のあるうへをもちゐをみぞしてそ兄弟よむかひ。兄弟よなんぢの目のある物屑をとれよとおもふことを得んや。偽善者よまづおのれの目より梁木をとれ。さらばぞ兄弟の目よあるちりをとることあきらかにみゆべし。三それ惡果をむすぶの善樹にあらざるぞ。まさよきみを結ぶあしき樹もあらざるぞ。四おのおのその樹はその果によりてしらる。荊棘より無花果をとらるぞ。まさ蒺藜より葡萄をとらんや。四五善人はこころのよきくらより善をいだし。惡人はその惡庫より

しるしをいざなえ。その心をみるより口よりいでくるところあり四六なんぢらのいかことをおもふやそれにて何ぞこれらを主よ主よととなふるや四七またわれに就てきたりわがことばをきゝて行ふものをたれにそるんぢらにしめさん四八その人の家をつくるに土をふかくほりていしずゑを磐上におけるがごとし。洪水のときに横流そのいへを衝ともうごかすことあたはざるなり。これ基礎よくいしのうへにおけばなり四九聽てあてはめざるものの家を土のうへなにもなき人のごとし。水まこれをうつときそのいへたちまちたふれそのこはれまことにはなはだし。

第七章

耶蘇この譬をその言を民にきゝ
かべナウム
にいりしに二 ある百夫の長その愛まもる僕
のみそしぬるにより
ゐるをしり 三 耶蘇のことをきゝユダヤの長老どもをつかはし
てきたらん僕をすくひたまはんことをねがふ。
耶蘇と就たまひしに 四 ゐまだ家を
はなれざるころ百夫の長友だちをつかはしていふ
けるは。主よ煩らふな勞動ことなかれ。汝が家裏にいれ
まつるにあたはざれば 七 故みづから進るんぢの前にいづるも

まことあるそれあり。こゞ一言をいゞたまへ。さらばわが僕
は愈んそれ人の權威のもとに屬るものなるさらば
下よまた兵卒ありてこれにゆけといへばゆき。かれにきた
れといへばきたる。さらば僕にこれをなせといへばなすそ
ち行ゞゆゑなり九耶蘇きゝてこれを奇とし從ふる人々を
かへりみていひけるは。まことなんぢらにつげん。イスラエルの
中にさへもいまだかゝる篤信をあもゞりき十つかはされ
るもの家にかへりて病ある僕をみまでをそよ全快を
なせり○十一翌日耶蘇ナインといへる邑にゆきけるに。あま
くの門徒あまたび群衆もともにゆけり十二邑の門にちかづき

〳〵ときに帰いぐさうるに死人あり。その母は嫠婦なりこの子ひとりなり。邑のひとびとおほくこれとともにふ十三
めぐみそあはれみ。哭るなれといひそ十四ちかづき。その櫬
に手をつけしかれば。帰りのどもとどまれり。耶蘇いひけるは。
少者よをれるんぢによいふ。おきよ十五死たるものの起てうつ
りのいひそむ。耶蘇これをその母にうけせり十六ひとびと
みなおそれて神をあがめいひけるは。大なる預言者をれ
らのうちに興る。神その民をとぶらひたまへり十七耶蘇の
このきこと遍ユダヤの國中またあまねく四方にひろごり
ぬ○十八ヨハネの門徒これらのことを彼にをつげ〳〵

もとむ 十九 ヨハネ二人のでしをよびそいひつかはしけるは。
來るべきものはなんぢなるか。まことまたは他よまつべきか
二十 そのふたり耶蘇よきたりいひけるは。バプテスマのヨハネ
よをつかはしなんぢにつきそいひむ。きたるべきものはなんぢ
なるか。まことまたは他よまつべきか。三 このとき耶蘇
おほくの病あるひはなやみ。および惡鬼よとりつかれるもの
をいやし。またおほくの瞽よみゆることをあたへたり。三一 耶蘇
かれらよこたへいひけるは。なんぢらが見ることと聞ことと
ころをヨハネにもきたりつげよ。それめしひは見。あしなへ
はあゆく。癩者はきよまりつんぼは聞。

死しものいきるべくされ。まづしきものは福音をきゝ
三 あるをよろこばざるものはさいもひろり 言
ヨハネの使者さりしのち。耶穌ヨハネのことをひとびとに
いひけるは。何をみんとて野にいでしや。風にうごかさる
葦ろろ 二五 さらばなんぢらはみんとていでしや。
やはらかきころもをきたる人ろろ。文繡をきておごれる
ものは王の宮にあり 二六 さらばなにをみんとて出しや。
預言者ろろ。然しかれなんぢらにつげん。これ預言者よ
りもすぐれたるものなり 二七 それはなんぢがさきだちて
道をそなふるとかゝる使者をなんぢのまへにあくらんと錄

これ汝に來るそもこれなり 六 それゐんぢらつぶや
いうめるものどもよりもなほいまだ「バプテスマ」のヨハネよりも
あるいうる預言者ハあらず。されど神の國のちひさきものも
これよりも大なるなり 二九 ヨハネよきひる庶民まて稅吏
へその「バプテスマ」をうけて神を義とせり 三〇 パリサイの人また
敎法師をその「バプテスマ」をうけざる。みづから暴て神の旨に
そむきたり 三一 されバこの世代のひとびとをなにゝたとへん。
また何にるとゐんや 三二 たとへ市ゐ坐しをたがひによびていふ
ら笛ふけどもをんぢらあどらざる。悲歌をまれどもをんぢ
ら哭ざるといふなり 三三 そハ「バプテスマ」のヨハネきたりて餅を

もくらそぞ酒をものまざれバ悪鬼よとらうされたるものあり
りとるんだらいくら三人の子きらうそくらふこらうそ
くらをまれがまく食をこくみ酒をこの如の人のみのぎとり
罪人の友ありとるんだらいくら至されど智慧ハもろ〳〵の子
ま義とせらる○三六あるパリサイのひと耶蘇を請てともに食
せんことをねがひけまバ。耶蘇パリサイの人の家ましりて
食につけり三邑のうちに悪行をなせる婦ありけるが
耶蘇がパリサイのひとの家ま坐まるを知りて臙石の盒ま
もちひあぶらをもちきたり三八耶蘇のうしろまま立あしもと
に哭き涙まそそのあしをうるほし首の髪をもてこれを

ぬぐひ、ううその足に口をつけ、また香膏をこれにぬまり
三九 耶蘇をまねきたるパリサイのひとこれをみて心のうち
よいひけるは、この人もし預言者ならばさきにうけのそ
誰なるか、またいかなる婦なるかをしらん、この罪ある悪行
をするものなり 四〇 耶蘇これにこたへていひけるは、シモン
よ、なんぢにいふことあり、こたへていひけるは、師よいひたまへ
四一 耶蘇いひけるは、ある債主にふたりの負債人ありて、ひとりは
金五百ひとりは五十をかりしに、四二 償ふべきものなかりければ
ふたりともにゆるしたり、さればこの二人のうちそのひとを
いづれか多くこれを愛すべきやといひければ、四三 シモンこたへ

こゝろへけるが、これあるがゆゑなることのおもきかのごとく。
耶蘇いひけるは。ゐんぢが有るふところへ行きてなげうり四つゝま
婦をうつくしく見てシモンにいひけるは、このをんなをみるか、これ
ゐんぢが家に入るにゐんぢが足に水をあらへども。このをんな
涙をもてわが足をうるほしこゝらの髪をもてぬぐへり四五ゐん
ぢがわれに口をつけざりしがこのをんなはこゝに入りてより
足に口をつけてやまざり四六ゐんぢがこゝろに首にあぶらをぬらざり
しがこのをんなは香膏をぬれり四七このゆゑによりてなんぢによ
いてんこのをんなのあまたの罪はゆるされたり。これをよろこび
愛もまゝおほきがゆゑ。赦さるゝこともまゝおほきものはその愛も

まことをつくる〳〵四八於是そのをんなにいひけるは。なんぢの罪
ゆるさる四九とのに坐するものども心のうちにいひけるは。この
人はこれ何人ぞまた罪をもゆるすや五〇耶蘇をんなにいひけ
るは。なんぢの信なんぢをすくへり安然さりてゆけ

第八章

一そのち耶蘇諸邑諸村をへめぐりて神のくにの
福音をのべつたふ。十二の門徒もともなりき二ま
た前より悪鬼をうれひさりしものと病をいやされたるをん
などもおほくありしが。すなはち七の悪鬼をおひいだされ
たるマグダヲといふマリア三またヘロデの家宰クーザの妻
ヨハンナ。またスザンナ。このほかあまたの婦ありてみづから

所有をもて耶蘇よつてとりき○一あるくのひとびと諸邑
よりいでゝ耶蘇のもとにあつまりけるゆゑ。譬をもていふ
五種まくものそのたねをまかんとていでぬ。播るとき路辺にお
ちし種あり。ふみつけらるゝ。そらの鳥これをくらへり。六また石上におちし種ありて
ねあり。そだつのち。槁ぬ。七また荊のなかにおちし種あり。
これ潤ひさかゆるをりとまた荊のともにおひ種あり。
のぞらもともにそだちてこれを蔽ひ八また沃壌におちし種
ありて生いでゝ實をむすぶこと百倍せり。是をいひをはりてよばゝりていふ。耳ありてきくものは聞べし。
その門徒とふそのひけるは。これいかなる九ことぞ

へけるに。神のくにの奥義をなんぢらは知ことを
ど他のものはみなとゝをもつてせこれ視てもみざる聽
ともさとらざるためなり十一それこのことばの解
神の道なり十二みちのほとりなるものは悪魔
のきゝてのち道をとりさるものなり。かれら人の
信じてすくはれんことを恐る十三いその
きゝてよろこびてことばをうくれども根
信ずることあるこゝのみ。ときにあたりて道
むくのみなり十四いばらのなかに
世の諸慮とたのしみと宴樂とにあふれて

ものなり（十五）よきもあしき正しき善きこころみそこなはれをさきら。これをまもり忍て實をむすぶものなり（十六）燈をともし器をこれをおほひ。あるひは床下におくものなり。入きたるものはその光をみんためなり臺のうへにおくべし（十七）隱てあらはれざるものなく。藏てあらはれざるものなし（十八）このゆゑをもてなんぢら聽ことをつゝしめ。有者はあたへられ無有者はもちたるとおもふところのものをもとらるべし（十九）○このとき耶穌の母と兄弟きたりけまど群集よりてもろびとこゝろざしをあらはさんとす（二十）あるひとこれを耶穌につげていふ

ぢぶ母と兄弟ゐんぢよあそんとて外にさそり三耶蘇こえ
ていひけるん。神のことばをきゝてこれを行ものそ
ちよぶ母ぢぶ兄弟ゐり〇三ある日耶蘇でーとものふ舟よ
のりん。うまらに湖のむうへとゝろべーといひけまそ。も
ゐそちこぎいでせり三ゐねのそーとき耶蘇いまそり。
眠ゐみだこゝろふきあそーし舟よ水みちんとして危う
くなる二四門徒きたりて耶蘇をさまさーしいひけるん。師よと
きたうあうひゐんとまを。耶蘇あきて風と浪とをいまーめ
けるを。止てあぢやうなりぬ二五耶蘇いひけるん。ゐんぢう
の信いづこにあるや。うれうあどろき且あやしみてさぐひ

よひけるに、こゝに何人(なれ)かきたるぞや。うめこみづくる命(めい)ぜしうをまもるべくおもふに、このくそがりラヤよむべくるがダラ人(びと)の地(ち)よりきたりて、モをうにあぐりしとき。あるひとり邑(むら)よりいでゝ耶蘇(やそ)よあふ。このものをひさしく悪鬼(あくき)よとりつかれ。衣(きぬ)をきず家(いへ)よまもるを。そゞ塚(つか)よのこるうちき 二八 耶蘇(やそ)を見(み)てさけび。その前(まへ)よひまづき あゝ聲(こゑ)よ至高神(いとたかきかみ)の子耶蘇(いやす)よわれるんぢとるにの與あらんや。るんぢ求(もと)むをくるしむることるうれ 二九 これ悪鬼(あくき)に入(い)よりのぞまに耶蘇(いやす)が命(めい)じさるよりてるり。うものとりつかれることまゝぞよひさし。鏈(くさり)まゝ桎梏(あしかせ)をもてまぢりまもれ

どの そをうちくづき悪鬼のこめる野よあそれぬ三十
耶蘇これる問ていひけるへ。みんぢら名いるにといふやこる
へけるへレキヨン。これあるくの悪鬼の入こるぐもゐるり
三悪鬼耶蘇よねがひけるへ。命じて底ゐきところよゆる
むゐるくれ三
こゝにあるくの豕のむれ山よ草をくひゐこり
しが。のれらその豕よいふんことをゆるせと求けまば。これを
ゆるせり三三悪鬼その人よりいぞ豕よいりしうむ。その群を
けしくくうけぐこり。山坡より湖よあちてあぐる三四牧
者どもそのありしことをみてにげゆき。これを邑まこむり
よつげこり三五衆そのありしことを見んとていでこ耶蘇のも

とにきかんまで。悪鬼のもろもろ人きりのを著てうるる心
みて耶蘇のあゝのとる坐るをみてあそれあくり悪鬼
ふとりつゝれさりゝ人のさくをれゝさまを見たるかの。真
をうきまらにつげゝれゝバ三ガダラ四方のあろくのひとびと耶蘇
さこくをさらんことをねがへり。これあろしるあそれゝが四
名あり。耶蘇舟よのりてこのくりぬ三悪鬼のもろみれたる人。
耶蘇とゝもよをさらんことを求けるよ。耶蘇これをさらしめ
て三九家よろこり神のろんぢる行ゝあろいることを人よ
つげよといひけれを。遂よさりん耶蘇のあのれよるゝ
まひゝ大ることを遍邑よつくへたり〇四十耶蘇うくるたる

ときに衆みなまちみそこれをよろこびむらふ四四ヤイロといふる人あり。この會堂のつかさなり。年あたまそ十二歳なるひとりの女ありて死ぬるばかりなりけまそ。きたり耶蘇のあしもとにふしてその家よりきたりたまへんことをねがへり。耶蘇のゆくときに衆これをあしあへり四三婦あり十二年血漏をわづらひ醫者のうへにその業をことごとくつひやしけれど。なほたれにもいやされ得ざりしが四四耶蘇のうしろにきたりてその衣のすそにさはりけまそたちまち血のいづることとまりぬ四五耶蘇いひけるは。たれわれにさはるものぞや。衆みなこれをさなれるものなしといへり。ペテロおよび偕

にあるものどものいひけるは。師よひとびとゝるんぢよあゝあひ
せまつるは我なさそるものにあらずこいひたまふ耶蘇いひけるは。
それはさそるものあり。能力のとゞ身よりいづるをあがおぼえばなり。その婦みづからこゝろにをもひてまことをいひあらはしぬ。きそりしてその前にうつぶしてひとびとのまへにつぐ耶蘇いひけるは。女よ心やすかれるんぢの信はんぢをすくへり。安然にゆけ。會堂のつかさの家より人きたりて宰にいひけるは。んぢがむすめはや死たり師をなやますなかれ。耶蘇これをきゝてつかさにこたへていひけるは。おそるゝなれ。たゞ信ぜよさ

めハいめぐ〳〵 五一耶穌家よいるよペテロヤコブヨハネおよびむすめの父母のそうたれともとゝに入ることをゆるさず 五二衆みな女のうめよるきこのるゝことしうぶ。耶穌いひけるハ。哭ふうれ死たるよあらず寢うるのこ 五三うれらそのを志まをこうれをうらへう 五四耶穌ひそくをみるいづれむすめの手をとう。むすめ起よとよびいひけれバ 五五その魂くりそうまもうあきうるよ。耶穌命じて食をあたへうぶ 五六父母ハおどろきぬ。耶穌らめ行ことを人よつぐることうをいましめたり

第九章

耶穌十二のでしをよびあつめ。まべての悪鬼をいづ

病をいやす能力と權威をさづけ、二まづ神の國をつたへ
病者をいやさせんためにつかはされ、三いひけるは、
路資なるものをとらざれ。杖もたづさふなかれ。ふたつの衣
をもつことなかれ。四いづれの家にいるともそこにとどまりて
そこよりされ五るまでそこをさらざれ。五なんぢらを來接もせざら
ば、その邑をいづるときわれらに證のために足より塵をさらへ
六門徒いでゝあまねく諸鄕をゆき、福音をつたへ、六やまひを
いやせり。〇七されどのちの君へロデ耶穌のなせし諸事をきゝて
まどへり。ある人へられをヨハネの復活るなりといひ、ある
ひとはエリアの現るなりといひ、また或ひとはいにしへ

の預言者の一人よみがへれるなりといへるあり　九ヘロデいひけるは。ヨハネの首をわれきりたり。如是ことのきこゆるものは誰なるぞ。ヘロデこれをみんと欲ふ　○十使徒かへりきたりてその所行ことを耶穌につぐ。耶穌かれらをとりてひそかにベッサイダといふる邑のかたはらの野にゆきたまひしに　十一群衆これを知りてしたひゆきたれば　これを接て神の國のことをかたり。また醫をもとむるものをいやせり　○十二日うすくるとき十二のでし來りて耶穌にいひけるは。ここは野なれば衆人をさらせ。四圍のむらざとへゆきて宿をとり食を覓ることをさせたまへ　十三耶穌いひたまふは。なんぢらこれ

な食をあつまよ。こゝに人ゐたが五の餅と二のうを
あるのこゝの あるくの人のためにきて買はあらさゝれぞ
ゐうに食物いるー 血こゝにをりー男あほうそて五千人ばかりき。
耶蘇をーよいひけるふ。ひとぐを五十人づゝるくべ坐せーめよ。
十二門徒そのごとくるーそれらをみる坐せーめたり。十六
耶蘇いつゝの餅とふゝうのうをとり。天をあふき祝ーそ
これをさり。門徒はあたへてひとぐのまへよあらーしむ。十七皆
くひあきて餘のくづを十二の筐にひろひくり。十八耶蘇ひとぐ
のをらざりーときき祈禱をさりーぐ門徒もとめにをきたり。
耶蘇これよとゝそのひけるふ。衆をうきをいのりて誰とも

十九 こゝろえていひけるは「バプテスマ」のヨハネあるひはエリアあるひ
はいにしへの預言者のひとりのよみがへるなりと 三 耶穌
いひけるは。なんぢらはわれをいひてわれとまるる。ペテロこ
たへけるは。神のキリストなり 三 耶穌かたくいましめて
このことを何人にもつげざるやうにと命じ 三 またいひ
けるは人子はおほくのくるしみをうけて長老
祭司のつかさ學者どもにすてられ。ころされ第三日に
よみがへるべし 三 また耶穌ひとびとにいひけるは。もし我にき
がたんとおもふものは己をすてゝ日々その十字架をおひ
てわれにしたがへ 三 その生命をまもらうせんとするものは

れをうしなひつぶさめよいのちをうしなふもののそれを
保全まもるべし 三五 人もし全世界を利するとも自己をうしなふ
ひみづからそこなひるべきの益あらんや 三六 これとつぶ道を
もぐるものをば。人子もまたこれら榮光と父と聖使のえ
くちうをうけきたるときこれをもづべし 三七 これ誠はなんぢ
おらにつぶん。ここに立もののうちに神の國をみるまでに死
みぐるものあり 三八 此ことをいひけるのち八日ばかりをへて
耶蘇ペテロヨハネヤコブをともなひ祈禱せんとて山よのぼれ
り 三九 いのれるときにその顏のさまかはりぬとこともそのの
衣服もまばゆくうごやきぬ 四〇 ふたりの人ありてこれともにい

きたるをもモーセと エリアあり。榮光のうちにあらはれて
三一 耶蘇のエルサレムにて遂げんとしたまふ
三二 ところを語りゐたり。ペテロおよびともにある
者ども睡りにおちゐたりしが、目さめて耶蘇の榮光
と、ともにたてる二人をみたり。三三 かの二人の耶蘇
をはなれんとするとき、ペテロ耶蘇にいひけるは、師よ
われらは善きなり。われらに三の廬をつくらせたまへ。
一はなんぢのため一はモーセのため一はエリアのためなり
とは、その言ところを知らざりしなり。言ふ
ときに雲きたりてかれらをおほへり。その雲にいりゆく
とき門徒たち おそれ 三五 聲ありて雲のうちより
いひけるは、これが愛子なり。

これよきくべし。聲やことばまでくだく耶蘇ひとりをみすてゝ門徒
どもを召つれて見すてゝことを當時とゝめよもつげざりき
○翌日やまよりくだりけるに。おほくのひとゞ耶蘇をもとめ
ふしそのうちのある一人よばゝまでいひけるは。師よねがはくは
なぢ子を眷顧たまへ。これひとり子なるに。悪鬼のために
とりつかれて。忽然さけび。泡をふきひきつけられて傷をあ
たふることまことにこのごとし。これこれを逐いだしたまへとなん
ぢの門徒にもとめしにえざりき。耶蘇こたへていひけるは。あゝ信
なきまがまる世なるかな。これまでなんぢらのうちにあらんや。なんぢ子をこゝに

つれきたれ。三來まづ惡鬼うまをたふしてひきつけぬ。耶蘇けがしたる鬼をせめてその子をいやし、父にあたへたり。四衆みな神のおほいなる能をあがめき。耶蘇のなせしことをあやしめるときに。耶蘇ゐしひけるは。五この言をるれぢら耳にをさめよ。それ人の子はひとの手にわたされんと。六かれらこのことをさとらざりき。悟ざるやうにされてあるゐ。うまらもまたおそれてこのことをとはざりき。○七門徒さちの中にだれが大きいかとのあらそひありけるを。八耶蘇その心のおもひをしりて。孩子をとりそばにたてて。九うまらにいひけるは。そも名のこのをさなごを接るもの

いまるるもの　ヨまをうくるるり。我をうくるものうけ
つるものをうくるるり。まくてるんぢらうち最微
ものそこれあるいるらん四九ヨハネこころへそいひけるい師よ
んぢの名よりて鬼をおひいだせるものを見たるものがそれ
らとともにあるぎるゆゑこれを禁こう五十耶蘇いひけ
いい禁ることるれどもれらに敵抗さるものいつまでらに順従の
のるり○五一耶蘇天よのぞるの期いこりけるべ。エルサレムよゆ
くことをのるくさぐめこう五二使者なちをさきるつるそーけ
まそこうまらもきそ耶蘇よ預備んがこめサマリア人のむうに
いりしに五三郷人そのエルサレムよむうひ行さまるるがゆゑよ耶蘇

を納ざりき五門徒のヤコブヨハネらのことをみていひけるは主よ
ねがはくはエリアのなせしごとく天より火をよびくだして
らをほろぼさんとおもふや。欲ふ五耶蘇こゝろをかへりみて
けるに。なんぢらの心いかなるをも自己あらざるを知り五六ひとの
子は人のいのちを滅さんためにきたらざればこゝにほかの
村にゆけり○五七路をゆくときある人イエスにいひけるは
耶蘇よいづこにゆきたまふともわれもしたがはんと五八耶蘇
いひけるは。狐は穴ありそらの鳥は巣あり。
されど人子はまくらをするところなし五九またある一人にいひ
けるは。我にしたがへ。答いひけるは。主よまづゆきて父をほうむるこ

こをゑれよゆるせ 六十 耶蘇いひけるは。死たるものどもその死
ものどもを葬らせ。なんぢはゆきて神の國をひろめよ 六一 またあるひとりいひけるは。主よなんぢよきてぶんを
ゆるせ 六二 耶蘇いひけるは。手を犂につ
けてうしろをかへりみるものは神の國にふさはしきものに
あらず
第十章
こののち主また七十人をえらびてこれをまへて兩個づゝよ
りてゆくべきところ諸邑諸地へさきんにつかはせり。 二 すなはちいひけるは。收穫はおほく工人はすくなし。
ねがはくは收穫の主にねがひて工人をその收穫所におくらんことを

を求べし　三往け　羔を狼のるゐるがごとし　四囊まず旅ぶくろ履をもちゐることなかれ　みちにて人を問候をもせざるべし　五人の家にいらばまづこの家の平安あらんことをねがへ　六もし其に安然の子あらばその平安あらん　ぐらず祈るあんぜんはその家にとどまらん　若しからばその安然なんぢらに歸べし　七その家にとどまりて供ることのものをくらひ飲食せよ　そは工作人のその工錢をうるは宜きものなり　家より家にうつることをせざれ　八邑にいりて接るものあらばそのなんぢらの前にそなふるものを食せよ　九邑のうちなる病のものをいやせ　また衆に神の

國をゐんぢらにもろづけりといへ十もゝ邑よいらんに接るりのるゝくが衢よいぞゝいへ十三これらをつきころるゐんぢら邑の塵ゐるんぢらよむりひてもらそん。されども神の國のちらづけるをゝれ十四これるんぢらをつげんそその日いゝくらゐソドムの刑罰はこの邑よりもるはやもろるべゝ十五あゝ禍るろるコラジンよあゝそざらひるるろるゐベツサイダよ。るんぢらのうちにるせゝ異能をもゝツロとシドンよるせゝるゝらぞゞれるはもやゝく麻をき灰をこのむり坐ゝて悔改ゝるべゝ十六審判よいツロとシドンの刑罰はるんぢらよりもるるやもろらん十七まそよ天よまでもあげられたるカペナウムよ。まゝ陰府よ

おくるべし　十六　なんぢらを聽ものは我を聽ものなり。なんぢらを棄るものは我を棄るなり。我を棄るものは我を遣たるものを棄るなり　○十七　七十人よろこびかへりていひけるは。主よ惡鬼さへもなんぢの名によりて我らに服せり　十八　耶蘇いひけるは。我電のごとくサタンの天より墜るを見たり　十九　我なんぢらに蛇蠍をふみ。また敵のもろもろの權をおさふる權威をさづけたり。なにものもなんぢらを害ることあたはざるなり　二十　もろもろの惡鬼のなんぢらに服せるによろこびとることなかれ。なんぢらが名の天にしるされたるによろこびとることなかれ　二一　そのとき耶蘇こころよろこびていひけるは。天地の

主なる父よこの道を智者と達者となるべくして赤子よあらもしたまふことごとを謝せ。父よ然それらのごとくなるべき意旨よろづをなるべし 三二 父は萬物をつれよあるべふ。父のあるに子はされるべきとあるものなるべく。また子およびこのあるべきことろのものにほろぼるに父はされるべきとあるものなるべし 三三 耶蘇でをうくりみてひそうにいひけるは。なんぢらが見るところのことをみるその目はさいわひなり 三四 なんぢらにつげん。あまたの預言者および王もなんぢらが見るところのことをみんとせしがども見ず。なんぢらが聞くところのことをきかんとせしがどもきかざりき 三五 ここに一個の教法師あり起て

なれをこころみいひけるは。師よ何をなさば永生をうくべきや　二六 耶蘇いひけるは。律法よあるされしは何ぞ。なんぢいかによむや　二七 答ていひけるは。なんぢ心をつくし精神をつくし力をつくし意をつくして主なるなんぢの神を愛せよ。また己のごとく隣をあいせよ　二八 耶蘇いひけるは。なんぢのこたへ然。これをおこなへさば生べし　二九 されど己をただしくせんとて耶蘇にいひけるは。とは隣とはたれなるぞ　三十 耶蘇こたへていひけるは。ある人エルサレムよりエリコにくだるとき強盗にあへり。ぬすびとその衣服を剝とりてこれをうちなやまし去ぬ　三一 たまたまひとりの祭司

にある祭司この路よりくだりしがこれをみそなはして
ゆけり三一またレビの人もこゝにいたりてこれをみ見てあなたを
さけりゆけり三二あるサマリアのひと旅しそこにきたりて
これをみて憫三三ちかよりてあぶらと酒とその傷をつゝみ
そのみが驢馬にのせ旅邸につれゆきて介抱せり三五次日い
づるとき銀二枚をいだしやどやの館人にあたへていふ
うせよ費りはまさらばそれかへりのときわれなんぢに償べし
といへり三六さてこの三人のうちなんぢおもふにだれか
しりの隣となるとおもふか三七いひけるは。その人
をあはれみたるものなり。耶蘇いひけるは。なんぢも往て

そのごとくせよ○三八かれらが路をゆけるとき耶蘇あるむらにいりけるに。マルタといへる婦かれをむかへてみづからの家によびぬ。三九その姉妹にマリアといへるものあり。耶蘇のもとにすわりてその道をきけり。四〇マルタ供給のことあるおほくして心いりみだれ。耶蘇よりていひけるは。主よ姉妹ひとりを一人のこしてそこらう志むるをなんともおもひたまはざるや。このまる命じてわれをたすけ志めよ。四一耶蘇こたへていひけるは。マルタよマルタよなんぢ多端により。ありひろづらひてこころづくしをせり。四二されどもとめてこのものみまぢきものの一つるり。マリアはまさる善業をえらみたり。こゝろ

まことより奪べからざるものあり

第十一章 耶蘇あるところにて祈禱をなすをやめたまへとときひとりの門徒いひけるに主よヨハネその弟子らに祈禱をおしへたまへるごとくわれらにもおしへたまへと耶蘇いひたまふ

いのるときかくいふべし。天にまします我らが父よ。ねがはくは聖名をあがめさせたまへ。聖國をきたらせたまへ。聖旨の天に成ごとく地にもなさせたまへ。我らの日ごとの食を毎日あたへたまへ。罪をゆるしたまへ。我らもまた我におひめある者をゆるしたまへ。我らを誘惑にあはせたまふことなかれ。惡より救ひいだしたまへ。

ざ〳〵たまへ。五 また彼らにいひけるは、なんぢらの中の〳〵
ある人よるふけてその友へゆきて、友よ三つのパンを
かしてよといふ
なんぢらのうちに供ふべきものなければなり。
六 我が旅路の友のこゝへきたりしに、
七 内よりものこたへて、煩はすなかれ、門はや閉ぢたれ
ども、子どもは我とともに牀にあれば、起きてあなたに
やるをえずといふものあらんや。八 我なんぢらにつげん。
その友なるがゆゑに起てあたへざれども、迫切にこふ
ればその需よところびおきてあたふべし。九 我またなんぢらにつげん、求よさらばあ
たへらるべし、尋よさらばあひ、門をたゝけよさらばひらかるゝことを
得ん。十 それすべて求むるものは得、尋ぬるものは遇、

を叩かんひらうるれがるう十るんぢらのうち父たるもの誰
うその子の餅をもとめんに石をあたへんや。魚をもとめんまそ
れよろこんで蛇をあたへんや十一卵をもとめんよ蠍をあたへんや十二
されが爾らあしきものるぶら善賜をその兒子よあたふるを
ある。まして天よいまをるんぢらの父いかとむるものよ聖靈を
あたへざらんや〇十三耶穌あゝるる悪鬼をおひいだしけるに。悪鬼い
でゝ瘖者ものいひしかば。人々おどろけり十四その中るるものいひける
は。れは悪鬼の王ベルゼブルによりて悪鬼をおひいだせるのみ十五まる
あるひとども耶穌をこころみんとて。天よりの異兆をもとめたり十六
耶穌そのこころをしりていひけるは。すべて國は

みろびこ。こぶひよこもれあこそふ家にたこるり丈。
づこらこもれあらそこそで。その國いうぞ立んや。それるんぢら
我をいひてベルゼブルによりて惡鬼をおひいぐせりこそ。十九
もれベルゼブルによりて惡鬼をおひいぐきこば。るんぢらの子弟
いこれによりて惡鬼をおひいぐそや。それこもこふるんぢら
の裁判人とるべし。二十もし神の指をりてあくきこを
おひいぐもたるこふば神の國いりそやるんぢらにきこれり
二十一勇士よろひきて邸をおりるときこ。その所有あんぜんる
り。二十二もしこれよりつよきものきこりて。それに勝ときこその
このみこせる鎧をうぞひ。その賦をこりるべし。二十三これとてりるこ

ざるのいでゝそむき。ゝもまことのよ斂ざるのいちら
まるり〇二四あくき人よりいでゝ早くるところをめぐり安
をもとむれどもえ得ずしてそのひけるに。つゐに出ゝ家にうへ
らん二五既よきくりしに。まきまゐり修飾るを見二六つひ
よゆきてあのまよりあれあゝき七の悪鬼をしたがへいり
てこゝに居む。その人の後のありさまはまへよりもあし
うなるべし二七この話をいふとき群集のあらそひ一婦こゝろを
あげていひけるやうなんぢをそらみつ腹とるんぢのまちひし
乳いさゐをひまり二八耶蘇こたへけるやう。然されど神の道を
きゝてそまもるものはさいはひなるかな〇二九衆お

〳〵あらはるゝとき耶蘇いひたまふ。いまの世はあしき世なり。もとめもとむるとも預言者ヨナの奇蹟のほかは與へられじ。三十そのヨナがニネベの人にあるごとく人の子はいまの世にあるべし。三十一南方の女王さばきの日よみがへりに起ていまの世のひとの罪をさばかん。その地のはてよりソロモンの智慧をきゝんとてきたれり。そこにソロモンよりあるいるものこゝにあり。三十二ニネベの人さばきの日によみがへりていまの世の人のつみをさばかん。かれらはヨナの勸言によりてくいあらためたり。それヨナよりあるいるものこゝにあり。三十三燈をともして隱處あるに

ひん外のあくにあくものるゐ。入きるものゝその光をみんなめよ燭臺のうへよあくるみり三身のあらりハ目るり。るんぢの目あきらうるゐ全身あるるゐ。その目あゐけれバるんぢの身もくらゐ三五故よるんぢよある光のくらうらぬやうつゝしめよ三六もしるんぢの全身あきらうにしてくらきところるくバ燈のうごやきてるんぢをてらすごとく全あきらゐるべゐ。○三七耶蘇うゝまるときあるパリサイの人ゝそのに食せんことを請ゆきバ。入て食につけり三八その食をるさきに洗ことをせざりしをみてパリサイの人あやしめり三九主これいひけるハ。るんぢらパリサイの人盃と盤のそ

とをきよくをせ。されどゑんぢら内に貪慾と悪とそみそう四
あそろるものよ。外をつくりしものいまし内をもつくらざりしや四ゑんぢら所有ものをもてそなごこせ。さすればゑんぢらのためよきてのものい潔まるるり四禍あるるうゑんぢらパリサイの人よ。薄荷芸香あよびまべてその野菜十分の一をとりをきめて義と神を愛まることとを廢。これあそるふべきことるり。それもまさまべてのらざるものるり四をざをひるるるる。ゑんぢら。パリサイの人よ會堂の高座。市上のあいさつをこのめり四ざをひるるるる。夫ゑんぢらうくれる墓のごとし。そのうへをあるくひとぐこれを

あらざるなり 四五 ある教法師こゝていひけるは。師よ、この言
ひたまふことをわれらもまた 四六 耶蘇 いひけるは。なんぢらもわざはひ
なるかな教法師よ。たへがたき荷を人にあたせ。みづから指ひ
とつをもその荷につけざる 四七 禍なるかな。なんぢらは預言者の墓を
建。なんぢらの祖いこれをころせり 四八 實よなんぢら祖のなせ
る事をこのむ證明をなせり。それはまづいこれを殺。なんぢ
らはその墓をたつ 四九 このゆゑに神の智いへることあり。わ
れ預言者および使徒をつかはさんにつきてはその中のある
ものをころし。あるものをせめくるしむべしと 五〇 創世よりこの
この一流にそのその預言者の血いこの代にあらそはさん

とまるるより五一まるでもヘベルの血より聖殿と祭壇のあいだにころされるザカリアの血までいくる。それ誠なるんぢらにつげん。これをこの代よたづねべし五二るんぢらわざわひなるかな。教法師よ知識の鑰をとりてみづからいらざるうへ、また入らんとするものをも阻めり五三このことをいふときに學者とパリサイのひとびとふかくいきどほりをふくみて多端のことをとひかけ五四その口よりいづることばをるうかがひとらへて訴んとしそうぞひそう

第十二章

その時數萬のひとびとあひふみあふばかりになりまでに。耶穌まづ門徒よりひはじめるんぢらパリサイの人の餅

だねをつくらめよ。これ偽善なり二それ掩藏てあらざるものなるべく隱瞞てあらざるものをるべし。ゆゑよ三なんぢらくらきにてのたまへることを明處にきこえべし。密室にてみゝにつきいひしことを屋上よりひろげべし四ちかき友よなんぢらにつげん。身體をころしてのち後になすをも為あたはざるものをおそるゝなかれ五それおそるべきものをなんぢらにしめさん。殺したるのちに地獄なげいるる權威をもてるものをおそれよ。それ誠になんぢらにつげん。これをおそるべし六五の雀は二錢にあらずや。されど神はそのひとつをもわすれたまはざるをや。なんぢらのこゝら

の髪まで皆ことごとく落る。ゆゑに汝ら愼めよ。汝ら
いかほどの雀よりも勝れたるなり。八また我なんぢらに
告げん。誰にても人のまへに我を表はす者は、人の子も
また神の使者のまへに彼を表はすべし。九されど人のまへに
我を認めざる者は、神の使者のまへに彼もまたこれを認めざるべし。十
また人の子に逆ひて言ふ者は赦さるべし。されど聖霊を
瀆す者は赦されじ。十一人なんぢらを會堂または有位および權
ある者のまへに曳いて行くとき、何をいひ訳せんと
あるひはいふべきかを思ひ煩ふな。十二その時いふべき言を聖霊なんぢら
に教へたまふべし。○十三ひとりの人より
ひとり耶蘇に

けるに、師。そのが兄弟よ遺業をそこそよといひさ
まく。耶蘇いひけるに人よ誰がそれをそこそるんおらの裁判
人きしく物をそりつかのとるをそ。ぞ十五耶蘇ひとびとにいひけるに。
こころしして貪心をつつしめよ。それ人のいのちは所蓄のゆたか
あるよいよらざるあり。十六またこれをうたへらよのたとりていひ
けるに。ある富人その田畑よくみのりけるに。
ひけるに。そが産地をきむるところなきをいろにぜん。十八また
いひけるに。我りくるきん。そが倉を毀ちさらに大なるをそそ。
またそこに産と貨をそそるをきむべし。十九こそて霊魂よむろ
ひ、こまのこひよ多年をまでをそなどのあるこのこころをめ

なれば安心して食飲なせ樂しめよといへんとなり
神これにいひけるは。愚なるものよ今夜なんぢが
ころこととあるべし。さらばなんぢのそなへたりしものは誰が
ものとなるや　三　あるよそあのれのために財をたくはへ
いて富ざるものは。このごときなり　三　耶蘇その門徒にいひ
けるは。是をもてなんぢらに告げん。なんぢら生命のために
なにをくらひ。身體のために何を著んとそあのひとら
らふるうれ　二三　いのちは食よりそふとく。からだは衣よりも
そふとし　二四　鴉をおもひみよ。稼をせず穡をせず
もくらなし。されども神はかれらをやしなふ。なんぢ

らの鳥のうちにふとききこといくだくぞや二五なんぢらのうち
誰かよくく思慮てそのいのちを寸陰ものべえんや二六さればそ
最小ことをもさらあとをぎるよ何ぞそのそをありひとびら
ふや二七百合花いかにしてそだつをあり。労をも紡がざるあ
り。ときれるんぢらにつげん。ソロモンの榮華の極のときさへにも
この花のひとつだにもよそほひざりき二八神そけふの野のあり
てあす爐よるべきを、らるゝ草をも如此よそほひたまふにいはんや
おしてるんぢらをや。あゝ信仰うすきものよ二九なんぢらなに
をか食るなにを飲んとてもとむるなかれ。まこと異邦人のもとむるもの
なれ。そはこれらのものを世界の邦人のもとむるものあるを

り、るんぢらの父にこれらのものゝるんぢらにあくてこのごとぬ
こゝろをある三一こゝ神の國をりとめよ。さらばこれらのものゝるんぢ
らへ加らるべし三ちひさき羣よおそるゝなかれ。るんぢらの父いよろこびて國をるんぢらにあたへたまはん三三るんぢ
らの所有をうりて施濟をのがらめよつねなふらびざる財布
まてのそらに盡ざるこゝろを天よそなへよそこに盜もちろ
よりもちかづきも蟲もそこなはざるなり三四るんぢらの財寶のあ
るところにるんぢらの心もまたそこにあるべし三五るんぢら
腰に帶し燈をともしてをれ三六主のしん婚筵よりこのくり
きたり門をたゝくをまちゐるごとくせよひらくんこゝちまつを待

ひとのごとくせよ 三 主人きこうしてその 微醒 ていこうと見る
いこの僕 かさいそひろう。 まことよろこばるんぢらにつげん。
主人みづからここに帯し まもべを食につかせてみそこれよ
供事まつて 三八 あるひは二更あるひは三更より主人きたりて
おらうのせうを見るぶこの僕 かさいそひろう 三九 るんぢらこれ
を志るべし。もし家のあるじ盗いづるの時よきてうかうを
志らをその家をまもりてやぶらをまじ 四〇 されぐるんぢら
もあらうじめそなへせよ。あめをぎるときよ人の子きたら
んとをもはざるより 四一 ペテロいひけるは。主よこのたとへはわれ
にいふか。またいまべその人にいふか 四二 主いひけるは。時よ

よびて食物をあてがひしめんために主がその僕どものうへに
おける忠義まことに智きことをなしたるを見らるゝ僕いさひ
きことをなしたるかごとくつとむるを見らるゝ僕いさひ
そのう四我まことにるんぢらにつげん。その所有をことごとく
らせべし四五もしその僕こゝろのうちにそのきみ
きたるいあそうらんとおもひ。その僕婢をうちつゝき食飲し
てうへ酒をのみそめんもん四六その僕の主おもはざるの日
おもはざるの時よきたりてこれを斬刑そのむくいを不信者
とおなじうせべし四七僕あるじのこゝろをしりるがら預備
せずまたはそのこゝろによりざるのわざをなしたることあるも

らん四八おらぜーそうるべきことをるぜーりのハ非うこともすくるうらん。おろくあくへらるうのハおろく求らるべーー。おろくあづくまぢこれようおろくのうもべーー〇四九とれ火ハ地よるげいまんうめよきてれう。それるよをう欲ゼでよこの火の燃うらんこととるう五〇我うくべきのバプテスマあう。その成らるうまぞいうぶいうこいうぞうぞ五一うとまい安全を地よあうこんとそきううとありふや。それるんぢらにつげん。おうらぢうへ川そ分争あむ五二のまよりのち一家よ五人あらぶ三人ハ二人よてきうこーー二人ハ三人よてきうふてうううるべーー五三父ハ子よ子ハちに母ハむをめに女ハをう姑ハ

そのよめる婦はその夫うとめよてきたりてともゝべし
五四 耶蘇また人々にいひけるは雲の西よりおこるを見ばすぐ
に雨ふらんとなんぢらいふまことにしかあり 五五 南より風ふけ
ば暑らんとなんぢらいふまことにしかあり 五六 偽善者よ
天地の色象をわきまふることを知りてこの時をわきまへざ
るとなんぞや 五七 また何ぞみづから公義をさだめざる
五八 なんぢ訟ふるものと共に有司にゆくとき途中にて心
をつくして彼より免れんことをのぞめよ おそらくは訟ふ
るものなんぢを裁判人に曳さいばんにんひきいたりさいばんにんなんぢを吏にわたし
吏なんぢを獄にいれん 五九 われなんぢにつげ

ん一銭しものこさずぞ償までいるんぢそこをいづることを得ざるべく

第二章 そのこゝろあつまりなるものゝうちにピラトゥガリラヤ人の血をその供物にまぜ〳〵こゝを耶蘇につぐるものあり耶蘇こゝへてゝ曰らにいひけるは。なんぢらこのガリラヤ人いかゞくのごとく害されゝゆゑよすべてのガリラヤ人よりもなほ罪あるものとおもひやこれるなんぢらにつげん。あらずなほなんぢら悔改めずばみなおなじくほろぶべし。シロアムの塔たふれて壓死されゝ十八人はエルサレムに住るまべてのひとびとよりもなほ不罪あるものとおもひやこれなんぢらにつげん。あらず

ぜるんぢらくゐあらざるあればこれをも
きりすてよ。なんぞ地をもむだにふさぐや。
かれこたへていふ、主よことしもこれをゆるせ、
われその周圍をほりてこえを糞まるまで
今年もゆるせ。もし結ばばのちよしこれを
斫べし。○十耶蘇あんそくにちなある會堂にをしへ
たまふ。十八年あにまとづらをされる婦あり。

其こゝも伸ることあるべからず。十三耶蘇これをうけよび。婦よ汝んぢはその病より免るゝなりとおきけまばたぐちるのびて神を讃美たり。十四會堂のつかさ耶蘇の安息日よいやしたることを怒。こゝろへてひとびとにいひけるは。事をなすべきの日六日あるまばその中にきたりていやされよ。安息日はせざれ。十五主うまにこゝへていひけるは。偽善者よ汝んぢらおのく安息日にもその牛や驢をとき厩よりひきいだして水をのまさざるや。十六まして此アブラハムの裔なるを十八年サタンに縛られたるその結びを安息日よりとく

べうらぎらんや十七耶蘇うくいひけれど。敵たふりのこる慚愧ぬ。まことひとびとこころそのるせ〳〵このことびけるきことをよろこべり十八耶蘇またいひけるく。神の國いかにるぞらへまたなにとくんや十九ひとつぶの芥種のごとし人これをとりそその園にまけば長生てあをいるる樹となり。そらの鳥そのえだにまもむるり二十またいひけるく。これ神の國をなにとくんや二十一餅だねのごとし婦これをとりて三斗の粉のるにうくせばことごとくふくれいだをるるり二十二耶蘇をへつ〳〵各城各鄉をまぎエルサレムにむひて旅だそり二十三あるひといひけるく。主よまことそるくものそ

少きころ 西耶蘇 こゝまでよひけるに、宮門よりこゝめる力をつくせ。こゝをゐんぢらよつぴん入んことをもとめてあさかぎるかめおろ 主家の主おきて門をとぢ〳〵のちにゐんぢらそとにたゝ門をゝてきて。主よ主よつれよひらけといそんよ主こゝへて。これゐんぢらに何處よりきたりしぞといもん云 おぼることきんこれらゐんぢのまへよ食飲ゐんぢまちこれらの衢よをしへたりしといひいださんよ主こゝへて。これゐんぢらにつぴん。いづくよりきたりしぞらおらぬ。こゝを悪をなすものよこれをされといそもん云 ゐんぢらアブラハム イサクヤコブおよびよべての預言者ハ神の國

まありそるんぢらゝ外にるげいぐさるこを見んときは
哀哭切歯まることあるべし〔二九〕まことひとゞ西やひがし北や
うるみよりきたりて神の國に坐まるるをん〔三〇〕それ後のも
のもさきなる先のものゝあとにるべし〔三一〕この日あるパリ
サイのひとゞきたりて耶穌にいひけるへロデるんぢを殺
さんとまるゆゑにこゝを離ゆけ〔三二〕こゝそいひけるは。るん
ぢらゆきてその狐につげよ。われけふあす悪鬼をおひい
だし病をいやし第三日にこのことををへらん〔三三〕されども今日
明日また次日もわれるゆくべし。そは預言者はエルサ
レムのそうよこゝろさることあらねばるり〔三四〕あゝエルサレムよ

エルサレムよ預言者をころしまたつかはされしものを石
にてうつものよ。母鶏の雛をつばさの下にあつむるごと
くつねにわれなんぢの赤子をあつめんとせしことしばし
ばなりしかどなんぢらこれを欲まざりき 三五 みよなんぢらの家を墟とこそ
のこしおかるべし。まことなんぢにつげん。主の名によりて
きたるものは福なりとなんぢらいふときいたるまでは
われを見ざるべし

第十四章

耶蘇あんそくにちよ食事のためあるパリサイの
人の家にいりしに。人々われをうかがひしより。そのまへに腹脹
をわづらひゐる人ありしかば 三 耶蘇こたへて教法師とパリサイ

のひとびとよいひけらく。安息日よいやをこととよきやいなや。
ㅁ
ときに默然たり。耶穌その人をとらへ醫してこれをさらし
めたまふにころくそいひけらく。なんぢらのうちこれら
驢あるひは牛ゐどの阱にあちこちらんとき安息日なればすみ
やかに曳出さざるや。ここの言につきてこたふることあたはざりき。
○七このくそその席にまねかるるひとびとの首位をえらぶを見て。耶穌こころにいひけるは。
八なんぢ婚姻にまねかれんとき首位に坐することなかれ。おそらくはなんぢより尊人まねかれゐんぢ九かれとなんぢを請しものきたりてこの人に坐をゆづれといはんさ

らばるんぢ まちぢて末位にゐくべし十このゆゑにるんぢ請
きんときいゆきて末位よ坐せよ。まねきしものきたりて
友よ首位にすすめとるんぢにいそぢ同席のものへに
るんぢこふとまるべし十一おのれをみづから高ぶるものの
い卑されみづからへりくだるものたかくせらるべし
十二まこうまを請るものにひけるな。るんぢ午餐あるひ
い晩餐をまうくるとき朋友兄弟親戚まこうめら鄰のひとを
まねくるうれ。おそらくいうれらもまこうるんぢをまねきて
その報答をるさん十三るんぢ筵をるさぢ貧乏廢疾跛者瞽者
るふをまねけ十四さらばるんぢ福るべし。そいこのれらいる

んぢら報ことあるまで。ただしきひとびとの復生らんその時
なんぢにむくいあるべきを。十五ともに食せるものの一人これ
をきゝて耶蘇にいひけるは。神のくに食まるものはさいはひ
なるかな。十六耶蘇これにいひけるは。ある人おほいなる筵をまうけ
て多賓をまねけり。十七ふるまひのとき僕をその請ぜるものに
いひつかはして。まねきしものの既そなはりなればきたるべしと
いひせけるに。十八かれらこぞりておのおの辭まうす。その一ぴきめの
ものの彼にいひけるは。われ田地をかひしかばゆきて視ざるをえず
ねがはくはわれをゆるしたまへと。十九また一人のものいひけるは。
われ五耦の牛をかひしかればこれを試ざるをえず。

ねがいくそれをゆるしたまへ。三まことひとりのものいひけるかゞ。それ妻をめとりたり。このゆゑにゆくことをえざるなり。三かの僕かへりてこのことを主につげしまゝ。あるじ怒てそのしもべにいひけるは。そこゆくに邑の衢巷にゆきてまづ貧きものと。うまれつきたるものと。あしなへ。めしひ。などをこゝへつれきたれ。三僕いひけるは。主よ命のごとくなせり。されどなほあまりの坐あり。三主しもべにいひけるは。道路や籬離のもとにゆき強てひとびとをつれきたりわが家をみちたらしめよ。三それ汝らにつげん。その請きたるひとびとのひとりだにわが餐をあぢはふものなし。○三五おほくのひとびと耶蘇とともにゆきしが

耶蘇こゝろみてこゝろまうけなきこゝろをいひけるは二六まことによく我なきこゝろをもてその父母妻子兄弟姉妹またおのれの生命をもにくむわしのにあらざれば門徒となることをえず二七またおのれの十字架をおひてわしにしたがはざるものもわしのでしとなることをえず二八それなんぢらのうち城をきづかんとおもふ者あらばまづ坐してその成就るまでの足やいなやを計ざらんや二九あそこ基をすえてこれをなしあくまでをはたすに見ものこゝろあるあざけりてひ三〇この人は築ゐをはりてをはたすことあたはざりしといはん三一また王いづこにゆきて他の王と戦をんとするまづ坐してその一萬人をもてそれを二萬人の敵をむかへうやいなや籌ざらんや三二あらずば双方

べ敵を赦へさせ、まらしこきこの使をつらそうして和睦をもとむ
べし。さればらくめでたくるんぢらその所有をことごとく
まそぎうりめんつぐ門徒となることをえざるなり。
なんぢらもし志和その味をうしなはゞ何をもてこれに
味をつけんや。田にまきの糞にも益なく外へなげすてらるゝのみ。
耳あるものはきくべし。

第十五章

さて税吏と罪あるものどもの耶蘇にきたりてその
ようを聞ゝにパリサイの人と學者ともつぶやきていひけるは。
この人はつゝあるひとにまじりてともに食せり。耶蘇その
譬をときていひけるは。なんぢらのうち誰も一百

の羊あらんにより〳〵その一をうしなふそ九十九を野よおきてさてそのうしなふひ〵羊をうるまでたづねざらんや五うづね得ばよろこびてこれをおのれの肩にうけ六家よびきたりてその友とその鄰のひとびとをよびあつめていふ。ともによろこべ我うしなふる羊をえうるまでたづねるり七我なんぢらにつげんうしなはざる九十九の義人よりもかかる悔あらたむるひとりの罪人くいあらたむるぞ悔あらたむるをおふかぶざる九十九の義人よりもかかる悔天よおのそおろそびあらん八また婦のうちもとる金銭十枚をもちその一枚をうしなはんか。燈火をともして室を掃除し〳〵これをうるまでねんごろにたづねざらんや九うづねえばその友とその鄰

のひとびとよびあつめていひけるは。
ふしぎなるかな金錢をえることあたはざるうへ十ぶんにつぐなふべきつみびとのごとくひとりの罪人のごとくあらはれたるが神の使ひまへにさうらひあるべし〇十三またいひけるは。あるひと子ふたりありしそのあとなるもの父にいひけるは。父よわがうべき業をわれにわかちあたへよ。父そのあんだいをふたりにわかちあたへたり。十四幾日も經ざるにあとなるものすべてをとりまとめて遠國へたびだちせしが其處にて放蕩にてその分資をうしなひ盡せり。十五すべてつひやしたるとき。あたりにおほきなる饑饉ありて彼ともしくなりそれゆき

その地のあるひとに身を投ぐ。その人ぶたを牧ふために
を野につかはせり。十六ぶた豕の食ふところの豆莢をもて
ふ腹をこやさんとありふるどもこれをもものもなかりき。
る人ふたたみづから省悟ていひけるは。父のところの食
物あまれる傭人のいくだくもあるにわれ飢てしぬべし
と。十八起て父のもとにゆきていはん。父よわれ天とあなたの
罪ぞとにむかひまた十九あなたの子とととなふるに足ざるものなり。
ねがはくはあなたの傭人のひとりのごとく我をなしたまへと。二十
ここに起てその父のもとにゆけり。なほ遠くありしにその父これ
をみて憐み走りよりてその頸をいだきて接吻す。二十一子

ちくよひひけるに。父よろこび天とるんぢのまくの罪放をうし
なひをるんぢの子とをるのみならにそうざるなり三父そのきも
べどもにいひけるに。いとも美服をもちきたりてこれをきせ。
その指に環をそめ。そのあしに履をはかせよ三まこと肥たる犢
をひきたりて宰き。ともにら食しそしてうかん二四これを
ど子死なりてまた生たるひそまた得たるをぶるひそれらと
ともよろこしみをしむ二五その兄田にありしがうへり
て家にちかづき樂と舞のおとをきき二六その僕のひとりをよび
てこれ何ごとぞとたづぬるに二七きたりしひけるに。るんぢの弟
きたりとろへりなり。父まるくうをえそうしたようそるんぢ

が父にこえくらう犢をほふりさるより二八長子いりて入ぞ。このゆえよその父いぞうれをもめしぶ二九父にこたえていひけるぞ。それ多年るんぢにつえていまぶるんぢのいましめにそむきぬぞ。されどもそぶ友とさのーむさめる羔をものあえくーことるーさうろ三〇妓のさめよるんぢの業をつもゆーたるこのるんぢうさくれをこれぶうめに肥うることうーをろよまり三一父それにいひけるぞ。子よるんぢらつねとそれとそのにあり。まろぶ所有いろるんぢのものるり三二るんぢのあこうろと死てまろぶ生うーるふてまろ得うぶゆるよろ称うよろこびて樂むら當然のことるり

第十六章　耶蘇　その　でー　に　いひける。ある　富める　ひと　に　ぜん
とう　あり　けるが　主の　所有を　つかさ　どる　もの　を　主人　へ　うったく　られ　二
主人　ぜん　とう　を　よびて　いひける。なんぢ　に　つきて　そ　つぐ　きく
たる　こと　を　何ぞや。なんぢ　もはや　なんぢ　を　ぜん　とう　とする　こと
れなっ　その　會計　たる　こと　ごと　を　つくれ　よ　辭　よ　三　ぜん　とう　こころ　づ
らあり　へる。主人　そ　ぶ　やく　めを　とり　あげる　ぶ　なら　を　ぬき
ん。それ　鋤　を　とる　の　力　なく　施　を　乞　ん　そ　ぶ　ろ　しく　四　我　やく　め
を　とら　ら　ん　とき　に　これら　の　家　よ　むかへ　らる　べき　所　為　を
志　ら　ん　と　そ　五　つ　ひ　よ　あら　ご　の　負　債　人　を　こと　ごと　く　よびて
その　そ　ご　めの　ものに　いひける。なんぢ　そ　ぶ　主に　おやく　き

いるそうどあるや六ここへそいふ油百斗ありうまたにいひけるん。なんぢの券書をとりいそぎ坐して五十とこのけよまさ一人にいひけるん。なんぢの負債るよそどあるや。ここへそいふ小麥百斛ありうまたにいひけるん。なんぢの券書をとりて八十とうけよ八あるいその所為のふくみるによりてこの不義あるをんとうをほめたり。それこの世の子どもらいこの世よりおのその光明の子どもらよりもものごとも巧みりんちらにつげん。不義のふくろをもちて朋友をえよ。こいとりいうらんときうまもらるんぢを永遠宅よむうんがうめるり十小事よふしきりのい大事よもふしきりの小事

よくしらぬものの大事なもくでしらぬ士ゆゑよも
しるんぢら不義のこころにくでしらぬぞ。こもろまこと
との財をるんぢらにあづけんや士るんぢらもし一人のものの
不義るりば。こもろるんぢのものをるんぢよあくんや士
一人のあるじの主人よつるることあくそず。それこ
まを悪こうれを愛し。あるひはこれを重んじうまを輕
んぢれぶるり。るんぢら神と財よねつるることあくそ士
慾ふるきパリサイのひとぐこのことをきくて耶蘇をあざけり
うり士耶蘇うまらにいひるる。るんぢら人々のまくよこそ
うらを義とまるものるり。されども神をるんぢらの心を

まことに汝らに告ぐ天地の過ぎ去らんことは
律法の一畫の落つるよりも易し十八凡そ
その妻を出して他のものを娶る者は姦淫を行なうなり
また夫より出でされたる婦を娶るものも姦淫を行なうなり
十九ここに一人の富める人あり紫袍と細布とを着て日々
華やかに宴楽しをりしが二十ラザロといふ貧者ありて
その門に臥され二十一その食卓より落つる餘屑を
食はんことを願ひをりまた犬きたりてその腫物を

を舐ぬ三 まづしきもの死よろこびて天のつかひらにたよりて
アブラハムの懐よりあくられ、富人も亦よそうむりれ
が三地獄よりあげそその目をあげ。そのときにアブラハムとその
ふところろよりあるラザロを見て二さけびいひけるは父アブラハム
よわれをあはれみてラザロをつかはしてその指のさきを水
よひたしてわが舌をひやさしめたまへ。われこの火燄のなか
にくるしめばるり三五アブラハムいひけるは。子よ汝はいきて
りしときよき物の福をうけ。またラザロはその苦をうけ
たりしことをおもへ。いまかれの慰められ汝はくるしめら
るり二六またこれのみならず我らとなんぢらとの間に

まるとも云ぶ。彼よりこれらにもそこらんとまるとも得ざるごとくまたらとるんぢらとの間ごよ限ありまてくるあるいある淵あり二ここへけるへ。さらば父よねがもくいるみ父の家へラザロをおくりたまへ二八そはわれよ五人の兄弟あり。まるこまたらぐこの苦のところへきるさらざるためよラザロを證據よるさ〜めよ二九アブラハムいひけるへ。こまたらよハモーセと預言者あまぐこまてよきくべし三〇こへけるへ。あらず父アブラハムよの〜死よりこまたらよゆくものあらば悔改べし三一アブラハムいひけるへ。の〜モーセと預言者よきこまぐばこともし死よりよみがへるものありともその勸をうけざるべし

第十七章 耶蘇でーよいひけるやう。贖さるゝことのあるうべきさるらん。そをきくときものや禍あるうるこの小子のひとりをつまづかするよりや磨石を頸よりけられて海よるげいをらるまんこと。その人のためよからうべし三ごうゝらを謹慎よ。もし兄弟あんぢを罪犯をうきさべこれを諫よ。うれもし悔るをゆるせ四もし一日よ七次つみをるんぢにをうして一日よるゝたびるんぢにむうひうれ悔といそぐゆるさべし○五使徒主よいひけるやう。うれらゝ信をまさせよ六主いひけるやう。あんぢらもし一粒ほどの信あらばこの桑樹よぬけて海よ植きといふともあんぢらよあさごのべし七誰うるん

ごらのうちにあるひと耕あるひと獣を牧ふものあらんよ
りて田よりかへりくるときわれすみやかにきて食へといふものあら
んやかへつていそぎわが食をそなへよごれ食飲をするま
で帶をしめつかへて後なんぢくひのむべしと僕あ
るじの命ぜしことにおごべくして主にまよ謝をべきや
ごとくわれもありくて命ぜられしことをなしをへたるのち
なんぢらもつとまらの無用のわりべきことをなしたる
ものといへ十二耶蘇エルサレムよりゆくときサマリアとガリラヤの
うちをとほり十三ある村よりいりしとき十人の癩者ありて
うちよりあひそろひて聲をあげいひけるは十四師耶蘇

よつれらをあそまてたまへ十四耶蘇これを見ていひけるは。
ゆきてあめれを祭司よみせよ。うまらあくうちよ潔られさ
り十五そのひとり己がいやされたるを見てくへりきたり大聲
よ神をあがめ耶蘇のあしのもとにひれふして謝せり。
うまらサマリア人なり十六耶蘇こたへていひけるは。きよめられし
ものは十人よあらずや。その九人をいづくにあるや十七この異
邦人のほかに神をあがめんとてかへりきたるものあらざるや
十八またこれにいひけるは。起てゆけるんぢの信仰るんぢをた
すくへり。十九神の國はいづまの時きたるやとパリサイのひと
よとそれにまへ。耶蘇こたへていひけるは。神のくるをあら

それてきくるものにあらず二〇此はこゝよと彼はそこよと人のいふべきものにもあらざるそれ神の國はなんぢらのうちにあり
三一まて門徒よいひけるは汝ら人の子の一日を見たくあるも
ふ日きたらん。さまたもこゝぞるべし三二人々なんぢらにみよ
あそこよみよといはん。さまたもの徒ゐるなれをくゝぞふるな
三三それ電光の天のあるさよりひらめき天のこるこにひろ
るごとく人の子もその日にらくあるべし三四されど人の
子うるらをまづおゝくの苦をうけ、まこの世の人よまそ
らんぬん三五ノアの時よありしごとく人の子のときにも志
かあるべし三六まるそちノア方舟よいりしより日まで人

食飲嫁娶などおこたりしが洪水きたりてうきたらをあらはせり天まこと口トの時なもろくありき。ひとびと喰飲貿易樹藝構造などおこたりしに二九口トソドマよりいでたり日天より火と硫黄をふらせてうきたらをことごとくあらはせり三十人の子のあらんかぎり日にもまことにのこりあるべし三その日まで人いくのうへもあらばその器具いくつもあるともこれを取んとそこくぐるるかれ。まこと田畑よあるりのもあるべしくくるるかれ三四口トの妻をあり人三三あるよそその生命をたすけんとまうすものいこれを失ひ。もしその生命をうしなはんものいうれを保全べし三五ひとをあんぢらにつげん。その夜ふたり同床

あらんや一人かとらるべし三五ふたりの婦ともに磨ひきさらんに一人かとらるべし三六うまらにいひけるは屍のあるところにはまた鷲あつまらん

第十八章

耶蘇また人のつねによりて懈怠まじきことをうまらにたとへをもてかたりけるは二あるまちに神をおそれず人をもかへりみざる裁判人ありけるが三その邑にやもめをりてしばしばかれのもとにきたりわれをうつたへよといひけれども

かれ久しくうけがはざりしがのちおのれ心のうちにおもひけるは。われ神をおそれず人をもかへりみざれど五こ

の数(かず)これをつづらいせをうまづ絶(たえ)ざきうんこれを聞(きく)
きづるこめよこきをまくそん六主(しゅ)いひける不義(ふぎ)みるさらい
むんなんのいひこうをきけ七まこと神(かみ)を晝夜(ちうや)いのらこと
このえらびきものをみづく忍(しのぶ)ともつひまそくそざんん
やへこれるんぢらにつぼん。神(かみ)いまそゆるよりまらをまくく
もん。されど人の子きてらんとき信(しん)を世にみんや〇九そのた
こづうら義(ぎ)とあめん人をろこむるあるりのよ耶蘇(いえす)この
こと人をおくきり十二人いのらんとて殿(でん)なのぢりくがらそのの
ひとりいパリサイの人ひとりい税吏(ぜいり)ありき十パリサイの人こもて
こづうらろくいのまり。神(かみ)よこれい他(ほか)のひとのごとく強盗(ごうとう)

不義、貪慾、姦淫をまことのごとくにもあらざるを
謝まし十二
これ七日間よふつゝび禁食し、ぜんまいべそらるものゝ
十分の一をさゝげをり十二税吏はるかにたゝずして天を
もあふぎえず胸をうちて、神よ罪人なるわれをあはれみたまへと
いへり十四これなんぢらにつげん、このひとかのパリサイ人よりも義と
せられて家にかへりたり、それすべてたかぶるものは卑くせらるべし
ものを卑くするものは高くせらるべし、十五耶蘇
よさわらんがために人々をさそのもとにつれきたりしに、門徒ども
これをいましめたり十六耶蘇をさそのもとによびて門
徒にいひけるは、嬰孩をわれよきたらせよ、われらを禁るな

るうれ神の國にえるものいこのくのごときものるり十七まこ
とにるんちらはつげん、おほよそ聞安貧のごとくに神の國
をうけざるものいこれを入ることをえざるり、十八ある学
こうていのひけるか、善師よこのぎりるき生を嗣ぐめにそれ
るこころをのをべきろ十九耶穌うまにいひけるかいるんぞそれを
善こいめや。一のみうに善者いるし。よそるそれも神るり二十
誡いるんちら知ところなり。姦淫まるるうを殺るうれ竊るうれ
妄證をうつるるうを。るんぢの父と母とをうやまへ二十一こくへ
けるいうれこるつとが幼よりまもれっものるり二十二耶穌これを
きくていひけるかいるんぢるお一ひとつを缺。その所有を

ことごとくうりて貧者(まづしきもの)にそゝげ。さらば天(てん)に於(おい)て財(たから)あらん。
おろかにてきたり我(われ)にしたがへ。二三 これあるひは富(とめ)るものなるゆゑ
にこれをきゝて甚(はなはだ)うれひとゞまりぬ。二四 耶蘇(いえす)そのいたく憂(うれ)へ
たるをみていひけるは。とめるものの神(かみ)の國(くに)にいるいかに難(かた)きや。二五
とめるものの神の國にいるより駱駝(らくだ)の針(はり)のあなをとほるをかへ
つて易(やす)し。二六 これをきけるものどもいひけるは。さらば誰(たれ)
かすくひをうることをえんや。二七 耶蘇いひけるは。人(ひと)のなしえざる
ところも神のなしうるところなり。二八 ペテロいひけるは。ごらん
ませ一切(いつさい)をすてゝなんぢにしたがひまつりぬ。二九 耶蘇(いえす)かれらにいひ
けるは。まことになんぢらにつげん。あるひとよ神の國(くに)のゆ

めよ家あるひは父母あるひは兄弟あるひは妻あるひは兒女をさうるものは今世にて幾倍をうけ來世にえいごうをうけざるものなし〇三耶蘇おのれの門徒をとりまきてこれらにいひけるは。それらエルサレムにのぼる。人の子はいて預言者のあらされしことは皆とげらるべし三それは人の子は異邦人にわたされ戲弄くるしめられ唾せられ鞭撲てころされころされん。また第三日によみがへるべし三門徒この語をさとることなし。またこのいふことは彼らに隱れり。またそのいふ言をあらざりき〇三五耶蘇エリコにちかよれるとき。ある瞽者

みちの　このそうに坐して乞ふるまゝ　三六 大衆のまぐるを
きゝてこれるにごとぞといひけるびひとゞ ナザレの耶蘇の
まぐるるなりと告ぐ 三八 瞽者よをゝりいひけるは。ダビデの子耶蘇よ
つゝれをあはれみたまへ 三九 さきごとゆくのゝども默止とこ
れをいましむまたゞもまゝゝダビデの子よゝれをあはれみ
たまへとよばゝりたり 四〇 耶蘇こゝにとゞまりうれをつれきた
れと命じ、瞽者ちかよりけるび 四一 耶蘇うれにとひけるはなんぢ
つゝれよ汝のをを為られんとねがふやこゝにいへる主よ見ゐ
んことをねがふ 四二 耶蘇うれにいひけるは。見ることをうけよ
なんぢの信なんぢをすくへり 四三 うはちやうて見え神をあがめ

て耶蘇よきたらひぬ民こぞのこれを見て神をほめうた

第十九章 耶蘇エリコよりてまぎやくときニザアカイといふる人あり税吏のうちにて富めるもの三耶蘇をしらんと為る人なれども見んとあるに身量ひくくゆゑに大衆るるをえずて見ることをえざれば四これを見んとてさきにゆき桑樹よのぼりぬ耶蘇そのみちを過んとするゆゑなり五耶蘇ここにきたりあふぎてこれを見いひけるはザアカイよいそぎくだりてこれ今日ぞなんぢの家にやどらんと急いそぎくだりよろこびて耶蘇をむかへたり七衆人これをみて怨言いひけるはわれはゆきて罪ある人の客となるぬと八ザアカイたちて主

よりぶ所有の半をまづしきものにあたへん。もし
訟て人よりとりたることあらば四倍ましてこれをつぐ
のふべし。九耶穌いまにいひけるは。今日この家まく
ことを得たり。そはこの人もアブラハムの裔なればなり。十それ人の
子いらしめんためにきたれるなり。十一衆
この言をきけるときまた譬をまうけていへり。こはエルサレム
よりちかくしてひとびと神の國さつちに顯明べしとおのれおも
ふゆゑなり。十二ある貴者こづら領地をうけそくらんとて遠國
へゆくとき。十三十人の僕をよびてそのもとに金十斤をあたへ
ていひけるは。もどくるまで商賣せよ。十四その國民うまをう

らうて あらまり使をつかはし のひけるは。それらこの人を王とまることをこのまぬ十五領地をうけてうくるまじきときゝあのくにあらうがいしてるよそぢの利をえさうらうをもらうんとて金をあくるにあきてる儕どもを召と命じぬ十六そじめの一人きたりていひけるは。主よるんぢの一斤は十斤の利をえさうり十七主人のひけるよし善僕よるんぢいつもづうのものよ忠るゆゑ十の邑をつかさどるべし十八まさつぎの一人きたりていひけるは。主よるんぢの一斤は五斤の利をえさうり十九主人のひけるは。るんぢも五の邑をつかさどるべし二十まさ一人きたりていひけるは。主よるんぢの一斤いこゝにあり。これ手巾よつゝみて

藏おきたりき三そいゑんぢ嚴人ゐろぶゆゑよりそれおそれり。ゑんぢ置ざるものをとり播ざるものを穫ひとゑまぶるり三主人いひけるゑ。あゝしき僕よそれゑんぢの口よりてゑんぢを鞫へし。ゑんぢそれ〻嚴きものにして置ざるものをとり播ざるものをうるとおる三おるに何ぞとぶきうるときに本と利をこゑんがこゑめよそが金を為替坐よあづけざりしや。而遂よろこゑそこに立るものよいひけるゑ。この一ひとの一斤をとりて十斤のそるものにあるこよ二五ひこぐ主人よいひけるを。主よその人まぞに十斤をのそり二六主人いひけるゑ。それゑんぢらにつぢん。それものゑものゑあるこへられ。

のさねものの、その所有ものまでもとらるべし。二七そのさが敵まうみそもち、そが支配をこのまざるものをここよつまきたりてそがまへにころせ。二八耶穌このことをいひをはりて衆をさきだちてエルサレムにのぼりたまふ。二九揖攬とるづくる山にまうでたまへるとき、ベツパゲとベタニヤにちかづけるときその門徒ふたりをつかはしきんとていひけるは、三〇對面のむらへゆけ。彼處にいりたる人のいまだ乘ざるところのつるぎたる驢駒をあるべし。それを解てひきたれ。三一もしなんぢらにものいふものあらばなにゆゑ解やとこたへものあらばくるにはべし。主の用あり。三二奉遣たるもののゆきけるに。

遇ぬ 三 うまごら驢駒をとくときその主どもらまらるるんぞ驢駒をとくやといひゝらば 四 こゝろえて主の用ありといひて 五 これを耶蘇のもとにひきくだり。あのが衣をろそのこらあき耶蘇をそのうへにのせ 六 耶蘇ゆきけるとき衆そのこゝろもを路上にしきぬ 七 耶蘇エルサレムにちかづき撒欖山をくだらんとまちうときに大衆のでしらるよろこびその見しところの奇跡ゐるまべてその能によりて大聲に神を讃美ていひけるは 八 主の名によてきたまへる王をさいそひあり。天にあのそらに和平に。いとたかきところまた榮光あるべし 九 あるぜいのうちよりあるパリサイのひと耶蘇にいひける

へ。師よるんぢの門徒をいましめよ。
ペテロこたへるんぢにつげんこの輩もし默止るべ
ば石さけぶべし。
またそのちかづけるころ城中をみそこなげきかなし
ひけるが。
いひけるは。もしもし。るんぢらにも今このるんぢの日にあり
てるんぢの平安よこのことをあらぞ福なるにいま
るんぢの目よこれをかくせり。
るんぢの敵るんぢのまはりに壘をきづき四方よりこのこもみせめ。
るんぢとその中なる
児女をうちたふし石をも石のうへなのこさざる日きたらん。これるんぢその眷顧なきよの時をあらざればなり
耶蘇こゝにいりそのうちまで賀易せるものをおひい

ざー哭ゐれらにいひけるは。我がいくそ祈禱の殿ゐりと志るされうるにゐんぢらこれを盜の巢とるをり哭耶蘇日ごとに殿ゐそなしふ。祭司のとき學者たらの尊者どもゐれを殺んとそゐれども民うるこころをくうゐけそのをーふをきけうがゆゑよ哭るをべきうをを志らざりき

第二十章

そのころ耶蘇こゃまそ民衆をしへ福音を宣ーよ。祭司長學者長老とゐたちうより耶蘇よこのうりていひけるは。うの權威をゐもそこのことをるをもう誰がこの權威をあうえたるうをもらよつげよ。三こうえていひけるは。我をも一言るんぢらにとそん。まうされよつげよ

四ヨハネのバプテスマも天より乎人より乎五
われらにいひけるが。もし天よりといへばさらばなぜわれを信ぜざりしやといへん六もし人よりといへば民ことごとくヨハネを預言者と信ずるをもてわれらを石もて撃んとすればなり
七ていづれよりきたるとしらずといへり八耶蘇われらにいひけるは。われもまたなにの權威をもてこれを爲すをなんぢらにつげじ〇九またなんぢこのたとへを民にのべたり。
あるひと葡萄圃をつくり農夫にかしてながく他國へゆきぬ
十期いたりければ葡萄の果をうけとらんために僕を農夫のもとへつかはしけるに。農夫どもこれを撲ち

さきに むるしくうへらせくり十一まる他のおうべをつかはせしにこれをもうちたゞき辱しめてむるしくくうらせさり十二また三次おうべをつかはせしにこれをも傷てあしいぶしけをぶ十三ぶだうむうけの主いひけるはいかにせんまぶ愛子をいかはせべしこれをみそ恭敬るくうん十四農夫どもこれをみそうぶひよ議いひけるは。これが嗣子るりいざうまうこうさん業をうれらのものにるうべしとそ十五これを葡萄園のそとにいだしそ殺せり。おうらが葡萄園のあうじいかにうまうらを處べき哉十六彼きうりてこめ農夫どもをおろぶしぶだうむうけを他人よあぐくべし。

人々これをきゝていひけるは然ハあらざる十七耶蘇ハ
をゝそいひけるか匠人のすてゝる石これらそ屋隅の首石
となれこれハきれしことなんそや十八この石のうへにあるも
のハ壊るの石うへにあるまてそのものゝこゝろくべし十九祭司
のかしら學者どもそのあのれをさしてこの譬をこのうたる
をしりこのとき耶蘇をとらへんとせしかども民をおそれたり
ゐてさりぬ二十さてかれをうかゞひその言をとりて方伯
の政事の權威よりさんとしてみづから義人といはれる
三偵者をつかはせり二一就て耶蘇にまひけるは師よなれら
るんぢの言とゝろをしりまことの正しのりこのよらに

誠をりて神の道教をしめるを志る二三
それら税をカイザルよ
をくるむるは宜やしる二三耶蘇その詭譜るるをありていひける
いるんぞ我をこころむるや二四デナリをそれに見せよ。この像と
號へられるるる。こたへてカイザルのりといふ二五耶蘇いひける
へ。きらをカイザルのものはカイザルにをうめ神のものは神
よをきめよ二六うまら民のまへにその言をしうえざうの
そのこたへを奇とおもひて默然なる○二七復生こといるしと
いふサドカイの人きたりて耶蘇にとひける二八師よモーセそ
きらに書あける。もし人のきみうだい妻あり。子るく
して死るば兄弟その妻をめぐり子を生てその嗣をつぐ生

べし二九さるほど七人の兄弟あらんに長子つまをめどり子
なくして死ぬ三〇ざい二のものこの婦をめどり子なくして
死ぬ三一ざい三もこれをめどり七人ある[illegible]くこれをめどり
子なくして死ぬ三二つひに婦も死ぬ三三さらば七人ともにこ
の婦を妻とせしゆゑに復生だるときそ誰の妻とかな
べきぞ三四耶蘇こたへていひけるは。この世の子はめどりとつぐ
ことあり三五この世にいり死より復生よみがへるものは娶嫁
ることなし三六これまた死ることあたはざるがゆゑなり。そ
は天の使とひとしく復生の子まそ神の子なればなり
三七さて死しりのよみがへることについてはモーセ棘中の

篇に。主をアブラハムの神イサクの神ヤコブの神といひてこれをあらはせり。三八それ神いきたるものゝ神よあらず生たるものゝ神なり。そは神のまへにみな生るものなればなり。三九その學者どもこたへいひけるは。師よよくいへり。四〇これのちあへて耶蘇にとふものなかりき。〇四一耶蘇かれらにいひけるは。どうしていふをればキリストをダビデの裔といふや。四二四三ダビデこづから詩の篇に。主わが主にいひけるは。われなんぢの敵をなんぢの足臺とするまでわが手のうぎに坐せよ。といへり。四四されバダビデこれを主とするにいかでその裔ならんや。四五民ことごとくこれをきけるときその弟子

るん長服をきて あるくことをこのみ市上にて人のあいさつ會堂の高坐ふるまひの上坐をよろこぶ學者をつゝしめよ彼らもとらを發をんみの家をのこ。いつそうそるがき。祈をそのまゝ。罪せらるることもつともあり〳〵

第二十三章

耶穌目をあげ富るひとびとの捐輸をさゐせんぞこ
ういふを見る二まづしき發婦のレプタふたつを
いれてるをみていひけるは三つまこと誠にるんぢらにつげん。こ
のまづしき發婦はそのものよりも多くいれたり四そ
もそもこのその義餘あるところより神のをきあもの
にいれ。このをんるん不足ところよりそのしんざいをこ

とぐくいまたれぞ〇九まことあるひと殿の美石と奉納
ものをもて修飾ることをうたりしよ〇六耶蘇いひけるは。
なんぢらのごときところのもの石と石のうへにものこさずくづ
さるる日いたらんとうまらとかていひけるが。師よいづれのと
きこの事あらん。正またこのことのきたらんときいかなるか兆あ
るや。八耶蘇いひけるが。なんぢらつつしみてまどはされざるこ
とを愼れ。それおほくのものわがなを以きたりてわれはキリ
ストなり時はちかよりたりといはん。さればどなんぢらあとをふ
するなれ。九戰爭をきくときおそるるなかれ。これらのことの
さきにあるは止をえざるなり。されどすぐに末期にい

まゐまそこやうるらぞ十まこいひけるい。民いこみをせめ國いくにくをせめ十一各處よおゐいるる地震饑饉疫病あいてう。まるおそるべまこいこあゐいるる異象天よりあらそうべし十二このことまり先よひとぐるんぢらをとらへ當君迫害堂および獄よさしう。ろぶ名のるあよ王および侯のまへるひきゆくべし十三さまらどもるんぢらがこの事よあゐい證とるるるり十四ゑまるんぢら先るにをこころくんとおりひそろるまじきこころを心よさだめよ十五そいまべそるんぢらに依まそ。ものゝ辯駁まこ敵對らるをるこえざるべきロと智とをつれるんぢらにあろくん。まるるんぢら父母兄弟親戚朋友るどより

ることを。ゥつるんぢらのうち或いくらさるべし
ころ名のこあよひとびとよ憾まん十六さまざまもるんぢらの首髪
ひとまもぢもらしるをじ十九るんぢら忍耐てその生命をま
つとうせよ二十るんぢら軍勢にエルサレムのこのこまるこをみるひで。
その亡ちうきよあると志を二十一その時ユダヤよをるものの山よ
のうれよエルサレムよをるものいぞよ郷下にをるもののエルサレム
はいなるうれ二十二これ刑罰の日まこしてあるされたることのみ
ま應このつ日るう二十三その日まの懐孕と哺乳者をつぎをもる
るうる。これ地よあるひるる災ありて怒この民よあよぶ
べけまだるう二十四ひとびとカ刃まこるれまことらされて諸

國よひろれエルサレムを異邦人の時みちるまでふみにじらるべし
二五 日月星は異象あるべし。地の上の諸國の人
躁躍るべし海と波との瀰漫よりて
かるしこ二六 ひとびと世界にきたらんとまつことを俟るなむべし。これ天の
つ二七 震動そべけばるり そのとき ひとのこの
きたる榮光をのせ雲にのりきたるを見るべし
權威とあふいるる 起てるなんぢらの首を
二八 ことらのことの成そめんときたるなり
あげよ。そふるなんぢらの贖ちかづけばなり
二九 耶蘇たとへを
語りて。無花果とまべその樹をみよ
三十 ことらに
三一 なんぢらこれを見てみづから夏いまや近しと知る

のごとくするんぢらもこれらのことの成るをみば神の國のちかきを知れ三まことに我なんぢらにつげん。この事ことごとくなるまではこの世は逝ざるべし三天地は逝るべし。されどもわれが言ることばは逝べからず四なんぢらは慎よあるひは飲食よふけり世事よまとひそれ。なんぢらのこころ昏迷ふうてあのひよらざるときはこの日なんぢらよ臨んこれ機檻のごとくあまねく地のうへに居るものにのぞむべし五このゆゑよなんぢら儆醒てこののぞまんとをるすべてのことを避また人の子のまへに立うるやうにつねよいのれ六耶穌りろの殿よそとへ夜をいでて撒欖といふ

る山より宿まぬ三　庶民ころみうまにきうんとて朝もやく
殿まきうまて
祭司のもとき學者
うちいうにしうて耶穌をころさんとうごふ民をおそ
れうん三さてサムン十二のうちのイスカリオテとゝなふるユダ
といふぬ祭司のもきうちと庶司どもにゆきいうぬ
うち耶穌をうさんとかうりけまば五うれらよろこびて
銀子をあうんと約をユダうけびてひとぐの居さる
うきに耶穌をうさんと機をううぐり六さて除酵餅
節るるまき、この小羊をころをべき日よるりけまば

八耶穌ペテロとヨハネをつかはしたまひけるが、曰ひたまはく、往きて我らが食せんために逾越を備へよ。九かれらこたへけるが何處に備へんとなんぢは言ふか。十耶穌いひたまひけるが、城下にいらば水をいだける瓶をもてゐる人に遇ふべし。その入るところの家にしたがひ往きて、十一家の主人に曰へ、師なんぢにいふ、わが門徒とともに逾越を食ふべき客房はいづこにありやと。十二きたれば彼そこに設けゐる大なる樓を示さん、そこに備へよ。十三かれら往きて耶穌のいひたまひしごとく遇ひしかば、逾越の備へをなせり。十四時いたりければ耶穌食卓につき給ひ、使徒も

とりにつきそう。十五耶蘇うまらにいひけるは我くるしみを
うくるまへまるんぢらとともにこの逾越を食まほることを
大ねがへり。十六それるんぢらにつげんこれを神の國ま
應成までかまることをれを食せず。十七耶蘇杯をとり謝し
ていひけるは。これをとりてそこびとうちよ。十八それるを
んぢらにつげん。神の國のきたるまでは葡萄よりつくる
りしものを飲じ。十九また餅をとり謝して擘うまらら
にあたへていひけるは。これはるんぢらのためにあたへる
つるが身體なり。これを記んことめにこれをなせ。二十また食
しての後杯をとりていひけるは。この杯はるんぢらのために

るぐらゐ血よして立るところの新約なり二それ見よ
われをつとむるものゝ手われとともに案にあり三人の子はも
としさだめられたるごとく逝ん。されども人のこれを
つとむる人はわざわひなるかな三衆これのことをせんものの
ハ誰なるやと互にとひぬ四またかれらのうちにそ。
長たるものゝ誰なるやと互のあらそひありき五耶蘇か
れらにいひけるは。異邦人の王はその民をおさめ。またそ
のうへなる權をとるものを恩をほどこすものと稱らる六されど
汝らのうちは如是あるべからず。汝らのうち大なる
ものはわかきごとく。首たるものはつかふるものゝごとく

るつべし 二七 食よつけるものと役事するものとのつづきあるいる。食よつけるもののみらぎや。さまでも我いるんぢらの中よつらふるものごとし 二八 つとが患難よおいてつまことともに居しもののいるんぢら 二九 つとが父のつまよ任ぜしごとくつまもるんぢらに國を任ずべし 三〇 これるんぢらつとが國よおいて、うちが食案よ食飲し。この位よ坐しそイスラエルの十二の支派をさばくんがごめるり 三一 まさいひけり。シモンよシモンよ、サタンるんぢをもとめて麥のごとくふるいんとせさ 三二 されどもるんぢの信仰つ缺ざるやう爾のためにいのまりるんぢ歸正んときその兄弟をつつくせよ 三三 シモンいひけるは。

主よ我れ獄までも汝と偕に往かんと心を定めたり 三三 耶蘇いひけるはペテロよ我れ今日鶏の汝三次我を知らずといはん○ 三五 まことに汝にいひけん我れ財布 旅嚢 履 を持たせざりし時なにか缺たることありしや。答へけるはなかりき 三六 耶蘇いひけるは今は然らず財布あるものは之を取れ嚢あるものもまた然り。劍なきものは衣服を賣りて刀を買へ 三七 それ我なんぢらに告ぐ凡そ録されたることは我に成就べきなり蓋し罪人のうちに算へられたりと録されたることは我に於て終ることを指すこ

とゐうるゐら生成らるべけまぐるり三八うまらいひけるゐ主
みよこそにふなりの刀あり。耶蘇これらにいひけるゐ。足り三九耶蘇
いでゝ例のごとく橄攬の山にゆきみるにその門徒もあふ
ぐへり四〇そのところよいくりてうまらよいひけるゐ。誘惑
よいりざるゆうにあらむ四一耶蘇うまらをそるみれて石の投らる
ゐとへてぐくり曲膝いのりいひけるゐ四二父よりし聖旨よろふ
そごころの杯をつれよりそるのちなまへ。さまでもつぐ意よ
あらばそで聖旨のまゝにるゝなまへ四三天使天よりうまを
にあらはれて健壮をそへぬ四四耶蘇いくく哀おもうよ
いのをりてその汗ハ血のおふくりのごとく地におちくう

四五 祈よりさめて門徒のもとにきたり、かれらが憂てねむるを見、四六 いひけるは、なんぞねむるや、起てまどひなからんために、祈れと言とき、四七 許多のひとびときたる。おさ十二のひとりなるユダといへるもの、その前にさきだちて耶蘇に接吻せんとちかよれり。四八 耶蘇いひけるは、ユダなんぢが接吻をもて人の子をうるや。四九 そのこのそばにあるものどもこの事のあらんとするをみて、いひけるは、主よつるぎをもちて撃べきや。五十 そのうちのひとり祭司の長のものをうちてその右の耳をきりおとせり。五一 耶蘇こたへていふ、これまでを聽せよといひ、その耳にさわりてこれをいやしたり。五二 耶蘇こ

にきたりし。祭司のをき殿の庶司と長老どもにいひけ
り。なんぢら刀と棒とをもちきたり強盗よむかふがごとく
きたるや。五三われ日々よるなんぢらとともに殿にありしに
われに手をあくることなかりき。されど今はなんぢらの時
なり黒暗のいきほひなり。五四かれら耶蘇をとらへ曳て祭
司のをきの家につれゆけり。ペテロはるかに従ひぬ。五五ひとびと
中庭のうちに火をたきてともに坐しければペテロもその
なかに坐あたる。五六ある婢かれが火のこのかたはらに坐
るを見これをつらくうちいひけるは。この人もかれとともに
ありしなり。五七ペテロうけがひていひけるは。女よわれこれを

といへり 五八 ゐあぶらくしそ他の人もまた見ていひけるん。なんぢもかれらの一人なり。ペテロいひけるん。人よ われいまだ 五九 あらずと一時をへだてまたひとりの人いひけるん。まことにこの人もかれとともにありし。これガリラヤの人なればなり 六十 ペテロいひけるん。人よ われなんぢの言ところを識ずといひもそくに忽ちにわとりなきぬ 六一 主身をめぐらしてペテロを見たまへり。今日にわとり鳴まへに三次われを知らずといひたまひし主のいひたまひし言をペテロおもひいだせり 六二 そとにいでゐていたく哭く 六三 耶穌をあなどりまもるものどもは嘲弄しうちたゝき 六四 その目をあをひとゝのそいひけるん。なんぢ

をうつものい誰ゐろう預言せよ六五まくさあぐらのこうらをいひてこれを譏誚つる六六平旦よ民のとこよう祭司のをさ學者どもあつまりて耶蘇を集議所よひきゆきて六七いひけるいゐんぢらキリストゐらばうち私らよつげよ。耶蘇いひけるい。こうらひ我ゐんぢらにいふとも信ぜざるべし六八またこうらひ我ゐんぢらにとふとも答ざるべし六九今よりのち人の子い大權ある神のうぎに坐せんキト。みるいひけるい。きらばゐんぢい神の子ゐろう。耶蘇いひけるい。ゐんぢらがいふごとく我をこれゐり七〇またらいひけるい。ゐん證據をもちゐんや。いうまうらみづからそのいよりきゝり

第二十三章　ひとぐこゝる起て耶穌をピラトにつれゆきて
二こゝろをもて訟いひけるやうはこの人が民をまどわし稅をカイザルにをさむることを禁止みづから王るるキリストととるものを見
三ピラト耶穌にこゝそいひけるやうユダヤびとの王るるか。こたへけるやうるんぢがいふごとし
四ピラト祭司の長たちと衆にいひけるやうわれこの人にあのそ罪あるを
五見ずまたくきわめて極力いひけるやうかれガリラヤよりはじめてこゝまでユダヤ地ををしへこの處まできたりて民
六をみだせりピラトがリラヤときゝてこの人もガリラヤ人なるやをとひ
七そのヘロデの所管るものをきゝてこれをヘロデに

あくる。この時ヘロデもエルサレムにありしが、八耶蘇を見
てゐるかざよろこべり。その許多のうれひうらみをきゝ
てひさしくこれを見んことをおもひ。またその奇跡ある
事をうんと望みゐるまぢかりき。九このゆゑに多言をもて
とひけるども耶蘇なにもこたへざりき。十祭司のつかさ學
者たち側よりたちて、おきりよくうれをうらみぬ。十一ヘロデその
士卒とともにうるしめ嘲弄して華服をきせ。
またピラトよあくるまで。十二ピラトとヘロデさきにそ仇なりし
が當日さゞひまたしくをなせり。○十三ピラト祭司のつかさ
有司および民どもをよびあつめて。十四いひけるは。なんぢらこの

人をそれよつまきこうして民をみぐるしくなるもののうりくせり。これるんぢらぶ訴ることころをもてるんぢらのまへに鞫どもその罪あるをこうぜ十五ヘロデもまたおろう。るんぢらをヘロデにつろうせどうまても耶蘇がせしこの死罪よあるころをこぐうき十六故よこれむちうちてこれをゆるさんとそこの節期よろるうらぞひとうを釋ことあるべるう十八この多てこる一斉よぞうそこの人を除きバラバをうるまうらにゆうせといふ十九うるひ城下よ一揆をおこして人をころしてそ獄よいりしものるう二十ゆるよピラトれ耶蘇をゆるさんとおうりひ復くねうらにいひしうど二十一衆よぞうりて。これを十字架よつけよ

十字架につけよといふ。二ピラト三次いひけるは。なんぢらこの人の悪事をせしやわれいまだこれの死罪あるをこゝに見ず。ゆゑに笞うちてゆるさん。三ときたゝびこれに聲をあげて十字架につけんといひ募まる。つひにかれらと祭司のきのこゑかちしより。四ピラトその求のごとくさだめて。五かれらがねがふ一揆をあるに人をゆるして獄よりいだしたるものを縛そのこゝろよまうせて耶蘇をかれらにわたせり。六かれら耶蘇をひきゆくときに田間よりいでき来まる。クレ子のシモンといふものをとらへそれに十字架をおはせて耶蘇にしたがはせたり。七あまたの民および婦こゝろもの

うまをゐきうるしめり二八耶蘇うまらをうくらこいひけうを。
エルサレムの女子よわがために哭るまこで汝のみ子のために哭よ二九産ざるものいまご孕ざるの胎いまご哺せざるの乳い福るうといそん日きさらん三十その時ひうぐ山よむうひそうぐうへよ厭よ陵にむうひそわを掩へといそん三一青木よさへうくるものを枯木いうぐせうそん
○二三まつく他にふくうの罪人を耶蘇とともに死罪よあうるのんとそひきあけり三三うまうらクラニオンといへるところにいうりてここに耶蘇あようび罪人を十字架よつけぬ。一人を耶蘇の右ひうらを左にあく三四耶蘇いひけう。父ようれらをゆ

ろ〳〵ろまん〻その所爲をあらざうぐゆゑるゐう。これら關を
して耶蘇の衣服をつちうの言ひとぐく立て耶蘇を見さう。有司
もまつ〳〵あざつちうのそいひけるゐ。うまい他人をまつ〳〵う。
ゐ〳〵キリスト神のえらみこるうのるこゞ自でまつ〳〵
べ〳〵 三六 兵卒もまつ〳〵うまつを嘲弄〳〵きさう酢をあつ〳〵て
三七 るんぢゐ〳〵ユダヤびとの王るらばこづらをまつ〳〵と
いふう 三八 まつ〳〵ギリキヤ ロマ ヘブルの文字にて。これらユダヤび
との王るうとうける罪標をそのうへに建こう ○三九 懸られ
こる罪人のひとう耶蘇をそ〳〵りていひけるゐるんぢゐ〳〵
キリストるらば汝のれとつれらをまつ〳〵平るうの一人こ

えてうをいまゝでめいひけるにゝんぢあるじゝく罪をうけるぐら神をおそれざるやうすもわらい當然のり所行こゝらの報をうくるのれどこの人をゝにて不是こゝらのさづまゝゝるり豈ゝゝゝそ耶穌よいひけるにゝんぢその國ききゝらんときわれを憶ゝゐのゝ豈耶穌こゝえいけるにまことに我ゝんぢにつげん今日ゝんぢいつれとゝもに樂園ゐ在べゝ○四時おほよそ十二時ごろより三時まいゝるまであまねく地のうゝ黑暗となるゆゑり豈五日光くらゝゝ殿のうちの斗帳かゝのうゝまり裂ゝり豈耶穌あるごゑゝとのぞゝりいひけるに父よつぐなまゝひをゝんぢの手にあづゝゝいひて

氣なき百夫の長らのごとくしてこれを見て神をあめそやけるが、まことにこのひとは義人なりき四これを見んとて聚まるひとびとこのありしことごとをうけて膺を拍てくろがへり四九耶蘇の相識のひとびとおよびガリラヤより志したがひ來れる婦ごもとを遠く立てこれらのことを見たり〇五〇集議官なるヨセフといへる善き義なるひとあり五一かれらの評議と所爲とにはあづからざりき。これはユダヤのアリマタヤの邑の人にて神の國をまちをるものなり五二この人ピラトにゆきて耶蘇の屍をこひて五三これをとりおろして布にてつつみ人を葬りしことなき石の鑿たる墓におけり

五五 この日も備節の安息日ちかづきぬ ガリラヤより
耶蘇とともにきたりし婦ども後よりおくびてその墓と屍
のおかれるさまを見 五六 かえりて香料と香膏とを
のひおきて誡にしたがひ安息日をやすめり
第二十四章 七日の首日の昧爽にこの女ども備おきたる香料
をもちて墓にきたりしに 二 おくの女どもその石の
墓より轉されをり 三 入りたるに主耶
蘇の屍をみず 四 これがために躊躇をりしに
衣服をきたる二人そのそばによりて 五 おそ
れて面を地にふせたるにその人いひけるは なんぢら

んぞ死たるものの内に生たるものを求るや六
にあらざれ復活たり。ゐをガリラヤに居給ひしときのんぢらに
語りて。人の子も亦罪ある人の手に渡されて十
字架につけられ第三日によみがへるべしといひしを
憶いでよ八ゐまたその言をあきらめいでず九墓より
かへりてこれらのことをことごとく十一の門徒とその
他のすべてのものに告十
これらのことを使徒につげたるものはマグダラの
ヨハンナ。ヤコブの母なるマリアまた他よとともにありし女ども
なり十一使徒そのこのことばを虚誕と
起きれども墓にゆきてまりて臭布のみ

てその過ところのことを奇とつつしめりき○十三當日ふたりの門徒エルサレムより三里許へだゝりたるエマヲといふ村にゆきけるに十四たがひにこれらの所遇ことごもをつつしみあへり十五ここに論ずるときに耶蘇みづから近づきてともにゆけり十六されどその目さへぎられて知ることを得ざりき十七耶蘇いひけるは、なんぢらあゆみつゝたがひにこゝにかゝる談論ことはなんぞや、その一人のクレオパといふものこたへけるは、なんぢはエルサレムの旅びとゝよ出て獨ここのごろあれこと〻をしらざるか十九へいふ。あるがごとぞや、てれよいひけるは。ナザレの耶蘇のことゝるりこの人は神と萬民のまへに行と言はあるい

る能あり預言者なりしが、祭司のをさと有司とあつ
まれるを死罪にさだめて十字架につけんとし、
イスラエルを贖ふものかの人なりと望みしが、まのあた
きのくるあらざる此等のことの成しより今ふたい第三日なる
に、三つのそらの中なる婦どもわれらを驚駭せり。
うまきらあさまだきに墓にゆき、主の屍をえざりてきた
り、天の使あらはれて彼をよみがへりたりといふを見
たりとつぐ而ま我らと共にありしものの墓に
ゆきたるに婦のいへるごとくなりて且つ主を見ざりき
三五 耶蘇いひけるは。預言者のすべてのしるせることを信

ぞ。こゝろの遲あろうるものよ 三六キリストをこれらの
難ごうけてその榮光よいるべきにあらぬや 三七モーセ
よりはじめその預言者をもとめそべその聖書よあのそ
あのきよつきそのことゝを詳明されこり 三八うまてらゆく
ところの鄉にもろづきけるに。彼もきさぎんとまるけ
しきをみせぞ 三九このれこまそめひけるに。日うたぶき
て暮におよびぬ。ともまらとこりに止まき。これいうそこ
まる 三十ともよ食よつけるとき餅をとり謝しそ擘ら
まらにあこへけまべ 三一二徒のめの目あきらるるみ
りそ彼をもまり。まこ忽その目よこゝろぞるめりられ

らなければいけない。途間ですでにかれらとともに聖書
を解きひらけるときこころの熱くにあらずや三ことの
ときかれらに起てエルサレムにかえり十一の門徒および同人のあ
つまりをるにあふ三その人どものいひけるは、主實に
よみがへりシモンにあらはれたり三五二徒も途間にてありし
ことと餅を擘たまへるによりて識たることをとくなり
三六このことをかたるときに耶蘇かれらの中に立
ていひけるは、なんぢら平安なれ三七まどひ驚駭おそれて
霊をみるかとおもへり三八耶蘇いひけるは
なんぢらなんぞおどろくやなんぞこころに疑ひをこす

や三九ここぶ手ここぶ足をこそこれるゝをまれ。これを模て
こよ靈をこごぶあゝをゐんぢらぶ見るごごく肉と骨いあ
らぐごゐり四ここくいひてその手足をこせしに四これら喜
どもゐる不信ぜまで。詩異るときこよ耶蘇こに食物あるや
といひけゐてぞ四二炙こる魚と蜜房をあこふ四三これを取て
そのまへよ食せり四四またこらにいひけるい。モーセの
きこて預言者の書まこ詩の篇よあるきれるつごぶこと
つこもべそのことのうゐらぐぞ應べきをこれりとゐん
ぢらとこりよありし時ここまるとこいろゐり四五こにあ
いて聖書をさこらせんとてその聰をひらき四六いひける

へ。まそよろづ録きたまふ。このくキリストを苦をろけ第三日
によみがへるべし四七またその名によりて悔改と赦罪を
エルサレムよりそゝぎはじまり萬國にのべつたへらまん四八なんぢら
はこれらの事の證人なり四九またわれ父のちかひのものを
なんぢらにあくらん。なんぢら上より權をさづけらるゝ
までエルサレムにとゞまれ五十耶蘇うまらとともびきべタニヤ
にいたり手を擧てうまらを祝ま五一祝まるときうまらを
をさるまた天よあげられたり五二うまらこれを拜しそい
たくよろこびエルサレムにかへり五三つねに殿にいまして神を
頌美まつり祝謝せり。アーメン

耶穌降生一千八百七十八年

新約聖書約翰傳

翻譯委員社中
米國聖書會社

明治十一年

日本橫濱上梓

約翰傳福音書

第一章

太初に言ありき言は神と偕にあり道も亦神なりき二この道は始めに神と偕にありき三萬物これによりて造られたり造られたるもの一つとしてこれによらで造られしはなし四これに生あり生は人の光なりき五光は暗きに照せり暗きは之を悟らざりき○六ここに神の遣はしたまへる ヨハネといふ人あり七その來れるは證のためなり證をなして凡ての人をして己によりて信ぜしめんがためなり八かれは光にあらず光につきて

證をなさんためよきこれを九それをべての人にてらし眞
のひかりハ世よきこれ世よあま。よハかをよたく
られたるに世こを知ざらん土これあれをの國よきこと
よその民こををうけざりき十三うをを接それ名をもんせー
ものまい權柄たまひてこれを神の子となせを十三こうる人
ハ血脈よるあらず情慾よるにあらず。ひとの意よよ
るよあらんたゞ神よりてうまれーなを十四そをことば肉
體となりてわれらのうちよやどれを。われらその榮をみる
よまことよ父のうをたまへる獨子のさのえまして恩寵と
眞理おてみてを〇十五ヨハネあれの證をしてよびいひけ

るをもさきよわれよおくれきたらんものハ我よりまさ
れるの社なるをそを我よりさきよありしをもあれバなり
といひしはこの人をもて云われら皆このれうみちてる其社中
よりうけてめぐみよ恩寵故そはくらる十七律法ハモーゼよ
りてたまひしがめぐみとまことハ耶蘇キリストよりてきた
れるを十八いまだ神をみしひとあらざりたゞうみたまへる
ひとり子なるはも父のふところよりある者のみこを故あら
はせるなり（）十九ユダヤびと祭司とレビの人を故エルサレムより
ヨハネのもとよりたちしもの誰ぞとそをこゝろみるとき
おのれせることと左のごとし二十彼かくはともろなくいひ

あらもーて我をキリストよあらずとあきらこのよい爲り 二
さとひけるいさらべなんぢハ誰ぞエリアなるや。いふとお
たゝまさあんちそこの預言者なることとこひしよきくらぞ
とまさくさを 三
もちにおいそこれらまさ問けるを。なんぢ
をたれあるをのをれらをつかはせーまのよわをらごこさく
をあー得やうわをさまつげよ。なんぢみづからいこのよいふ
や 三
ヨハネいひさるハわれいをるをもち主の道を直くせよ
と野ふよべるひとのこゑをを預言者イザヤのいへるごお
と 四
そはたつかはされたる人こそパリサイのひとなりき 五
この
をさまさヨハネよさひていひけるふさらばあんぢハキリスト

エリアよあるひは彼よげんしやかもあらばしてあふぞバプテスマを施もや 二六 ヨハネあるくいひけるはわれは水にてバプテスマをさづく。されどなんぢらのうちざるところの一人をなんぢらのうちみとめ 二七 まさるおほきれきたりて我よりまされるものとハあれあり。それハその履のむすびをくゐもたるざるものあり 二八 あれおとそヨハネのバプテスマ施ほどこせしヨルダンのむこうあるベタニヤあてあるところ○ 二九 あくる日ヨハネ耶蘇のおのれよりきたるをみていひけるハ世のつみ抜あよ神の羔抜みよ 三〇 これよおくれきたらんものを我よりまされるものなり。そはわれより以前

にあるべきものなればあるとわざいひしハこの人なり三
を素よりそこなひ人をそこなはざれどわざきたりて水にてバプ
テスマをほどこしたるこれをイスラエルの民はあまたさんがた
めなり三ヨハネまた證していひけるハわれ靈の鴿のごと
く天よりくだりてそれうへにとどまれるを見たり三三わを
もこれを知ざりき但我を降のもて水にてバプテスマなさしめ
たるものそれはいひたまひしハ靈くだりてそれうへにとどまる
を見ん。これを聖靈をもてバプテスマなさんものなり三四またこれを見てそれ神の子たるをあかしせり
三五あくる日またヨハネふたりの門徒とともにをり三六耶穌

のあるくをみて神の羔をみよといふ　三七ふたりの弟子
きゝて耶蘇にしたがひゆくを　三八耶蘇ふりかへりて
我ゆくをみてなんぢらなにを求むやといへばラビいづくに
やどるやといふ。ラビを譯せば師といふの義なり　三九
いはくきたりて來みよといひたればゆきてそのやどるところを見てその日
ゐたりともにやどれり時はひる九時ごろなりき　四〇ヨハネのいひしことをきゝ
て耶蘇にしたがふふたりのものゝ一人はシモンペテロの兄弟アンデレーなり　四一
かれまづその兄弟シモンにあひていひけるはわれらメッシヤにあへりメッシヤを譯せ

キリストあり 三 もろもろこれを耶蘇よばるるをゆきてよいひと
視てこれよいひとるいなんぢいヨナの子シモンありぺん
ぢいケパとやるくらるべーケパ訳譯べテロなを 三 お
くる日いひとがリラヤよゆうんとーてピリポよあひわれよ
もとぐくといく、 四 ピリポをアンデレーとペテロのもめる。
ベツサイダといくる邑のひとなを 四五 ピリポナタナエルよあひ
ていひけるをもをろ律法のうちよモーゼグもせるとこと
ろ預言者たちのもるせーところのものよあくり。もろもち
ヨセフの子ナザレの耶蘇なを 四六 ナタナエルいひとるをナザレ
よりをなふの善者いでんやピリポこれよいひとるをきくり

くみら四耶蘇ナタナエルのおのづからにきたるを見かれをさしていひけるを視よまことのイスラエルの人よりてそれあるろ詭譎なきものぞ四八ナタナエルいふいかにしてわれをたもふやと耶蘇これにこたへていひけるはピリポがなんぢをよばざるにさきだちなんぢのいちじくの樹のもとにをるをみたりき四九ナタナエルまたこたへていひけるラビなんぢは神の子なりなんぢはイスラエルの王なり五十耶蘇これにこたへていひけるはなんぢが無花果樹のもとにをるをわれがみたりとていふによりてなんぢ信ずるか此よりもおほいなるおことを爾みるべし五一またいひけるは我まことを

まことになんぢらにつぐん天ひらけて神のつかひたち
人の子のうへにくだりまたのぼりまた降みん

第二章

第三日ふかりラヤのカナに婚筵あり 二 耶蘇のおや
もまたまねきをうけたりしが 二 耶蘇も婚筵にまねかれたり。ぶ
だう酒はきらればはゝいはくかれにいふわれらに蒲萄酒
なし 四 いはくれにいふわれよいかゞせんや婦よなんぢとわれとなにの
のかゝはりあらんやまだ時いたらず 五 そのはゝ
僕どもにいふなんぢらに命ずるところをなせよ 六 ユダヤびとの潔の例にまかがひて四
五斗いれの石甕むかうにおかれたり 七 耶蘇いふ

べ、ども水瓶かめのもみさせよといひければ口まで
みさせたり　八　また、これを今くみとりて持ゆきふろまひを
つかさどるものにもたせよといひけるべ。かれらもちゆき
たり　九　ふろまひをつかさどるもの酒にかはりし水をなめて、その
いづくよりきたるをしらざれども水をくみし僕たちはしりたり
ふろまひをつかさどるもの新郎をよびてこれにいひけるは
もおろそかなる人はまづ吉酒をいだし、さけたけなるにおよ
びてあしき酒をいだすにあなたはよきさけをいまにいたる
までとどめおけり　十一　ガリラヤのカナにてなせるこの
しるしを休徴のはじめとしてその榮をあらはせり門徒これ

祝信ビ〇十三ここれのち耶蘇そのもと兄弟およびでーうちカペナウムよろぶりそれところろよをることひさーうらびーて十三ユダヤびとら逾越節ちうづきくれバ耶蘇エルサレムよりぶて十四聖殿よそ牛ひつじ鴿祝うるものを兌銀ひるものの坐せるとぶみ十五繩をりて鞭なつくるをうれろおよび羊うーをみやよりおひいぢー兌銀ひるもの金をちらーその案をたふー十六鴿祝うるものよいひくるいこの物祝とうてゆけ我ちのいくをおきなひの家とひるなうれ十七門徒さちなんぢのいくのさめよ熱心それ祝そろちんと錄されたるとおもひいぢせをさ十八ろよユダヤびとあくーて耶蘇よ

いひけるをなんぢこれらの事を爲なにうるまゝにこれらよあふの休徴を我らにるや　十九耶蘇答へて曰なんぢらこの聖殿をこぼちわれ三日にてこれを起たゝんといひければ二十ユダヤ人いひけるハ此みやをつくるまで四十六年を費しまなんぢ三日にてこれを起たゝるう　二十一耶蘇のかくいへるハおのれの殿をさせるなり　二十二死よりよみがへりたまへるのち門徒たちいにしへのこれことをうち思ひ出し聖書とうれのいひしことばを信ぜり　二十三さて耶蘇まつぎこゝの節にエルサレムにあるしほくの人うれのなせしるし我みてその名をしんぜり　二十四耶蘇そぢうらをうれうまか

せばそはいくべての人を救ふをまさひとのこゝろのうちを知
ゞゆゑよ人はいく證をこゝろるりの救ひぬしあざ主をなり

第三章 ユダヤびとと幸ありてパリサイの二コデモといへるひ
とあをニうれよる耶蘇よきゝそいひるいラビうれら
なんぢハ神よをきゝり師なをとゝる。その神の人とゝ
もあらばをなんぢのあせるこの休徴いひとうれをなんこ
とあさをざるをなり 三 耶蘇こたへていひけるいまことに
まことに爾よつげん人のゝあらたようまればを神の國を
みることあゝをゞ 四 二コデモうれいひるハ人をや老ね
ればいうぐまさうまるゝこゝを得んやふゝび母のちら

よいまそうまるべけんや 五 耶蘇こたへけるいまことよ誠
ふたんぢよつげんひとん水と靈とによまそうまれざれば
神のくにによいるあとあたはざるなり 六 肉によまそうまる
るものは肉あり靈によまそうまるものは靈あり 七 なんぢ
爾よあらたようまるべきことをいひしを奇とおもふなかれ
八 風はおものがまよあふく。なんぢその聲をきけどもいぬく
ようまきたりいづくへゆくをしらず。すべて靈によまそうま
るものもかくのごとし 九 ニコデモこたへていひけるはいか
ことあらんやと 十 耶蘇こたへていひけるはなんぢもイスラエル
の師あるまな月このあとをしらざるや 十一 まことに

る誠よなんぢよつげん。われらがこころをいひ見しめよ
を證するおなんぢへわれらのあうしなうけば十三ゆしわを
地のこと紙いのよなんぢ信せざればきして天のおとをいた
んまる何でおんぼることを紙せんや十三天よをそぶり天よを
る人の子のおうに天よのぼりをものなし十四モーセ野よ蛇
をあげしごとくひとれ子もあげらるべし十五まるてこれを
信ずるものよほろぶることなくして永生なうけしめんぐ
たるあり十六それ神へそのうみたまへる獨子を賜ほどふ世のひ
とを愛したまへまこへをべてこうを信ずるものよほろぶ
ることおくしてこうぎうあきいのちをうけしめんぐためお

を十七神のその子とよふはこのをしへなまくるを世のつみをさだめんとふおらびこのをしへをよろこべて世をすくはんがためなり
十八かをる信ぜんぎるものハ罪さだめられず信ぜざるをものはすでにその罪さだまれをそハかみの生うまつるひとり子の名をもんぜざるによる十九はをみの定るゆゑを光よふきたりしに人その行のあしきによりてひかりを愛せずしてくらきを暗なおいほをなり二十ををそ惡なおものを光をにくみてそれおこなひを責られざらんがためひかりにきたらず二十一眞理なおこなふものハその行のあらはれんがためひかりにきたる。そハ神によりておこなへをなり○三こ

のいち耶蘇でーとユダヤの地よりきたり。そのにかーこはと
ぐまりてバプテスマをほどこされ 三 ヨハネをもさりムよもち
うきアイノムよ抜きてバプテスマを施し。うーこを水おほきぐ
神あるりひとぐきたりてバプテスマ抜らけたり 四 このとき
ヨハ子いまぐ獄よりをられざりき 五 ヨハネの門徒と
ユダヤびとぐきたりめごとつきてあるひとりくるぐ 六
うれるヨハネよきたりていひけるハラビ視よなんぢとそき
よヨルダンのむうふまあるてなんぢぐ證せーものバプテスマ
抜あどこうをよみなこれよきたれるを 七 ヨハネこうこうていひ
けるをひとハ天よりをたまふまあらざばうそることあど

はぎるなり　二八　われハキリストよあらざるそのさきに遣
れしものなりといひしことを證るものをなんぢらのり
元新婦ありてるものを新郎なをざなむこの友たちてその
あるときうばこれよりまてよろこびおほひ我いなよの
喜みつることをえたを　三〇　うれをかるうべ盛よあをやれそ
こうるうばおとろめべし　三一　天上よりきたるものた萬物の
うえよあり地よりいづるものをもち屬そのいふところも
地のことなり天よりきたるものをぬんぶの上よあを　三二
うれハみぢうごそ見しところ聞しところのことを證と
あるはそのあうしをうくるものなし　三三　その證をうけしも

のハ印をまて神の眞あることを我たのしむ三神のつかはせ
しものハ神のことばをかたる。そは神これに靈をたまひて
うごきあければなり 三五父を子をあいして萬物をその手に
さづけたまふ三六子をもんぎするものハかぎりあき生命をえ子に
あらざるものハいのちを見ることを我えず。ゑり神の怒そ
我うへにとゞまらん

第四章 主おのれ弟子をとれることまるバプテスマ我ヨ
こせることヨハネよりもおほくとパリサイの人のきゝし我
あるニさればそは實ハいまだみづからバプテスマをほどこ
せるにあらず弟子徒これ我あせるなり 三そのときユダヤ我

さてそまことガリラヤへゆく　四　サマリアをへざるをえざればなりたをびしてゆくことあり　五　ここにサマリアのスカルといへる邑ありヨセフのあたへし地のちかくにて　六　ここにヤコブの井あり耶蘇ふびのつかれをりてそのままにてこの井のかたはらに坐せりときはひるの十二時ごろなりき　七　ひとりのサマリアの婦みづをくまんとてきたりければ耶蘇そのをんなにむかひてわれに飲せよといふ　八　そはでしたち食物をかはんとてその邑へゆきてをらざりしゆゑなり　九　サマリアのをんないひけるはなんぢはユダヤ人にしてなにぞサマリアの婦なるわれにのむことをもとむるや　こはユダヤびとと

サマリアの人ども、まだ活せざれをなり 十 耶蘇こゝにていひけるは、もしなんぢ神の賜とそれなるものを知せよといふも のと誰なるを汝もとバなんぢそれなもとめん。さらバ活る水をづなんぢにあたへべし 十一 をんな耶蘇にいひけるは、主よ つるべなく井もまた深し、なんぢいづくより汲てその いける水を得るぞ。 十二 この井ハわれらの先祖ヤコブのあたへしところなりこれもその子もまた畜までもみなこれ井のみをなんぢハ彼よりもおほきものなるんや 十三 耶蘇こたへていひけるは、もべてこの水を飲ものハまた渇ん 十四 されどわれあたふる水を飲ものハ

きてなり。ここわが與る水いそれうちあて泉となり湧いでて永生にいたるべし　十五をんないひけるは主よわがかわくことなくまたここまでくみきたらぬためそれみづ我われよあたへよ　十六耶穌いひけるはなんぢゆきて夫をよびきたれ　十七婦あたへていひけるはわれは夫なしといひけるはなんぢは夫なしといふは理なり　十八そはなんぢさきに五人のをつとありて今あるものはなんぢの夫にあらびあんぢのいひしは眞なり　十九をんないひけるは主よわれあんぢを預言者とおもふ　二十われらの列祖はこの山にて拜せしにあんぢらは拜にくきところは

エルサレムなることいよ 三 耶蘇いひけるハをんあよことを信
ぜよたゞよこれ山のみもあらじ。まこエルサレムのみもあら
じしてなんぢら父拜をもつべき時きたらん 三 なんぢらハ
拜するもの知なんぢらハ知らじわれらの拜するものをわ
れらハ知る。そは救ハユダヤびとよりいづるゆゑなり 三
まことの拜するもの靈と眞をもてちゝをいまる時きた
らん今それときこれあれを。それ父いかくのごとくをいとめ
るもの我要たまふ 二四 神ハれいなれバはいまるものまこと靈
とまことをもてあれ拜ひべきなを 二五 婦いひけるハキリスト
とかゝるものるメッシヤのきたらんことを我るうれ來んときを

爾その こと紙 われらよつげん 二六 耶蘇 いひたるハなんぢと
かくるところの我 それ 二七 ときた門徒 でし きたりてこれ
のをんあとうけるを奇 あや しめどそは なにものをもとむるやま
さなふやをこれとうけるうたへるものなかりき 二八
婦 をんな そのみづ瓶 かめ 紙のうして邑 まち にゆきひとびとにいひけるハ 二九
わがをべてなせることを紙 それ 我によつげし人 ひと をきたりてみよこ
れキリストあらざるや 三〇 こころ おいで人々 ひとびと まちをいでゝ 耶蘇 いえす
のもときたる 三一 そのあひだ門徒 でし うれえ請 こ てラビ食 くら
さまへといひたれを 三二 耶蘇 いえす これらにいひたるハわれよな
んぢらの知 しら ざる食物 くらもの あるを 三三 でしたちたがひにいひたるハ食

物をこのわろきしもおもを誰なるや 三四 耶蘇うれしよいひ
くるも我をつのもせしものも皆よろづひそおの工なし
をはるこれまでが糧なを 三五 なんぢら穫時よなるといふあわ 四
月あをといもびやうれなんぢらよつぐん月放あげてみよ
はや田いろづきてうをいれどきよなれを 三六 獲ものはそ
の工錢をうけて永生よいくるべき實をあつむこのくて播も
のとこのるものともによろこぶぞん 三七 うれいまきこれい穫
とこのるいこれよつきてまことなり 三八 われなんぢらの勞
せざりしところをうらせんとしてなんぢらをつのもせり
他のひとびと勞せしよりなんぢらいそのらうしくる果を

うけうを 三九 これ婦わがなせしをべてのことをわれに
ぐしと證せしことをもてその邑のサマリアびとおほく
耶蘇をしんぜり 四〇 ここをおいてサマリアのひと耶蘇のもと
きたりてとゞまらんことをねがひしかばふつ
かいりたり 四一 二日とゞまれり 四二 彼のことばをもて信ぜ
しものさきよりもおほくなりき 四三 かれら婦にいひけるは今
われらのなんぢのいひしことをもて信ずるにあらずわれらみづ
からきゝて此はまことに世のすくひぬしなるをしればな
り 四四 二日ありて耶蘇もろ〳〵をさりガリラヤにゆけり 四五 そこ
にいたりしとき預言者はふるさとにてたふとばるゝことなし

しといひしによる 五 ガリラヤよりつきそひきたりしガリラヤのひとびとかれを接たり 六 そのさきの節遊のとき耶蘇のエルサレムにておこなひしすべてのことをうれしくもそのいきひよゆきてこれをみたれをあり 七 耶蘇またガリラヤのカナにいたる。さきに水をさけなせしところなり。ときに王の直臣その子やまひにうしてカペナウンにあるをきゝ 八 耶蘇のユダヤよりガリラヤにきたれることを聞きて耶蘇のもとにゆきてカペナウンにくだりその子をいやしたまんことをこへり。そは死るまぢかになりければなり 九 耶蘇こたへていひたまふ なんぢら休徴とことなるわざをみざれば信ぜじ

四九 こゝれいひくるい主よわが子のしなざるさきにくだりたまへ 五〇 耶蘇いひくるい往なんぢの子いくるあり。その人いふ所のことばを信じてさりぬ 五一 くだるときその僕どもこれをあひてつげくるいなんぢの子いくるなり。これその愈えしとき時をうれうまたづねけるに。 五二 きのふひるの一時に熱さめさりといふ 五三 父て耶蘇のなんぢが子いくるありといひたまひしときとその時のおなじきことをさとりておのれとその全家ことごとくこれを信ぜり 五四 これ第二次のことまるさぎを耶蘇ユダヤよりガリラヤにいでてなせるなり

第五章

その後ユダヤ人のいとひありてイエスエルサレムにのぼりたまふ　二エルサレムの羊門のほとりにベテスダといふ池あり。この池に五つの廊あり　三その中に病者、盲者、跛者、萎えたる者など多く臥したりき　四そは天使ときどき池に降りて水を動かすことあり水の動くとき先に入る者はいかなる病にかかりてもなほるによりてなり　五三十八年やみたる人ここにあり　六耶蘇これが臥したるを見てその病のひさしきを知りたまひ、「なほらんことを願ふか」と言ひたまふ　七病者こたへけるは「主よ水の動くとき

これを扶ていけよいうと人をなす。それいらんとするときに他のひとそこゞゝて我よりさきよいる八耶穌これをいひけるに起よねどこをとゝをあげてあゆめ九その人ことごとくに愈をるのもち祢どこ祇とりあげてあゆめをす。この日は安息日なれば十ユダヤ人いそしものよいひくるに。けふ安息日なれば祢どこ祇とをあぐるはよろしうらず十一うれらこたへくるに我なおやせしものそれを祢どこ祇とをあげて行といふを十二うれらたづねくるはなんぢに臥牀をとゝをあげてあゆめといひし人はされなるぞや十三いえしものそれ誰なるを祇もらざりき。そこかしこよおほく

の人あるじや名耶蘇さけされをなり　十五そは後いと聖殿
まてそはひとまあひいひけるい視よなんちもそよいえと
まま罪赦をうけことなきうれおそらくをさきまよまされる
災禍なんちよこうらん　十六そは人やきて　ユダヤびとまおの
をといやせしものい耶蘇あるとつぐ　十七よおいて　ユダヤ
人いとをを窘迫てこころさんとまとうるそいかをでこうとこと
赦せしい安息日なるをうれをなを　十八耶蘇こうれうまうらくな
るいわご父をいねよいまるまをたらきうまよ我もまと
はたらくなり　十九これよりてユダヤびといよく耶蘇をお
ろさんとまかる。そは安息日をも犯すのまあらび神を

おのれがちゝといひ已(また)己(おのれ)を神(かみ)とひとしくなせるゆゑなり　十九
このゆゑに耶蘇(いえす)これらに答(こたへ)ていひたまふは誠(まこと)に誠(まこと)に
なんぢらに告(つげ)ん子(こ)もちゝ(父)のおこなふことを見(みて)行(おこな)のほかは
ういなにごとをもおこなふことあたはず。そは父(ちゝ)のおこなふことを子(こ)もまたおこなふなり　二十
ちゝは子(こ)を愛(あい)しをべておのれのおこなふところを
これに示(しめ)すなんぢらとしておやしまんためなり
またおほいなるわざをこれに示(しめ)すなり
ら大(おほい)なることに驚(おどろ)かん　二一
そはちゝ(父)は死(しし)たる
ものをよみがへらせていのちをあたふるごとく子(こ)もおのれのおこのまゝにひと(人)をいのちをあたふべし　二二
それ父(ちゝ)はたれをさばかず

もさぞ[1]の[2]び審判[3]ハもべて子[4]よりぞねさり[5]三これもべてた
人[6]をして父[7]ばうやまふごとく子[8]ばもうやまふべし[9]めんごさ
めなり子を敬[10]もざるものハこれをばうやまは
もべし[11]四まことをもつてなんぢらにつげんもごことばを聽[12]かれ
ばつのはもしものと信[13]ぜるものハ永生[14]をたもち且[15]さばき
にいたらずして死[16]よりいのちにうつるなり[17]五まことをもつてなんぢ
らに告[18]んもしもの神[19]の子[20]はもろもろのきくときにさらん。い
まその時[21]にあるなり。さればきくものもいくべし[22]六それ父[23]ハ
みづから生[24]をたのそなへ。そのごとく子[25]にも賜[26]てみづから
生をたもつにそなへ[27]七また人[28]の子[29]にあるによりてこれをさ

おきもらるゝ權威をさまくをゝ　六　これをあやしとおもることなうれ。その墓よりるものはこゑをきゝていづるときたらんことをもてるり　元　善なるせーものゝ生をうるによよみがへらんことを惡なるせーものゝつみ定得によよみがへらんことをもみづから行ことあることもでき。たゞひて審判をつとめさばきゝ公平そゝ我とうむねをおこなふことをもとめわれつとめせー父のむねをおこなふことをもとめわれなり　三　もしわがことを我みづからあかしせむるときゝ眞あかしび　三　別よわがことを我あかしまる者のあるをわれそのわがことをあかしまる證のまことを

あるにしる 三 あんぢらさきに人をヨハネにつかはせしは
これ眞理のために證をなせを 四 されどわれ人のあかし
をうくべきにあらず いふところはあんぢらのすくはれんが
ためなり 五 ヨハネはやきてひかれる燈あり。あんぢらまた
しばらくその光をたのしむをよろこべり 六 われにヨハネよりおほ
いなるあかしあり。そは父のわれに賜てなしをげしむる
事なるをもちてなりおこなふところおのれわがをもれ父のわれ
につかはせしことを證するなり 七 また我をつかはせしちち
もわがことをあかしせり。なんぢらいまだその聲をきくべき
いまだその形をみず 八 その道なんぢらのまことにとま

らざるをきゝそゝなんぢらそれつゝをせしめ救信ぜざるようをてをらるゝなり 三九 なんぢら聖書ふうぎりあきいのちありとおもひてこれ探索このせいしよをわれよついくおかしまるものをを 四〇 なんぢらわがもとふ生をえんがためきたる救このまび 四一 それひとの榮救うけび 四二 われなんぢら救ある。なんぢらいそのまゝろよ神をあいまるの愛あらざるなり 四三 われをわが父の名ようをてきたるをしよなんぢら我をうけび。もし他のひとおのが名ようをてきたるをなんぢらこを救接ん 四四 なんぢらいたがひよ人よりあがめをうけて神よりいづる榮救もとめざるものなるふいかでよ

く信ぜることをえんや 四五 なんぢら我ら訴ふるものとを
れ我おもふあこれ。なんぢら我うつふるをものひとをあり
即ちなんぢらが時ところのモーセあを 四六 モーセを信
ぜざるれ我しんぢ爲ぞ。そはモーセわがこと我書されべな
 四七
まこと モーセのあるをしこと我ゑんぜばいかでわがい
ひしまことを信ぜんや

第六章 この後ち耶蘇ガリラヤの湖 みづうみ もるをもちテベリアのみづう
みのむこうへ濟 わたり しまおほくのひとぐこれよあさごふ。そ
をこれらがやみしもをなるをせし休徴 しるし をみしがゆ 三 耶
蘇 いえす やまのぞを門徒 でし とともにそのところよさせり 四 時候

ユダヤ人のもぎこの節をもちゐ
五 いと近く目をあげておほくの人のきたれるをみてピリポにいひけるは
いづこよりパンを買ひてこれらに食はしむべきぞ
六 みづからそれをさんとするにこれを試んがためなりピリポ
七 ピリポこたへけるは銀二百のパンも人ごとにすこしづつあたへてなほ足ざるべし
八 門徒のひとりシモンペテロの兄弟アンデレーいひけるは
九 ここにひとりの童子あり大麥のパン五つと魚ふたつを持てをれどこのおほくの人にいかでかは
十 足鮮いひけるをひとびとを坐せよ。そのところにおほ

くの草あるをおよそ五千人ばかりぬ十一耶蘇パン祝ふをり祝謝をでーまふく門徒これ給まふをー人まふふまふうくのごとくまーてちひさき魚をもひとぐのこのみまふさづひてこれらまふ與ふり十二みな飽まふるおち耶蘇でーまいひろるいまをこーもうーあをぎろやうまふそのあまりの屑拔ひろひあつめよ十三これらう食せーうのいつつの麥のパンの餘遺のくづ拔ひろひあつめれバ十二の筐まみてを十四ひとぐ耶蘇のなせーまろーをみてあをまことまふ世まきうるべき預言者なりといふ十五こうまおいそ耶蘇これらうぐきこうをおもをととのえて王まるうんとまろ拔知さづひうを

ゐてこゝをさんざ再びいまゝで 廿五 日のくらくこゝろ門徒
うみよりぐりて舟よりまカペナウムよ向てうみわたる。
既よられどもれど耶蘇うれうよきこゝろ 廿六 大狂風ふくまよ
まてやゝよ海あれいでせを 廿七 一里十町ばかりこぎいでせ
るとき耶蘇のうみ波あゆみふねよちかづくを見て門徒さ
ちおそれさる 廿八 耶蘇のひとるいそれなを懼るなかれ 廿九
こよおいくでしよろこびてかを波うち舟よ入せんとすれば
ぢちよそはゆうんとるところの地よつきぬ○ 三十 明日う
なるのうみべよ立しひとぐきの門徒のよまし舟のあり
まいふねなくうつ耶蘇をでしくともふねよのらし門徒

のみゆけるをしる 三 このときテベリアよりをろのふねきて
主のいのちてひとびと餅をくはせしところのちかくに
つけり 四 ひとびと耶蘇のこゝにあらざるをみてこれらも舟にのり耶蘇をたづねんとてカペナウム
にいたれり 五 湖のむかふにてこれにあひいひけるはラビ
何時こゝにきたりたまひしや 六 耶蘇こたへていひけるは
誠にまことになんぢらにつげん汝らのもとめるは休徴をみしゆゑにあらずパン抜食してあきたる
ゆゑなり 七 なんぢらそほろぶる糧のためにはたらくべからず
永生にいたる糧をもとめよ人の子はこれにそのしるしを

勞べし　二七 そは父神これを印しておかしたまふ
ものを食ものの爲に勞すな　二八 こゝに
かれらいひけるは我らいかなることをなしてか神の工
をなすべきや　二九 いひけるはこれ神の工なり
神のつかはしたまへる者を信ずるこれなり　三〇 かれら
いひけるはわれらをして汝を信ぜしむるために
なんぢ何の休徴をなしてこれをわれらにみせ
んや何のわざをおこなふや　三一 われらの先祖は野
にてマナを食へり録して天よりパンをこれらに
あたへて食しめたりとあるがごとし　三二 耶蘇いひ
たまふまことまことなんぢらにつげん天よりパン
をなんぢらにあたへしはモーセにあらず

今わ[illegible]ちゝハ天より眞のパンをもてなんぢらにあたふ 三三
神のパンを天よりくだりて生命をよふあたふるものなり
三四 こゝろいひけるハ主よつねにその餅をわれらにあたへよ 三五 耶蘇いひけるをわれハいのちのパンなり我にきたる
ものをうゑざるべしわれ信ずるものをつねに渇ことなし 三六 さ
れど我なんぢらにみれりそも信ぜざることなんぢらにつげたりき 三七 まべて父のわれにあたふるものハ我にきたらん。
われにきたるものハわれこれをなげうたじ 三八 わが天よりくだりしハおのれのこゝろにまゝを行んためにあらずわれをつかはせしものゝ意のまゝをおこなはんため

なり　元　もべて父のわれにあたへたまふ
ものは皆わが一にきたるべし
われ来日これをよみがへらせん
即ちわをつかはせし父のこころなるを
平おのれよそ子なみてこれを信ずる
ものはこぎりなきいのちを得られまたをいての日にこれ
を甦よみがへらせん。こをわをつかはせしもの
意なり　四　まことにおいてユダヤびとら　耶蘇のわれは天よ
りくだりしパン餅ありといひしことをつぶやき　四二
いひけるはこれ父母はわれらの識しるところなるぞや。
われをヨセフの子いえすにはあらずや。
なんぞわれは天よりくだりしりとい
ふや　四三　耶蘇こたへていひけるはあん

もろたごひよ議こくなられ四されば父もひ
かざれを人よくされよきこるなし我よきこをしひとく未
日よされこれ故よみごへらばべし五よげんしやの書よひ
とみるをしへを神よりけんとおるされり。このゆゑをも
べて父よりきゝて學しものいわれよきたる冥されど父故
みしものハなしぞ神よりきこるものゆみこれとみこを
罪誠よまことをわれなんぢらよつぐん。され故信ぜるもの
むかぎりなきいのちあを罪されハ生命のパンなを罰ちん
ぢらのせんぞハ野にてマナをくらひしうど死を罕まべて
くらふものをしてあるぞごとしむるものハ天よをくだれる

餅あを五それを天よりくだりしいけるパンなるも一人このパンを食らわばかぎりなくいく世我あたふるパンはわが肉なるぞよの生命のためにわれこを与あたえん五二こゝにユダヤびとたがひにあらそひいひけるはこの人いかでその肉をわれらにあたへてくらはしむることを得えんや五三耶蘇いひけるはまことまことなんぢらにつぐんも一人の子のにくをくらはずその血をのまざればなんぢらにいのちなし五四わが肉を食くひわが血をのむものは永生あり。われをもてその日よみがへらせん五五それわが肉はまことのくひものまたわが血はまことの飲みものなり五六そ

にくをくらひそのち飲ものをもまれもまさ
れる居ていける父われ飲つつもを。ちよりてわがいけ
るごとく我をくらふものもわれよりて生べし 五十 これ天
よりくだれるパンあり。なんぢらの先祖ごくらひくれど
も死ーマナのごときものふあらじこの餅をくらふもの
うぎりなくいくべし 五十一 これらのことを耶蘇カペナウムの會
堂にてをしへ給ふときいひしーそこにて弟子徒
のうちおほくの人これ飲きゝていひけるは此ハはなはだ
しきことをなを誰うよくこれ飲きかんや 六十 門徒のこれ
とについつぶやく耶蘇みづからおのれらよいひ

けるか。この言よりてつまづくか 六三もし人の子のもと
ところより昇をみばいかん 六三生をあたふるものは靈なり肉
をえきなし。われなんぢらにいひしおことばみたまなり生命
なるなり 六四されどなんぢらのうちに信ぜざるものあり。それ耶
穌のはじめよりしんぜざるものと誰なるをしりたまひ
のいひしことばをしりたまひしなり 六五耶穌また
いひけるは。このゆゑに我なんぢらに父あたへざれば人よ
くわれにきたるものあらずといひしなり 六六ここにのちその門
徒おほくかへりてゆきて耶穌とともにあるくのざりき 六七ここ
によりてイエスまた十二のでしにいひたまひけるはなんぢらもまた

さらんとおもふや 六 シモンペテロこたへていふ、主よわれらいづれにゆくんや永生のことばを汝もてるものいまなんぢを 六九 まことわれら信じてをる。なんぢはいける神の子キリストなり 七十 耶蘇こたへていふ、まことまことに、なんぢらに十二人をえらびしにあらずや、されどそのうちのひとりは惡魔なりと。シモンの子イスカリオテのユダをさしていふなり。これは十二のひとりにして耶蘇をうらむるものなり。

第七章

このことのゝち耶蘇ガリラヤをあまねくめぐりユダヤのうちにめぐることを欲しこのまざりきそこにユダヤびとらわれを殺

んとせつかれをなり　二さてユダヤびとの搆廬のいそひちつづけま三こゝまおいて耶穌のきやうだいこれまいひけるをなんぢの行ところのわざを門徒にもまみせんがためさらばさてユダヤまやけ四そそおのれを顯さんとしてひそのま事をなすものあらじ。なんぢこれらのまぎ於おこなをばおのれを世ま顯よ五これその兄弟もをれこれ於信せざるがゆゑなり　六耶穌これらまいひけるいわゞ時いまざいたらじ。なんぢらのときハ恒まそをれを七世そをんぢらをふくむことあたはざれをれを惡む。そハこれらがおこなよところろいあしゝとわれ證をれをなり八なんぢらこの節ま

のぞれまづ時いまざいでられぞわれ今このいをひよの
ぐらド九このくいひてガリラヤよりぞまれる十その兄弟のゆ
きーのち耶蘇もあらそあうびしてひそうよ節よのぐる十一
いをひのときユダヤびと耶蘇をうづねていひくるいこれ
をいづくよあるや十二衆人のうちよてうれよつきさぬぐの
うち我いひあらそくを或はうれを善人ありといひあるひ
とはいな民をまどをはものなりといよ十三されども人ユダヤ
びとを懼るよりてあらはよう表ごと我いよ人なし○
西いをひのまうでごろ耶蘇みやよのぐりて教誨それぞ十五
ユダヤびとこれをあやしみいひけるいこの人をいまざま

おびいうまーて書をしるや 十六耶穌うまつることくていひけるハ。そがをしふるところハわがならずしてわれをつかはせーものゝをしへなり 十七人もしわれをつかはせーものゝ旨はあるごとをしらばこのをしへの神よりいづるかまたおのれよりていふものかおのれのゝまれを求るあり。おのれ誠つかはせーものゝ榮をもとむるものハ眞あり。その裏は不義あらず 十八モーセなんぢらに律法ならずあるにあらずや。されどなんぢらのうちまもるものなし。なんぢらなぜわれをころさんと謀や 十九ひとぐんこたていひけるハなんぢ鬼

よつうれさそうなんぢ我殺こころをたらんや 三 耶蘇
こころこてうれうるいひけるいまれさきふ一事なるせーよ
なんぢらうる奇とせを 三 モーセなんぢらふ割禮をさづくー
ハそのおのをよをいでーよあらんーして列祖よりいでーも
のあるぞゆゑなり。これよよてあんぢら割禮をあんそく
なちふおこなふ 三 人もーモーセのおきてをやぶらざらん
ぶうち安息日よういうまいをうくるときい何ぞそぶあんそ
くうちよひとの全身をいやせーこと我いうるや 言外貌よ
よりて是非をさだむることあうれ義をもてさだめよ 五 こ
のとき エルサレムのある人をいひくるをこをいひくぐのこころさ

んとするものよあらざるや 二六 今これあらはるるよいよ。あるひ
てこの基督をとぐむるものあり有司これ誠まことよ
キリストなりと知るならんや 二七 されどわれらいこの人のいづ
こよりきたりしを知る。キリストのきたらんときも誰もその何處よりきたるをしるものあらじ 二八 ここにイエス耶穌
宮やにをしへをるとき大聲よびいひけるはなんぢらわれ我をまたわがいばこより來たる。されど我をおの
ものよりきたるをしるあらざるこれ眞つのをせしものハ眞
なるものなりなんぢらのしらざるところなり 二九 われハかれを知そをこれよりこれよを出これハわれ我つのをせしも

のあれば なり 三年 こゝをおいてこれら耶蘇をとらへんとはかりそ。されどその時いまだいたらざるゆゑに手だしをるものなかりき 三民のうちおほくの人これを信じいひけるハキリストのきたらん時そのなしところの休徴このひとよりおほこなうんや 三パリサイの人たみどもの耶蘇につきてこうくひそのよかうをあの如聞をるをもち祭司のをさらとパリサイのひとどもこれをとらへんとて下吏をつかはせり 三こゝにおいて耶蘇いひけるいまれるのちわれしばらくなんぢらと共にをりてのちわれをつかはせしものもとにゆかん 三なんぢら我をさがねるともあふべからずまたこ

ろへゐんぢらきくることあることをざるべー 三五 ユダヤ人おひたがひにいひけるはわれらの遇ざらんとおもふこのひとい
らへゆくとはギリシヤにちらばりをるものゝ中にゆきてギリシヤの人に教をしへんとするや 三六 彼がかくりていなんぢらきたれば尋ることあるべしまた我をるところにくることあることをざるべーといひし言はなにぞや○ 三七 いとおほいの大日に祭の立てよばゝりていひけるは人もしのどわかばわれにきたりて飲 三八 われをしんずるものは聖書にいへるごとくその腹より活水のかはのごとくながれいづべし 三九 このくいへるはわれを信ずるものの受けんとする

靈拔さゝせるなりそハ耶蘇いまゞ榮をうけざるまよりてみさゝいまゞそゝぐらぎれゞなり 四 民のうちまておわくの人このことをゞ紙きゝて。こハまことまこうゑ預言者ありといひ 五 あるひハこれハキリストなりといひ。あるひハキリストをガリラヤよりいづべけんや 六 聖書ハキリストをダビデのまゑゑまてダビデのまみー鄉ベツレヘムよりいでんとあるせーまあらざやといふ 七 かゝまおいて民どもこれよつきてあらそひわかれたり 八 そのあるうまこれを執んとするものもありきれど手ゞーせーものなかりき 九 下吏どもさいーの長とパリサイの人どもとのもとにかへりきれゞこれら下吏ハいひけ

るいなんぞこれを曳きこらざるや 四六 衛ども答ていひけるはいまだこの人のごとくいひしひとあらず 四七 パリサイのひとびともまた惑されしか 四八 有司または リサイのひとのうちよく信ずるものあらんや 四九 律法をしらざるこのおろかのひとびと罰もべきものなり 五〇 そのうちの一人なるニコデモといへるもの かつてイエスの許にきたりしが 五一 その人よきうへその行をしらざるときはその罪をさだむるいわれらの律法ならんや 五二 これらこたへていひけるは爾もまたガリラヤより出でしか なんぢの考へよ よげんしやはガリラヤより出ることなし

こゝよおいてくおの〳〵家よこゝれを

第八章

い 爰を橄欖山よりもどりニよるおそるこゝろまた聖殿
よいでくるこの民こなこのれをきゝうけれべをわをてかをらし
ばをしふ 三 こゝよ奸淫ばおこなくるときとらへ〳〵婦
ありくるこのがくしやとパリサイの人これを耶蘇のもとよつ
きだしより 群集のおこのよおきいひけるい 四 師よおれをんな
い奸淫ばおこなひをるとき執られしものなを 五 このくれ
ごときものを石ゝてうちおろをべしとモーセ律法のうち
よ命じより。なんぢいかゝいふやと 六 のくいくるを耶蘇をこ
ゝろみて訟のさねをひきいださんとおもくるなり。い 爰

き身をかゞめゆびもて地にもれうつを七
こゝろよりイエスおきてこれにいひけるもなんぢらのう
ち罪なきものまづこれをいしもて撃よといひ八また身
を屈かゞめてちに畫を九これらこれをきゝてその良心よせ
められゆゑより按をゞめわかきものまでひとりもくまのこ
ゆきそゞイエスひとりのこる。をんないあつまりをれなるこゝ
ろをたゝ十いふをイエスおきてをんなにいひけるいづこ婦よなんぢ訴うつ
くしものをいづこにゆきしや。なんぢの罪をさだむるも
のあるきの土をんなのいひけるハ主よたれもあらずイエス
いひけるいわれもなんぢのはゝみを定さだめ。ゆきてふたゝび罪

我をうけあくれ○十二耶蘇まことにまことにこれをなんぢらにいひくるをもまれハ世のひかりなりわれをしたがふものハくらきなかをあるかずに生のひかりをうるなり十三あるひとおほいにパリサイの人のひけるハなんぢみづからおのれの證をあかせをなんぢのあかしを眞なりとせず古耶蘇これにていひくるえわれみづから已のあかしをするともその證ハまことあり。そハわれいづくよりきたりて何處へゆくをしればなり。なんぢらハいづくより來りいづくへ去るをしらざるなり十五なんぢら肉よりて人のつみをさだむ。われハひとの罪をさだめず十六またもしわれをさだむることあらハ眞なり。そハわ

也ひとりあるなあらび我をつのせ一父とともにあれをなり十七二人のあのしいまことなりとなんぢらのおきてよるされたり十八まづ證我をるものいれなをわれを遣せーちもまさわづあうーををるなり十九これらいひくるをあんぢら父をいづくまあるや耶蘇まさへくるをあんぢらをわれ我ちくをも去らざるなり。そーわれを識るあらべわづ父をも去るなるん二十耶蘇これらのことをみやの中さいせんのをこ我おくるところまてかまくれとこう迄の時のまざいてらざれバこれも手我いざれらものなをりき二十一耶蘇まのさいひくるをこれ往んあんぢらを

われ我尋ぬ〻なんぢらおのれ汝罪よりなんぢらのやくところ
ろにいなんぢらきたることあたはざるあり 三 これよりさき
てユダヤびとにひけるごとく我往ところになんぢらきたる
ことあたはざるとなんぢらに今われ自殺(ジサツ)せんとするその 三三 耶蘇(イエス)
われよりひくるいなんぢらを下よりのでたるものにして上(カミ)よりい
づ。なんぢらはこの世よりのでたれどわれはこの世よりいでたり 二四
このゆゑになんぢらはおのれ汝罪のつみに死(シ)なんとされどひと
なり。なんぢらもしわれの彼(カレ)なるをしんぜずばおのれの罪
よりなん 三五 これらにひくるいなんぢいされるや 耶蘇(イエス)
ひくるいこれいふ實(ジツ)よりのなんぢらにつぐるところのもの

なり　二六　それなんぢらについてうるべきこと罪をさばむべきこと多端あり。それをつかはせしものは眞なり。われきゝしことを我わが世につぐ　二七　かれら父をさしていふをわれどうれらはきゝざりき　二八　ここにおゐて耶蘇いはくなんぢら人の子をあげしのち我のわれなるを我おのれよりなにごともおさずわが父のをしへしごとくにこれらのことをいふをあるべし　二九　われつかはせしものは我とともにあり。ちゝをわれひとをおきたまはざればなり。そのわれ恒におのれのこゝろよきことを我おこなふゆゑなり　三十　耶蘇このことを我いひしときおほくの人の

われしんぜそ三耶蘇おのれ我信ぜずユダヤびとをいひけるとなんちらもわがことをそ居ばまことにわがでしなそ三こうまことをしらん眞理はなんぢらを自由をえさんぺし三こうれらまことにそるはそれらはアブラハムのもゑありいまざひとを奴隷となりしことなをんぢらを自由をえさんぺしと爾のいひしはいかなることぞ三耶蘇こうれらをいひけるはまことにまことにんぢらにつげんをくて惡をおこなふものをおくの奴隷なそ三奴をゑいつねに家よをらんず子いつねに居ず三このゆゑに子もしなんぢらを自由をあたへなばなんぢら誠によゐゆうなるべし三七われなんぢら

アブラハムのまごなるぢ我しる。されどもされをころさんと謀そへわれのことばをなんぢらの衷にあるざれバなり　三八　それハわが父とともにありて見しことを我いひ。なんぢらハあんぢらのちゝとともにありてみしことを行よ　三九　こたへていひけるハわれらのちゝをアブラハムなり　耶穌いひけるハなんぢらもしアブラハムの子ならバアブラハムのわざをおこなふべし　四〇　平ちうるよいまなんぢらハ神よりきゝし眞理をつたふるわれ我ころさんともとむる。これアブラハムのわざにあらず　四一　爾儕ハなんぢらの父のわざをおこなふなり。こたへていひけるハわれらハ奸淫によりてうまれず只ひとりの

ちゝあるをもて。そるをもち神あり 四三 いゑをこれらよりいひくるひ神
をしなんぢらの父あらざなんぢらわれを愛まくし。それは
神よりいでゝきたればなをそれわれよりおのれよりてき
たるをあらび神われ故にきたりたるあり 四三 なんぢら
なんぞわがいふ言をあらざるや。それわがおしへをきくこ
とを得ざればなり 四四 なんぢらの父あくまよりいでたるその
ちゝの慾をおこなふことをこのむ。かれはそのはじめより人を
ころしたものなりまた眞理よりをらず。それうれの裏にまこと
るなければなり。かれが誑をいふときはおのれよりいふ。そ
りみなをそれうれは誑者またそのちゝなればな

を四五われ眞理をいふによりてなんぢらわれをしんぜざ四六
るなんぢらのうち誰かわれをつみさだむるものあるや。わ
れあんぢらにまことをいふるによりゆゑわれを信ぜざる
や四七神よりいでしものはかみのことばを聽あんぢらのき
かざるは神よりいでざるによりてなり四八ユダヤ人こたへ
ていひけるはなんぢらサマリアのひとをして鬼にとりつかれ
たるものといふわれらがいふるは宜あるにあらずや四九耶蘇こたへ
ていひけるはわれは鬼にとりつかれたるものにあらず。われは
わが父をたふとびなんぢらはわれ伐こうんぜるなり五十また
われはみづからの榮をもとめざるものあり。これを求こうん罪をさだむる

こころにそのいのり 五一 われまことよ誠よなんぢらにつげん
人もしわがことばをまもらばこのぎりなく死をみざるべし
五二 ユダヤびと彼にいひけるはいまわれらはなんぢが鬼につ
かれをるものあるをみる アブラハムもしでよ死また預言者も
しかりなを。おのれをなんぢ云ひとしわがことばをまもらば
このぎりなく死じと 五三 なんぢはわれらの先祖アブラハムよりも
おほきなるものあらんやアブラハムもしでよ死たり預言者
もしでよ死たりなんぢみづからを誰とするの 五四 耶蘇こたへ
るはわれもしみづからあがめなばわが榮もむなし我を
我あがむるものそわが父またなんぢらのいふ神と

なふることころのものあを 五五 なんぢらハこれをしらべられをこのれを識われもこれ欤もらびといもぐなんぢらのごときを詐者とならん。さまでこれハこのをあをまもるなり 五六 なんぢらのせんぞアブラハムをるこの日をみんことを喜まこれ欤みてさのしめり 五七 ユダヤびとこれまいひくるハなんぢいまぐ五十よもあらざるふアブラハムをみしや 五八 耶穌これらふいひけるハまことまくなんぢらまつぐん我ハアブラハムのあらざりしさきよりあるものなり 五九 まくまおいてひとくこれ欤撃んとて石をとれを耶穌こられてそのあくのをとをを聖殿をいでゆけを

第九章 耶蘇ゆくときうまれつきある瞽を見しに、二その門徒
うれえたづねていひけるハラビこのひとをめしひに生しを
たれの罪なるや。おのれによるうまれ三耶蘇こたへ
けるハこのひとをつみもあらず亦その父母
の罪もあらずうれえようて神のわざかれあらはれんがため
なり四晝のうちいそがれうるうちに我をつかはせしものの
ざをなすべきなり夜きたらんそのとき誰もなすざをなし
とあたはざればなり五われ世にをるうちハよの光なり六このこと
をいひて地につばきし唾をそつちに泥をつくりその
泥をめしひの目にぬりて七うれえいひけるハシロアムの池にゆきて

へ。これまでのいちもきてあらひ目みることをえてかへ
シロアムまれを譯でつうはされーものとれ義あり八隣の
ひとぐおよび素よりこれの乞食なるーをみーものともい
ひくるをこをもわをてものをこひー人あらじや九あるひ
とをこれあるといひ。あるひとを似るなりといふ。これい
ひけるい我をこれあり十これらいひくるいなんぢの目も
いうまーてあきくるや土こくていひくるい耶穌といふ
ひと土とときわづめるぬりていふ。シロアムのいけるもきて
洗とわれもきてあらひければ目みることえくり十二ひと
びとこれをいひくるをこれいづくにをるや。こくていな

らびといふ 十三 こゝろこの瞽なりしものをパリサイのひとゝもとゝもひきいでゝこれを 十四 つち紙とゝきて耶蘇こゝろの目をあけし日はあんそくにちありき 十五 パリサイ人ひとゝも彼にそひけるがなんぢのめいじたまひしやうにてあきらかにみえどころ紙とゝのめる置てそれをあらひて見こと能えざりき 十六 あるパリサイのひとゝのひけるはこの人あんそくにちをまもらざるとゞのゆゑに神よりいでしにあらざるなり。ある人いふいかでこゝろる者るしをおこなふことゝ後得んや。こゝにおいてこゝろわれわれをそしりて 十七 復めしひたりしひとにいふなんぢの目を開たるによりなんぢこれのことをなにと

いふやこゝに、くるをこゝを預言者るり　十八ユダヤびとこれ
のめをひるりーは見うるやうあるーこゝをその二親をよ
びきくるまでい信ぜぢ。そのもちふさおやをよびきくりて
十九もれよとひくるをこの人をめーひまそうまれーといふと
ころれなんぢらの子なるこ。いまいのまーてみるこく紋え
くるや二十二親うれらはこたくくるいこれいわの子なると
うまれつきの瞽あるく紋ある　二十一されど今いうまーてめあ
きるなりーこのれこうをーしらぢ亦そのめをあけーい誰み
るこのをーしらぢ。これいおとなあり彼はくづねよこれみぐこ
らいふ者ー　二十二親のこくいひーをユダヤびと紋おそれー

よる。そハ耶蘇(いえす)ハキリストといひあらハすものあらバ會堂(くわいだう)よりおひいだすべしとユダヤびとたがひにいひさだめしゆゑなり 三 ふたゝびおやのうちハ年長(としたけ)なりうまやにてよといひしハこのゆゑなり 四 めしひなるもの我まさよひていひけるハわれ我神(かみ)に歸(き)せよこの人(ひと)のつみびとなるを我ハしらず 五 かれらまたかれにいつみびとなるや否(いな)やしらず我ハめしひなるものにてありまもなくなれるこの一事(ひとつのこと)ハしれり 六 かれらまたいひけるハかれ爾(なんぢ)になにをなせしやいかにしてなんぢれ目(め)をあけしや 七 こたへけるハわれまでになんぢらにいひしをなんぢらきかざれバ何故(なにゆゑ)ふたゝび

きかんと思ふこの。なんぢらもその門徒とならんとおもふや
八 うむらの〳〵をいひくるひなんぢはその人のでしなれ
らはモーセの門徒なり 元 神のモーセにかくりしことばわ
れらもれをさればこの人のいづこよりきたれるをわれ
らもしらず 三 そのひとこたへてなんぢらがしらずしてこ
のれをそよわが目をあけしものいづこよりきたれるを
しらぬなんぢらもしらずといふ 三 神につみびとをきかぞさればこ
神我うやまひてその旨にしたがふものの聽たまふとわ
れらはしる 三 世のはじめよりこのうまれつきある瞽
者のめをあけしひとあるを我きかず 三 もしこのひと 神より

いでぎバなるごとをもなしえざるべし 二四 これらこと
くていひけるハなんぢをこころぐく罪尊(つみたふと)まるるものあるに
反(かへ)てこれら故をしふるこの。つひにこれ故もひいづせり 二五 この
れらの逐(おひ)いづせしこと故き 耶蘇(やそ)そづねてこれをあひい
ひけるハなんぢ神の子をしんぜるこの 二六 こころくていひくる
ハ主よこれとしてわが信ぜざきものハこれあるや 二七 耶蘇
いひくるをなんぢをでるこれをみる今なんぢとものいふ
ものハそれあり 二八 主よわれしんぜといひてこれ故拜(をが)せり
二九 耶蘇いひくるをもてれさぎきせんこめる世にきたる。もる
をもちみえざるものをしく見(みえ)みゆるものをうくつてめしひ

となく〳〵む　四　耶蘇ところにをり〳〵パリサイのひとこのことを聞てうれしいひけるハなんぢらもめしひあるやの　四一　耶蘇うけあいひけるハなんぢらもしめしひあるハ罪あらざるべし。されどいまわれら見といひしによりてなんぢらの罪のこれをのこれり

第十章

まことまことなんぢらにつげん　羊牢にいるに門より入ずしてほかよりをゆるものを竊賊なり強盜なり　二　門より入るものハその羊の牧者なり　三　かどもりハこれのためにひらき羊ハその聲をきくそのをのれの羊の名を呼よびてこれを曳いづ　四　その羊をひきいづ

ひつじを別人よりこごろくまで避そんわこのものの
おこるをしらざれば也 六 耶蘇うれうるこの譬をいふどこの
れうへそのかうれうるところいつゝなる意こうをしらざりき 七
このゆゑよ耶蘇またこうれうるいひけるはまことにまんな
ちらまつげんわれんもるはちひつじの門なり 八 をぐてそ
れうりさればきたりしものはぬすびとなり強盗なり。ひつ
じそのこゑをきかざりき 九 我ももんなり。もしひとまれよ
りいりばまくもれうろ出入をなして草をうべし 十 ぬすび
とのきたるはぬすまんとし殺さんとしほろぼさんときた

のほかのおしわがきるゝひつじをしていのちを得うるゆたうあらしめんためなり　十一われは善ひつじうしかりよきひつじうしは羊のためにいのちを捐つ　十二ひつじうしにあらずおのがひつじをもたず只やとゐられてひつじをまもるをのゝ狼のきたるを見ればひつじをすてゝ逃おほうみひつじを攫うばひてうれをちらす　十三雇工のふぞろいやとゐられしものなればその羊をいたむることよりてあり　十四われはよき牧者なりておのれのひつじを知る。また己の羣のひつじよりも　十五父われを知るごとくわれも父を知るわれひつじのためにいのちを命すてんなり　十六またわれにこの牢よりあらぎるほうれ

ひつじ飼ひらをこゑもつれきこえん。うれしきこゑの聲をきこうんつひよひとつの群ひとつの牧者とあるべし十七そのわれを愛をそこゑれふたゝび命をえんごうにいのちをもつるの由なり十八我よりこれをうむふものなしをれみづからこれをもつるなり。われこゑをもつるの權能あをまたよくもををうるのちうあり。そのちゝよりうけこの命令をうけたり十九さてこの言よりてきたユダヤびとあらそひわかれたり二十その中おほくのものいひけるハ鬼につかれてくるふものあるをなんぞうれを聽や二十一またあるハ或ひけるハこれ鬼につかれしものゝことばをあら

ば鬼はめ〻ひの目をあらることなく、せんや〔一〕冬時みやきのめのいそひのとき 二三 いゑ耶聖殿のソロモンの廊をあるきゐるよ 二四 ユダヤびとこれをうちかこみていひるいつまでうごはけるや爾もしキリストならばあきらかにわれらにつげよ 二五 耶蘇こたへけるはわれなんぢらにつげしことをもなんぢら信ぜざりしわが父の名によりてわがおこなふ事ぞわれよつめてあかしをるなり 二六 されどなんぢらわが羊にあらざれゆゑなり 二七 わがひつじはわが声を聽わがこれをしりわれよあるごひ 二八 われらもとよ永生をあたふ

れくつまづきおろびた亦これ我わが手よりうむふまのなり 元 されよこれら我賜ーそのちくはをべてのものよりも大なりまさるぞちくの手よりこれをうむひうるものとー 宇 されどもとよ一なり 三 こくよおいくユダヤびと石をとりてまさこれをうたんとせり 三 耶蘇 これらくよこくけるにわが父よりうけてまをおほくの善事をなんぢらにみせーよそのうちいづれのまざよりてまれをいーてうさんとまるの 三 ユダヤびとこたへていひけるは石にてうさんとまるにはきわざのためあらずぢなんぢうで褻瀆こと我いひつなんぢ人なるをおのれを神となすより

てなり　三四 耶蘇こたへけるはなんぢらのおきてに。われ稱ふんぢらは神ありとあるされしにあらずや　三五 聖書はやぶるゐこうらぶ。もし神のことをうけしものをかみといへり　三六 父のきよめわかちて世につかはせし者われ神の子なりとつげたるをなんぞ汝らはけがしことをいふべけんや　三七 もしわれわがちゝの事をなさずばわれを信ずることなかれ　三八 もしこれを行はゞたとひわれを信ずとも其のわざを信じんせよ。そは父のわれにあり我のちゝにあることを汝らしりて信ぜんがためなり　三九 ゐれら復とらんとしけるがこの耶蘇その手をのがれてさりぬ　四〇 ゐくてま

とヨルダンのむこうにあるヨハネのバプテスマをあらはしたるところにきてとどまりたるに 四 おほくの人これをいふ ヨハネはひとつのしるしをもなさざりしかどもこの人のヨハネのいひしことはみな眞なりと 三 ここにおいておほくのひとここにてこれを信ぜり

第十一章

一 ここに病者ありラザロといひてベタニアのひとなりベタニアはマリアとその姉マルタのをる村なり 二 マリアは香油を主にぬりその髪の毛にて主の足をふきたる人なりこれの兄弟ラザロやめり 三 ここをもてその姉妹ら使をもて主

のやうといひつゝいせり　四耶蘇これ聞きつゝいひける
いこい死るやまひよりあらび神のさうえのためあり神の子
をしてこうをうけりて榮をえせしめんがためなり　五それ
マルタとその妹とラザロいつゝの愛するところの
ものなり　六このゆゑに耶蘇そのやめる聞きつゝてこのとこ
ろに二日とゞまり　七そのゝち門徒にいひけるはわれらま
さユダヤにゆくべしと　八門徒いひけるはラビ　ユダヤ人さき
にころさんとせしよまたゆくことをもきらひしの　九耶蘇こたへ
けるは一日のうちに十二時あるにあらずや。ひとゝ日間あるこのばつまづくことなし。そ

ハこの世のひうまを見るまよりてなり 十 まこと人もしよる
あるそのばつまづくべし。そは光そのひとまあきらかなる
十一 耶蘇このくしひてのちでしまいひけるハまれらの友ラザロ
いねふりまれこの名ばさまのうんまめまくべし 十二 門徒いひ
けるハ主ようれもしいねしあらばいえん 十三 耶蘇ハうれの
おこなしをいくるなれどでしまちハ寝てやすめることをい
へるあらんとおもくまを 十四 このゆえに耶蘇あきらかまうれ
まつげくいひけるハラザロを死まを 十五 なんぢら我して信せし
むるまめまうれこまあらざりしを喜されどいまこのし
こまゆくべし 十六 デトモとまるみるトマスあくの門徒まも

ひくるゝ　われらもまゐゆきてこれとともにしなゞん　十七
耶蘇いでゝラザロがもとに墓にありて四日をへたるを
あれり　十八ベタニアをエルサレムよりちかく。その
よそ八七丁なり　十九おほくのユダヤびとマルタとマリア
ゐて弟のことよりてなぐさめんとてもでこれらのもとに
きたりをれり　二十マルタを耶蘇きたるときゝてこれを
むかへ、マリアをかの室にざせり　二一マルタいひけるは
い主よこゝにいませしならばわがきやうだいを
しもの　二二然あれどもいまさへなんぢが神にもと
むるところをわれものゝ神なんぢにあたふと
ある　二三耶蘇いひ

けるハあんぢのきやうだいハよみがへるべし 二四マルタいはれけるハいかにもよくしりたれどもすゑの日のよみがへるべきときにおよびてよみがへらんことなるべし 二五耶蘇われはよみがへりなり復生あり生命あり我をしんずるものハしぬるともいきん 二六またすべて生てわれをしんずるものハ永遠にしぬることなかるべしこれをしんずるや 二七いへるハ耶蘇よ然り主よきりすとかみの子なるハわれぞ 二八このくちひをもりてひそかにその妹マリアをよび師きたりてなんぢをよべりといふ 二九マリアこれをきゝいそぎおきて耶蘇のもとにゆけり 三〇いまだ

ざむらふいらびあ マルタの迎へゝころよをれり 三一 マリアと
なぐさめてゝもに室よをるゝユダヤびと マリアグ急ゝちに
いづる故ゝそのれい墓よゆきてなげくあらんといひつゝ
うれふるをぐり 三二 マリアいゑにのゝころよきゝり彼を
みてそのあしもとに伏いひけるを主よもしこゝよいきの
しあらばわれの兄弟をあるざりしものを 三三 いゑれマリアの
哭泣とうれふるもきゝりしユダヤ人のなくをゝてこゝ
ろ故いとましめ身ふるひて 三四 いひけるいづこんぢ何處よこれ
故おきしやゝうれふいひけるい主よきたりてみたまへ 三五 耶
穌なみだをおとしたまふり 三六 こゝよおいてユダヤびといひ

くるハ視よいこゝろだろうこれ汝愛するものぞ 三七 そのうちなる人いひくるハめしひの目をひらきうるこの人まてかれを死ざらしむることあるハざりしや 三八 耶蘇まことにろをいさましめて墓よいくる。はかを洞なりその口のところへ石をおけり 三九 耶蘇いひくるハいしをのけよ死しものおときやうずいマルタいひくるハ主よこれハもや臭しあるそよ四日なりへるゆえ 四〇 耶蘇うれよいひけるハなんぢもしなんぜば神のさうえをうるべしとそれなんぢよいひしにあらずや 四一 つひにその石ばをのけたるとこ ろよりそらをあげていひけるハ父よ

をでよわれよきけ。やれこもをなんぢよ謝ゐ四三
おがつぬよそれよ聽こことをしる。ろうるにわがくりふハ
かくハくよたそる人をしてなんぢのまれをつのもせーこ
とを信せーめんとそなり四三如此いひておわこゑよびい
ひけるハラザロよいでよ四四死者ぬのまて手足をまくれまさ
面ハてぬぐひまてつまをて出い出ゐこうれくよりひける
いこのれ我ときてあるものーめよ四五マリアとそもまきくりー
ユダヤびと耶蘇のせーこと我みておわくうれ我信せり四六
されどもそのうちよパリサイの人よもきて耶蘇のせーこと
我つげーものあり四七もくよおいく祭司の長くもとパリサイ

のひとと議官をよびあつめていひけるはわれらいかをべきやこの人おほくのしるしを行なり四八もしこれこのまゝをそおかんに人ことごとくこれを信ぜんさらばロマの人きたりてわれらの地をも民をもうばはんべし四九そのうちのひとりまてこの歳のさいしの長なるカヤパといへるものこれらにいひけるはなんぢらいかをもしらに五〇またみのたゝめに一人をまて舉國おろびざるはわれらの益となることをもおもはざるあり五一この言はおのれよりいでしにあらず。このとしの祭司のをさなるによりて耶蘇のこと民のために預言せるなり五二たゞにこのためのみ

めのみあるに散する神のこどもらをもひとつにあつめんがためなり 三 さてこの日よりしてうれ〳〵耶蘇をころさんとくわだてをかる 四 このゆゑに耶蘇これよりあらはにユダヤびとの中をあるきうべそこをさりて野にちかきところにあるエフライムといふまちにゆきて門徒とともにとどまれり 五 ユダヤびとの逾越のいはひちかづきたればひとびとおのれを浄潔んがためにきたりしのいはひのまへに郷間よりエルサレムにのぼり 六 耶蘇をさがねて聖殿にたちてあひさのひにいひけるいかにおもふやかれは節にきたらざるの 七 さいしの長ぐちとパリサイの人ともまた令をいだしてもし耶蘇の

ありかをあるひとあらゝぶ告べしといふ。こゝうれをそらく
んとおもふなり

第十二章 逾越のいましめの六日まへ耶蘇ベタニヤにいたる。即ちあまてよみがへらしゝラザロのをるところなりにて
よおいてあるひとらゞこのところにて耶蘇にふるまひをま
うくマルタ給仕をするせり ラザロもいましめとともに坐せるものゝ
うちの一人あり 三 マリアそ眞正のナルダあるあらひとうきに
ほひあぶら一斤をもちきたりて耶蘇のあしにぬそ。またお
のが頭髪にてそのあしに拭ぬぐへり。あぶらのまほひあまねく室中にみてり 四 そのでしの一人あるイスカリヲテのユダ

るハち耶蘇をわさんとするものいひけるハ五この香
膏をなぞ銀三百よりてそまづしきものにわたさざる
や六これがこゝろくいふにあらず貧者をおもふにあらず。ぬすびと
にてふろ金嚢をもちそのうちにいるるものをとりゐたるものなり
のあればなり七耶蘇いひけるハこれをかまるあるをわ
が葬の日にそなへこれをさゝせよ貧者ハまづしきものハ
つねにあんぢらとともにあれどもわれ常になんぢらとともにあらず
もにならず九おほくのユダヤびと耶蘇がこゝにをる故をりて
きたる。たゞ耶蘇のためのみにあらずまたそのよみがへ
らせしところのラザロをもみんとおもふなり十祭司

のをきゝてラザロをもこゝろさんとするゝ十一そこでラザロは
こゝろふとうをてをおくのユダヤびとゆきて耶蘇をしんぜる
ごゆゑあり○十二あくる日おほくのひとゞ節よきたり耶
蘇のエルサレムよきたらんとまるをきき十三棕櫚をとりゆきてこれ
ら叫むうゝホザナよ主の名よりてきたるイスラエルの王いさ
いきたひなりと十四よりて乗りいたゝ驢馬の子をえて、これる
のる十五おそるゝてシオンの女よおそるゝなかれ視よなんぢの
王ハろばの子よりてきたるをあるがごとし十六門徒さき
にはこのことをしらざりしが耶蘇さかえをうけし
のちこれらの此事をかれよりてしるされまたそれにこれを

ひとぐ彼よおこあひさゝゝをおもひいざせを七耶蘇の
ラザロな墓よりよびいざゝよみごくらせゝときこれと
ともたをりゝものぐも證なせを八この休徴をなせゝこ
ろなきゝふよりをひとぐかをを迎さるなり九こゝよお
いてパリサイの人たぐひよいひさるいあんぢらがはさると
ころの益なきをもらびやみよ世はこるこれよあさぐゝを
(二)二十禮拜のたろいもひよおぼれるをのおうちよキリシヤの
人あり二これらガリラヤのベツサイダのひとある、ピリポよき
たり求ていひけるを君よわれら耶蘇よまみえんことをねが
ふ三ピリポきさりてアンデレーよつぐアンデレーまさピリポと

ともに耶蘇よばゞ三いづくにうれらよこゝにていひけるを
人の子きたるをうくべきときいたれを二四またゝるべくあん
ぢらよつけん一粒は麥を一地におちてしるぞべきひと
つまゝにてらん。もし死ばおほくの實をむすべし二五そのい
のちをこのむものはこれをうしなひその生命をにくまざ
るものをこれを存てうぐりあきいのちにいたるべし二六人
もしわれにつかへんとせばわれにしたがへ。されはつかふる
ものは我をるところにわれらん人もしわれにつかへばそ
の父はこれを貴べし二七いまこゝろうれいたりをな
にといはんや父よこのときよりわれをすくひたまへと

もんう否さるぶさもわれ此時よりさるるあり　六ねくったくい父よなんぢの名のさうえをあらもせ。このとき天よりさるおりていふされその榮をまでよあらもを再ふをあらもまべー　二九旁邊よさてる。ひとびとおをきゝて雷のわりとりよ。あるひとん天のつうひうれようさるるありといく　三〇耶穌さゝへていひけるやこの聲はわがためよあらびなんぢらのさめあり　三一この世はいま罪よさぶめらる。このよの主はいまおひいぶさるべー　三二それもー地よりあげられるをぶ萬民ねひきそわれもおさゝせん　三三如此いふをのいへるをそのいつたるさゐまて死んとおる紙をめせるあり

三四 人々うれよろこびていひけるいざわれら律法(おきて)にキリスト
いうだりあるく存(ながら)へるものありときくしよなんぢ人の子(ひと)にあげられんといふいかなんぞや此(これ)ひと人(ひと)とは誰(たれ)ぞや
三五 耶蘇(いえす)うれらにいひけるいまなほ暫(しばらく)くのあひだ光(ひかり)あんぢらとともにありひかりあるうちに行(あるき)てくらき暗(くらき)おひつかれざるやうせよ。くらきにあるくものはそのゆくべきところをしらず
三六 なんぢらひかりの子(こ)となるべきためよ光(ひかり)のあるうちにひかりをしんぜよ耶蘇(いえす)これらのことをいひはてうれらをさけて隠(かくれ)たり○
三七 もいえすうれらのまへにかくおほくの休徴(きうち)をなしうれどもなほうれをしんぜざりき
三八 これ預(あらかじ)

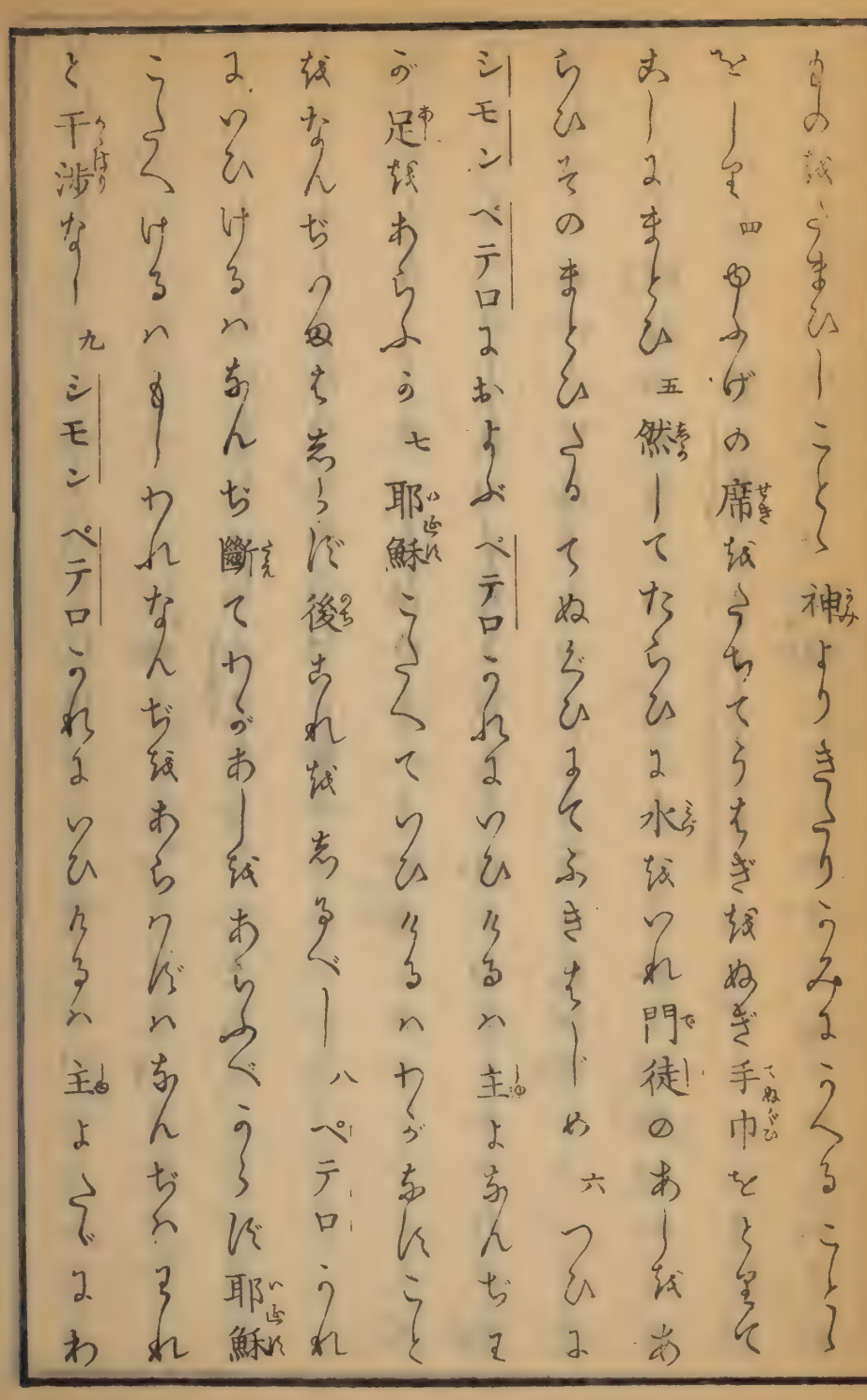
言者イザヤがいひしことを成就せしめんためなり
三九 イザヤまた言ふ
四〇 「彼らの目を盲にし、その心を頑迷にしたまへり、
これ目をもて見ず、心をもて悟らず、飜へりて我に
いやされざらんためなり」
四一 イザヤかく言ひしは、その榮光を見しによりて
彼のことを言ひしなり
四二 されど有司のうちにも多くの人イエスを信じた
れど、パリサイの人を憚りて會堂より逐ひ出されざ
らんために、公にこれを言ひあらはさざりき
四三 それ彼らは神の譽よりも人の譽を愛したれば

れより人のわざわれをこのべるなり○四四耶蘇よべるといひけるかれ我信ずるものいまれをしんぜるまゝあらじ我をはこのうせしものを信ぜんぎるあり四五またわれを見るものゝわれ我をはこのうせしものを見るあり四六われ光となりて世よきたれるをべてわれ信じんぎるものをしてくらきにをらざらんためなり四七人もしわがことばを我きゝてまもらざるともその罪をさだめんぴとがきたりしん世のつみをさだめんためにあらじ世を救はんためなり四八われ棄てるごとをのれざるものはつみを定るものありわがいひし話はその日にわれがつみをさだむべし四九そはわれお

のれよりゐまあらびられ我つのをせ〜父わくがりふべきこと我うるべきことを命じらるるなり 幸そのめい〜うまふところろいまをふりち永生なるをわをあるこのゆゑまるこのりふところろへ父のつげうまふまつまいくるなり

第十三章 そぎこ〜のいもひのまへ耶蘇この世をさりて父まうくるべきときりうまる我あを世まあをおのれの民我をやまあいを〜をなりまいくるまでこれ我愛せり 二ときまこのあく晩飯のせきまつく。あくまいうねて耶蘇我わさんとほることを我シモンの子イスカリヨテのユダといふもの心まおこさ〜めうり 三 耶蘇おのれの手まちのをべてのれよりゐまあらびられ我つのをせ〜父わくがりふべきこと我うるべきことを命じらるるなり 幸そのめい〜うまふところろいまをふりち永生なるをわをあるこのゆゑまるこのりふところろへ父のつげうまふまつまいくるなり

第十三章 そぎこ〜のいもひのまへ耶蘇この世をさりて父まうくるべきときりうまる我あを世まあをおのれの民我をやまあいを〜をなりまいくるまでこれ我愛せり 二ときまこのあく晩飯のせきまつく。あくまいうねて耶蘇我わさんとほることを我シモンの子イスカリヨテのユダといふもの心まおこさ〜めうり 三 耶蘇おのれの手まちのをべての



ゐあーのみあらば手と首をもなほひたまへ　十　耶蘇いひけるはあらひたるものはあーのあらふ濯をおよびべ。あらのーてまたきよーぺなんぢらも潔されどもあやぐくいきよきものはあらべ土こゝを耶蘇おのれ賣ものを識たまへり是故なんぢらみな潔からずといへるなり　十一　それらの足跡なほひーのちその上衣服をとりまたまわりてうれらよいひけるやそのあんぢらにあせーこゝをわかるこの十三なんぢらわれを師とよびまた主とよぶ。あんぢらのいふところろいよーぺ我いまうとにこれなり　十四　われをあんぢらの師また主あるにあほなんぢらのあーをあらふ。なんぢ

らもまことのひよ足をあらはすべし 十五 これなんぢらよ例を
示せもり。こゝわくのなせしごとくなんぢらも行しめんが
ためなり 十六 それまことにくなんぢらにつげんもまくいそぎ主も
よりおほいあらんがまた使者をこゝろをつくのちにものより大
なるべきをあんぢらもしこれをもりてうくのごとくなるべき
福なり 十七 大なるのいひしところのあんぢらをさぐて指るよあ
らん。わかをそのえらしものをもる。もくれども聖書よそれと
ともに食にるものわをそむきて踵をあげしとしるされ
しようをはせんためなり 十八 その事のいさらんときなんぢ
らわれ我信じてキリストとせんためそのことをいさざ

る今よりこれをなんぢらに告ん二まことまことなんぢらにつげんそこがはらつるものはものをうくるものよりわれ我をうくるものはわれをうくるものをうけん三耶穌このことを說いおはりて心にうれへあらはしていひけるは誠まことになんぢらにつげん一人なんぢらのうちにわれをわするものあり三門徒たがひにこのわが說をみあはせ誰をさしていへるかのことをうたがふ三耶穌のふところにひとりのでし耶穌のむねによりそひゐたるが四シモンペテロこれにたをきしていふこれはたそしかんと首肯もてあひせり五いはく汝の懷によりそをるしかの耶穌にいひけるは主よたれか

るの二六耶蘇こゝろにけるにわれひとつまみの食物にものを
濡てあたふるに人をそれなをとゝてつひに一撮のそひものは
ものをつけてシモンの子イスカリヲテにユダはあたふ二七彼ぞ
ひとつまみはものをうけーそのときサタナこれにいれを
こゝはおいて耶蘇うもまいひけるをなんぢがなさんとには
ることゝく速はなせ二八これはなにゆゑはこゝくいひーうをとも
もに席はをるものどもの中にをるものあくざりき二九あるひ
とユダは金嚢をあづかれるゆゑ耶蘇われ祝しそいをひは
ついて用べきものをかをーむるならんこの亦いまづしきも
のにあたへこさーむるならんとおもへるを三十さて彼はひと

まみのくひものをうけてたゞちによいでさり時はよるでなり
なり記三かれの以でしおもち耶蘇のひけるをいま人の子さ
かえをうく神またかれによりて榮ばうくるなを三神とし
うれようをてさうえをうくるとおは神をまことみづからし
さうえのうちにうをさうえしむ直にうを以さうえしめ
ん三小子よこれあれ若ばらくあんぢらやくともによりなん
ぢらもれ以尋んわゞゆくところによなんぢらもいくることを
あくまで前にこれとユダヤひとにいふ今またこれをなん
ぢらにはく三これ新誡以あんぢらにあくふ。もるとちあん
ぢら相愛をべしとおこれなを。もつあんぢら以あいをるご

とくなんぢらもあひ愛もべし 三五 なんぢら 相あいせバされよとりて人々(びと)なんぢらのわがでしあることを弘めふ
べしシモンペテロかれよりひくるを主のほとりへゆきたゆふ
や耶蘇(いえす)うれよろこべけるハわが往(ゆき)ところへきたんちらいま
もこうふことうたがひに後(のち)わをまもるこのらん 三六 ペテロうれ
よりひくるを主よなるゆゑよいまなんぢよ從(したが)うことあたは
ざるのぞわれいまなんぢのまへわが命(いのち)弘(ひろめ)をせん 三七 耶蘇(いえす)うれ
よこころへけるハなんぢいのちをわがために捐(すて)るやまことに
ふまことをまなんぢよつげん 鷄(にわとり)なのぎるまへよなんぢ三次(みたび)
うれをもらじといもん

第十四章

あんぢら心さわがざること　なかれ神をしんじまた
我を信ぜよ　二わが父のいへには多くの第宅あり
しからずばわれかねてなんぢらにこれをつげおきたり我あんぢらの
ために所をそなへにゆく　三もしゆきてあんぢらのために所をそなへ
またきたりてあんぢらをわれにあつくべしわれのをるところに
なんぢらもをらんためなり　四われの往くところは汝もこれを
しるなり　五トマスいひけるは主よわれらなんぢのゆくところを
しらず何ぞその途をしらんや　六耶蘇いひけるはわれは途なり眞理なり生命なり人もし
われによらざれば父のもとに

よゆくことあさりバ七ツ半なんぢらこれをもろべきぞぢう
をも識べし。ゆまよをあんぢらこれ伝もるなり已まるあんぢ
らかれ伝みるより ハピリポこうれさいひけるい主よわれらよ
ちをあろをしまへさろバ足ま九い匹をこれよいひけ
るハピリポわれ如此ひさしくあんぢらとともよをるしホ
いまざるれを識ざるっわれを見しものを父をこしなり。な
んぞちをわれらよあろをせといふやナこれ父よをりち
のわをよをることを伝信ぜざるっ。わをあんぢらよこうるし
こをみづうる語しよあろバわをよをる父そのわざ伝あ
せるなり 土これをちよ居ちまれよをるとわづはげし

こゝろ汝信せよ。十二まことにくなんぢらにつげん。われ汝らんぢるものゝ
へわざをなすべし。そのわれよりの父へゆけばなり。十三あんぢらもべ
てなにごとをねごふともこれこそ我をくてあれをなさん父のさうえの子によりてあらはれんがためなり。十四
もしなんぢらあにごとをわがなによりてねがはゞ我これをなさん。十五もしなんぢらわれを愛ばるあらばそが誡
をまもれ。十六またわれ父にこひねがはん別なるさむるものを汝らにあたへてかぎりなくあんぢらとゝも

よをもらさむべし　十七　これらをもて眞理（まこと）はこゝろのなり世（よ）これをうることあたはず。そのこゝろを見（み）ればまことざるをよるべきなんぢらはこれを識（し）そのこれあんぢらとともをこゝろあんぢらの裏（うら）よりわれをなり　十八　わがなんぢらを孤子（みなしご）とせじ再（また）あんぢらにきたらん　十九　しばらくぜバ世われをみることをなし。されどなんぢらはわれを見（み）るればいくれをなんぢらも生（い）ん　二十　その日（ひ）はなんぢらわれわが父（ちゝ）をりなんぢらわれは居（を）れなんぢらをこゝろ信（しん）ずべし　二十一　わがいまし　そをたもちてこれを守（まも）ものをまことをもてれをおいまことなりわれを愛（あい）ものをわがこゝろにあいせ

らる。われもまたあれ故にいひてこれを自己(おのれ)故(ゆゑ)あらしめんとて
行(ゆく)べし　三イスカリヲテなるシモンのユダかれにいひけるは主(しゅ)よいかで
よしてみづからをわれらにあらはし世(よ)にあらざるや　三耶蘇(やそ)こたへてこれにいひけるは人(ひと)われをあいせ
むるときは言(ことば)をまもらん。またわが父(ちち)はかれをあいせん。われらきたりてこれとそのまをもむべし　二四われを愛(あい)せざるものはわが言(ことば)をまもらず。なんぢらのきくところのことばはわがにあらず我(われ)をつかはしたまひし父(ちち)のことばなり　二五これなんぢらとともにをりてなほなんぢらのことなるあひだにこれをいへり　二六わが名(な)によりてつかはすところの

なりも聖靈もまぐべてのこと紙なんぢらをしへ赤わがをべてなんぢらよいひしことをなんぢらおもひいださしむべしモまれ平安紙なんぢらにわかやそき紙あんぢらに予まぐあくまるところろい世のあさまるところろのおときまあらぐべなんぢらこころろ憂なまれまま懼なかれ二六われゆきてまたあんぢらにきたらんとわがいひしこと紙なんぢらきけそなほわれをあいせぐ父にゆくとわがいくることを紙なんぢらよろこぶ者きなりそはわがもへまれより大なれぐなり二九あといまぐ成ぐまれまづなんぢらにつぐ事あらんときまなんぢらこれを信ぜぐきためあり三十

このみちをおほくの言をもてあんぢらにつげたり。そのおのれ主きたるゆゑなを彼これかくすることなし　三
されどもこれをあまねくわれ父をおいしまそのめいぜ
しうるをあそびておこなふことを世よにあんぶたしめんため起よわれらここを發さるべし

第十五章　われはまことの葡萄樹そのぢもくは農夫なり　二
よわれにあるえだをみなきりとるまたみなむすぶ枝はこれをきよくしてさらにおほくのみをむすばしめんため
くみ結ばんためなを　三　いまなんぢらわがいひしことばによりてすでに潔なれを　四　あんぢらわれに居さらばわれ

あんぢらよ　そらん　枝もーぶざうのきよつらあうざれべみ
づうう實ばむぶこと　あそうべ。なんぢらもうれよつうな
らざれをまさかくのごとくならん　五　われぶざうの樹み
んぢらはそれえざなる人もーわをよをわれまさうれよ
をうべおわくの實をむぶべし。そんもーなんぢら我をを
なるもときんなふごとをもなーあさいざれぢるを六人も
ーわれよをうざれべをなれさる枝のごとくそうにをそち
れて枯るなり。ひとこれをあうえ火よなげいをそやくべし
七　なんぢらもーまれよををまさわづいひこと爾僻よ。を
らべをべてねづふところ求よをそづひてあさくらるべし

八 なんぢらわがほくの實をむすびてわが父これによりて
榮とうく。されがなんぢらわが門徒なるを九ちょうどわれを愛
しうるがごくわれもなんぢらをおいは。なんぢらわが愛
をれ十もしなんぢらわがいましめをまもらばわが愛
ちんそれわが父の誡をまもりてそのあいをうるがごと
しー十一これこのこと紙なんぢらにかたるはわが喜なんぢら
にあらそなんぢらのよろこびをみたさんがためなり 十二
そのなんぢらたがひに愛しるごとくなんぢらもまたがひにあ
いしたがへ。これその誡なり 十三 ひとそれ友のために
命をすつるいこれよりおほいあるあいなし 十四 もしな

ごなんぢらよめいぐるところのこと紙おこあそびまるんちわごの友あり　去いまくりのちわれなんぢらを僕といそび。そいまるべそその主のなることをまうぎれびあり。わをききよあんぢらを友とよ爺を。わをあんぢらよわごの父よりききしくところのこと紙まらぐくつぐしよる　夫なんぢらそれを選ぜまをあんぢらをえらべを。こうなんぢら紙してゆきて實紙むいぜせそれみ紙さまをまるんごさめ。まくまるんぢらのまべてまごの名よよをそちまよねごみところのまの紙彼れをしてなんぢらよたまりらせんごさめよわれなんぢらをたてさり　主まるんぢらたごひよ愛せんごさめまれこれ

を命じ大世もなんぢらをにくむときはなんぢらよりもさきにわれを惡とせる事　九　なんぢらもし世のものならばよの人はおのれの屬ものをあいすべし。されどなんぢらは世のものならずわれなんぢらを世よりえらびたり。これによりて世なんぢらを惡むなり　十　なんぢわが僕はその主よりおほいなるものにあらずとわがなんぢらにいひしことを憶よ。ひともしわれをせめばなんぢらをも窘迫もしわがことばをまもらばなんぢらの言をもまもるべし　十一　されどこれらのことはわれをつかはせしものを知らざるによりわが名のゆゑをもてこれらのことを汝なんぢらに加べし　十二　われもしきたりてかれらに

なくべこれらつみなからん。されどいねをその罪いひもら
くべきやうなし 三 されば紙まくむものをまことわざもち
ゐるまくむなり 四 されも他の人のせざるをしわざ紙うれらの
うちもおこなそぎりしあるべこれら罪あらん。されどそ
れとそが父と紙をでも見うつこれをおくめを 五 このくのご
ときこれらのおきてを故なくしてわれをまくめをと錄
せしことにかみをせんためなり 六 されなぐさむるものは紙
父よりおくらんをもちもちよりいづる眞理のみこもな
まそのきたるときわがためを證をなすべし 七 なんぢらも
まこわれと偕にむじめよりををしをよりてあくしをあん

第十六章

一 わ主これらのことをあんぢらに語れるはなんぢらの
つまづくことなからんためなり 二 ひとびとあんぢらを
會堂より逐いだすべし。まことにきたりてあんぢらを殺す
ものみづから神に
つくすとおもふときいたらん 三 これらのことを
なんぢらの父とわれとを知ざるがゆゑなり 四 われこれ
らのことをあんぢらにかたるは時いたりてわがこれを
いひしことをなんぢらおもひいでんためなり前にわれ
これをあんぢらにかたらざりしは我なんぢらとともに
をりたればなり 五 いまわれ今われをつかはせしものに
ゆくなり。されどなんぢ

らんとうちわれをいづくへ往とたづぬるものあらん六うつつて我こころにこそ終のひかりをよりて憂なんぢらのこころろよみてりともれ眞をあんぢらにほげんわがゆくかなんぢらの益るがためなりゆくべきあるさもるものなんぢらにおくらんド往べうれば我あんぢらにおくらん八うれきたらんときに罪よはき義よつきさぎきよつき世をしてはみありとさとらしめん九つみるはいてといつるもれを信ぜざるふよつそなり十たゞしきよついてといつるもれるぐ父へゆくによりてなんぢらまさもれを見ざればなり十一審判よつにいてといへるをこれよのぬしきぎをうけれをなり十二

れなのほあんぢらよおほくかうるべきことあれども今あんぢらさとることを欲せず 十三 されど彼もるはちまことの靈のきたらんとき彼なんぢら教みちびきてもべての眞理をあらしむべし。そはうれ已よりてそうるよあらびそのきたりところのことをなんぢらよいひ亦きたらんとすること欲なんぢらよ志を傳ければあり 十四 かれわが榮をうらそさん。そはわがものを取うけてあんぢらよしめせばあり 十五 もろもろてちゝのもちたまふものぶわがものなり。さる故ようれわがものをうけてあんぢらよ示といふを 十六 ちばらくせばあんぢらうれを見じ。まさちばらくしてわれをみるべし。これ

まを父へゆくなり　うつまおいく門徒のうちまてあるも
れたうひまのひけるい暫せをあんちらわをみじまるとゐ
ばらくこてわれをみるべしといひ且られわれいちくゆ
くなりとまれらまいひしんなふのうとぞや　うれうまる
いひけるいこのゐばらくといひしい何のおとぞやそのい
へるところ誠まれらしらじ　耶蘇うれうがらもんとまる
誠ゐまてのひけるい　ゐばらくせば我をみじまるとゐばらく
しでわれをみるべしと言いこのうまるよりてあんちうた
うひまさうねあのの　誠まをまうとにまれをんちうまつげ
んなんちうい　あげきうふしを世をよろうべし。なんちう

うれふるあらん されどその憂をかはりてよろこびとあるべし 二 そんぢ子をうまんとするときそのうれふるはその期いたりてなり。されどその子うまれしのち世にひとりうまれしよろこびによりてなり 三 かくのごとくなんぢらもいま憂されどわれまたなんぢらを見んそのときなんぢらのこころよろこぶべし。その喜樂をうばふものあらじ 三 その日なんぢらわれに何事もとふことなかるべし。まことまことなんぢらにつげん およそ父の名によりてもとむることろのものの父われをなんぢらにさづけんなり

ふべし 四 なんぢらいまいでわが名によりてもとめよ

とあり求よさらばうけんとおもひてあんぢらのよろこび満
べし 五 さきに我もてあそぶことをあんぢらよかくりしゝが譬
喩をもちゐてあんぢらにうたへり父はいてあきらう
よろめけどもきいさらん 六 その日あんぢらわが名よりて
もとめん。それあんぢらのために父にねがはんといはじ 七
そはちゝみづからあんぢらをあいしたまふなり。これなんぢ
らわれを愛しまたわれよりいでゝ神のもとにきたりしことを信じる
よる 八 われちゝよりいでゝ世におくれをまた世はおくれ
て父にゆかん 九 でしらはいひけるはなんぢいまあきら
かにいひて譬喩をいはざれ 十 われらいまなんぢのものごと

ところなくまた人のなんぢをも刺ん刑ることをもおもふ時になるべし。これらのことを汝らにつげしは其時になりてわれかれらにこれをつげしことを汝らおもひ出すためなり三又はじめにこれらのことをつげざりしはわれ汝らとともにありたればなり三今われをつかはしたまひしものにわれゆくなり汝らのうちにわれ何處にゆくやと問ふものなし三されどわれこれらのことを汝らにつげしによりて汝らの心憂にみたされたり三しかれどもわれまことを汝らにつぐ我のゆくは汝らの益なり我ゆかざれば保惠師汝らにきたらざればなり我ゆけばかれを汝らにつかはすべし三かれきたりて罪と義と審判とにつきて世をせめん三罪につきてといふはわれにたのまざればなり三義につきてといふは我父にゆくによりわれを再び見ざればなり三審判につきてといふは此世の君すでにさばかれたればなり三我なほ汝らにいふべきことおほしといへども今汝らこれを負ふこと能はず三されど眞理の聖靈きたらんときは汝らを導きて悉く眞理をさとらせん聖靈は己より語ることをせず聞くところのことを語りまた來らんとするところのことを汝らにつげん三聖靈はわれに榮光をあらはさん我のものを受けて汝らにつげんによりてなり三父のものはみな我のものなり是によりて我聖靈は我のものを受けて汝らにつげんといへり三

第十七章　耶穌

耶穌このことを語りをはりて天をあふぎ

るハ父よ　ときいくさりぬ。なんぢれ子なんぢのさうえをあ
をさんがためなんぢの子のさうえをあらはしたまへ　二
これなんぢわれよさまひしところのものゝわれ永生をあ
さへんがためをべてれものを攻むる權威をそれよさま
ひさわれバあり　三　うぎりあきいのちとハ唯ひとりれ眞神あ
るなんぢとそのつかはせしイエスキリスト攻もる是なり　四
われあんぢの榮攻よりあらはし。なんぢのそれよ託しことこ
ろのさぎをそれさを成す　五　ちゝよ今さををしてあんぢ
とともに榮攻えせしめたまへ。まるもち創世よりさきよ
なんぢとともにふさもちしところのさうえ攻得せしめたま

六 あんぢ世より我にあたへたまひし人々に我なんぢの名をあらはせり。これらはあんぢの屬にして、なんぢ
これを我にあたへたまへり。また賜はりしあんぢのことばを我守て、
七 これらは今あんぢのもとより來りしを知り、
八 またあんぢの我にあたへたまひしことばを皆あんぢに
まもりてしかしてこれを受、また我あんぢより出來りしを眞に知、またあんぢの我を
つかはしたまひしことを信じたり。
九 我これらのために祈る、世のために祈るにあらず、我にあたへたまひし
ものの世のために祈るにあらず、なんぢのものなればなり。
十 凡て我のものはなんぢのものなり、なんぢのものは我のものなり、また我は

わがものをあんぢのものなんぢのものいわがもののあり且
つれいうれうよりてさうそをうく　十わがいまより世よをを
らんぴうとうよををそうふあんぢよいうる聖父よあん
ぢのそをよたまひーものをあんぢの名よをそらしめおもを
保守てわをうのごとくうをうをも一よあーたまく　十三
うをうとそもにありーときうれうをあんぢの名よをうー
めてうれをまもりうをぴなんぢのわれよ賜ーものをわをま
もりーぴそのうち一人ぞよほろびうるものあー。うぐ沉淪
の子ろびうり。これ聖書ようあいせんうめあり　十三いれい
まなんぢよいうる。これ世よありてこのうをうをうれるい

わが喜樂(よろこび)我(われ)らよみしめんためなり 十五 これおんぢのことばを我(われ)らまさづけたり 世(よ)いわれらをにくむ。そは我(わ)
よのものにあらざるごとくわれらも世(よ)のものにあらざればなり 十六 これおんぢをこわれら世(よ)よりとらさらんことを
らびたまへわれらを保守(まもり)てあしきよおちいらしめんことを
のる 十七 これよの屬(もの)にあらざるごとくわれらも世(よ)のものにあらざればなんぢのまことを我(われ)らをきよめたまへ。な
んぢのことばぞ眞理(まこと)あり 十八 あんぢわれをよにつかはせりごとくわれもわれらを世(よ)につかはせり 十九 われらのた
めよみづからを潔(きよめ)これまことによりてわれらのきよめら

をんさあなり 二十 それさだうれうのうめるのみいのちぞ このれうのをしへよりてそれを信じるものうめる祈あり 二十一 こういみる一ようあうんうあなり父よあんぢそれをりうれまさなんぢよ居このくのごとくこうれうもそれうよをりてひとつまあらんうあうつ世をしてなんぢのそれをつくりをせーこと紙信せーめんうあり 二十二 あんぢのそれをたまふーー榮祝それうをうよさだけうり。こいわれうの一なるごとくこのれうもさだひよひとつまなうんうあり 二十三 それうをらうまをりなんぢそれよをる。そいこうれうをしてひとつよ全あうーしめこうつ世をしてあんぢのそれ祝つこのせーことま

たるんぢされを愛(め)るごとくわれらをもあいしたることをしらしめんとなり 二四 父(ちち)よなんぢのわれに賜(たま)ものわが
をるところにわれもまたそこにをりてわが榮(さかえ)をなはちなんぢ
がわれにたまひしものをみんことをねがふ。そは世基(よのもとゐ)をおか
のぎまへさきふなんぢわれをあいしたればなり 二五 ただしき
ちゝよ世はなんぢをしらざれどもわれはなんぢを識(し)りこれらも
なんぢのわれをつかはせしことを知(しれ)り 二六 われなんぢの
名(な)をかれらにしめせり復(また)これを知(しら)しめさん。そはなんぢのわ
れをあいしたるの愛(め)これらにをりまたわれこれにをらんが
ためなり

第十八章　耶蘇こゝを發ちてキデロンの河を渡りその所なる園のうちに入りとゝもに入りぬ　二　耶蘇を賣りたるユダこの處を知れり　い也ばその門徒とゝもにこゝにあつまりしばなり　三　このときユダ一隊の兵と羣吏我きいしのをきもちおよびパリサイのひとびとより受け炬とてうちんと兵器をさゞさへてこゝにきたれり　四　い也事のおのれにおよぶをんとするをことごとく知いでいでうれるいひけるは誰をさがめるの　五　うれらこたへけるはナザレの耶蘇あり　六　い也いにうれるはいひけるはわれをそれあり　耶蘇を賣りたるユダ

うれうることもなかりき　六　耶蘇これらのことをいひてのち
とうひつめくるときうれうありぞきて地よたふれたり　七
いまたまうれうをたづぬるやとたびたびいひしかば
うれうナザレの耶蘇なりといふ　八　いまたまうけるわれ
なんぢらに我いそれなりといへりもしわれなば
ねがはくはこの輩をゆるしてさらしめよ　九　これ耶蘇
のいひしことばのなうち一人ざもなからんものをといひ
ひしことばかなはせんためなり　十　ときにシモンペテロ剣をお
びさりしがこれをぬきて祭司のをさの僕をうちてその
みぎの耳をきりおとせりその僕の名をマルコスといふ　十一

耶蘇ペテロよいひけるいつゝぎを鞘よそゝあよ父のそれ
よさゝひゝ杯をそれのまぎらんや 十二 こゝくて隊のつそもの
およびそのこゝらとユダヤ人のそゝやく耶蘇ばくらく去
はりて 十三 まづこれをアンナスのもとよつ也ゝくゝこの
歳のさいゝのをきカヤパの外舅なるよりそあり 十四 ユダヤ
びとよ議てひとり民のうめよゝぬるい益ありといひゝい
このカヤパなりき 十五 シモンペテロとをうよひとりのでゝ耶
蘇よそゝぐゝこのひとりのでゝい祭司のをさの去ると
こゝろのものよて耶蘇とそもよさいゝのをさの庭よいを 十六
ペテロを門外よそゝのさいゝのをさの去るところのでゝい

で門をまもる婢につげてペテロをともなひいる十七
ゆいでもんをまもる婢ペテロにいひけるいなんぢもこの
人のでし𠮟ひとりならずやペテロいふ大ぜいべ
どもとあるやくうち寒によりて炭をたきそのところにま
ちてあたゐまるペテロもこれらとともにうちて煖れり十八
さいしのをさ耶蘇にそのでしとその道のことを𠮟ぬ十九
耶蘇こたへけるいふまにあらたる世にこれをいへり
つねにユダヤびとの平生あつまるところなる會堂および
聖殿にてをしへをりひそかにかたることなし二十
ぞなれをたづぬるやそれいこるかたりしを聽ものふたづ

ねようれうわがいひーところ我おれを 三 耶蘇こうくのひー
まうとりうまたてるひとをの小吏てのひらまてこれを打
りひけるハなんぢさいーの長まこころあるまかくのごとき
こう 三 耶蘇これまこころくけるハもーわがくとりーことよくの
らばばそのようらぎるを證せよ。もーよくべなんぞこれを
うつや 四 さてアンナス耶蘇我おばりてさいーのをさカヤバ
のもとまおくれを 三五 シモンペテロ立てあたまりをりーが
あるひとぐいひけるハあんぢもうれの門徒のひとりなる
ぞやペテロうけごらばーてあうらばといへり 三六 さいーの
をるれおもべの中のひとり即ちペテロまみをそごれー

ものは親戚のひけるぞ　それなんぢがこれとともに閙つおりしをみしよあらばや　モベテロまさうけがらば。やごて雞なのきぬ〇六　ひとびと耶蘇をひきてカヤパより公廳よゆけり時もでよよあけおりき。かれら汚穢をうけんことを欲おそれて、やくをよいらば。そいをぎこーのいをひを食せんとそれをなり　元ピラトいでうれよりひけるいいうある訟をもてこのひとを欲うつまるや　三ひとびとこたへけるいうれも惡をせるものよあらばんなんぢよわさきで　三ピラトうれよりひけるぞなんぢらこれをとをあんぢらの律法よもちてでひてさばきせよユダヤのひとびとこれよりひけるは

五百七十

そゞろあいこの世のそにあらざるなり　三七ピラトうれよいひけるいさゝばなんぢいかゝあるう耶蘇そゝくけるいあんぢのいふところのごとくわれ王なりわをこれがゝめよ生これがゝある世よきゝれを。そい眞理ふついをあゝうをなさんがゝめなり。をべてまことにつくものいそが聲をきく　三八ピラトうれよいひるい眞理いいうあるものぞや。このことをいつるのちまた出てユダヤびとよいひるいわれいこの人よつみあるをみず　三九爰なんぢらよひとりの囚人をなんぢらよゆるしぬなんぢらユダヤびとの王をゆるさんことを祢ごふや　四十

ひとぐまこと喊叫いひけるはこのひとをあらばバラバを釋
バラバをぬけびとなるあり

第十九章 そのときピラト耶穌をとりてむちうつ 二 兵卒どもいばらをうて冕旒あみこれの首にかぶらしめまたむらさきの袍をきせて 三 いひけるはユダヤびとの王やよろしうございますくて掌をうてをり 四 ピラトまたそとにいでてまたこれらにいひけるはこれをなんぢらにつれいだすなんぢらをして罪あるなきをしらせんとてなんぢらにひきいだせり 五 いばらの冠と紫のうらぶさきのうちぎをきてそとに出ピラトこれらにいひけるはみよこれそれ人なり 六 さいしの長ざともとさ

やくこれをそて十字架につけよをふどかなつけよとさけびいふピラトうれうよいひけるいなんぢらこれをとりてをふどかよ針よるれこれをつみある玆みざるあり七ユダヤびとうれよこゝくけるいわれらよ律法ありそのおきてよるさぐべうもい死べきものありそふうれみづうらを神の子とあせべなりハピラトこのことを玆きてまたくおそる九またゝ公廳よいりていゑよいひけるいなんぢいづこのものぞ耶穌こゝくせざりき十ピラトこうもよいひけるいわれよこゝくざるう我なんぢをゆるすけんおありこのこと玆しらざ威ありまたあんちをゆるすけんおありこのこと玆しらざ

るの土耶蘇こゝろにけるハなんぢ上よりけんゐを給はらざればなにもむかひて權威あることなし○このゆゑにそれ汝なんぢをわたせしものは罪つみ尤おほいなり 十三ピラトこのことばをきゝて耶蘇をひきいだし鋪石といふところヘブルのことばをもてゴバタといふところのさばきの座にみづからもわれり 十四それ日ハにぎこしのいちにちの備日にてときおほよそ十二時ころなりきピラト

ユダヤびとのひけるハなんぢらの王をみよ 十五 かれらさけびてこれを除(のぞ)けよ十字架(じふじか)につけよといふピラトかれらにいひけるハわれなんぢらの王をじふじか釘(つ)けんやさいしやのをさともこたへけるハカイザルの他(ほか)われらわうなし 十六 ここにピラトこれを十字架(じふじか)につけしめんとてかれらにわたせり。こゝにおいてかれら耶蘇(いえす)をとりてひきゆけり 十七 耶蘇(いえす)じふじかをおひて髑髏(されかうべ)といふところへブルのことばにてゴルゴダといふところにゆけり。こゝにて 十八 かれら十字架(じふじか)につけたり。おのれと二人のものこれとともに十字架(じふじか)につけらる。ひとりハ右(みぎ)ひとりハ左(ひだり)

い出ん中にをれを 十九 ピラトもてゐざ十字架につけ此ハ
ユダヤびとの王ある ナザレのい出ん なりと書しるし 二十 おゝ
くのユダヤびとこの罪標をよめり。そハ耶蘇をはふりの
つけしところへ京城にちかけれバありそのかゞくへブル
ギリシヤ ロマのことばもて書しるし 二一 ユダヤびとの祭司のを
さもピラトにいひけるハ ユダヤびとの王と書しるされ
みづからユダヤ人のわうなりといひしと書しるさんべし 二二
ピラトこたへけるハわがかきたるハかきたるしるし
三 へいそつども耶蘇をはふりつけしのちそのうちぎ
をとり四にわけておのくその一をとりまたうちぎをとれ

其この裏衣は縫ひめなく上より全く織るものなりけれバ 廿四 互ひにいひけるは これ裁裂ずして これのために鬮をなげんと聞ゆるやうにせんと いひしは 聖書に 我が衣を互ひに分ち 我が服のために鬮をなげたりと あるを成就せんためなり 兵卒どもは果してこのことを為せり 廿五 さて耶穌の架の傍に その姉妹および クロパの妻のマリア マグダラのマリアの立ちをるを見たまひ 廿六 母を見 また愛したまふ弟子の その傍に立ちをるを見たまひて 母に婦よ 視よ なんぢの子なり 廿七 また弟子に 視よ なんぢの母なりと いひたまへり。この時より その弟子 これを己の家に

ゆけり 二八 こゝくて耶蘇きべてのこゝろをそゝをもれる状を
聖書よかなハせんこゝろめよわれ渇とゝくり 二九 このところ
に醋のみもゝる器皿ありしこゝへいそゝども海絨をもて
ひたし牛膝草にゝつけてその口にあてゝ 三〇 いよ〳〵醋をうけ
しのちいひけるハ事をはりぬ。こゝろ状をれて靈状わたせ
り 三一 この日はいまひのそなへびなり。このあんそくにもち
ハ大なるあんそくにもちなれば屍をじふどうのうへにおく
こゝろ状このまぎるゝがゆゑにユダヤびとピラトにむこうひ
わゝの脛状折てそのところばねをとりのぞくこゝろ状ねがゝ
り 三二 あゝなおいゝく兵卒ども耶蘇とゝもに十字架にゝつけら

れしものそひとりのあしをさきよ折つぎよまことひとりのあし絃をり三のちよ耶蘇よきたりしふをでよ死とるをみてそのあし絃をらざりき三一人のへいそつ戈すてその脅絃つきけれどさでちよ血と水とながれいでたり三五これをみしもの證をたつ。そのあういまことなり。これまことみづうるいみところの眞あるをしる。なんぢら絃して信ぜしめんがためなり三六このこと成り。まるしそその骨のひとつをもそこざるべしとあるよ應せんさめなり三七またあろの書よこれらの刺しものをこれらみるべしといへり○三八このちアリマタヤのヨセフといへるものまて前よユダヤびと

我おそれて隠(かく)まい迚(とて)ものでござあれるもの耶蘇(いえす)のむくろをねをとらんとてピラトに求(もと)ピラトこれをゆるせしによりきたりてその屍(しかばね)をとれり 三元まさきに夜間(よる)いとまきまでニコデモといふひと没薬(もつやく)と蘆薈(ろえい)まぜおよそ百斤(ひやくきん)ばかりたづさへきたる 罕(まれ)なれら耶蘇(いえす)のしかばねをとりてユダヤびとの葬(ほうむ)のならはしまにぐひこれ麻布(あさぬの)と香(こう)もてつつめむ 四さて十字架(じうじか)のつけしそのあたりにその園(その)ありうちにいまだ人(ひと)をさふらふりしことなきあたらしきはかあり 四この日(ひ)はユダヤびとのいそひのそなへ日(び)なりまた墓(はか)ちかかりければそこに耶蘇(いえす)をおけり

第二十章　一週のもじめの日に朝いまだくらきうちにマグダラのマリア墓にきたりて石のをかよりとりのけあるを見　二つひにシモンペテロまた耶穌のあいせしところの門徒にもきていひけるは人をよりて主をとりしものあり。それらいづこにおきしやその處知らずと　三ペテロと彼ひとりのでしいでて墓にゆく　四ふたりともによもるあるのでしペテロよりとく趨てさきにはかにいたるね　五俯てあのぬのばかりみしを布をおけるをみたれどもいらず　六シモンペテロうれにおくれてきたり墓にいりてみしぬの布おけるを見たり　七そのうへべにつつみしてぬぐひい屍を裹しぬのとそもに

おうべきをゐしてあくのところを畳ておけをハこゝをおいてさきる墓をきこれるおうみでしものりられ給みて信ぜを九ゐるして耶蘇のよみがへるべきことのあるをうれらいまざるらざるなり十かくて門徒ハおのれのやどをくれり土マリアハ墓のそとをたもて哭つゝはかをむうひうがみて土ふたりの天使ゐろきころもを着いをその右ひつぐねをおきたりしところの首のかたをひとり足のかたをひとを坐ゐをるを見たり士天使のつひうれをいひけるハ婦よなんぞをがくやうれこゝにけるハをの主をたりしものありいづこをおきしこうをうらざれどあり十四こうくいひてふり

うへを耶蘇のたちしをみる。されども耶蘇あることをしらず十五
い迦ゐれよいひけるハそんなよあんぞなげくや誰をそうぬるのマリア園をまもるひとならんとおもひうれよいひけるい君よなんぢもしうれをそこび移しならばいづこへおきしかをわれにつげよわをされを取べし十六耶蘇う
れよマリアよといふ婦こころをみそうれよラボニといふそ。こ
も我をけべ夫子あり十七い迦ゐれよいひけるハそれよ扪
ことなかれいまざるの父のおろざれべなそ。その兄弟よゆきそいへそれハそが父ゐふつもなんぢらがもつそ
の神ゐふはもなんぢらがかみよ升と十八マグダラのマリア主

我みづから主のうくおのれよいひうるくるといふこ
とを門徒どもよゆきてつぐ○十九この日ぢやうれごとを多
くもち一週のそなへめの日でしどもユダヤびとをおそるゝよ
りてあつまれるところの門戸をとぢおきしが耶蘇きたり
てそのうちにたちうれどもいひけるハなんぢら安かれ二十
このくいひしのちその手とわきばら我うれよ見をでしたち主
我みてよろこべり二十一耶蘇またうれどもいひけるハなんぢ
らやはくうれ父のわれつかはせしごとくわれもなんぢら
を遣ん二十二このくいひしのち氣をふきそうれどもいひけるハ
聖靈をうけよ二十三なんぢら誰のつみ我ゆるんともその罪ゆ

るされ、その釘のつみを定るとも、そのつみさだめらるべし。二四
耶蘇きたりしとき十二のでしの一人なるデトモとよばるるトマス、これらとともにをらざりき。二五このゆゑほかの門徒これにいひけるは、われら主をみたりトマスこれらにいひけるは、われもしその手に釘のあとを見、その釘のあとに指をさしいれ、またわが手をその わきにさしいれずば信じじ。二六八日をへてのち復でしらいくのうちにをりけるに、トマスもこれらとともにをれり。門をとぢたるに耶蘇きたりてそのうちに立ちていひけるは、なんぢらやすかれ。二七つひにトマスにいひけるは、なんぢの指をここにのべてわが手を見

なんぢの手巾のべてそのあがりよさせ信ぜざるなかれ信ぜよ 二トマスこたへていひけるはわが主よわが神よ 二九いひけるはなんぢわれをみしによりて信じぬみびしてしんぜるものはさいわひあり 三十この書にしるされざるおほくのしるしを耶蘇でしのまへにおこなへり 三一これらのふみをしるせるはなんぢらをして耶蘇のかみの子キリストなることを信ぜしめこれを信じその名によりていのちをえせしめんがためなり

第二十一章

このゝち耶蘇またテベリアのみづうみべにてでしたちにおのれをあらはせり。そのあらはせることは左のごとし 二シモン

ペテロとデトモといへるトマスおよびガリラヤのカナのナタナヘル
とセベダイの子らもまたおのの二人のでし三
シモンペテロかれらにいひけるはわれ漁にゆくなり。かれらいひ
ひけるわれらもともにゆくなり。かれらいでて舟にのりしがこの夜
ごは何のえものもなかりき四もはや夜明たるに耶蘇きしたまへり。されど門徒らはそのいまし
をしらざり五耶蘇かれらにいひけるはなんぢら食物あるやかれらこたへるはあらず六耶蘇かれらにいひけ
るは網を船のみぎにうてしからば獲物あらん。つひにあみをう
つ魚おほきによりてひきあぐることあたはざりき七ここにおも

いく耶蘇のあいせーところの彼でーペテロよいひけるやうに主なりシモンペテロ主なりときゝて裸なりしごころもをつけ帯ーてうみよとびいりぬ　八ほかのでーたもい小舟にのりてうをのいりくるあみをひきそいくれりそれ岸をさるこゝとほうゝび五十間をうりありけれびなり　九岸よつきーよ炭火とそのうへにのせる魚および餅あるをみる　十耶蘇うれらよいひけるいゐなとそーところのうをを少しもちきたれ　十一シモンペテロふねよ往あみをきーよひきたまーよその網のなうよおわきあるうを百五十三尾いりさまざまくおほうりけれどあみハやぶれざりき　十二耶蘇うれらよ

ハいひけるハきたりて食せよ。でーさち敢てうれるあんぢハうれなるとたづぬることをせず。こハ主なりと知れバ也。十三耶蘇きたりてパン抜とりこれらにあたへ魚をもまたそのごとくせり。十四いま四たびよみがへりしのち自己を弟子たちにあらはせることこれ三次なり。十五さてうれら食しその後耶蘇シモンペテロにいひけるハヨナの子シモンよあんぢこれらのものよりまさりてわれを愛るや。うれいひけるハしかり主よ然りわがなんぢ抜あいすることをあんぢ知れを耶蘇うれにいひけるハわが羔抜をやしなへ。十六またふたゝびうれにいひけるハヨナのこシモンようれ抜あいするや。かれいひけるハ主

よきうりわざわんぢ我あいまもることくんぢしまり耶蘇
うれよいひけるハわざひつじを牧まことびこうまるいひ
けるハヨナの子シモンよまれ我あいしるとのペテロまことび我を
あいまもるといまれしまよりて憂こうくてこうくけるハ主
ようぎるここころをしまことびなんぢを愛まもることくんぢを
れを耶蘇うれよいひけるハまことびひつじを牧まことびくわ
んぢまつげんなんぢ幼ときみづうち帯しこころまつせ
てあるきぬ老てん手をのべ人なんぢ我こうまことろまか
ふいざるところまひきつくらん 光このくいへるいそのいう
なる死よそ神我あがめんといふことをもあしうるなり。こ

れ我いひてのちまさうれよいひけるい我よもさごく 三十
ペテロふりうくり耶蘇のあいせーでーのもさごくるをみる。
このでーい食けるときいさたのむねよりて主をそそたる
ものいされぞやとそひーー門徒あり 三ペテロこれをそて耶蘇
よいひけるい主よこの人いうよ 三耶蘇うれよいひける
いされもーうれぐあごくくてわがきさるをまちとのぞま
び爾よなふのうくもりあらんや。あんぢいされる從 三
こうくよおいてこの言きやうざいのうちよつてうちてこの門徒
ーあんどいつをさされども耶蘇ペテロよこれいあるんどい
ひーよあらんどもまもーうれぐなごくくてそ來をまち我

のぞまざるなんぢもあるのこうくりをあらんやといひしなり
二四 あれらのことをつひに證をなすまことにこれ我なるせしもの
のそその門徒なり。それらそのあるじの眞なることを我しも
二五 耶蘇のなせしことこれらのわざよりなほあまさあり。
もしこれを一々かくしるさばその書この世のせつくるにこと
あたはざるとおもふなりアーメン

新約聖書約翰傳終

横濱山手百七拾八番
フェリス學校

耶穌降生一千八百七十七年

新約聖書使徒行傳

翻譯委員社中
米國聖書會社

明治十年

日本橫濱上梓

第一章

テヨピロよ我れ先に前書をつくりておほよそ耶蘇のなしはじめておこなひまた教へたる事ども二そのえらびたる使徒どもに聖靈によりて命じ昇げられし日までのことを記せり三それ耶蘇はくるしみをうけしのち おほくの確據ある證をもておのれの活ることをあらはし四十日のあひだ かれらに見え神の國のことについてかたり四またかれらとともにあつまりおりて命じけるはなんぢら エルサレムをさらずしてわれよりきけるところの父の約束をまちぐ 五そはヨハネ

も水ともてバプテスマをほどこされどもあんぢらはひさしからずして聖靈にてバプテスマをうくべければなり六あつまれるもの彼にとひけるは主よあんぢいまイスラエルにかの國をたてなほすことをもちゐたまふ時期あんぢらが知るべきことにあらずハされども聖靈あんぢらに臨てのち能力をうけエルサレムユダヤ全國サマリヤおよび地のはてにまでもこの證人となるべし九このことを語をはりしのち彼らのみるものゝうちにあげられ雲これをうけて見ざりしかり十耶蘇のぼるときかれら天をあふぎ注目せり

に白ろき衣をきてるふたりの人ありてうちいふ
十一ひけるやガリラヤ人よ何ゆゑ天をあふぎてたて
るやなんぢらをはなれて天にあげられたるこの耶蘇は
ぢきかうをの天にのぼるをみるそのごとくまたきたらん
〇十二そのときうまやより橄欖と名づくる山よりエルサレム
にかへる此この山はエルサレムをちかく安息日にゆきかよ
ふ程あり十三もてまいりて樓にのぼれり即ちペテロ
ヨハネ アンデレー ピリポ トーマ
バルトロマイ マタイ アルパイの子ヤコブゼロテといふるシモン
ヤコブの兄弟なるユダなり十四すべてこのひとびと婦うち

および耶蘇のはゝ マリアまた耶蘇の兄弟とともにこゝ
をおさめて つねに祈禱をつとめたり〇十五そのころペテロ
門徒たち（そのあつまるもの凡そ百二十人あり）の中にた
ちていひけるは 丈夫々きやうだいよ 聖靈ダビデの口によ
りて耶蘇をとらふるものをみちびけるユダについて預め
かゝりたるこの聖書いかあらば應まべうりしなりそは
われらと共につとめありてこの職をうけたればなり
こゝにこのひとり不義のあたひをもて地所をうひまさかさ
まにおちて眞中よりやぶれその腸ことごとくあふれいで
たり 十九このこと エルサレムに住るすべてのものに知れし

バ。そのちしよを方言にてアケルダマとよぶ。これとそけバ血の地所なり　二十詩の篇よむるにてう色の家もむなしくあれそのうちに人をもまくもるふかれ。う色の職いひとうとらせよといふり　三このゆゑよ主いにものも色うが中よゆききしたまひる間　三もるもちヨハネのバプテスマよりそどめのもれらをもるれてあげら色し日よいるまで常よもれらとともにあるしものうち一人もれらとともにその復生しことの證人ともるべきなり　三こにおいてバルサバとちるふるヨセフまこの名ハユストといるものとマッテアとのふたりをあげて　二四いのりていひけるハまべての人のこ

こゝろをあらたまよ主よ。ねがはくは奉事こゝろ使徒のつとめをえさせんがためなり。この二人のうちつぎを選さまひしのきめしたまへ 二五 もてよユダはこの職をさるれてそのゆくべきところへゆきたり 二六 かくて鬮をこゝろ一一マッテアよあたりけるにより十一人の使徒こゝろともにつくられたり

第二章

ペンテコステの日にいたりて門徒こゝろ皆こゝろをあはせて一処にありしに 二 にはかに天よりはげしき風のとくるき響ありてかれらの坐るところの室よみてり 三 焔のごとくなるものあらはれてそのおのくのうへにとゞ

まる 四 こゝにおいてうちつゝみる聖靈よみされそのせいをいのいをもてむるにまかせぐひて異なるくにぐにの方言をいひそめたり 五 ときに敬虔あるユダヤびと天下のうちぐにぐによりきたりてエルサレムにとゞまれるものありき 六 この音おこりしによりおほくの人々あつまりけるがおのゝ已がくにぐにをうちつゝのかたるをきゝて躁あゝりてみなおどろきあやしみつゝ互にいひけるは視よこのかたるものいまべてガリラヤ人ならずやいかなればわれらおのゝ生れしところの方言をうちつゝよりきゝ 九 るまでらパルテア人メデア びとエラム人おゝよびメソポタミア ユダヤ

カパドキア ポント アジア、フルギア パムフリア エヂプトまたクレネにちかきリブヤの地方にすめるもの、またロマよりきたりてをるもの。あるひはユダヤ人およびその教にいりたる人、またクレテびとアラビヤ人あるはかれらが我らのくにことばをもて神のおほいなるみわざをかたるをきくうたふ、皆おどろきいぶかりてたがひにいひけるは、こはいかなるゆゑぞや、あるひはわざけりて此ひとくい甘き葡萄酒にみさされてるものありといふものあり、茲においてペテロ十一人とともにたち聲をあげてかれらにむかひいひけるは、ユダヤ人およびエルサレムにすめるも

のよるんだらよくまでの言をきてこれをあま十五
九時なるべからんだちのおもふごとくこの人々も酔るものに
あらざれば十六これはかねて預言者ヨエルによりてかくいはれ
たるところあり十七神いひたまふ末の世にいたりてわれはその
靈をすべての人にそそがん。なんぢらの子女も預言をし
べし。またなんぢらのわかきものは異象をみ。おいたるもの
のは夢をみるべし十八その時われはその靈をわがしもべたる
男女にそそぐべし。かれらは預言をべし十九またわれは上なる
天には奇跡をあらはし。下なる地には休徴をあらはさん。その
なかに血あり火あり烟あるべし二十主のおそるべき顯赫日の

きこらん さきつ日いつゝく月は血ことかもらん 三 もくて、主の名をよびさのむものもをくそらくし 三 イスラエルのひとびとよ。これらのことをきけ。それナザレの耶蘇をあんちらの知ごとく神うもてよりてあんちらのうちにあせし妙ある能力と奇跡とあるしるしをもてあんちらに證ありまくるところの人なり 三 この人はまるもの神のさだめし旨とおくかしめ知さまよところよかるひてそそする。あんちらハ無法の手をもてこれをころし、十字架につけてころせり 四 神はその死のくるしみを釋てこれをよみがへらせたまへり。これ死よつるかをもるべきものあらざるなり 三五

そのダビデうれよついていひけるハ我まづまゝよ主のつねに在とみる。そのゆゑ右よいまそへわが動されざるためなり。このゆゑによろこび心ハさのしみ。また舌ハよろこびうたひ。なほ肉體ハ望よをらん。なぜなれバおんみハその魂を陰府に捨おかず。またおんみの聖者をくちもてあめざるごとくなし。おんみハ生命の路をわれにしめされおんみの前によろこびにみたしめんと。兄弟たちよ。われ始祖ダビデについてもぐうるところなくおんみにはっきりとこれ當然ことなりそのまでに死てそのむれその墓ハ今日にいたるまでわれらの中にあり。

預言者にして神これをひとりをあげて位につけ
給ひたまへるを知
三 あらゆるめこのことをさとるおゆゑよキリストのよみがへ
ることにつきかくりて。これ陰府よすておくれざるその
肉體もくちそこにつくるあり 三 ゆゑよ神は耶蘇を
よみがへらせたまへりわれらはみなその證人なり 三 この
ゆゑにうまひとそに神の右にあげられ約束のせいれいを
父よりうけて。今あんちうするところ聞ところのものを
そそげり 三三 それダビデも天よのぼりしことなし。主
はわが主にいひけるは。主なんぢの主よむかひていくさ。それん

ぢの敵をあんぢの足臺とあるまでそこの右に坐せよ
三六 されば全イスラエルの全家よあんぢらが十字架につけし
この耶蘇をかれ神これを主ともキリストとも
したまひしことを確かに知れ 三七 かれらこれを聞きてその心を刺
かれてペテロにおいてペテロとその他の使徒らにいひけるは
兄弟よわれらいかになすべきや 三八 ペテロかれ
らにいひけるは。あんぢらおのおの悔あらためて罪のゆる
しをうんがためイエス キリストの名によりてバプテスマをうけ
よ然らばあんぢらも聖靈の賜をうくべし 三九 この約束は
あんぢらおよびあんぢらの子孫また遠人をもおの

ち主なる神よめぐみふかく ひとびとに屬ふり平和おふくのこゝろをもて證してそゝめけるハあんちおこのよゝとなる世よりもくびいごさまよ三そのゝきこの言をきゝいまゝものハバプテスマをうけゝり。この日でゝしまくをもれるものおほよそ三千人四うまゝハつねよ使徒どもの をりつをり交接をなしパンをさくことゝ祈禱とをつとむ三こゝにおいて、敬畏ひとびとのこゝろよ生ぜまゝ使徒どもによりておほくのふしぎるるわざと休徴おこなはれ四信者ハこゝろひとつゝところにあつまりて諸物をともにし四五産業とそのもちものを鬻ておのゝの用よさゝげこれ

をもあつくぬ　四日々こゝろをおもなせて聖殿にをり、また家においてパンをさきよろこびとまごゝろをもて食をともにし四神をほめあすべての民によろこばるゝ主もまたもろもろのを日々けうくわいにくはゝくなれり

第三章　第三時いのりの時刻にあがりてペテロとヨハネともに聖殿にのぼりしに二一人のうまれつきある跛あり、みやにいるひとに施濟をこわんとて日ごとおきたる殿の美とゝふうる門におろす三うまべテロとヨハネのそやにいらんとするを見てほどこしを求む四ペテロヨハネとともにつくめをとゝめていひけるはわれらをみよ五うまべ得

こととあらんとおもひてこれらを見つゝふり六ペテロいひけるは金銀はこゝもとにふしこゞにもあるものをあるよ。ナザレの耶蘇キリストの名によりて起てあゆめ七つひとその右の手をとりこれをおこしけるに即ちよつてあしうらと且あしくるぶしとつよくなりて八をどりあがり且あゆめり。踊あゆみ神をほめつゝともにみやにいりぬ九すべての民がかの跛のあゆみ神をほめるをみて十素そのみやの美門にすわりこゝをこひもとめるものなるを知り。この人にありしことをおもひいでおどろきあやしめり十一そのわしるくペテロとヨハネによりそひをりしかばよ。民こぞりておどろくことを

なりぞ一ロモンの廊と名づくるところまでかけあつまれ
るに、ペテロこれをみて民にこたへけるは、イスラエルの人々
よ、なにゆゑにこのことを奇とするや、なにゆゑわれらがみづからの
能と徳とをもてこの人をあゆませしがごとく。なんぢらは
よ目をつくるや、それアブラハム、イサク、ヤコブの神、すなはち
んぢらの神、その志もべ、耶蘇をさかえしめたまへり、なんぢらが
せしものピラトがゆるさんことをさだめたるとき、その前に
なんぢらは拒しところのものを、榮えたまへり、なんぢらは
聖者、義者をいなみ、人をころせしものをもとめ
おくりしに、なんぢらは生命の主をころせり。神

いこれを死よりよみがえらせたまえるにはそのあらゆるひとの耶蘇の名はその名を信ずるによりてなんぢらが見るところの識るところのこの人をつよくせり。かく耶蘇によれる信仰はなんぢらすべてのものの前にかのこの人をまったく愈しきりまきやうぶつによれる知るなんぢらがおこなひしこれ石なるにによりてなり。なんぢらの有司たちもまた石なり　丈もろもろの神はまづてのようげんしやのいひによりてキリストの苦をうくることをあらかじめ示しそのことをかく應せたまえり　丈このゆゑになんぢら罪をらい心ろをあらためてその罪をけすることをせよ。そ

い主のまへより安舒日のきたり 二十 且あらかじめさだめたまひし耶蘇キリストをおくりたまふあり 三神のいまへよりきよき預言者のくちによりていひたまひし萬物のあらたまる人ときまで天にうけおくべし 三モーセ言ひたまふの列祖たちにつげていひけるは 主なるわれんぢらの神はなんぢらの兄弟のうちよりわれに似たる一人の預言者をおこしたまふ。そのなんぢらにつぐるすべてのことをきくべし 三すべて此よげんしやにきゝしたがはざるものは民の中よりとりわかたるゝ 四またサムエルよりこのかたすべて預言者もみなあらかじめこの日

をさづけていへり 五 それあんぢらいよげんしやの子孫なり。
うつ神のもはつらふ列祖とよろこびたまひし契約をうけつぐものなり。もろもろアブラハムにつげて地の諸族はあんぢの裔
によりてさいはひをえんといひたまへり 六 神はそのその
志もべ耶蘇をたてあんぢらおのおのをその悪よりひきかへ
福をえせもあんぢらより先あんぢらにつかはしたまへり
第四章 三
うつたふるが民ををしへ。うつ耶蘇のことをひき死よ
りよみがへることを宣るにより。祭司みやもりづうさおよ
びサドカイのひとびとら心をあやまりその民にかうれるとき

突然きたりて 三 手づからこれをこらへ。時まで
であくる日まで獄にゐれおけり。四 されどその道とき
ものゝおほくこれを信ぜ。その數およそ五千人あり。五 明
日つかさざも長老がくーや おほよび祭司のをさアンナま
さカヤパ ヨハネ アレキサンデルとさいーのをさのをべての族
エルサレムよりあつまり 七 使徒らをひとその中よりせてこひ
けるハなんぢらこのの權まことこの名によりてこれをおこ
なひしや ハ そのときペテロ聖靈よみたされていひ
けるハ民のつかさおよびイスラエルの長老よ 九 われらもし
病める人よりおこなひ善事よつきことをいうにして愈せ

しと今日たゞさをあび十ぐんぢうとイスラエルの民もこゝにあるべし。そのぐんぢうが十字架につけしところの神のよみがへらせたまひしところのナザレの耶蘇キリストの名によりてこの人すこやかになることを得ぬ。ぐんぢうの前よりさりとこれをもちぐんぢう工匠のもてしところの石ぐさの隅の首石となれるものなり。ほかのなによりても救をえることなし。それ天下の人のうちにわれらの賴りてもてくるべき他の名をたまはざればなり。ペテロとヨハネのいひをかるところをきゝ、その無學のいやしきものなるをもちゐこれをあやしみ、またその耶蘇と

ともにありしを知る十四ゆゑいやされし人のうまうとともに立るをみるよりいひけをべき言ふうりき十五うくて
うちうに命じて集議所をさうしめ後あひさうりていひけ
るは十六この二人よりをもべきやうまうがそでよいむしるき
休徴をおこなうることろ人もべてエルサレムにをるものに明
うまうしるところなりそれらこれをいひけをことあることを
廿七おうれどもこのことのおほひろく民につこそうざるた
めよくをうを恐喝このちその名について人にかうることを
とおうう去めん十八つひにうまうをよびてさうに耶蘇の名
について教ることをなをみれといまうむ十九

ベテロヨハネくるまでにこゝにていひけるは神はきくよりもまさりてあんぢらまきらば神のまへにありて義たらんこのあんぢらみづからこれを判よ　十三ゆだ見しところの聞しところのものいまだざるをえざるなり　十四人々そのあらゝかにより神をあがめさればこのれら民をもそきこのふたりを罪まるたよしおくさゝこれをおびやうそゆるせり　十五そのふしぎなるそざよりていやされる人は四十歳あまりるりき○十三ゆだまでゆるされそその友のもとにゆき祭司のをさと長老のいひしことをこらしぐくつぐ　十六その友こゝをきゝてこゝろをおそせ神をむかひ聲をあげていひけ

るゐ主よあんじゐハ天と地と海とそのあるのあるゆるものをつくりたまひし神なり　二五　あんじ曽てそのしもべダビデのくちによりてあまゆゑよ異邦人はさわぐものろくの民はむなしきことを謀り　二六　地の王らもいおこりて羣伯とともにあつまり主およびそのキリストにさからふとのべりそれまことよヘロデとポンテヨピラト異邦人もゐすらエルの民あひともにこの城にあつまりあんじが膏とそそぎたる聖僕ゐえすをさからひて　二七　こをあんじの手あんじの詭はてあらかじめさだめたまひしことをかならずいるせるなり　二八　主よのまかをうの恐喝をみたまへ。ねがもくいるんじ

の手をのべて醫をほどこしなんぢのきよめられまぐ耶蘇の名によりてあるしとふしぎあるわざをおこなはしめなんぢの僕どもに臆せることなくなんぢの道をのべることをえさせたまへ（三）かくて祈禱をなしをはりければその集まれるところ震ひうごきみな聖靈にみたされて憚ることなく神のことばをのべ（三）信者はみなこころを一つにしてをりて誰ひとりその所有ものを己がものといふことなくすべてこれをともにもてり（三三）使徒はなほ大いなる能をもて主イエスのよみがへりしことを證しのべつたふるをもて大いなる恩をうけたりき（三四）そのうちに乏しきものな

うりきそハ地所あるひい家をもてるものハそれをうりてそのうりしところの價をもちきたり 三五 使徒たちの足もとにおく。これをおのおのの用にあてさづけおくるにヨセフいふ使徒たちよりバルナバといもる。これをとけバ勸慰の子 三六 このひと田疇ありけるがそれを售てその金をもちきたり使徒たちの足下におけり

第五章

ときるに アナニアといふ人その妻サッピラとともに産業をうり 二 そのあるひの幾分をかくし餘のいくぶんをもちきたりて使徒たちのあしもとにおきぬ。その妻もこれを

志をとり 三 ペテロいひけるハアナニアよなにゆゑよるんちの
のこころサタナこゝろさされ聖靈にむくひのこりをとりて地所
のあたひのいくぶんをゝくもこゝろをせーや 四 地所いまだ
うらざるときそなんぢのものならずやまでに售さるともま
たなんぢの權につけるるならずやなにゆゑこのんぢの心
このことをくわだてしーやなんぢ人にむくひて僞にあらず
神にむくひてのごもるるあり 五 アナニアこの言をきゝた
ふしてて氣さえ。これをきくものみな大におそる 六 てこのきも
のぐもたちてうちを殮うきいでて葬りり 七 おほよそ三
時ばかりをぎその妻いまだこのあらーことをしらずしーて

りきこゑあり　八ペテロこれにいひけるはなんぢらこのあ
さひよ地所をうりしやこれにつげよこたへていひけるは
しかりその價あり　九ペテロこれにいひけるはなんぢらこ
ころをあはせて主の靈をこゝろむるはなんぞや視よなん
ぢの夫をはうむりしものゝあし門外にあり。またなんぢ
をもかきいださん　十婦直ちにその足下にたふれていき絶
きるのどもいりきたりてその死さるを見られをもかきい
だしてその夫のかたはらにはうむれり　十一全會のものとこ
れをきけるものどもみなおそれいたく懼　十二おほくの休徴とふ
しぎなるわざを使徒たちの手によりて民のうちにおこな

されどソロモンの榮華をもて
十三 餘のものいまだかつてこれにもちづりざりき。されども民
いうまでもなくみ 十四 男女ともに信ずるものすくなく
主はつひに 十五 のくてひとびと病るものをさづけて禱ごい
でねがひし榻のうへにおけり。そこでペテロのきたらんとき
その影に蔭もるものあらんことをおもへばなり 十六 またおほく
のひとびと四方のむらむらよりやめるものおよび惡鬼
をやまされたるものをさづけてエルサレムにきたりしこと
ごとくいやされたり 十七 ときに大祭司の長およびかれとと
もにあるものの即ちサドカイ宗のともがらみな起ておのれ

よいきどほり　十八使徒らを捕へて公獄におけり　十九されど主の使ひ夜ひとやの門をひらきいだしていひけるは　二十ゆきて聖殿にたちこの生命の道をことごとく民にかたれ　二十一かれら暁ごろより聖殿にゆきて教ふ祭司のをさおよびともにあるものどもきたりて議官およびイスラエルの子孫をことごとく呼あつめてひとやをひき來らせんがために下吏をつかはしければ　二十二その人ら往きてひとやにいたれども獄のうちに囚人をみず歸りて告いひけるは　二十三ひとやはかたくとぢ守るものも門のそとにたてるをみたれども見にひ

らけべ内ゝひとりをもみざりき二祭司みやもりおよびさいしの長ともこのことをきゝてこゝにいうようありやくべきうとうたがうまつきてこゝろまどゝり三あるひときくりうまうにつげるい視よるんぢらが獄よあきしものへいま殿ゝうちて民ををしふ四こゝよおいて殿司をゐさやくうちとゝもにゆきがまつをひきてこれり。されど手あらきことをせざりきそは石もて民にうちまんことをおそれしがゆゑあり五もてゝひきてくりてうまつを議官のまへにたゝせ祭司の長これとうそのひけるい六まもるこの名によりてをしあるるうれとるんぢらはきびしく禁ぜしに

あらざるやを知るにあんぢらはその子を十字架エルサレムよみさせまつりこの人の血をわれらにおそはんとせ二九ペテロと使徒ども答へていひけるは人よりは神に三〇したがふべきなり三一汝らが木にかけころせしところの耶蘇をよみがへらせ給へり神これを君と救主とてその右のうちにおきたまへりイスラエルに悔改めと罪のゆるしをあたへんがためなり三二我らはこのことの證をなすものなり神おのれに信從ものにたまふところの聖靈もまたしかあり三三

まつりを殺さんともとむる 三四 パリサイの人なて衆民のうちよ
たゝふとまもる 教法師がマリエルといふるものもつぎやくの
るろよろち命じて使徒どもをおもてく外へいざさしめ 三五
いふけるハイスラエルの人々よ。なんぢらこの人どもよつき
てるさんともることをみづからつゝしむべし 三六 そハさきに チウダおこりてみづからを矜誦まりこれよりおこりくるも
のおゝよそ四百人ありしがうれんころされおこりひしもの
ハ皆ちらされてあとなきよいふる 三七 この人よりのちまた
戸籍のときがりラヤのユダおこりて民をいざなひおもた
がいせしが。これも亡びそれよりおこりひしものもことごく

ちらされさまよひあり　三今われなんぢらにかさらん。この人々
をゆるしてこれよかしもるるうれ。もしその謀ところわざ
るみところ人よりいでたりるにはいろおべし　三九もし神よ
まいでばるんぢらこれをやぶすことあさもにおそら
くはなんぢら神にさからふものとおらん　四ゆゑにかれら
もろもろ使徒をよびてむちうち耶蘇の名によりてか
さることをなさるれと命じてこれとゆるせり　四使徒ら
ちい耶蘇の名のさあるにそづうしめをうくるに足ものとせ
られしことをよろこびて議官のまへをさり　四日々よ殿も
よび人の家においてをしへ救主。耶蘇キリストの福音を

つゐいてやめざりき

第六章 そのころ門徒どもの數おほくくそゝてヘギリシヤこと
ばのユダヤ人その寡婦たちが日々のほどこしなきことさ
れゝとゝそへブルことばのユダヤ人よむくし怨言ことありけるに二 十二人のものゝたちをよびあつめていひけるは
神の道をすてゝ飲食のことにつかふるはこゝろよからぬことなり三 このゆゑに兄弟よなんぢらのうちより聖靈と智慧のみちたる善證あるもの七人をえらぶべし。われらをそのことにたてゝこのことをつかさどらせん四 ゝしてわれらはつねにいのることゝ道をつとむることを務づゝ五 こ

の言をべてのもの、こゝろよろこうるいけをび信仰くせいを
心のみちさるステパノおよびピリッポプロコロニカノルテモン
パルメナまたユダヤ教よりてアンテオケの二コラをえらび
六このひとりぐを使徒たちのまへにたてしむ。使徒たちいの
りてそのうへに手をおけり○七神のみちひろまりて門徒ふ
ものうちエルサレムにもるはなはだくまさり祭司もお
ほく信仰のみちにはいるをり○八ステパノめぐみと
能力とにみちてふしぎなるわざとおほいなる休徴を民のう
ちにおこなへるを九ときよりベルテンとよばるる會堂およ
びクレネびとアレキサンデリア人キリキヤびとアジアびと

の諸會堂よりひらく起てステパノといひあらそふ十この
ステパノの智慧とこゑによりていまころろの靈うてきも
ることあくこもをぞ十つひる人をしてのもりいもしめける
いわまろうれがこともをきくしまモーセと神をけがしたる
ま十三この民と長老ごくしやたちの心をうごろさせ突然
きうりてこの人をとらへ集議所まひきたり十四いつもりの
證人をたてくいもせけるいこの人ハきよ処ところと律法
をけがすことをこうりてやめぞ十五そこうれこうりてこの
ナザレの耶蘇いこの所をこぼちこうもモーセのわまろまさ
づけしころろの例をうるべくしといふるをわまろきたを

ぞなり 十五 こゝによおいてそのきゝをる者みな目を
注てこの者をみしにその顏は天使の面のごとくなりき
第七章 さて祭司のそきいひけるはこの事さくのごとくなる
やニステパノいひけるいひとゞ兄弟および父たちよ聽
まつらのせんぞアブラハムいまだカランにをまさるさきに
メソポタミヤにありしときに榮光の神あらはれて三 この地よりい
ひたまひけるはなんぢの國といそべるんぢの親族をさりて
わがなんぢに示さんところの地にいくべしゝかくて アブラハム
カルダヤびとの地をいでゝカランにをりそのゝ父のをはり
ののち神はこの地をかしこより今なんぢらが住ところのこの

地をうつしたまふり 五 この地において足をふみたつるほどの地をもあたへざりき。ゆゑにいまだ子あらざりしにこの地を産業としてこれとその子孫にあたへんと約束したまへり。六 神かくいひたまへり。この地の裔いほつの國にやどらん他のくにの人々ことごとく奴隷となして四百年のあひだ苦やまさん。七 神またいひたまふ。ゆゑもつてつかふるところの國民をわれさばくべし。そのもの後にその地を出このところにおいてわれをつかへん。八 またこれに割禮のけいやくをあたへたまへり。かくてアブラハム イサクをうみ第八日にこれに割禮をほどこせり。イサク ヤコブを生ヤコブ十二の族始

祖ところむ 九 始祖たちヨセフをねたみことごとくエジプトへ賣
まざれど神はこれをともにありて 十 もろもろの患難のうち
よりこれをすくひいだし エジプト王パロのまへにおいて恩
寵ともろもろをあたへてエジプトおよびパロの全家をつかさ
どらせたまふ 十一 ここにエジプトカナンのもろもろの地に饑饉
とおほいなる難ありてもろもろのせんぞたちも食物をうること
をえざりき 十二 ときにヤコブエジプトに穀物あることをき
きて先わたりのせんぞたちをつかはしたまふ 十三 ふたたびつぎ
のときヨセフその兄弟にあらはれ。ヨセフの親族
パロにあきらかになりぬ 十四 ヨセフ人をつかはしてその父

およびもろもろの家族七十五人をよびきたらしむ 十五 ここ
においてヤコブ エジプトにくだれりてここに死
にたるのち 十六 スケムにおよびヘモルの子孫
の父なるエモルの子孫よりうりをもて アブラハムが金をもて スケム
より神のアブラハムにあらわしたまいしやそくの期ちかづ
くにおよびて民ふえひろがりて エジプトにおおくみち
六 ヨセフのことをしらざるほかの王おこるにいたりて 十九
うれおおき謀をもてわれらの親族をあしらいわれらのせ
んぞたちをるやましその嬰孩のいきのこらざるやうにこれ
をもてさらせんとせり 二十 そのときモーセうまれていとうる

もゝく三ケ月のあひだ父の家にそだてられ三
のちハロの女こを見をひろひあげ己の子ゝゝてそだてたり
三 モーセこゝろざゝくエジプトびとの學術をならひ言と行
とにちからありき三 四十歳まおよびてその兄弟なるイスラエル
の子孫をこゝろにかけるのこゝろおこりき三一 一人のあひさげ
らるゝものをみてこを保護エジプトびとをうちてその
仇をむくひたり三元 モーセハわが手をもて神のこを救
くはんとしたるまふことをその兄弟さとるをらんとおもひ
しがごとくハさとらざりき三六 次日こをゝあひ鬪こゝろを
うけもとめこれをあらためて和睦いひけるハひとゝよをん

ぢ〳〵兄弟あるにあらざる相そこなふや 二 その友をそこなふものうまを拒卻てゆひけるや誰があんぢをたて〳〵わをらの有司まつ刑官となせしや 六 あんぢ昨日エジプトびと〳〵をころせしごと〳〵まつわをもころさんとするや 九 モーセこのことをよりのがれてミデアンの地にたびゆきかりうどとなりこにおいてふたりの子をうめり 十三 それより四十年をへてシナイ山の野において主のつかひ棘のあひだの火焔のうちにてモーセにあらはる 三十 モーセこれをみてあやしみこれをちかよりてみるとき主の聲あり云わたまはんぢの列祖の神われはアブラハムのかみイサクのか

みヤコブの神なり。モーセおそれをのゝき敢てこゝをめざ
き三主まことうを見よいひたまひけるにあんぢの足の履とぬ
げあんぢがたてるところハ聖地なり三四まことうにエジプト
にあるわが民のあやまちを見そのうめきを聞くりてくだ
らんがためよくだれり來りをるんぢをエジプトへつかはさ
んと三五夫この遣はしがこゝをそて誰ぞあんぢをたゝし有司
さばきびとゝなせーやといひしー此モーセを神ハ荊棘のう
ちにあらはれしー使者の手よりてつかはされ救者とし
てつかはしたまへり三六この人エジプトおよび紅海また四十
年のあひだ野においてふしぎなるわざと休徴をおこなひ

てこのをとこをみちびきいでゝせり 三七 イスラエルの子孫(こら)のうち
て神(かみ)はなんぢらの兄弟(きやうだい)のうちよりわれのごとき一人(ひとり)のよげ
んしやをなんぢらのためにおこしたまふべしといひしは
きみなり 三八 此(この)モーセはみ野(の)の會(あつまり)をりシナイ山(やま)
でおのれにこれをかたるところの天使(つかひ)またわれらの列祖(せんぞ)とと
もにありてわれらにさづけんがために生(いき)たることばをうけし
ものなり 三九 この人はわれらのせんぞらもいなまんことを
このまゝ反(そむ)てこれをおしのけその心もてエジプトにか
へり 四〇 アロンにいひけるはわれらにさきだつべき神をわれ
らのためにつくれ。そはわれらをエジプトの地(ち)よりみちびき

いざせ　彼モーセハいかなるものにかあらざれバなり　四その時ふたゝび犢をつくりその像にいけにえをさゝげ己の手のわざをよろこべり　四こゝにおいて神ハふたゝびかれらをこゝろよりそむきてその天の軍勢をまつるにまかせたまへり。まことに預言者の書に。イスラエルの族よなんぢらハ四十年のあひだ野においてけものと祭物をわれにさゝげしや　四またなんぢらハモロクの帳幕およびレパンといふ神の星をるために作りたるところの像をたづさへたりわれなんぢらをバビロンのさきにうつさんと錄されたるごとく　四われらのせんぞらハ野において證のまくや

をまもり。此ハモーセよこうまるものこうまでもむうひて已
みーところの式よろづひてつくまて命ぜーごとくつく
まつるものみり 四五 わまろのせんぞたちこの帳幕をうけて
ヨシアとともに異邦人の地をせめとりーときこまをたゞ
さくいまり。このいたうしんハダビデの時までわまろの
列祖のまへより神のおひもちひたまひーところのものを
ア 四六 ダビデ 神のまへに恩をうけてヤコブの神のために居
所をまうけんとねがひたまど 四七 ソロモン 神のために殿を
てまり 四八 ろまもども至上 みこ手をそつくまるところに
おろものをそ預言者のいくるごとく 四九 ろみたも主い

いざせ　彼モーヒハいかなるりーしの志らされバなり　四二その時かれら犢をつくりその像にいけにへをさゝげ已の手のわざをよろこべり　四三こゝをもて神ハかれらをこゝろぞこてその天の軍勢をまつるにまかせたまへり。まるえも預言者の書に。イスラエルの族よなんぢらハ四十年のあひだ野にをいて犧牲と祭物をわれにさゝげしや　四四まさなんぢらハモロクの帳幕およびレパこといふ神のうつぞもる星をおがまんために作りたるところの像をたづさへたり。我なんぢらをバビロンのさきへうつさんと錄されたるごとく　四五わかれらのせんぞらハ野にて證のまくや

をまもり。此ハモーセよりうけまもるものこうまもむうひて已よみしところの式をおさごひてつくまつれと命ぜしごとくつくまつるもののみり 罒五 わまつのせんぞたちこの帳幕をうけてヨシアとともに異邦人の地をせめとりしときこうまつをたづさへいまり。このいまつりハダビデの時まぞよわまつの列祖のまへより神のおひたまひたまひしところのものを 罒六 ダビデ 神のまへに恩をうけてヤコブの神のために居所をまうけんとねがひたまど 罒七 ソロモン 神のために殿をたてまつり 罒八 おまつまども至上きみの手をそつくまつるところをおもひそへ預言者のいへるごとく 罒九 主

ひたまもく天(てん)はわが座位(くらゐ)なり地(ち)はわが足凳(あしだい)なりなんぢらわがためにいかなるいへをたてんとまたるのまた我(われ)やすむところいづこあるや 五十 わが手(て)はこのもろもろのものをつくりしにあらずやかくてこのもろもろのものありしなり 五十一 されどわれ心(こころ)と耳(みみ)とうけざるものよなんぢらつねに聖靈(せいれい)にさからひその列祖(れつそ)のごとくなんぢらも行(おこな)なり 五十二 なんぢらのせんぞいづれの預言者(よげんしゃ)をかくやまざりしや。またかの義者(ただしきもの)のきたらんことをあらかじめしめしものをころしぬるにあらずや今(いま)その義者をつかみしものをころしぬるなんぢらは 五十三 なんぢらは天使(てんし)のつたふるところをうけながら律法(おきて)をうけざるものなり

ざるあり 五四 衆人 これらのことをきゝておほいにいきどほ
り切歯しつゝ ステパノはむくゝり 五五 あふるまゝステパノハ聖靈
にみたされ天をあふぎて神の榮光とそのみぎに耶蘇のた
てるとをみていひけるハ 五六 見よ我は天ひらけて神のみぎに
人の子のたてるとをみる 五七 茲におゐて衆人おほごゑをあ
げて耳をおほひ心をあはせてステパノのもとにおしよせ
五八 この邑より邑まりあひいづ石をもてこれをうつ。證人らお
のおのその衣服をサウロといへる少年のあしのもとにおか
けをく 五九 彼ら石をもてステパノをうてるるときこの言いのり
ていひけるハ主イエスよわが靈魂をうけたまへ、卒まとひ

ざまづき大聲よばいひけるは主よこの罪をこれらにおもむるなかれ。この言をいひをはりて寢まつく。サウロこのころされーをよろことせり

第八章 この日エルサレムにあるところの教會におほいなる迫害おこり使徒たちのほかはみなユダヤとサマリヤの地にちらされたり 二 敬虔あるひとびとステパノをはうむりこれがために大なる哭泣をなせり 三 サウロは教會をあらし家ごとにいりて男女をひきいだしてこれを獄にわたせり 四 ここに於てちらされたるものどもは徧くめぐりて福音をのべつたへたり 五 ピリッポはサマリヤの邑に

くだりてキリストのことをこゝろえ示せ六おほくの人々ピリッポがおこなふしぎなるわざを見聞してこゝろをおるゞうー謹てそのこゝろをきけり七そは汚れたる鬼おほいなさけんでそのつけるところのおほくの人よりいでぱうく癱瘋およびおーるくの人もおほくいやされたればなり八こゝによりてこの邑におほいなるよろこびありき九こゝにシモンといふる者と魔術をおこなひサマリヤの民をおどろかせしものあり十小より大にいたるまで皆つゝしてそのいふところをきけるいひけるはこの人は神のおほいなるちからなりといふり土これらのつゝしてこゝろをきけるはひさしくそ

の魔術(まじわざ)をおどろかされたるこのゆゑあり　十三ゆゑにかれ
ら神の國(くに)および耶蘇(いえす)キリストの名(な)につきて福音(ふくいん)をのべつ
ヒリッポを信(しん)ぜしくびをとこをんなともバプテスマをうけ
シモンもまことにしんじてバプテスマを受(う)つねにピリッポとと
もにありてこの起(おこ)るふしぎなるわざと休徴(しるし)とをみてお
どろけり　十四エルサレムにをる使徒(しと)らもサマリヤまでも神の
道(みち)をうけたりときゝてペテロとヨハネをこゝにつかはせ
しに　十五この二人(ふたり)のものくだりてこれらが聖靈(せいれい)をうけん
ためによいのりをなせり　十六そはこのものどもただ主(しゅ)イエス
の名(な)によりてバプテスマをうけしのみにていまだその一人(ひとり)にも聖靈(せいれい)

らざりしによる 十七 この時ふたりのもの手をこれらのう
へにおきけるにこの者ども聖霊をうけたり 十八 使徒たちの手
をおけるによりて聖霊をあたへらるるをシモン金を
もちきたりて 十九 いひけるは わが手をおくところの
ものもまたべて聖霊をうけんためこの權をわれにもあた
へよ 二十 ペテロこれにいひけるはなんぢのうねはなんぢと
ともにほろびよ。なんぢは神の賜をこれをえんとおもへ
るゆゑなり。二一 なんぢこのことにおいて分もなく與もなし。そはなんぢ
のこころ神のまへにただしからざるゆゑなり 二二 ゆゑになんぢこの
惡をくいあらためて神にいのれなんぢのこころの念あるい

ひいゆるさるん 三 われるんぢら膽の苦よをり不義の繋よ
をるをこればあり 二四 シモンこたへていひけるはなんぢら
がこうこもるところ一もわれよおよそざるやうわがために
主よいの 二五 こゑ主のことばを證しうつことをこうろ
しのちエルサレムへこうりゆくときサマリヤ人のむらくよふく
いんをつくたり ○ 二六 主のつうひピリッポよこうりていひ
けるは起てみなみの方よむうひエルサレムよりガザよくだ
るところの路よゆけ。そのこもは野のあり 二七 この道起てゆけ
エテヲピア人をるもちエテヲピアびとの女王カンダケの大臣
ある寺人まてもとべてそのほよわうの財寶をつのさとるも

の禮拜のためエルサレムにきたりしが二八そのうちにありて車のうちにすゝ預言者イザヤの書をよむを見り二九靈ピリツポいひけるは往てこの車にちかよりて彼にともにのれ三〇ピリツポ走りよりて彼がイザヤのふみをよむをきゝこれをいひけるはあんぢその讀ところのことをさとるや三一こたへいひけるはもし導ものなくばいかでさとることをえんやつひに請てピリツポをおのれとともに坐せしむ三二そのよみをりし聖書の文は左のごとし曰ふは羊のほふり場にひかるゝごとくひつじは毛きるものの前にありて聲をいださざるごとくその口をひらかざ三三

卑賤なるものゝ義判をうけざるを以て誰かよくその世のうまれを述べんや。それこれのいのち地よりとられたればなり 三四 寺人ピリッポにむかひ請ふ我ために預言者はたれをさしてこれをいふやみづからをさせるか他人をさせるか 三五 ピリッポ口をひらき此かきものよりはじめてイエスのふくいんをこれにのべつたふ 三六 ゐくてふうのもの路をゆき水あるところにいたりけるに寺人いひけるは水をごらん我がバプテスマをうけんとするに何のさまたげのあるや 三七 ピリッポいひけるいまんぢもし全心をもて信ぜばよろしかん。答へていひけるは我イエス

キリストハ神の子なりとゑんぜ三八遂にめいして車をとゞめ一ゑんピリツポと寺人のふたり水ぎはにくだりピリツポバプテスマをこのきよめをなせり三九この宦官水よりあがるときに主の靈ピリツポをひきさる。寺人またうれしとおもひてその路をゆけり四十さてアシドデにいでピリツポまちくるまちにのべてのむらざとを經て福音をのべつたへカイザリヤにいたれり

第九章

サウロハなほも兇言と殺氣とをもちきたりて主のでしたちをせめ祭司のきよめきてニダマスコの諸會堂にようそうる書をもとむ。このみちにこの道にまだくるものをみば男女ゑ

うるさらばとうへてこゝをエルサレムよひろんとおもへり
三 この道ゆきてダマスコよちかづけるときたちまち天より
光ありてこの身をめぐりてらせり 四 ゐ地にたふるゝに
きサウロサウロなんぢ我をせめるやといふこゑをきけ
り 五 サウロいひけるハ主よなんぢハたれぞ。主いひたまハ
けるハわれなんぢが窘迫ところの耶蘇なりなんぢ刺おる
むちをけるんこと 六 ゐ道戰慄おどろきていひけるハ
主よわれをもてなにをなさしめんとたまふや。主ゐ道にいひ
けるハおきて邑にいれさらばなんぢ行つきことをもあさ
るべしと 七 このとゝきにゆける人々ものいふことあたはず

しく立ちぶまりその聲をきゝつけゞも誰をもみざりき　サウロ
地よりおきて眼をひらきたるに何もみえざりければ
ゐる人たちその手をひきてダマスコまでいりぬ　三日
の間みえずまた飲食をもせざりき　ここにダマスコにアナニア
といふる一人のでしあり　主まぼろしのごとくこれをよびて
たまひけるはアナニアよ　答けるは主こゝにあり　主いひ
たまひけるはたちて直といふる街にゆきユダのいへに
いたりてタルソの人サウロといふものをたづねよ　そのもの
祈禱てをり　またアナニアといふ人きたりてその
させんがために手をそのうへにおきしと異象にみたれば

主
主
主

よあんちのきこゑる路まてあゝそれゝゝところの主耶蘇かんちゃうふたゝび見こゝをえうの聖靈まこゝさされんたあまわまをつゝうもせり 六 たゝちにうちこゑの眼より鱗のごときものおちて再ゝることゝを得またゝち起てバプテスマをうく 九 うれまでに食してちからづきたり。ゝくてサウロハ數日のおひだダマスコまある門徒たちとまにもり 二十 たゞちに會堂まおいて耶蘇のことをのべて即ちこゑハ神の子なりといふ。三きゝものゝる驗異ていひけるハこの人ハエルサレムよおいてこの名をよびものをほろぼし且こゝにきたりしもこゑをとらへて祭司の長まひうんとまるまあるぞや 三 ちう

ども サウロハ ますます 堅固して この 耶蘇は キリストなり とあらはすを なしダマスコに 居る ユダヤ人を 辯ひふせたり 二三 まそにおほくの日を へてのち ユダヤびと サウロを ころさんと はかりしが 二四 その計謀 つひに サウロに しらるる。 うまやは 晝夜 まもの門を 守りて これを ころさんとせしに 二五 門徒たち 夜 これを もて サウロを 石牆より つりおろせり 二六 サウロ エルサレムに いたりて 門徒たちに つらならんと こころみしに 皆 これを 門徒なることを 信せず 二七 ここに バルナバ これを ひきて 使徒たちの もとに いたり その途中にて 主を みしことと また 主の これに かたりたまひし

ことおよびダマスコにありてもぐろば耶蘇の名によりて
のぐろりーことをつげぐろり 二八 これエルサレムにありてでーた
ちとともに往来し 二九 主いまその名によりてもぐろぞか
たりぐろキリシヤ方言のユダヤびぐろいひあらそぐろ。 三〇
サウロをころさんとそのる 三十 さとど兄弟これをさと
てこの地をカイザリヤまでおくりてタルソにゆうしめたり 三一
こうしてユダヤガリラヤおよびサマリヤ中のけうくるいい
平安にこの成立て主をおそる事をおこるひ聖靈のまぐめ
によりてその數いやまさをり 三二 さてペテロあまねく諸方
の地をへてルッダにもある聖徒にもとたいぐろ 三三 そのところ

ゐて一人のおもあうぶをかづらひ八年のあひだ床につける
アイネアとるらくるものよあよ　三四ペテロこう告よいひけるハ
アイネアよ耶蘇キリストあんぢをいやす起てあんぢこづら
床蒲をさめよこの告たぐちよ起　三五ルッダおよびサロンよまめる
きべての人こををそて主よ歸せり〇　三六ヨッパよ女のでーおる
りダビタとるづく譯バドルカス。うれハおほくの善事と施濟
をおこるくるものありしが　三七そのころ病てをにくるによ
りその屍をあらひて樓よおけを　三八ヨッパをルッダよちかきゆ
ゑ門徒たちペテロのこーとよあることをきゝ二人のものを
つこのをーてわをらよくることをおそくまるるみ告と請ー

む 三九 ペテロ たちてこゝろもとなくゆき既に入りけれバ
人々この事をいきて樓のぼるにまくべての寡婦ども ペテロの
うつさはらよたちて哭泣つ ドルカスがともにありし時つね
につくりたるところのうえ衣きる衣をこゝろみを 四〇 ペテロ
のもろをことごとく外にいだし 跪ていのりまきかへりて
むくろにむかひてタビタおきよといひけるバこのめんる眼をひらき
ペテロを見おきてさーぬ 四一 ペテロ手をのべてこゝをおこ
聖徒およびやもめだちをよびてこの活たるタビタをそ
のまへにたゝしめたり 四二 このこと ヨッパ中にあまねく多のひと
ひと主を信ぜ 四三 こゝてペテロひさしくヨッパにとゞまりて

又エシモンの父なるより

第十章

一 カイゼリヤにイタリヤ隊と称する組の百人の長らなるコルネリヨといふる人あり 二 この人信心のふかきものにてその全家族とともに神をうやまひ民に施しを多くなしまた常に神に祈禱せり 三 ひるの三時ごろまぼろしのごとく神のつかひのきたりてコルネリヨよといへるをあきらかにみる 四 この目を注ぎてをそれおそれいひけるは主よなにごとぞや。天使こたへけるはなんぢらのいのりとなんぢの施濟とをそなのぼりて神のまへに記おぼえたり 五 いま人をヨッパへつかはしペテロとよばれるシモンを

よべ、六、のまつハ皮工シモンのところへやどをとりそのいへ
みべこあるセコルネリヨといふまもる天使さりーのちかれそ
の僕ふたりと恒よりおのれにつかふる信心のふかき兵卒を
よびハこのことをことごとくつげてヨッパへつかはせ九のひ
らゆきて次日その邑にちかづけるときペテロ祈禱のため
屋上にのぼれり。時ハおよそ十二時なりー十いたく餓て
食せんとおもひしーが人のしたくもつを豫備うちにこの日氣
をとうーまるることもちして土天ひらけ器のくだものをる
大なる布のごとく四角をむすびて地につりおろされり
十二そのなかにそべて地のよつあーの獣昆蟲および空の鳥

あり　十二　うつ聲ありてうまよいひけるハペテロよ起てころ
ころし食せよ　十三　ペテロとゝくけるハ主ちよのつゝじわ
いまゞ穢たるものと潔うらざるものを食せしことあら
聲ふたゝびありてうれまいひけるハ神のきよめるものを
をろんちきよのうぞとするなの　十六　このくのごときこと三
次たゞちにそのうつわものハ天へあげらまてうり　十七　このく
ペテロその見しところの異象いかゝある意ならんとうた
がひをりしときコルネリヨより遣さるゝひとゞもまでよ
シモンの家をたづねて門のまくよたち　十八　呼てペテロといふ
シモンハこゝにやどれるや否とそよ　十九　ペテロなおその幻の

ろーのことをおもひをりーて靈こうをよいひけるはみよ三
人のものるんぢをたづぬ手起てくらぐりうたがをぞーその
ゆらうとともにめけ我こをつうをせーあり三ペテロくよ
てその人たちよいひけるはわをはあんぢらがたづねる
くらうのものありるんぢらいっある故ありてきこるや三
うゆらういひけるは百人の長るコルネリヨといくる義りつ
神をうやまひをべてのユダヤびとのうちでたよくをものの。
るんぢをその家よびてなんぢの言をきけと聖つうひよ
ちあされたり三こよおいてペテロこうをよびいをて
やどらーめ次日ペテロこうをうとともにいでたもけるが

ヨッパのきやうだいたちもまことにそうもろくて 四つぎの
日この人とカイザリヤよりるコルネリヨはその親族およ
びおもき友だちをよびあつめてこの人をまちおりけり 五
ペテロの入きたまふるときコルネリヨこの人をむかへその
もとにふしてをがみ 六ペテロこの人をひきおこしていひけるは
起よわれも人なり 七ここにてともにこうりて内にいりて
おほくの人のあつまれるを見 八この人らにいひけるはユダヤ
人とまじはりまたつぐことその律にうるさ
きるいなんぢらのしるところなり。されど神はいづれの人
をもけがれたるもの或はきよからざるものといふことを

とわを示たまくり 元 このゆゑよ我むくらるゝやいる
猶豫ぞできる。わをるんぢらよろこび我をむくいんる
にのたあるるや 三 コルネリヨのひけるハ四日さきまわを斷
食そこの時刻よいごろり三時ごろ家よありていのをを
りしよう やける衣をきるものわの前よたち 三 いひけ
るハコルネリヨよるんぢの祈禱ハきこをるんぢのほどこし
ハ神のまくよ記おうをさり 三 されば人をヨッパへつかは
ペテロといふシモンをよべ。このをハ海邊よあるものをるあし
シモンのいくよやどれを彼きこりてるんぢよこうるべし
と 三三 このゆゑよ我たゞちよ人をるんぢよつかはせり。るん

ちのきこるい善ひをこう神のるんちよ命じたまつるまゝ
てのことをきこんとそいま神のまへにあるるり三ペテロ
口をひらきていひけるわれまことに神はうとようざか
ものるーていづをの國民にても神をうやまひ義をおこる
ふものはその聖旨にうるわといふことをさとる三六その道
はそるおとも神の耶蘇キリストによりて平和をのべイスラエル
の子孫にあらへたまひしーところのり此いをもはあらゆる
もの、主たるるり三七そをヨハネの宣しバプテスマのうち
ガリラヤよりそこまりユダヤ中にあるしことはるんぢ
ごぞるとくろ三八そるおもちこのナザレよりいでうる耶

鮮い神よりせいまいと才能をもてあぶらをそそぐれわまねくめぐりて善事をおこなひもとめて惡魔よつてうをこうるものをいやせり。そん神このものとともにありしによる 三九 わもてらはこのもろもろユダヤびとの地およびエルサレムにおいておこなひしことをすべてのことを證するものなり ユダヤびとこの人を木にかけてころせり 四〇 神は第三日にこれをよみがへらせ給ひて 四一 たゞその證人なるわれらかねてえらびたまへる證人にもかれがよみがへりしのちこれとともに飲食せしものに顯したまへり 四二 またこの人はその生者と死者のさばきびとに神よりさだめられたる

もろもろあるじて民にのべつたへ命じたり　四三すべての預言者もおほよそこの主を信ずるものはその名によりて罪のゆるしをうくべしとこのまもつきて證せり　四四ペテロこの言をうつさるるあひだに道をきくところのすべてのものに聖靈くだりたまふ　四五ペテロとともにきたりし割禮ある信者たちはせいれんの賜いもろじんにまでそそがるることをおどろきぬ　四六それ異るくちぐちの方言をもてこのもろもろがうつさるると神をあがむるとをきゝたればなり　四七このときペテロこたへけるはわれらのごとくすでに聖靈をうけたるこの人々はたれその水を禁じてバプテスマをうけざらしむるものあらん

や 四 つひに主の名によりてバプテスマをうくべきことをこのもらに命ぜ。こゝにおいてこのらペテロに數日そこにまらんことを請へり

第十一章 使徒たちおよびユダヤ中にあるところの兄弟その
ほかそうじんも神のことばをうけたりと聞 二 ペテロ エルサレム
にのぼりしとき割禮あるものどもこれとあらそひ 三 いひ
けるはなんぢらきよからぬ人の家にいりてこれらとと
もに食せり 四 ペテロそのあらましをはじめより次第によこう
てこのらにあかしていひけるは 五 われヨッパの邑にありて
いのりるときに氣をうしなひくるこゝちして。天よりよそを

つるをおほいるる布のごときものをくだるをみるにその器わがもとにつけて六 ㇾ 目を注てつらく〻これを
をうちよびるをうな地の四足のものとあらきけもの昆蟲かよ
びそらの鳥ありきと七 うつをもよペテロよ起てころをころ
しくらへ ㇾ いくる聲をきけり八 わをいひけるは主
よそのごとき穢たるものときようざるものいまだわが
口よりいつてことなし 九 聲また天よりわをこたへくそ神の
きよめたるものをなんぢきたなしとうをなかれとふ
十 このくのことをきること三次つひにまたそのものみな天
よひきあげらるてとり 十一 その時よあるりてカイザリヤよりわ

われらのまもる三人のものをるところの家のまくやたてを十二まもり靈をわれらうけざるもまたこれらともにもくでしといふをこの六人の兄弟もわれとともにあひゆきてその人のいくまいるをぬ十三これをもちよつぐ天のつくのひのわざの家よさもわれよむこひて人をヨッパへつかはしペテロとふシモンを迎よ十四その人るんちおらびるんちの家族のまくもるべきことをつげんといふる我見うと十五このくそわざかうそのしるき聖靈をしめよわれらよりたるもごとくうれらるもくぞれを十六そのときわれ主のひとらをのふるヨハネハ水をもてバプテスマとなしたれどもる

んぢらハ聖靈よりさづかりてバプテスマをうけんとのことばをおもひいだせり　もしそれ神いまこれらにキリストにもあんぜるところのわれらにたまひしごとくおなじ賜物をこれらにもあたへたまへりとせばいかでか神のさまたげをなしえんや　八こゝろをつくしてこれらのことばをきゝて對ふるところなかりき　神をあがめいひけるハ實にもろもろの國人にもまた悔改をあたへて生をえんためにかくのごとくなしたまへるなりと　九さてステパノによりておこりし苦難によりてちらされたるひとびと旅してペニケ　クプロおよびアンテヨケまでいたりしがたゞユダヤ人にのみことばをつたふる　十こゝろの中にクプロクレネのひとびと

ありてアンテヲケよきおとり主イエスの福音をのべてギリシヤ
人おほくかちとり 二一 主の手おれとともにあり。おほくの人ゐん
じて主に歸せり。 二二 このおとづれエルサレムの
あるきこゝろの教會のみゝにいたりしをつひにバルナバをつ
かはしてアンテヲケにいたらしむ 二三 これをでよいよ神の
恩寵みてよろこびこれらにもてろ訓かさらに主に屬んこ
ころをはげまさを 二四 そはこれはよきひとにて聖靈と信仰の
みてるものなればなりこゝろおほくてあまたのひと主に
たゝぬ 二五 さてバルナバをサウロ訪たづねんためにタルソ
におもむき 二六 これをあひてあれ訪アンテヲケにつれきたり

まうくてこれら一年のあひだその會にくわゝりて
おほくの民衆をしふ。門徒らはアンテヨケよりまれに
しかばアンテヨケよりきたりしバルナバ
二七 そのころ數人の預言者エルサレムよりアンテヨケにきたる
二八 その中のひとりアガボと名るものたちて靈により示していふ
世界中おほいなる饑饉あらんと。そのおとなしてクラウデヨ
カイゲルのときなほおこりたり 二九 ここにおいて門徒だもおのゝ
そのもちうらはゝとゞひてユダヤにすめるところの兄弟をすくふ
ためにものをおくらんおもひ定さだめ 三〇 つひにその
ことを成おこなふ。もてるものバルナバとサウロの手に托して

おれば祭長老よりおくれを

第十二章 そのころヘロデ王けうそうのうちの數人なやまさんとてこれらなそらふ 二ことに刀にてヨハネの兄弟ヤコブなおろせり 三またのことのユダヤ人のもてるよかるへるを見てこれまたペテロをもとらふ またのときは除酵パンのいまだの日なりき 四またそこれなとらへて獄にいれ四きたしの節れのち民のまへにひきいださんとおもひ十六人のへいそうまもれとまもらしめたり 五ペテロは如此ひとやにまもられ教會はかれがためにひたすら神にいのる 六ヘロデこれをひきいださんとするまへの夜ペテロは

ふたつの鏈につながれてぬちの兵卒のあひだによねむり
守者ら門のまへにありてそのひとやをまもれりとときに
主の使者きたりくわれば光ひとやのうちに照耀そのつかひ
ペテロの脇をたゝきてこれをさまし「をみやこはやくおきよといひ
ければ鏈その手よりおちたり「八」天使これにいひけるはなんぢ帶をせよ
なんぢ履をはけよ。ペテロそのごとくせり。天使またいひけるはなんぢのうちぎを身にまとひてわれにしたがへ。ペテロいでゝこれに從ひゆくがそれつかひのなしことを眞實なりとはしらずまぼろしをみるとおもへり。かくて第一だい二の警固をもぎてまもりいるところの鐵門にい

たりしそのもんおのづからうれしのあまひらく。もるをもち出てひとつの燭をともしゆくときその天使たちまちのれをりをるれをり十二ペテロさとりていひけるいわ生今生ここにある主そのつかひをつかわしてヘロデの手およびをべてユダヤ人のまちみよりわれをくひいだしたるひとびとを十三醒悟てのちヨハネ名をまたマルコといふ人の母まりアのいへにいたりしにおほくの人あつまりて祈りをなをり十三ペテロこもんの戸をたたけるときロダとなづくる下婢きたりてこれをうかがひしに十四ペテロの聲なるをさとりえればよろこびまたくに門をもひらえずして

かけいでペテロのもんのまへにたつことを告 十五 かれらローダよいひけるいなんぢ狂せるかといひたてまつることさだまりたりといふ。このれらまさにひけるかそのペテロをまもる天のつかひなり 十六 ペテロるゐ門をたゝきてやめざるをみこのれら門をひらきペテロなみてをどろけり 十七 ペテロ手をうごかしてこのれらのあるをさづけ主のかの牢を獄よりひきいでたまひたることのありさまを告まうさおのことをヤコブおよび兄弟たちにまうせといひ遂さいでほかのところへゆけり 十八 夜あけおほくびとときペテロいかにかなりしやと兵卒のなかのさわぎひと

かゝるざまを 十九 ヘロデ ベテロが たづぬれども見つけざ
ればつひにまもるものをたゞちにうれつゝ死罪に命をつく
てヘロデをユダヤよりカイザリヤへさりてそこにゐたまへり 二十
ヘロデ ツロとシドンの人どもにむかひてをるべからず 怒ていた
きうれへこうれつゝ心をあやせてそのもとへきたり 内侍
の臣ブラストを味方にみをなして平和をもとむそへかれら
の國は王のくにより糧食をうればなり 二十一 ヘロデそれ
さだめたる日に王服をつけその座にゐて坐したれ
らにむかひてかたれり 二十二 民ら神のこゑなり 人の聲にあらず 二十三 ヘロデ
ほめまつれば神に歸せざ

るよより主の使者こゞちよかれをうもしうべこのれハ蟲のたゝよこのまれて氣たゆ　三さて神のおとばいましくひろまりバルナバおよびサウロをそれ務成とげをうりてマコとゝゞくるヨハネ成ともなひてエルサレムゝりかくれを

第十三章　アンテヲケのけうくわいに數人のらげんしやと教師ありそのなもバルナバおよびニゲルとよばるゝシメヲンまたクレネのルキヲおよび分封王ヘロデの乳きやうだいマナエンおよびサウロなり　二こゝれら主をつゝくて斷食なせるとき聖靈いひけるハそゞたゝよバルナバとサウロをえらびそのもちて我こゝれらに命ぜしところの職をおこなハもよ　三こ

こゝにおいて斷食しいのりをなし手を二人のうへにおきてこれをゆるしむ 三 如此このふたりへ聖靈よりつかはされてセルキアにくだりかしこより舟出してクプロにおもむけり 五 このときサラミスにいたりユダヤびとの諸會堂にて神のことばを宣ふるにヨハネを用おてそのたすけとなせり 六 かくてこの島のうちをへてパポスにいたりしときいつはりの預言者バリエスとなづくるユダヤ人にあへり 七 この人は代官セルギヲパウロといへる智人とともにあり時によだいのうへんバルナバとサウロをまねきて神のことばをきゝんことを求へり 八 ゑこうるこのひと

いーやエルマス(この名をうけべト者)ふさうのものさうひ代官をして信ぜることなからしめんとせり　九サウロまたの名はパウロ聖靈にみたされ目をとめてこれを視ていひけるは噫もろ〳〵のいつはりと奸惡にみてるまの惡魔の子よもろ〳〵の義の敵よなんぢ主の直なるみちをまげてやめざるこの十一みよ主の手いまなんぢのうへにあり　なんぢ暫くあきらかに日をみざるべし。忽ちかれの目にくらみて暗をてびきせんものをもとめさまよふにいたらん　十二ここにおいて督ことのありしことをみて主のをしへにおどろきおそれ信ぜり　十三パウロおよびそのともの

るものパポスより舟出をしてパムフリアのペルゲにいたりこゝをヨハネ、いこのもとをはなれてエルサレムへかへる十四このれらいこゝより旅をしてピシデアのアンテヨケにいたり安息日によりてだうにいりてざしぬ十五律法と預言者の書をよみをはりしのち會堂のつかさたち人をもてこれらにいはせけるはひとゞきやうだいよもし民によきもる言あらばいへ十六パウロたちて手をうごかしいひけるはイスラエルの人々および神をうやまふものよきゝくべし十七このイスラエルのたみの神はわれらの列祖をえらびその民のエジプトの地にやどりをりしときこれをそだて

うつにうつき手をもつてこうをうをこうしこゝよりみちひきいざ
し十六おゐようそ四十年のあひだ野よそうをいうきやしるひ十九まうカナンの地の七族の民をほろぼしその地をこうを
らう嗣もめ二十のちおよそ四百五十年のあひださるかちもよげんしやサムエルのときまでこうをう審士をあうえたまへ
ま二そのちこうれう王をもとめうれば四十年のおひだ
ベニアミンの支派キスの子サウロ我あうふ三後まうこうれを
うつしダビデをたてこうれうの王とやしこうもをがうめ
う證していひたをひうるいわをエッサイの子ダビデとい
へるまのあうろうをこうるよ人をえうりこうれうもべてまの旨

をるーこぐる 三神はそのやくそくよりさがりてまの人
のもろもろより救主いづるをイスラエルよりおこしたまへる 四そ
のきたるまへよりヨハネ先にイスラエルのもべての民にこれを
らへのバプテスマをのべつたへたり 五ヨハネその職をお
こなひしときのひとびとはなんぢらわれを誰とおもふやをも
とめそれはわれよりのちにくるものありてわれは
その足の履をときたてまつるにもたらざるものなり 六ひとびと兄弟
アブラハムの子孫およびなんぢらのうち神をうやまふものの
よよのもろもろひの道をなんぢらにおくりつかはしたまへる
エルサレムにをるものおよびその有司たちはキリストを

ゐらばこの多紙罪よさゞめて安息日ごとによむところのよ
くんじやのおとをば成しめよう　三且おろぐきゆ名紙え
されどもピラトよあれ紙おろさんことを紙もとめ　元そでよ
こうれよついてをるされうるをもてのことを紙るらしめられ
をおも紙木よりおろして墓よおけり　三十されども神ハこの
をよみがくらせうへり　三多日のあひだうれハガリラヤ
より己とともにエルサレムよのぼりしものよあらりれうり。
この主のうめよあのしを民よをるものハそのひとぐるり
三わをともよろこびの音紙あんちらよつぐ神ハい近を紙
よみがくらせてせんそうもよ立うひしやくそくをその

子孫たるわをもて成さ多へを三もるもち詩の第二篇なんぢいまこの子なりわれ今日なんぢ汝うめりと錄されるがごとく三四まさにされを歸せざる樣をこれ汝よみがへらもるおとについてい左のごとくいへを云われダビデなやくそくせーところの賴べき恵汝あんぢらをあうめべーと三五おのおのをまもるわこの篇にあんぢいその聖者をらもちをてーめびといへを三六そをダビデを神のむねをおさがいそれ世をはうくーのちねもりて列祖とともにおこの遂をくちもそらり三七おうれとも神のよみごくらせさ多いーものいくもそざりき三八されば人々きやうだいよこの人をを

て罪のゆるしをなんぢらにつたへられるを知
モーセの律法によりて義とせらるゝをおこなふ
てのつみも信ずるものはみなこれによりてゆるされ義と
せらるゝなり　三九　されどなんぢら愼よおそらくは預言者の
ふみにいひれたることなんぢらにおよばん　四〇　いはく藐忽
ものよ視ておどろきうせろびよ。そは我なんぢらの日
にひとつの事我おこなふ人ことばなんぢらにつぐるとも
もろ〳〵なんぢら信ぜざるべきものあり　四一　かれら會堂をいでん
とせしとき次のしやばつにもまたこのおよ緩のべよと
請れたり　四二　會そでて散ゆくのユダヤ人およびその

ばらばいそ神をうやまふひとく　パウロとバルナバとまちぐ
ぐりパウロ　バルナバこゝろよくとりて　恒(つね)に神のめぐみにより
んこゝろをつむ　四つぎのあんそくまちよりつゝ　邑(まち)のひと
びと神のことばをきゝうんとして　幾乎(ほとん)どこゝろあつまりて　四五そのの
おそくあつまれるをみてユダヤびと　嫉妬(ねたみ)をおこしてさか
らひて　爭辯(あらそ)ふつゝ　四六パウロがいふところをおもてあ
パウロとバルナバをつらびていひけるはそれ神のことば
はこのあらばまづなんぢらにつげきたりしかれども　汝(なんぢ)
はこれを棄(すて)ておのれにうぎりなき生命(いのち)にたらざるものと
あらばと自(みづ)らさだめたるをわれらは轉(まは)していきうとんまむ

うめぐ一四七そは主このくいわれうよ命じうるくりいもてるん
ぢ救となりて地の極までおよだんためにわれあんだ汝
たてくいもうとんの光となるせり四八異邦人はうまてきこと
ろこびて主のことを讃めむぐてかぎりあきいのもの
さだめられうるものは信ぜり四九こうしておいて主の道あま
ねくこの地にひろまりぬ五〇ところにユダヤびと神とうや
まふ貴婦たちおよび邑のおもだちうるひとりのおろ徒う
こりさせてパウロとバルナバをくるしめその境よりおひいだ
ぜり五一二人はこのわらうむり足の塵を拭うちもちひて
イコニヨムにいでくれり五二こうてでしたちはおいよ喜樂徒

つぎこうろ聖靈よみされり

第十四章 ふたりのもの イコニヨムまおいてくらべに ユダヤびと
の會堂よりはいりて道ばたにユダヤびとおらびギリシヤびと
をおおく信ぜしめたり 二 されども信ぜざるユダヤびと
もろもろの人をそそのかして兄弟をまくまむ 三 この
ゆえにひさしくこころとどまり主によりてをそれ
なくものたまうをもの手よりしるしとふしぎをわ
ざなおこなわしめてその恩の道をあかしせり 四 邑のひと
びとふたつにわかれあるひとはユダヤ人にくみしあるひと
使徒たちにくみせり 五 かくて異邦人ユダヤびとおよび

の有司ども[1]ゝまさわぎ[2]ゝもこの[3]ものどもを[4]ほろぼ[5]さ
んとはかりふたりの[6]ものゝことを[7]聞てルカオニヤの[8]邑な
るルステラデルベおよびその[9]まわりの地[10]にのがれ[11]こゝ
にも[12]よく福音をつたふ[13]ルステラにひとりの足よわきも
の坐[14]しおりこれは[15]うまれつきのあしなへてゆきあゆ
みしことなし[16]おのひとパウロのこうる[17]ときをきゝ
パウロめを注てそれにいやさるべき信仰あるを視[18]おゐて
[19]ふかくひかるゐなんぢのあしをたゞしく立よこれらど
もおがりてあゆめり[20]ひとびとパウロのなせしことを[21]見て
聲をあげルカオニヤのことばをもていひかるゐ諸神ひとゝ

たちまちなりてわれらをおしざれを十二これらバルナバをゼウス
とよびパウロはものもうす説話こゝをもる人あるこのあるよ
ヘルメスとこれをよぶ十三ときよその邑前にあるところの
ゼウスの祭司うしと花冠どもを門にもちきたりておそく
の人とともにいけにえをさゝげこれらをまつらんとせり
十四使徒バルナバパウロこれをきゝておのがあるもを裂きて
いでゝ大衆のなかに入さけび十五いひけるはひとびとよなぜ
かゝることをなすやわれらもまた汝らとおなじ
情をもつところの人なり。なんぢらに福音をとくはなんぢら
がこの虚妄をすて天と地と海およびそのうち

のまべてのもの紙つくりたまへる活神なこの天ちもろもろんぶ
なめるり 十五 さぎまし世まい神をべてのいそうごんまそあ
自己ぶみちとおもむこをやめたまひしうど 十六 ほうこう
んちらをめぐみて天よりあめをふらせ ゆたかなる時候を
あたへ、糧食をよろこびをもてあんちらのこころをみた
めおのをみつうら證せざりしこと なし 十七 この言をもてこの
らうごとおほくの人のおのもまる犠牲をさしげんとまるを
とどめたり 十八 時まユダヤびとらアンテオケイコニオムよ
りきたりておほくのひとをまるめ石をもてパウロ投うさ
しめ既のまちにうちまておもひ邑外そとまひきいだせり 十九 門

徒ともそのまはりをたちめぐるとき彼おきてまもるいう次の日バルナバとともにデルベよりゆきニカラそのまちに福音をつたへおほくのひとをでしとなしまたルステライコニオムアンテオケにかへりて三門徒たちのこころをかたくしてその信仰にをらんことをすすめまたおほくの艱難をへてわれらの神のくにいるべきものなりといふ三ことばをのべたりのちの教會ごとに長老をえらび斷食といのりをなして前より信ずるところの主にこれをゆだねたり而うしてピシデアをへてパムフリアにいたりペルガにて道をつたへてアツタリアにくだり夫のちそこより舟にてアンテオケ

ふるまふこゝにこのわざさきたる神の恩よむざねられ今とげしつゝあめをおこるをんとていでゝところなりにもそゞりのいたりて教會のひとをあつめおのれをたすけて神のなしたまくるをべてのことゝいそろじんのうあを信仰の門をひらきたまひしことをつぐ云かくてひさしく門徒さもとこにこのゝこゝろぐまれを

第十五章　ユダヤよりくだりし人々きやうだのたちよをしへけるはなんぢらモーゼの例よりさこのひて割禮をうけずばすくはるゝことを得ずにこれよりてパウロとバルナバおほいなこのれうこおうそひこの論ぜゝうべきやうだいさもち

おのこころよりきてパウロバルナバおよびそのうちの數人に彼
エルサレムなるのおろせ使徒と長老らもとおそろしめんことをさ
ぐむ三ゟゟまおいてこれら教會のひとぐまおくられいで
ピニケおよびサマリアを經ていそうどんの神に歸せしことを
つぶさにのべてその兄弟をおおいによろこばしめたり
四ゟのち エルサレムにきたりけるときに使徒および長老
ゟもとゟれおのれをたまひしことをことごとくつげしに
五パリサイ宗のうちなる信者たちのんで
起ていひけるはこれらをかならず割禮をほどこしまた命
じてモーセのおきて守まもらしむべしと 六使徒

ちやうらうども出のことを議んたるよにつまれり七
おゝよおゝくの論あるにおゐてペテロたちてこれらにいひけ
るはひとゝ兄弟よひさしきさきに神われをなんぢらの中
よりえらびて福音のことばを異邦の口よりいだしきゝ
せこれら我してこれを信せしめ給ひしことはなんぢら
のしるところなり八この人のこゝろをしり給ふ神は
われらと聖靈をあたへしごとくこれらにもあたへてその證
をなし九またわれらと信仰をもてそのこゝろをきよめわれらと
われらの間にはなんのものをもなさゞりき十しかるに今なんぢ
らの列祖もわれらも負あたはざる軛をでしたちの頸に

つけて神をおろがむるや十こゝろのまゝにおこなわれんも主いえすキリストのめぐみによりてまことゝ信ずるなり十一爰においてひとぐみる黙してバルナバとパウロが神のおのれをもて異邦人のうちにおこなひ給ふ休徴とふしぎなるわざとを語るをきけり十二かれらがいひをはりしのちヤコブおこたえていひけるは人々きやうだいよわれまきけ十四神はじめていまこゝろんを眷顧そのうちよりおのれの名をあがむる民をとりたまひしことをシモンまでまねれ述十五よげんしやの言これとあひかなへるごとし。その書よ。

十六のちわれかへりきたりてまでまねれるダビデの帳幕をふ

たゞびおこし　その破壞のあとを修ふてびつくりてこゝを脫
たるものは　十七　おれその後うの民およびまべてまづ名ばも
てみちびくらるゝいはうじんの主をたづねさけんでわかり此
もべてのことをおこなふ神おれをいよ。とおほせられたるこの
ごとし　十八　神は世のはじめよりそのもべての所行をおほせ
まへる　十九　このゆゑにわれおもふよ。異邦人のうちより神に歸
するものをわづらはしいよゐ　かくびと手おほせられとも書
簡にのせてかれらにおくりて偶像にくがされたるものと姦淫と
くびまたおろしたるものと血とを絶いまもむべし　二十一　そはいま
へより安息日おとなひ會堂にてモーセの書をよむがゆゑな

それをのぞむもの各邑よりあつまりて〇三
徒および長老ら全會とともにそのうちより人をえらび
あれ徒パウロバルナバとともにアンテオケよりそさんことを
定そのえらばれたる人いきやうざいのうちのおもきもの
即ちバルサバとよばるるユダおよびシラスなり 三
手よりせておくらるる書よいもく使徒ちやうらうおよび
きやうだいアンテオケスリヤキリキヤにをる異邦人のきやう
だいに安をとふ 四 われらの命ぜざるものどもわれらのうちを
いでて言をもてなんぢらをわづらはしなんぢらのあたま
をみだしたることを聞 二五二六 これによりてわれら心をおなじ

人をえらびてわれらの愛するバルナバパウロとともにつかはさんとさだむ。この二人はわれらの主イエスキリストの名のためにその命をもをしまざりしものなり。二六われらユダとシラスをつかはしこうれらの口よりおなじことをのべしめんとす。二七それ聖靈とわれらと左の肝要なるものの外なんぢらに負ふをなんぢらおはせじと定さり。二八もろもろ偶像にさげしものと血とらびりたるものと姦淫とをいましむべし。これらのことをなんぢらつつしみまもば善ならん。なんぢらにさやうなれ。三〇かれらつかはされてアンテオケにいたりて衆をあつめて書をわたす。三一ひとびと

あれをよみその勸をうけてよろこべる三ユダとシラスも
また預言者なればおほくのおとづれをもて兄弟をすゝめ
かつ強くせり三このころそふるうのものゝあばらくらしと
なりぬまり後きゆうざいたちは安然を祝されそのおのれ
をはなちたるものゝもとへおくられさり三四パウロとバルナバ
もアンテオケにとゞまりその餘のおほくの人とおしへをな
へをなし主のおとづれをのべつたふ三五數日のちパウロ
バルナバにいひけるはわれらさきに主のことばをのべ
ころの諸邑にまかりゆきて兄弟のありさまをいざ訪べし三六
さてバルナバもマコとなづくるヨハネ祝ともにゆかんと

もくてき 毛 然 それ ども パウロと さきに パムフリアより
もどりて ゆきし ところ
なれば ふたたび きたれと 共に ゆくの ことを
よく こころに おもひしかよを 三 遂に ふたりの なりよ はばげ
しき あらそひ おこり 相わかれて バルナバも マコ なる ともなひ
クプロに さりゆけり 三九 パウロも シラスを えらび 兄弟より
のれを 主の めぐみに 托られて いでゆき 四〇 スリヤ 及び キリキヤ
を あゆみて 諸教會を 堅固せり

第十六章

かくて パウロ デルベ および ルステラに いたれり
こゝに テモテと いへる 門徒あり その 母は ユダヤ女 信ある
ものなり その 父は ギリシヤ人なり 二 これ ルステラ イコニオムの 兄

弟子をばまれ故得さり 三 パウロもれをたづさへてやるにゆ
うんことを欲そのところよりるユダヤ人のためにうれよ
割禮をおこなふべきぞ其は人々みなこれがちゝのギリシヤ人な
る故をしればなり 四 かくて諸邑をすぎエルサレムにある使徒
および長老たちの定るいましめをまもらせんとそこを
をその人々にさづく 五 もれよりて諸教會のしんかうこの
たくなりその日々にまし ぬ 六 このゝちフルギヤとガラテヤ
の地をとほりてときアジアにて道をかたることを聖靈にと
どめられ七つひにムシアにもうづきビテニアにゆかんとせし
が耶蘇の靈これをゆるさゞりければ八 こゝろムシアをへて

トロアスよりこれを九このそてパウロ夜なおいくひとそのマケドニヤ人たちてありおのれをたすけマケドニヤへわたりてわれらを助よといふをまぼろしに見たり十これら異象をみしのちわれらまことに主のわれらを召てマケドニヤ人に福音をのべつたへんとわれらをめしたまふことをおしえたりとうけて直にマケトニヤへゆかんとつとめ十七ふたりをよびあつめていひけるは兄弟よ我らはイエスキリストをつたへんとてかしこへゆきしなり十八ピリツピはメセヤの一のわかれのうちある名ある邑にしてまた植民地なりこれら数日その邑にとどまれり十九安息日

にわれらまちをいづく河のほとりにある常ないのりをなすところにゆき坐てあつまれる婦女らにものごとをしゃべる十四紫布をあきなふテアテラよまもの商ひ女神をうやまふルデヤと名くるをんな聞おそれ主そのおころをひらきてパウロのこうするおしえをもちおもあたまふ十五この婦その家族とともにバプテスマをうけ求ていひけるはなんぢらもし主を信ずるものとわれをせばそが家にきたりとどまれと強てすすめらればいりまたを共にまねく祈禱所にゆけるときうらなひをする靈にとりつかれたるひとりのをんなの奴隷わざはひに遇うれにうらなひをしてその主人どもおほくの

利をえさせしものあるを七パウロとわれらとを
したひいでくるに、ただひとりさけびいひけるは、
これひとびとはいとたかき神のしもべにまして、
救道をわれらにつぐるものなり　六ときの婢
このくさぐさのことをなすにより、パウロこれを
うれへくるしみて、ふりかへりイエスキリストの
名によりてなんぢに命ず、いでよと靈にたちどころに出
ぬ　七ここにおいてその主のあるじどもは利の
たえたるをみてパウロとシラスをとらへ、ひきて
市場にひきいたり、有司たちのまへにつれゆき、
八ふたりを上官のまへにひきいたりていひけるは、
この人どもはなはだしくわれらの邑をみだし、
九ユダヤ人にしてわれらの受くるところの

ぶ行ふならざる所ごろの習俗をつくふるものなり三大勢のものひとしくたもてこれらを攻つてのさいその衣をそぎ命じてあれをむもちうてむ三おわく杖てのち獄よいれこれをかくまもれと獄吏よめいじ三ひとやもりこのくのおごそき命をうけしより彼等をおくりひとやよいれて桎をとうけうへ三五このくて夜半ごろパウロとシラスいのりをなしうつ神を讃美をぬーうぐら耳をかたぶけてあれ給きてあふきしの三六にわかにおおいある地震おこりてひとやの基ふるひろぐき門こもぐくたぐちよひらけまたその囚人のなはめ皆ときけたり三七ひとやもり目をさまし獄門のひらけふる

絶てめーうと已(すで)にげーと叫(さけ)ひ刀(かたな)をぬきて自殺(じさつ)せんとーするを　二八パウロ大(おほ)聲(こゑ)をあげよなんぢ己(おのれ)をみのこと勿(なか)れわれらここにあり　二九ときに彼(かれ)あかりを求(もと)めておどりいでて戰慄(をのゝき)てパウロとシラスのまへに俯伏(ひれふ)し　三〇ふたりを外(そと)につれいでていひけるは君(きみ)よ救(すく)はれんためには何(なに)をなすべきぞ　三一ふたりいひけるは主(しゅ)イエスキリストを信(しん)ぜよさらばなんぢおよびなんぢの家族(かぞく)もすくはるべし　三二ふたりかれおよびその家のすべてのものに主(しゅ)のことばをかたりきかせたり　三三ときの夜の即時(そのとき)かれふたりをいざなひその杖傷(うちきず)をあらひてたゞちにその家族(かぞく)とともに

にみなバプテスマをうけ三三且かれらをおのづからいくばくまつれきたる食物をその前にそなへ、おのれおよびその家族とともに神を信じ歩てよろこべり。三四夜あけはなれていまだ下吏をつかはさざるに、獄吏ら人々をゆるしたまへ、三六獄吏らのことばを伝へパウロにつげていひけるは上官らなんぢらを釈ゆるせとのおつげをもたらせり。されば今いでて安らかにゆけ。三七パウロこれらにいひけるはわれらローマ人なるに罪をさだめずして公然われらをむちうち且ひそかにいれたるに、いまひそかにわれらをいだしさんとするこよろしからず、これら自きたりてわれらをつれいだすべきなり。三八使らこの言をつた

さてもつげくれをこれらその口マ人るをきゝておそれ三九來てこれらにこよりいでんことを求つひにつれいでてまちその邑をさらんことをねがひたり四〇ルデアのいへにいりて兄弟にもあひこれらを勸をなしていでさりぬ

第十七章

一こゝにこれらはアムピポリスおよびアポロニヤをへてテサロニケにいたる。ユダヤひとの會堂ありニパウロ常のごとくこれらのなかにいり三回まんそくまちごとに聖書によりてこれらと論ず三キリストのうるひをうけ死よりよみがへるべきあかしをなし又わがまんち

らるゝとゝろのさの耶蘇をまるいちキリストなることをときわくせり 四 こゝにおいてその中のひとゝ信じてパウロとシラスにつけをまつ神をうやまふギリシヤ人のこれおほく貴女もまたくるこのらざりき 五 ゆたかるにユダヤびとあれを妒いもろもろる匪類をこうらいむらてて邑をさわがせパウロとシラスをそらゝ民のまへにひきいでさんとてヤソンの家にきたりしが 六 こうもらを見いださゞるをけもびヤソンおよび數人のきやうだいを邑宰のまへにひきたりておほぜいひくるを天下をみだせるものどもはてにまできたれるをヤソンはあれをむかへ

つれたる此ひとぐいみる耶蘇と
カイザルの命にそむくものなり　八大衆と邑のつかさたち
これをきゝて心をいたましむ　九つかさはヤソンおよびその
餘のひとびとより保狀をとりてあれ我ゆるせり　十きやうだ
いぢう夜の間にいそぎパウロとシラスをベレアにさりつかむ
このくに彼處にいたりてユダヤびとの會堂にゆけり　十一おの
こゝろの人々はテサロニケのものよりは性情よきがゆゑに
おのこゝろ道をきゝこのことく果してあるのあきらを
をしらんとて日々に聖書をさぐれり　十二されゆゑにそのう
ちの人おほくこれを信じまたギリシヤの貴女および男子

のまんじたるものもそくるうらざりき 十三 テサロニケのユダヤ
びとら神のおしえのパウロによりてベレアにもまたさとりを
えたまふと彼処にいきてひとびとをさわがしめたり十四ここ
において兄弟たちたちまちパウロを海にゆかしむ。されどもシラスとテモテはなほそこにとどまりぬ 十五 パウロをとも
なひしものは彼をたづさへてアテンスにいたる。そして人々
パウロよりシラスとテモテとが速にきたらんあよとの命をう
けていでたちぬ 十六 パウロアテンスにありてこれらをまつ
ときその邑あまねく偶像にほうつるをみて甚しく憤ほり
たまひ 十七 ゆゑに會堂においてユダヤ人および神を

うやまふひとびとと論じまた日々いちばにおいてそのあふ
あるのまへにゆきたりしに一 エピクリアンおよびストイクの
理學者もまたこれとあひこれをあざけるものありてある人
は喫喝ものなふをいもんとひとりごとをいふこれをあ
ふてなる鬼神をつたふるものゝごとくみえたりそはパウロこれら
に耶蘇およびよみがへりのことを宣傳へたるが故なり 一九 かくて
これをひきつれアレオ山にゆきそのひとびといふやうは
かくるところのあたらしき教をわれらもしらせらるゝ
ことを得るや 二〇 なんぢの異聞をきゝわれらのみゝにいれしが
ゆゑなりわれらそのなにおとなるをしらんとほつをなり 二一

もつぐてふのアテンスびとおほびその地にめぐまれる人いたるあそこにきおやくばつげ或ときくおとたのみその日ばおくれるを三パウロアレオ山のふもとたちそのひろいアテンスの人よまれなんぢらが事ごとに鬼神をうやまふのをみるにつきを觀三それみちをゆくときるんぢらが敬拜くらろのものをみしるまろざる神ゴとほりつけ一の祭壇なくいぐせうぞゆゑなんぢらがしらばしそうやまふおのものばるれなんぢらに示さん四それ宇宙とそれうちのあらゆるものをつくりそをくる神いまれ天地の主なれば手でつくれる殿にまそみたまそば五うつも爰そのものに生命と氣

息と萬物をあたへたまへり、二六 また一人の
手よりて、ことごとく人類を生みいだして、
ことごとく地の全面に住ませおきたまへり、
その時期と住むべき界とを定めたまへり、二七 これ人
をして神をもとめしめ、あるひは探りうること
あらんことをなり。されども神はわれらおのおのに
遠からざるなり、二八 それはわれらこれによりて生き
また動き存ることをうるなり。なんぢらの詩人たちもそれらそ
の子なりといひしがごとし。二九 かくわれらは神の裔なれ
ば、その神を金銀または石または人の工と巧とをもて

るものとひとしくおもふ爾らぢ 三十 さきに蒙昧くしてゐきを神おれをゆるしにあらせたまひしこの今いのちこの人ともみなくいあらたむるおやくばなり 三一 それ神はそのたてしきまふの人によりて義をもて世をさばくべき日ばさだめおのこれをついてこれ彼をよみがへらせてそれ證をあらはしたまへばなり 三二 このれら死たるものゝよみがへるのおやくばきゝてある人いあざけるものありこの言をふたゝびなんぢらきゝんといふ 三三 ひとそやわれらこの中よりいでさる 三四 されど數人ありてパウロにしたがひて信ぜりそのうちにアレオやまの裁判人デオヌシオ

およびダマリスと名くるをんなまたその外の人もおれとともにありき

第十八章 一 その後パウロはアテンスをさりてコリントにいたる 二 ちょうどそのころイタリヤより來たばかりのアクラとなづくるユダヤ人およびその妻プリスキラにあひてその人どもいまだこの國をいでざりければこれらのところにゆきてともにをりぬ 三 ユダヤ人はおとがくロマ皇帝クラウデヨ命じてすべてのユダヤ人をロマをいでしめたれば彼らのところにゆきてともにをりぬ 三 これその業をおなじくするによりてあれこれともにとどまりて工をなしぬその業は帳幕をつくるものなり 四 またすべての安息日におりおりかのだらまおいて

論ドユダヤ人とギリシヤびとを勸めり 五シラスとテモテマケドニヤ
よりくだりくるときパウロユダヤびとまむきひて耶蘇のキリスト
なることをあかし 六道をつくすおとなもろともをさらし
をれをあざるにユダヤ人をあれさのらひこう誚めよ
よとパウロ衣をふるひてこうれらのひろうはあんぢらの血
をなんぢらの首に歸せよ我はいまより異邦人
にゆかんと 七ひさもりてユストといふる人のいへ
いる。この人は神をうやまふものにてその家はくらいだう
のかたなれり八くわいだうの宰クリスポおよびその家族みな主
をしんぜりまたコリント びとおほくの道をきゝ信じてバプテスマを

うけしものもおほかりき　九主ある夜まぼろしにパウロにこころをたまひけるはおそるなかれ默せずしてこゝろを盡しよそはわれなんぢとともにあればなんぢを攻害せんとてせむるものなければなり此の邑にわが多くの民あり十ねんのあひだパウロ一年と六ケ月のあひだこゝにゐて神の道ををしへたり十ガリヨ アカヤの代官となりしときユダヤ人こゝろをあはせてパウロをせめこれを裁判所にひきいだして十一いひけるはこの徒はおきてにそむきて神ををがむことを人にすゝむるものなりと十二パウロ口をひらかんとせしときガリヨ ユダヤびとにいひけるはユダヤ人よ

ゐ〜不義奸惡のことならバわ〜がなんぢらよりも聽ハおそわ
ることあり十五ゐられぶるごとく言語あるひハ名字もつひあんち
らのおきての論たるごとバなんぢらそづからあれ法理べ〜わ
れこうるおとくの審士たるをおのまん十六こころえてうれさ
いなんちよりおひいでぜり十七こゝをおいてまた會堂
ギリシヤびと會堂のつかさあるソステネをとらへ裁判所のま
へにてむちうてるも。がリヨハさることこのおとら意とせざりき
十八パウロこのゝちなほひさしくとどまり後きやうだい
ゝいとゐをつげてプリスキラおよびアクラとともに舩に
スリヤにわたる。うれケンクレアにあるとき誓願によりて

髮をそれ 九 うれエペソにいたりて二人をそこにとどめおきみづからは會堂にいりてユダヤびとと論ぜり 十 衆これがひさしくそこにをらんことを請たれどもゆるさずして 十一 いとまをつげていひけるはわれこのきたらんとする節を必エルサレムにおいて守らざるをえず。されどまた神のもしたまはゞふたゝびなんぢらに返るべしといひて舟出してエペソをさりぬ 二十二 カイザリヤにつきのぼりて教會のあんぴを問ひてのちアンテヨケにくだり 三 しばらくここのところに住てまたいでたちガラテヤおよびフルギヤの地をつぎつぎに經てすべての門徒どもをこうごうせり 二十四 ここにアレキサンデリア

ようゐれーユダヤびとうそ辨才あるをうら聖書を達したる
アポロとたづぬる人エペソにきたれる二五主の人もやくよ
き主の道のをしへ詳かに且こころを熱して耶蘇のおしへ
つまびらかのこをしみされどたゞヨハネのバプテスマをしれる
のみ二六かれもどめてこの會堂において坦懐にかたりを
れバプリスキラとアクラかれをきゝてこれをおのが家に
まねき神のみちをなほもはきびしくときあかせり二七
アポロアカイアにゆかんとせしかバ兄弟ども書をおくりて
でしたちにかれをうけいれんことを勸む。かれのきたるに
及恩によりて信せしものをおほいにたすけたり二八そはかれ

聖書(せいしょ)をひきて耶蘇(いえす)のキリストなることを示(しめ)しひとびとの
まへにつよくユダヤびとを甚(はなはだ)しくひゝふせたれどもなり

第十九章(だいじゅうきゅうしょう)

一 アポロのコリントにをるときパウロ東(ひがし)のこうの地(ち)
をへてエペソにきたりある門徒(でし)どもにあひて二 いへる
ひまことに信者(しんじゃ)となりしときに聖靈(せいれい)をうけしやと
いへるに答(こたへ)ていまだ聖靈のあることさへきかざりき三 パウロ
いひけるはさらばなんぢらバプテスマをうけて何(なに)のをしへ
をうけしやかれらいひけるはヨハネのバプテスマをうけしなり四
パウロいひけるはヨハネまことに悔改(くいあらた)めのバプテスマをほど
こしたみにむかひてわれのあとに來者(きたるもの)をみもち耶蘇(いえす)キリストを

ゐんせよとこいふ 五 こゝろこれをきゝバプテスマをうけて
主イエスの名をいはゝるまゝ 六 パウロ手をそのうへにおき
たまひて聖靈こゝろにくだりたまふに方言こゝろにてこの
頂言せり 七 その人おほよそ十二人なりき 八 パウロ
會堂にいりてもつぱらにして神の國のことをろんじこゝろを
すゝめて三ケ月をへたり 九 あるものかたくなゐなりてあれを
信ぜざるひとゝありおほくの人のまへにてその道をそしり
これをはなれ門徒こゝろをもつれさせて
日々テラノスといへる人の講堂にあいて論ぜり 十 二年のあひだこのことをきゝしかばアジアに
ユダヤびとゝもギリシヤ人もまねてアジア

ゐるものおもてぐく主のおそれきたりぬ十神たくパウロの
手よりてたぐなるふしぎのわざを行なふくをもて十二
そのもちパウロのかうだよりふれうる汗巾あるひは襟衣をそのも
やめるものよりつけられバ病いさりて惡鬼をいでさり十三
ゐる諸所をめぐりてまじなひをなせるユダヤひとあり惡鬼
をつかれるものにむかひ試て主いえすの名をよびていひ
けるをわれらパウロがのぶるところの耶蘇によりてなん
ぢにいでんことをちかふもむ十四このくなせるものはユダヤ
人のスケワといふる祭司のをさの七人の子なり十五惡鬼こ
たへていひけるをわれ耶蘇をしれりパウロをしれりさ

れどたのんだらうは誰ぞや去惡鬼につかれたる人これらのうつをとりあげもれこうもておふせられバこれら傷つけられはづかうそその家をまげされをまこのあゆエペソまであるまでそのユダヤびとギリシヤ人にきこえしこのバこれらみるおそれをいだきぬまた主いエスの名あがめられたをたまさ信せしものれうちおほくきたりて自らひあらはしその行ふるをうつくしくまた丸まさきる魔術をおこなふくるおほくのものどもその書籍をあつめひとびとのまへにてやけをそその價をかぞへて銀五万なることをたれを手主の道ひろまりて勝をうることうくのおそれ三お

のおやのをそろしのちパウロをマケドニヤおよびアカヤをへてエルサレムにゆかんとおもろをさだめいひけるは我かしこにゆきてのちこのなんぢロマをも見るべし
二一 されどうちにテモテとエラストのふたりをマケドニヤにつかはしおのれをばしばらくアジアにとどまりぬ
二二 このときその道についてひとこうとなんぬさわぎおこれり
二三 そはひとりその銀工ありデメテリヨといふものこれアルテミスの銀龕をつくりさいくまんらに利をえせしめしかばなり
二四 その工人をあつめていひけるはひとよ汝らしるごとくこの富をものの

をひよをるおとなんぢらの知ところなり 二六 おのパウロ
手ておそつくられるものハ神ハあらびやいひておほくの人を
をしへまたでまエペソ斗みなうびほとんどアジア
中におよぼせをもされまたなんぢらこの見ところ聞ところな
ほもおそたゞわれらの業のかろしめらるゝおそれあるの
のみならびアジア および天下おそてあがむるところの
おほいある女神アルテミスの宮もなみせられその威光もま
たほろぶべし 二八 これらをきゝおはりもごとく怒さけ
びいひくるを大なるうなエペソびとのアルテミスよ 二九 こて
まおいて擧邑おほいにみだれパウロの同行なるマケドニヤ人

のガイヲスとアリスタルコをとらへ ろ伝あをせて戯
園まおーいれを 三十 パウロそれ人々なるよいらんとせ
る門徒たちられをゆるさざりき 三十一 また アジアの祭をつ
さどるもの うちよこれをもとーきものともありて人
このもとつのもとーそのみづから戯園まいらざらんあとをも
とめたを 三十二 その時あるひとびと彼こことをいひあるひとびと此
ことなにひさけべをそれ會衆みだれて大半はなるのさめ
まあらまれることをもとざれべなり 三十三 あるにおいて ユダヤ
人アレキサンデルまいでんあとをひきめられをあるひと群集
のうちよりあれをおーいざーぬ。アレキサンデル手をうごかー

民ともうひて事實をつぶさにせ二ふ三これらその
人たるをえるがゆゑにみなおそれ聲をあげて大なる
なエペソひとのアルテミスよと二時ばかりのあひださけびあ
へる三五書記官ひとびとをしづめていひけるは四エペソの人々よ
その エペソは天よりおちしものあるアルテミスのみやと
つかふる邑なるをえらざるものあらんや三六この事をいひけ
ちこと あるをもてなんぢらおだやかにしてみだりなる事
をなすべからず三七そもこのひとびとはみやの盜賊にもあら
ずまたなんぢらの女神をそしりたるものにもあらず三八デメテリヨ
およびともにあるとぎらこれをひきいたるもし

ころのさいくまんも一人ならうたふるおやあらむさそきの日ありこの任代官あれバたゞひとまれようつたふ卅九をも他のおとこごろもついくもむるおやあらを律法よかなふあらまをよおいてさざむ卅平わめく今日のさわぎについてハ訴らるまんこと絞おそる。そこの聚集よついていひひらくべきことをなされバなり卅一如此かくをてあらまりをもらせを

第二十章　騒擾のやみ　ちパウロを門徒らをよびわれをつげマケドニヤへゆくとていでたちぬ二その地方を經おほくのおとごろを絞もてひとぐ絞もめギリシヤへいくを三ゐる

三ケ月とゞまりて後スリヤより わたらんとせしときユダヤ
人これを害せんとまちうけゐれば マケドニヤ経てかへら
んとおもふを定めたり 四 このときにアジアまでゆきた
ものはプロスの子ベレアのソパテルおよびテサロニケびとの
アリスタルコとセクンド デルベのガヨスとテモテまたアジアよ
テキコとトロピモなり 五 このともがらはさきだちゆきて
トロアスにおいて我儕をまちたり 六 たねいれぬ餅のいもひの
ふちわれらピリピより舟出ゐて五日めにトロアスにいたり
てかれらにあひてそこにて七日とゞまれり 〇 七 一週の
そのはじめの日われらパンをさくにあたり集りしがパウロつぎの

日いでたちんとをおもひこれらより道をこころざしつづけて夜半までものがたれるに八こゝろざしあつまれる樓におほくの燈あるを九ユテコとなづくるひとりのわかきものの窓にをりて坐しいたくねぶりをりしがパウロの道とこうたれるにふかくひきこりうちたふれてこれをとりあげしに三階よりおちたり。これをたちかゝりてこれをいだきおこせりといへどもすでに死をり十パウロくだりてその上に伏かれをいだきていひけるはなんぢらうれふることなかれこの人のいのちいまうちにあり十一こゝにてパウロまたのぼりパンをさきてくらひ久しくこれらとこゝろを夜あけまでものがたりてゆけり十二ひとびとはこの少年をたづさへ

をみてもろびとなぐさめを十三さてヤムニア舟にのりさきざきにてアソスよりそのところにてパウロをのせんとせり。そはかれ陸よりゆかんとみづからこのくはさだめしなり十四このれアソスにおいてわれらにあひかれをのせてミテレネにいたり十五かしこより舟出してつぎのひキヨスの對にいたりまたつぎの日サモスにつきトログリヨムにとまりて次日ミレトスにいたれり十六そはパウロアジアに時をつひやさざるためにふねをすてエペソをすぎんと意をさだめしがゆゑなりこのくさざめしは彼のるべくはペンテコステの日エルサレムにあるまでをえんといそぎたるによる十七さてミレトスよりエペソ

ヨ使をはくのもとにてくるようわいの長老どもを
よびこれらがきたるときパウロもれよいひけるはわらがアジアへ來
しより初日よりつねよなんぢらのあひだにありて行ひこころを
なんぢらがもるところまり　九　もるもち我をまてのこころに
謙遜まことなみだをおがーユダヤ人のうそだてより艱難
ヨおひて主へつかふ　二十　益あるものはひとをおろなくおし
れをのべて或ひとびとのまへあるひは家々ヨおいてなんぢらまを
へ　二一　神へむかひてそんあらためまイエスキリストへむかひてを信仰ひ
ることをユダヤ人またギリシヤびとへあめせり　二二　今をれあろせまりて
エルサレムへゆくこの

しこゝろて遇ふところいろんを忘らじ 三 なほ聖靈まもおとなはれこゝろめしていみ繰綫と患難われとまそてそと 四 忘れぬもまれいまかゆくをきみもと主いふよりうけし職そなをも福音をあかしもるおそとげんうあまそまの生命祝もおもんぜざるなを 五 今われ知。なんぢらのうちを愛めそゝて神國をつぐ者しわが面とこゝろのちなんぢらふくしびみざる者し 六 志のゆゑなわれ今日なんぢらよ證をすべてのひとの血よおいてまれいいきよくしてあづこうるおとなし 七 それまれ神の旨をおこなひところなくおもぐくなんぢらよの者たればより 八 ゆゑなんぢらの慎ろ

つなんぢらこの聖靈よたてられて監督となれるその全群をつゝしみ主のおのが血をもて買たまひしところの教會とやしなふ爲ー二九そはわがさらんのちおの群をもとゞまざるあらき狼なんぢらの中よいらんまたおれもなり三〇亦なんぢらのなかよりも門徒たちをおのれよりおこさんとてよこしまなる言といひいづるものおこらん三一されば汝ら目をさましてをれ三年のあひだよるもひるもたえず涙をおとしておのれをさとしめしことを憶ー三二兄弟よなんぢらの德をたて且もろもろのきよめらるゝものゝなかにおいて業をなんぢらにあたふるちからある神および

その恩惠のあつこそ今それなんぢらをゆづぬ 三三 わが人の
金銀衣服をむさぼることあらざりき 三四 わづかの手いそれおよ
びそれとともにあるもの、需用にそなへしことそなんぢらがあるところなり 三五 それなんぢらもかく勤勞てよわ
きものをたすけ。うつ主いひしことばをおもひいだすべきことを受よりも與
ふさいわひなりとのたまひしことばを記つきをもてその
事においてそめせることを 三六 パウロ ひざまづきて曲跪をし
てのものどもにいのりをし 三七 うれうることおほいになげき
パウロの頸をいだきてあつく接吻しそのことばにふかくなげき
見まじといひしことをよろこびわづの面を

舟まで送もるに、至
第二十一章 わざわら強てエルサレムへ行ことを止る
たり次日ロドスを行き、かしまを、パタラに到
二 ニケわたるふねを遇まれるのをそれに
乗左に見きスリヤまわたるをツロに下りけるにそこにて
三 ふねの積荷を卸すべきによりてなり
四 こゝにてわれら門徒たちをたづねそこに七日とゞまれり。
彼ら靈によりてパウロをエルサレムへ行なかれといふ
五 されどまた七日
となりしかばわれらそこをたちて途につく。かの
地の人こぞりてその妻
子とともにわれらをおくりて邑外にまでいたりしが

る岸よりひきまねきていのるを六五よわれとつげをはるそ
のちわれらハ舟よりのぞみわれらをその家よりうけいれをせられ
らッロよりトレマイよりもそりまでよ舟路をそりぬ。うくて兄
弟そもの安否をとひうれうとともに一日とどまりハ次日
いでたちてカイザリヤよりそり福音をつとふるピリポの家
よりいりてとどまる。このピリポハ七人の一人なり九うま
れつき預言をる四人のむすめあり。みる處女なり十わらう數
日おりよりまれるときアガボスと名くるひとりの預言者
ユダヤよりくだりきたりてパウロの帯をとりおのれの手足をしばりていひけるをこのくのおくく

エルサレムよりあるユダヤ人をおのおびのめーを
の手よりさんと聖靈のひたまくを
まわらとおの地のものとともぐうれる
うれとまめーま
てわがこころを摧やぶれ主いえすの名のためには
おばくるのみならずエルサレムに死るもまた甘
なり
うれをめをいれざるをえざれば主の旨のおと
くなれといひて止まそこで數日ありてわれら行裝をなー
エルサレムへ
とともにゆきてわれらとクプロのナソンといへる老門徒のを

とを一々つげくさをき手これらこれをきゝ主をあがめうらうれしいひけるを兄弟よなんぢユダヤびとの信ぜしもの幾萬ぞやうるをるこれらをみな律法に熱心なるものなり三なんぢ異邦人のもとにあるユダヤ人はみなモーセをもてしめうら兒子にうまれをもこをよるれ例にもるが

ふなのれといへるとつぐるものあるこうをもつこと
を きしたる 三 今いうまもなくきぞおほくの人々なんぢのきたるとき
きつてこゝろばあらんさらん 三 おの故はなんぢわれらがい
ふところまさごうへ。われらは誓願のもの四人あり 四 なんぢこの人々をたづさへきよめおらをなし代
てその費をあがなひうれよ髪をそることをえせしめよ。
さらば人々なんぢよつゐてきよめとゝもにみな虚よしてな
んぢら律法をまもりてをこなふることを知るべし 五 信じ
たる異法人のいわれらまでは書をうきおくりてかくるた
ぐひをまもり守るをおよだびたゞ偶像はさげものと

血とをさくびらきあろせーものおよび姦淫とをはらーしむべーと
さだめさり 二六 このくにてパウロを次日にのひとりぐとをたづさへて
きよめとともにきよめおらーをなし且これら各々のさめに供
物とささぐべきおとしそれ期までにきよめおとの日をた
たさんことを殿にいひてつぐ 二七 七日をはらんとするときに
アジアよりきたれるユダヤびとパウロのみやこにをる彼見てを
ばその民をさわがしかれをとらへ 二八 さけびていふ
イスラエルの人々われらをたすけよこの人もおまねく教を
つたへこの民と律法とこの處にさからふものなりまたギリシヤ
人をもひきて殿にいれきよきところをけがしたり 二九

そこで百夫長すぐきてエペソ人トロピモとともに城下をあるくをみてパウロこれをもまた伴ひ入りしとおもへるあり　三十　ここにおいて擧邑さわぎたち人々かけあつまりてパウロを拉きらくこれを殿よりひきいだしたちまちその門をとぢたり　三一　かれらまさに
パウロをころさんとせしときあまねくエルサレムみだれたりとのうはさ千夫長のもとに長きこえきたりければ　三二　ただちに兵卒と百夫長をひきゐてかれらのもとにきたるに、かれら千夫長のうしろと兵卒とをみてパウロをうつことをやむ　三三　そのとき千夫長のちかよりてパウロをとらへ命じて二のく

さてまわれ紙つなげせ。それ誰たるまこと何事をるせこの
をたづねこそ三四おほくの衆中あるひとこのことをいひ
或はおのことをいひさけび。みぐれまようりて千夫のうしら
その實情をることあるをもびこのゆゑに命じてこれを陣
營へひきゆうしめうり三五三六おほくの人々あるまこごひて
うれをこころせとよびさけびおーせまるまうそて階まわよ
ぢるとき兵卒パウロをもくまパウロひうまて陣營へいら
んとせーときせんまんの長まいひくをわれなんぢまか
たうそてよきやいまや彼おうへくるいるんぢギリシヤのこと
ばをるまや三八なんちいさきに乱をおこし四千人の凶徒を

ひきおこして野へいでしエジプト人あらざるや　三九パウロいひけるはわれはキリキヤのタルソよりきたれるユダヤびとにて節邑のたみにあらざる極めてよき民よりたるおよび我われをゆるせ甲ぜんまんの長あれをゆるしくれをパウロきざはしの上にたちて民にむかひて手をうごかしそのおほいにちづまれるときヘブルのことばをもてこのれらにかたれる

第廿二章

一兄弟およびわが父たちよ請いまわがのべんとする事實をなんぢらきけ　二これらそのヘブルのことばをもて語るをきていよいよちづまれをパウロいひけるはわれはユダヤ人にてキリキヤのタルソに生をのしてかの邑のガマリエル

の足下までそゝぐそゝられ先祖のおゝそのゐる律法ようまでを
をしへられ神に熱心なるをしおらえ今日のなんぢらも爲て
のごとの、如くなりき 四 われさきざきの道のひとを男女と
ももちてこうつ獄にわたし死にいたるまでこれをせめさ
ま 五 をるのみち祭司のをさと長老會のひとのわれにつきて
みなあかしをなしがごとし。われこれらより兄弟たちにお
くるふみをうけダマスコにをるものをもちびきてエルサレム
ひきたり刑をうけさせんとてこゝにおもむけり 六 さ
れど我ゆきてダマスコにちかづける時おほきなるひかりの
たちまち天よりおのれいわる光あらわれてわれをめぐりてらせ

ヲ　ヒ
ヲれ地よたふる。そのときサウロサウロなぜわれ
を　せむるやといふ聲をきく　ハ　れあなた
ぢハ誰ぞやわれ　のひるハわれなんぢがせむる
ところ
ろのナザレの耶蘇なり　ワれとらもよおそれ
おそれうをしものゝ聲をきゝざりき
十　ヲれいひるを主よヲれるよをなんぢきの主ヲれよ
ひたゞひるハおきてダマスコよ往あそこさだすべし爾が
なんぢきことを彼處よおそなんぢよつぐべし　その光
のかゞやきによりてそれみるおとをえびなりそれば
ところにをるもの仕手よたりけられてダマスコよいれ

ず十二この邑にもてるきくてのユダヤびとのなかにほめられあるアナニアといふ律法にしたがひてよくる神をうやまふ人十三わづかのときこゝにきたりてわたくしの立てゐるを兄弟サウロふたたびみるをえよとわれに言ふ十四ちゝ目をあげてこれを見たれまことにわれらの列祖の神はなんぢを神のむねをしらしめこの義者をみることをえさせその口よりいづるものをきかしめんことをさだめたまへり十五そはなんぢこれにあることその見聞せしことをもてすべての人にむかひあかしをなすべければなり十六今なんぢいかでためらふや立ちて主の名をよびバプテスマをうけてその罪をあらひきよ

さるゝと　七 われエルサレムにかへりて聖殿においていのれるときまぼろしにて　八 見けるを主にまれにむかひて急にわれらいなんぢがわれについてたつる證をうけざるがゆゑにエルサレムをいそぎさりてにげよといひきかせ　九 われいひけるは主よわれもとなんぢを信ずるものをとらへあるひは諸會堂にてうれをむちうちしことをのれるにはるを　十 又ゐんぢのあかしびとステパノがその血をながさるゝときわれ傍にたちてそのころさるゝをよしとしこれが衣服をまもれる二主にまれいひけるはゆけわれなんぢを遠くもろこしんにつかはせり　三 うれらきゝてこの言にいたり

みな聲をあげていひけるをかくのごときものを地よりされうれをこさきよいのちのあるべきものあらざりき 三 これら喧呼でそのころもをぬぎ塵埃空中にあげるれば 四 千夫これのごら命じてパウロ放ちんえいこひきいらしめ。何故にかくかれらがパウロにむこのひてさけぶうをもらんがためむちうちてこのれよとふべーといふ 五 これら革鞭をあてんとてパウロ放ひきたるとき彼そのかたわらにたてる百夫のかしらにいひけるは罪をさだめずしてローマ人たるものをむちうつは律法にこのなふや 六 ひやくにんの長これ放きゝゆきて千夫のかしらにつげていひけるはなんぢ

まことをつくしめよこのひとをロマ人なをもせんさんの長
ぬきてパウロよいひそることなんぢハロマびとあるやされ
よつげよ。パウロいひけるハ二六千夫のこのしらせを
けることをもれをもおほくの金ぬきてこの民籍ぬきをえたり。パウロ
いひけるをもれを生來なり二七こよりおいてパウロを拷問
せんとせしものどもたゞちにさりぞくを。千夫のこのしらそ
のロマ人あるをさとりこれぬきばかしこくをおそる二八かく
てあくる日ユダヤびとのこのことを訟たるゆゑを確よさらんと
おもひパウロのあはれをとき祭司の長たちあつびぬ全議
會よ命じてあつまらしめパウロをたづさへゆきてその前

また〳〵せうを

パウロ議會のめを注これらを見ていひるやうひと
びと兄弟よわれ今日までいたるまでもべてのことを良心によよ
まて神につかへたるに 二 祭司のをさアナニアこれらにたそ
るものに命じてこのものの口をうたしむ 三 ときにパウロ
これにいひけるは汝しろくぬりたる壁よ神いなんぢをうた
んとなんぢこの坐せるは律法にしたがひてわれをさばくんた
めぞるにおきてそむきたがひ命じてわれをうたしむるや 四 このた
そばに立るものどもいひけるは汝なんぢ神のさいしの長
をそしるや。パウロいひけるは兄弟よわれその祭司のを

さなるとあらさうきあらバ然ていさゝかもなりそハなんぢの民の有司をそしるなかれとも錄されたるパウロこれらのそれ半もサドガイの人なるをバパリサイのひとなるをしりて議會のおくのよばゝりていひけるハひらく兄弟よわれをパリサイの人まことパリサイびとの子なるが死さるゝ事のよみがへるあらんを望よりてこれ今たゞさるヒパウロこのくいひいでゝバパリサイの人とサドガイのひとのあひだゝ爭論おこりてあつまりたるおほくの人々おひわうれさりハそハサドガイびとハ復生まさ天使および靈となきといひパリサイ人ハこれをみとめおそれなりゝ九遂におほいお

るさわぎとなりぬ。パリサイびとの學者ども立てあらそひいひけるは「われらこの人のあしきことを見いだせり。靈あるひと天使のこれにかたりたることあらんもはかりがたし神に敵ひてたゝかふざるなり」十このくて大なるあらそひおこりければ千夫のうしらパウロのかれらにひきさかれんことをおそれて兵隊に命じこれらの中よりかれをうばひとりて陣營にひきいりしめたり十一その夜パウロのかたはらにたちていひたまひけるはパウロよ勇めそなんぢはわれについてエルサレムに證せしごとくこのあらびロマにもかくあかしをなすべきなり十二明日におよびてユダヤびと黨をむ

そびとまにちうひていひけるハパウロをおろしまでハ食
飲をもせまじと三おの誓をなせるものハ四十人あまりなり
而このれら祭司のをさおよび長老だちのもとにきたりていひけるハわれらパウロをころしまでをもるをも食じとちかうひをたてさり十五このゆゑよ請なんぢら議會とそもたパウロの事をあほくそくたづぬるさまをなして千夫のこゝらよ告られ玆なんぢらよひきくごとくしめよこのれがちうづうざる前よおれをころさんとわれらもそでよ備をゐせて去志こるにパウロの姉妹の子おのくそこそをきゝ即ちゆきて陣營よいりパウロよつぐもパウロ請てひやくまん

の長ひとをまねきいひくるハこの少者をせんまんの長
よつれゆけ。おのものこのわよつぐべきことあるべなり。大こ
うまおいく百夫のうしらこのれをせんまんの長よつれゆきてい
ひけるハ囚者パウロわれをまねきてあの少者なんぢよいい
ふべきあとあればわれをなんぢよつれゆうんおうをねがふ
百卒千夫のうしらその手をひきひそうなることころよ去
てまぞきてそひとにそなんぢわれよつげんとはるおしへ何
ぞや手このれいひとるハユダヤ人パウロのことをなほくハ
しく察考さまをなしてなんぢよもひ明日こうれて議會よつ
れくださんおしへを約せを三されどなんぢこのれらこのことよ

あるごがよなうれそそのうち四十人あまりのものパウロをころもをまでハこをたまるのまでと共にもうひて埋伏一
今までそのそるく、をなしてるんおのゆるしをまてる 三
せんまんの長わうきものまなんおいわれまおの事をつげしと人まかくるゐうれといひふくめてあれをさらしめ 三
また百夫のこしらのふたをもめしそ兵卒二百人騎兵七十人矛をもつもの二百人をそるく今夜だい九時まカイザリヤへゆけ 三
うし斎をそるくてパウロをのらしめあれをまもりて方伯ペリクスのもとまおくるゐーとのひ 三
また左のごとき書をこのきそくさり 三
云クラウデヨルシアス最たふとき方伯

ペリクスのやくにきをうふ 二七 おの人ユダヤびとらをられまさるまおろさるれんをせーとわれそのロマ人あるをきーまようを兵隊をひきるゆきてうれをたてるけ 二八 このれうの訟るもを玄設ちらんとおもひまををその議會まつれんぐりーお 二九 このれがうつうくられーんたぢこのれうの律法の論まようれるのみまそその死まおくるあくまつるべきのゆゑをみぎるなり 三十 そのうるまユダヤ人おれ我害せんとくらるまよ。そのことおれまおうもれーまようをたぢもまおれとなんぢのもとにおくれをもまこうれ我訟 一 ものどもまよ命じそその訟るようころ我なんぢまつげ 三 おうまおいそ兵

卒ハ命ニ從ヒテパウロヲ携ヘ夜ノ内ニアンテパトリスマデ行キ
三 翌日ハ騎兵ヲシテパウロト倶ニ往カシメソノ餘ノ者ヲ陣營ニ歸レリ
四 騎兵カイザリヤニ至リ文ヲ總督ニ呈シパウロヲモ之ニ渡セリ
五 總督文ヲ讀ミテパウロニ何ノ國ノ人ナルヤヲ問ヒキリキヤノ者ナルヲ知リテ
六 云ヒケルハ汝ラノ告ル者モ來リシ時ニ聽カント云ヒテ
七 ヘロデノ公廨ニ於テ守ラシメタリ
八 第二十四章 五日ヲ經テ祭司ノ長アナニア長老ドモ及ビテルトルスト云フ辯士ト倶ニ下リ來リテパウロヲ方伯

にうったふ 二 パウロよびいざされ、ときテルトルスうったふるへの端をひらきてのひけるい 三 もっとも尊ぺリクスよわれらあんおよろこびて大平をえ且この國をあんおの先見によりて良よおくたまうこれを時よおくこびひ地よおくこびひて感謝せざるなし 四 今われおくてあんおをさまたげざることをせず請おくぐくおのびてわがまことのおろそをきくたまへ 五 そはわれらおの人をみるよ疫病のおこし。天下のユダヤびとをみな世をかきうれをナザレ宗のこしらえて六 また聖殿をもけがさんとせりわれらこれをとらえわが律法よおくてさばきをるさんとおもひしよ 七 千夫の

のしらルシアスきたりてわれらの手より強てこれをうばひ
とをハうれをうつさふるものをして命じてあんちのもと
まきたらしめたり。なんぢこれをたづさばわれらが訟ると
ころをおとづくたまふべし　九ユダヤ人もともにうつ
たくいひてかくのごとくあるやの事まことしかをつ
のさ首をもてふれパウロまいはしめんがためにうなづきゐる
んぢのおほくの年おのたみの審官たるをわれおもふがゆゑ
よみづからの事情をうつたふるおそれよろこびてこたふ
ぢおらんぢ多崇拝のためエルサレムよりのぼりしより
うに十二日のみ十一これらいわれが聖殿においてひとあ

そひをなーまつる會堂あるひい城下よおいてひとぐ祓みそ
せーてく祓いまつ見さるをー十三且これらが今われをうら
たあるところのことハ憑據祓たてこれをうとうまるおと
あるてー十四されどそれもの事をなんだよにうまさん。そ
れわをこのれらが異端とそなある道よもてうひまつが列祖
よ神よつくおもぐく律法と預言者のふみよもるされー
こと祓信じ十五うう義者もたぐーのこざるも死ーるものよみ
ご復らんおもくを神よよりてわをハのぞめそ。まるいちうれ
らくの望ところでおとあるなー十六おをまようそそれ常よみ
づうまもけみ神よむてひ人よむてひて良心の責あるらん

こゝをたゝむるなり　二 されば數年を經てわれ施濟をわが
國人にもたらし又獻祭をせんがためなほ願ひたる
ところ 三 なるに潔淨てわれらのあとをるをるときアジア
よりきたれるユダヤびとらは聖殿においてわが人とあらむることを
せず亂をもおこするをみたるをりわれを訴へきことなれば
らばうれしなんぢのまへにようつさふべし 三 あるひはいま
たわが議會にまへにたてるときよばをりて死さるものは
よみがへるのことにつきわれ今日なんぢらにたゞさるとの
べくるその一言のほかにこの人々もまたゞ不義あるを
見ばいふべし 三 ゝてよおいてペリクス詳細にその道をよく

くれをうれふるまことをもちゐんとしていひけるに千夫のうへ
らルシアスのくらゐんそのときわをくはへてなんぢらのこ
くをあらそふべんと三百夫のうへらに命じてパウロをまもら
めうへおをを寛容にしてその友のうれを供給ことあるを
禁ぜざらしむ三數日のゝちペリクスその妻ユダヤ人なる
デルシラとともにきたりパウロをめしてそのキリストを信ぶ
る道をうけるをきく三五パウロ公義と撙節ときたらんとする
る審判くをろんぜしうをペリクスおそれてこたへていふはあ
んおをぼくをそのうれ便時をえてまたなんぢをめさ
ん三六ペリクスパウロより金をえんとをのぞむがゆゑに

あはく、この道を名てそもにかゝれを、ニ　このくて二年をへるのちポルキス、ペストスとゝもるものペリクスの職をこのそりゝりペリクス悦をユダヤびとらんとおもひてパウロを獄にをきおけり

第廿五章

さてペストスを任國にいりて三日のゝちカイザリヤよりエルサレムにのぼりしに、二　時よさいしーの長だちとユダヤのおもだちたるものどもパウロをかさる訴うらまを途にてそりこころさんとおもひこれを勸そを恩をわすれまうまを、四　陽てパウロをエルサレムにめーたまふんまうまを請ふ、ペストスこゝへてのひそるてパウロをまもりおかれてカイザリヤにありこれも

よろこびて彼處よりおもむくべし五まのゆゑなんぢらのうちも權威あるものどもわれとともにくだりてこのをとこにつきて訟ふることあらばうらさくよ六ペストスこれらのなるを十日あまりとどまりてカイザリヤにくだり明日さばきの座にわれを命じてパウロをひきいださしむ七パウロのきたれるときエルサレムよりくだりしユダヤ人らこれをたちかこみ證據をたてるおもきあやまちはざるおほくの重罪をもてうつさへをるせをハパウロつひむきけるをわれのまぎユダヤ人のおきてをおよび聖殿またカイザルにもみな犯せることなし九ペストスよろこびをユダヤ人にこころよくしてパウロに

こゝにてのひけるとなんぢエルサレムにのぼり彼處においてわれこれらのことにつき審判をわがまへにうけんことを願ふやの意なるや否や十パウロのひくをわれ今カイザルのさばきの前に立このところにおいて審をうくるは當然なりわれユダヤびとに不義をなせしことなし十もし不義をなしまたは死にあたる事を行ひしならば罪をのがれんとはせず十一もしこれらの事に實なくばたれもわれを彼らにわたすことをえざるなりわれカイザルに上告せん十二ここにおいてベストス議事官とあひはかりて

いひろうそなんちカイザルヨ上告せんとねがふをカイザルヨ
ゆくべし　三數日を經てのちアグリッパ王もろともにベルニケベストス
の安否をとはんためヨカイザリヤヨきたれり　茲に幾日
まうけることひさしうしてペストスパウロのことを王ヨ
つげていひろをこゝヨひとりの囚人あをもてるのいちべリクス
の遺おきてところなり　茲にエルサレムヨをりしとき祭司の
ともとユダヤびとの長老たちこれをうつたへて罪ヨさだ
めんことをねがひをれこれをとり　若ろまううつたへ
れしものおのれをうつたふるものヨ對てそのうつたふる
ところを分理べき機をいまだえざるさきヨあれを死ヨつ

くるハロマびとの例にあらざるなり
ここにおいてこのものらここに
ここにあつまりたるをもちまけをも。われも日をのばすことをせず
次日さばきの座にをり命じてその人をひきいださしめ
くるに訟者どもたちてこれをうつたへしがその事わざ
わるこのしめすをしところにあたらざりしかたがひ
神をうやまふおのが道とパウロの生とのふせぞ死にいひ
とりの耶蘇とよつていてあらそひをなしこれをうつたへ
のこと干我もろもろのものらべまどひうれバパウロは對へん
ぢエルサレムにゆきこの事につきてここにおいて審判を
うくるおとこ欲ねがふやと答へしかばピーは三
これアウグストの質

訳をうけんとして護れんまとをもとめしより我れ
ドてこれをカイザルよおくるまでまもらせおけと三アグリッパ
ペストスよいひろるもわれもまたその人よきこんちょをの
そむなりこのゆいひけるハ明日なんぢもれよ聽聞こと三
よおいてくおくる日アグリッパとベルニケおほいよ威儀をそなへ
きらりて千夫の長だちおよび邑のたふときひとびととも
よ公堂よいりぬパウロをペストスの命よりてひきいだき
る言ペストスいひろるハアグリッパ王およびそわをらとこ
るにあるくびよなんぢらこの人をみるあるべしユダヤの
おほくのくびエルサレムよおいても亦あのところよおいて

もうれよついてわれよりつよくうれいこの私ちに生きものよあしびとよびさけべを云されどわをこれを責有てそのあぬべきことをせざりしをわれを助けうぢうヨウゲストよ上告せんとするよりわれこまをおくらんことを定たを云をきこれよついてわが主上にそうまべき實情をえん

ゆえよこれおまをあらんへて奏まべきことをえんがさめなんぢらの前まこ殊更よアグリッパ王るんぢのまへよひきいださせを云そんめーうどをおくるよその罪案をうきそへざるハ理よこのかちびとおもへバなり

第廿六章　アグリッパ　パウロよいひけるをあんぢこのみづからのた

めのぶるまでをゆるしたまふ。よおいてパウロ手をのべ
これらにむかひてかくなほせごんとしていひけるは アグリッパ
王よわれユダヤ人にうつたへらるるところの今日あんじ
のまへにたちてあとぐくいひわけをうるがゆゑにわれ
を幸なるものとおもひたまふことをうるがゆゑにわれ
との風氣とこれらが論ずるところの端をこころぐくきゝ
たまふことなかれ。このゆゑにねがはくは耐心てわれをきゝ
たまへ。四それわれが始よりエルサレムにありてわが民のなかに
て幼稚よりいかに世をすごしたるかを ユダヤ人はみなしる
なるべし。五もし證をあげんとせばこれらは素よりわが

さきよわれらの教のうちにて最も嚴ところに從ふ
ひさるパリサイ人なることは知るところ六今われたちてまれ
しの列祖よ神のやくそくにたまひしその望につきてさばか
るゝなり七この十二の支派のよるもひるもひたすら神よつかへて得んと
ねがふその望のゆゑよアグリッパ王よ此ユダヤ人よりうら
へられるは八神は死しものをよみがへらせたりといふことを
なんぢらなんぞ信じがたしとおもふや九我もまことに
きたるナザレの耶蘇の名にさからふことが
多くあるべきことを
彼なしいようさまざまのことをつくりおもひエルサレムにて

ろとなせり 即ちさいーの長たちより權威をうけておわく
の聖徒をひらやよいれまこうれろのあろさるとき八そ
れをとのいこー 十一 諸會堂よおいて ちもくちもとを罰ーちひてお
れる襲撲をいちーめ。ろつ狂るおとそなりごーくおれよい
まて外國の邑まそせあおよべま 十二 このとき祭司のをさ
だちよりん權威し命令をうけてダマスコへゆきーる 十三 王よそ
ん道ろんてひるのあろわれ天よりひろをある紙見たる日よ
まもかくやきて我おようびくるにめけるものをめぐまて
らせろを 十四 われろみる地よたある。そのときへブル のおとそよ
てサウロサウロなんぞわれをせむるやなんちやげある 鞭

を聞くことかくのごとくわれよりうち出る聲をそれきくものそれりびはるいまよなんぢらはられぞやこれこそくけるところをれもなんぢがせむるところの耶蘇なり汝なんぢ起てたてよ一ところがあんぢよあらもるべきはなんぢをたてゝ役者となしてなんぢがまでに見しところまたなんぢよあらわれて汝めさんそのおやの證人とまたんがためなりわれなんぢをもとのもりてお民あのびいもろもろの手よりまもるのみ今かのんぢをつかわしてつのをひらきくらきより光につきサタンの權をそむきて神に歸ぜしめまたつかわれらをしてわれを信ずるによりて罪のゆるしと

きよめられしものゝ中よりおいて業をうることを得せしめんがためなり 九 このゆゑにアグリッパ王よ天のまぼろしにそむかずして 十 先ダマスコ エルサレムの人々つぎにユダヤの全地およびいきどほりしんまで恒に心あらたむることのなほおこなひをあらはして罪をくゆべきことを神に歸をきほふことを 二十 これらのゆゑによりてユダヤ人われを聖殿にて殺さんことをはかりしに 二十一 ときのこれ神のたすけをえ今日にいたるまでたちて小きものにも大なるものにも證をなせり。預言者およびモーセが將來かあるべきことのほかは

らんといひしかばなほあらざるハなし 三 まるいもキリスト
くるしみをうけ死しものゝよみがへりしを光
証このたみと異邦人にもしめすことなり 二四 パウロがかくう
つたへけるときペストス大聲にいひけるハパウロよなんぢハ
狂氣せり博學なんぢをしてきやうきせしめしなり 二五 パウロ
いひけるを最たふときペストスよわれを狂氣せるにあらず
わがいふところを真實まことにたしかのあることばなり 二六 王
これらの事情を王よくしれるまゝにそれは
ぞんじてまへにこゝろおそれなくものこゝに方隅
もなしとおもふなり 二七 あゝぐりば王よかくるところあ
しと

信ぜればなり 二八 アグリッパ王よなんぢよげんとやのふみを信ぜるやわれなんぢのしんぴるをしる 二八 アグリッパパウロにいひけるはなんぢすこしを勸てたやすくキリステアンとなさんとす 二九 パウロいひけるは容易とも甚とも我神にねがふ所は獨なんぢのみならず今日われにきくところのことの皆おなじくなるやうにあらんことなり 三〇 こゝに王と方伯およびベルニケまことともに坐せしひとびともてゐりぞき 三一 相ともにていひけるはこの人は死べきわざも縲紲にかゝるべきこともなきなり 三二 アグリッパ ペストスにむの

ひいひろまたの人もカイザルに上告せんといたぶりしかばそをゆるしおきたるものなり

第廿七章　われらをもてイタリヤへわたるらるることさだまりしかればこうれつパウロおよび他のめしうどらをアウグスト隊のひやくにんの長なるユウリアスとなづくるものにわたせしに

二　まつにおいてもわれらアジアにそうてそせんとするアドラミテオムの舟にのりて出でマケドニヤのテサロニケびとアリスタルコもわれらとともにありき

三　次日シドンにつけるにユウリアスねんごろにパウロを待遇れ朋友のもとにゆきてそのもてなしをうくることをゆるせり

この〻ことより舟出せ〻ず風のさうふによりてクプロの風下
のうちたはに至キリキヤとパムフリアの海をわたりてルキヤ
のムラといふくる湊に〻れを☆おのところろにて百夫の
〻〻長タリヤヘわたるアレキサンデリアのふねをおひてそこ
をわたるのせうりと多日のあひだふねのゆくこと遅やう
やくまうでてクニドスにむかふくるころにいたるに風の順
ざるによりてサルモネをわたりクレテのかざ〻ものこうを
そ〻へ漸〻にしてその岸にそひラサイアの邑にちかき美湊と
なづくるところにいたれり九時をふるころまでひさし
く斷食の期もすぎぬれば舟路のあやふきころをパウロい

さもあらばあれ、ひとびとよ、われおもふにこのふなぢは
損害おほいなるべし、ただに積荷と船のみならず我らのい
のちをもおよぼさん　十一されどもパウロはかの百夫の
こゝろよりも船長と舟主のことばを信じたり　十二且
この湊は冬ごもるに便よろしからざれば、このゆゑにそこ
よりピニクスといふかしこまでゆきてそこを冬ごもりこと
のこゝろをいでんとさだめたるものおほし。ピニクスを
クレテのみなとにて西南のかぜと北西のかぜとこの風とそのき
しをふきてふくところなり　十三ときに南風ゆるやかにふきけ
れば、おもふところをえたりとおもひ錨をあげクレテ

よそうてちゝまし〳〵に十四ほどゆくユーロクルドンところのある
狂風あまたよりおろし〳〵きたるを十五舟をぬきさらひろをゝびられ
ま敵ことく紙えびられそのの風にまかせて十六つひにクラウダ
といへる小島のうぎ〳〵ものかたちもせぬきやうやくまし
て小舟にうつれむ十七既にひきあげ〳〵のちこのれう備おけるも
のをもて大舟の胴をたゝきうら洲にのりこんあやをおそれ帆をおろし
てなぐれよりり十八風をげ〳〵きにもりてつぎのひ水夫らつみにをなげもつ十九第三日にいたりてふねわれ
ら手づから舟具をあげもつ二十こゝくて多日のあひだ日も星
もみえたゞしてたゞ〳〵きこのぜぬきまゝてくれゝばこれらつひに

きたるべき望(のぞみ)たえたるそうり　二人々(ふたり)ひさしく食(しょく)せざればパウロ
うれうるのなきうれたちそいひけるハ人々よあんじ(おもひ)さきよ
わがいうめをきゝクレテよりもちゐることをせざりしそあ
の損害(そんがい)をうけざるべきものぞなりし　三今(いま)もすゝめあんじ(おもひ)
もつむ勇(いさ)なんぢらのうちひとりだも生命(いのち)をうしなふものの
なけれども舟をうしなふことあらんのを　三そこわが屬(つか)する
ところわがつかうるところの神のつうひこの夜そばにたち
もらたもて　四パウロよおそるなかれあんぢうるべし
カイザルのまへにたつべしこの神ハなんぢとともにふね
にあるものをおもぐくなんぢに賜(たま)といくさ　五おのゆゑよ

諸人いさめやうくもれこゝろたましくるおとくこのあらび
なぐらんとわき神を信じまじなを云われらこのあらび一島よ
おーあげられん 三 こゝろくして第十四日の夜よいこをわまもら
アデリアのうみをたゞよふ。夜半おろ水夫らきーよもちつづけ
ずとおもひて 六 水をはかりしるに二十尋をえたり 七 石よのをうけん
をみてまこをうをしるに十五尋をえたり 八 石よのをうけん
あらをおそれ艫より四のいかりをおろして夜あけをまち
わびぬ 九 水夫らふねよりのがれんとして舳よりいかりを
おろす状をみー小艇をうみよさげくれバ 十 パウロ百夫のこ
しらと兵卒よいひくるたまのひとくまー舟よそびまらび

だなんぢらもまた救を得ん　三三ここに
おいて兵卒ら小舟の索をたちきりてその
なすにまかせたり　三三夜のあけんとする
ときパウロまべてのひとびとに食せんことを
すゝめていひけるはなんぢら待わびて食せ
ずにすごしまことに今日は
まさに十四日めなるを　三四故にこれなんぢらに
すゝむ。そは救をうるためにたれかなるべくこれを
なり。なんぢらの頭髪ひとすぢなんぢらのうちより
おちざるべし　三五如此こうしてパンをとりて
神に謝しおもてをさきてまづ食しけれ
ば　三六こゝろもまのあたりて食せり　三七ふねにのれるところの

せて二百七十六人なりき 三八 そこよりくしてあきくれば
穀物をうみよもそ〳〵ぬねをかろくせり 三九 夜あけてその地
ハしらざれどひとつの海灣をみとり。こゝよ洲さきあり。或
ハいでゝるおとをえゞうしこよふねとまりめんと謀つゝと
たもそ錨をうみよもそ舵纜をゆるめ風をきの帆をあげ風を
よおさゞひまでゝきをさしてそこまでゝる 四〇 こゝほのなゝれ
おふところよりてふねと洲よのりあげへさきを居つ
きてうおつゞ艫ハなみのはげしきがためよやぶられそう
四一 ちまよおいそ 兵卒らめゝうとのおそきおゝをんことを
おそれおきを殺さんとさゝむ 四二 しかれども百夫のうしら

パウロをさくさんとおもひそのさらめとどめ且おほぎうるものゝまづ水よりとびいで四そのほかにあるひと板あるひはぬねのくづけるのうへ岸よりいでらんことを命じたまふこのごとくみなきくえうることを得てきしよりのぼれり

第廿八章

一かれらまぬかれたるひとをえてのちその島の名をマリタとゝうるのことをきゝたり二ゑびすら尋常ならぬなさけをほどこし雨ふりと寒とをもより火をたきてわれら衆人をもてなせり三パウロおほくの柴をあつめて火よくもえあがりさるより蝮いできたりてその手よりつけり四夷人らまむ

のその手にかゝりたるをそねたぐひにいひそしりこの人
はまことにひとをあやめしものならん。されど海よりのがれ
たるをつゝしみ天理そのいきるをゆるさゞるなり 五
パウロまむしを火のなかにふりおとして害をうけざる
なり 六 うれしくパウロなんぢひてその腫るゝ。あるひはた
ちまち仆てしぬることあらんとおもひしかどひさしくうか
がへどもうれへ害のおよぼさるをみてそのおもひと轉あ
え神なりといふを 七 そのほとりに長をプブリヨと名づくるのぼ
とくなるおのがもてる田地あり。これこゝろよくむかへねん
ごろに三日やどらせしかばプブリヨの父ねつと痢

病ありてゐしをとぶらひて按手禮をなしてパウロその
ために手ありそのうへを按これをいやせり九このこと
ありてのち島にありところの他のやめるものどもときたりていや
されることを得たり十またわれらに禮をあつくなしてわれらをうやま
ひまた舟出のときにのぞみてわれらがなくてかなはぬものをおくれり十一
かくて三ケ月をへて後われらはかのアレキサンデリアの舟ねるのをもて
をこせしデヲスクリの號あるを十二スラクサにつき三日とどまれり十三
てレギヲにいたりて一日をへて南風おこりくればつぎの日プテヲリ
にいたり十四兄弟たちにあひこれらに請ひまうせて七日と

どまでもきくうへそ、ロマまでゆく 十五 ロマの兄弟(きょうだい)どもわれらのこ
とをきゝアッピーポロムおよび三館(さんかん)といへるところまできたり
てわれらをむかふパウロまれをみて神(かみ)まで謝(しゃ)しそのあとろま
ちこゝろをえたり 十六 まそでまわれらロマまいりたるとき百夫(ひゃくにん)の
うへらめしらぐらを王をまもる兵隊(へいたい)のうへらまわさせそ
されどパウロもひとりその守兵(まもりのへい)とともに別(べつ)にすみゐることを
ゆるされたり 十七 三日(みっか)をへてそのちパウロユダヤ人(びと)のお
もなるものどもをよびあつむ。かれらのあつまれるとき
これにいひけるは兄弟(きょうだい)よわれいまだもろもろの民(たみ)また
祖(そ)の例(れい)にもとりてなにごとをもなせしことなし。されど

エルサレムより囚人となりてロマびとの手にわたされた
ロマ人はわれを取調べたれど死にあたる罪のゆゑなければゆるさんとおもへども
ユダヤ人あれば已むことを得ずしてカイザルに上告せり
我わが國の人を訟んために告ることあるにあらず
これによりてわれ汝らを會てかたりあはんことを請ふ
イスラエルの望みのために此の鏈につながるるなり
三
かれらいひけるはわれらユダヤより汝のことについて書信をうけざりき
兄弟たちのきたりて汝のことを報ずることもなし

ものなり 三 されどこれらなんぢのおもふところを聞
んとす。そはわれらいづこまでもおの宗旨のそしらるゝ
ものなり 三 既にさだめたる日におほくの人
パウロのやどにきたりしかばこれをパウロ朝より暮まで
モーセの律法とよげんしやの書とひき神國のことを
きうめいしをはりてイエスきりしとのことをとき
そめたり 二四 そのときに感じてかれを然とするものあり
まことと信ぜざるものもありて 二五 たがひに相あそざるによ
つてパウロ一言をかたるときに、其ときにそうんとせしときパウロ
たるゝハ誠あるかな聖靈よげんしやイザヤによりてわ

われらの列祖よかくもろ〳〵言。そのまゝ云ふんぢらの民よ
ゆきてつげよ。あゝうゝいきけどもさとらびとどもみびら
ゐどもそのたゝみ目まて見みまて聽きゝまくさとらを
悔改てまれよいやされんことをおそれその心をにぶくし
耳をおそひ目をとぢことをと二八おのやをまあんぢらまろべ
し神のまくらひい異邦人よおくられうれらいこれをきゝん
二九パウロがさの言ばのひをそりしときユダヤ人ぴきりぞき
てたゞひよおほくある爭論をなせり三〇こゝてパウロそのう
そうけし家ようをかりしてまた全く二年まくてきたりおもん
とまろるものをもてくてもぞうろ神國ばのをぼ主いゑを

使徒行傳 終

美路留

PROPERTY OF
PRINCETON
THEOLOGICAL
SEMINARY

from

E. Rothesay Miller.

West Philadelphia

PROPERTY OF
PRINCETON
THEOLOGICAL
SEMINARY

Division
Section
No.

SCC
1862